

【公開版】

再処理施設 廃棄物管理施設

設工認申請の対応状況について

2024年1月29日



日本原燃株式会社

目次

1. 入力地震動の算定に用いる地盤モデルの検討に係る対応全体計画	3
2. データの取得及び信頼性の確認	6
3. データの敷地への適用	14
4. データの整理	21
5. データの再整理	158
6. 敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造モデルの設定	165
7. 今後の対応	167

「第五条 安全機能を有する施設の地盤」、 「第六条 地震による損傷の防止」の説明方針

【説明事項】

- Sクラスの耐震設計（Ss、Sd、水平地震力3Ci※、保有水平耐力）
 - Bクラスの耐震設計（1.5Ci※、上位クラスへの波及影響）
 - Cクラスの耐震設計（1.0Ci※、上位クラスへの波及影響）
- ※建物構築物の場合。機器・配管系の場合は20%増しとして算定。

灰枠：説明済みの事項

緑枠：今回一部説明する事項

分類		申請対象設備	1. 設計条件及び評価判断基準	2. 具体的な設備等の設計	3. 具体的な設備等の設計と評価判断基準との照合
A. 新規に設置するもの		【再処理施設】 Sクラス：4基 Cクラス：2,083基(Sクラスへの波及影響：21基) ^{*1} 【廃棄物管理施設】 Cクラス：5基	Sクラスの耐震設計、 B、Cクラスの耐震設計（上位クラスへの波及影響）に係る設計条件及び評価判断基準（特に、基準地震動に基づく入力地震動の策定）	2-1：システム設計、構造設計等 ・構造図、系統図等	3-1：設計要求等との照合
B. 既設	B-1: 設計条件が変更になったもの	【再処理施設】 Sクラス：2,284基(耐震クラス変更：104基) Bクラス（Sクラスへの波及影響を考慮）：60基 Cクラス（Sクラスへの波及影響を考慮）：6基 【廃棄物管理施設】 Sクラス：9基 Cクラス（Sクラスへの波及影響を考慮）：3基		2-2：解析・評価等 ・FRS、解析モデル、耐震評価等	3-2：評価判断基準等との照合 ・評価結果等と許容限界の比較
	B-2: 設計条件が追加になったもの	-		2-1：システム設計、構造設計等 （工事有の場合）	3-1：設計要求等との照合
	B-3: 新たに申請対象になったもの	-		2-2：解析・評価等 ・FRS、解析モデル、耐震評価等	3-2：評価判断基準等との照合 ・評価結果等と許容限界との比較
	B-4: 設計条件に変更がないもの	【再処理施設】 Bクラス：1,134基 ^{*2} Cクラス：1,817基 ^{*1,2} 【廃棄物管理施設】 Bクラス：9基 Cクラス：188基	変更がないこと の理由を説明	-	

*1: Cクラスに分類される設備のうち、11・35条「火災等による損傷の防止」と12条「再処理施設内における溢水による損傷の防止」にて機能維持を要求する設備の評価方法等はB-1のSクラスと合わせて説明する方針

*2: B-4のB・Cクラスに分類される設備のうち、12条「再処理施設内における溢水による損傷の防止」で溢水源から除外する設備の評価方法等はB-1のSクラスと合わせて説明する方針

【主な説明内容】

- 申請対象設備を重要度毎に明確化 ➡ 申請対象設備は説明済み
 * 既設設備の工事の有無や解析モデル等の評価方法の変更の有無は引き続き精査する。
- 設計条件及び評価判断基準の明確化（特に、基準地震動に基づく入力地震動の策定） ➡ P5～176
- 同じ評価方法になるものについては、同じ評価方法の纏まりを説明したうえで合理的に説明

「第三十二条 重大事故等対処施設の地盤」、「第三十三条 地震による損傷の防止」、「第三十六条 重大事故等対処設備」のうち地震を要因とする重大事故等に対する施設の耐震設計の説明方針

【説明事項】

- 常設耐震重要SA設備の耐震設計（Sクラスの機能を代替（新設、既設にSA設備の条件を追加））
- 地震を要因とする重大事故等に対する施設の耐震設計（1.2Ss（常設設備・可搬型設備））
- 常設耐震重要SA設備以外の常設SA設備の耐震設計（B、Cクラスの機能を代替）

■ 灰枠：説明済みの事項

■ 緑枠：今回一部説明する事項

分類	申請対象設備	1. 設計条件及び評価判断基準	2. 具体的な設備等の設計	3. 具体的な設備等の設計と評価判断基準との照合	
A.新規に設置するもの	【再処理施設】 常設耐震重要：1、148基 常設耐震重要以外：130基 可搬型設備：2、693基	常設耐震重要SA設備の耐震設計（Ss）、地震を要因とする重大事故等に対する施設の耐震設計（1.2Ss）等の設計条件及び評価判断基準	2-1：システム設計、構造設計等 ・構造図、系統図等 2-2：解析、評価等 ・入力地震動、FRS、解析モデル、耐震評価等（S、B、C、1.2Ss） ・地震を要因とする重大事故等に対する施設の評価判断基準の設定（1.2Ss）等	3-1：設計要求等との照合 3-2：評価判断基準等との照合 ・評価結果等と許容限界の比較等	
B.既設	B-1:設計条件が変更になったもの		-	-	-
	B-2:設計条件が追加になったもの		【再処理施設】 常設耐震重要：807基 常設耐震重要以外：130基	2-1：システム設計、構造設計等（工事有の場合） 2-2：解析、評価等 ・入力地震動、FRS、解析モデル、耐震評価等（S、1.2Ss） ・地震を要因とする重大事故等に対する施設の評価判断基準の設定（1.2Ss）等	3-1：設計要求等との照合 3-2：評価判断基準等との照合 ・評価結果等と許容限界の比較等
	B-3:新たに申請対象になったもの		-	-	-
	B-4:設計条件に変更がないもの		-	-	-

【主な説明内容】

- 申請対象設備を重要度毎に明確化 ➡ 申請対象設備は説明済み
* 既設設備の工事の有無や解析モデル等の評価方法の変更の有無は引き続き精査する。
- 設計条件及び評価判断基準の明確化（特に、基準地震動に基づく入力地震動の策定）
- 同じ評価方法になるものについては、同じ評価方法の纏まりを説明したうえで合理的に説明
- 入力地震動の策定は第五条、第六条と共通するため併せて合理的に説明

1. 入力地震動の算定に用いる地盤モデルの検討に係る対応全体計画

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

1. 入力地震動の算定に用いる地盤モデルの検討に係る対応全体計画

■ 前回までの説明

① 敷地において得られているデータの整理結果及び信頼性

岩石コア試験結果及び岩盤部分の単位体積重量以外のデータ及び信頼性の確認結果について説明

- 敷地内における既往データに加えて追加調査によるデータも含めた「A.岩盤部分の物性値等」、「B.岩盤部分の剛性の非線形性」、「C.岩盤部分の減衰定数」及び「D.表層地盤の物性値等」に係るデータの提示。
- 各調査において、データの取得や処理が適切な方法で正しく行われていることを確認し、敷地において得られているデータの信頼性が担保されていることを確認結果。

② ①において信頼性を確認したデータに基づく整理

以下の事項について、AA周辺グループにおける一連の内容について説明

- 敷地内の各位置（近接する建屋グループごと）において用いるデータの整理結果。
- 敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造の設定に係るデータの分析結果。
- データの分析結果を踏まえた敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造。

■ 今回の説明

前回会合の指摘事項の対応も含め下記①及び②の項目について説明。

① 敷地において得られているデータの整理結果及び信頼性

前回からの追加として、岩石コア試験結果、岩盤部分の単位体積重量及び、表層地盤物性のうち埋め戻し土に対して実施した追加調査結果について、データ及び信頼性の確認結果について説明

② ①において信頼性を確認したデータ（前回提示含む）に基づく整理

- 各グループにおけるデータの整理結果
- 上記を踏まえたデータの再整理に係る検討状況


③ 敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造の設定

- 上記の整理結果を踏まえた各因子における敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造の設定状況

⇒上記の検討は電力会社、メーカ、ゼネコンの専門家の意見を十分に頂きつつ慎重に実施した。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

1. 入力地震動の算定に用いる地盤モデルの検討に係る対応全体計画

 : 本資料における説明範囲

因子	各因子における実施項目	これまでの審査会合	前回の審査会合		今回の審査会合	
			①データの整理及び信頼性確認	②データの分析	①データの整理及び信頼性確認	②データの分析
A. 岩盤部分の物性値等	<ul style="list-style-type: none"> 近接する建屋グループごとに、直下又は近傍のPS検層データを整理 	<ul style="list-style-type: none"> 敷地内12Grごとに直下又は近傍のPS検層データに基づく物性値の設定内容を説明（6/20） 	<ul style="list-style-type: none"> データの整理結果及び信頼性の確認結果（単位体積重量を除く） 	<ul style="list-style-type: none"> 分析方針及び結果 ➢ AA周辺グループ 	<ul style="list-style-type: none"> データの整理結果及び信頼性の確認結果（単位体積重量） 	<ul style="list-style-type: none"> 分析方針及び結果 ➢ 全グループ
B. 岩盤部分の剛性の非線形性	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震時の地盤のひずみの大きさを踏まえた影響確認 	<ul style="list-style-type: none"> 非線形性が入力地震動に及ぼす影響が無く、線形条件を設定可能であることの確認内容を説明（6/20） 	<ul style="list-style-type: none"> データの整理結果及び信頼性の確認結果 	<ul style="list-style-type: none"> 分析方針及び結果ただし、上記岩盤部分の物性値を反映前の条件における分析結果 ➢ AA周辺グループ 	-	<ul style="list-style-type: none"> 上記岩盤部分の物性値を反映した条件における分析結果 ➢ 全グループ
C. 岩盤部分の減衰定数	既往データによる検討	<ul style="list-style-type: none"> 材料減衰 繰返し三軸圧縮試験 	<ul style="list-style-type: none"> 事業許可にて整理している繰返し三軸圧縮試験結果に基づくひずみ依存特性について説明（6/20） 	<ul style="list-style-type: none"> データの整理結果及び信頼性の確認結果（岩石コア試験結果を除く） 	<ul style="list-style-type: none"> 敷地全体における分析方針及び結果 	<ul style="list-style-type: none"> データの整理結果及び信頼性の確認結果（岩石コア試験結果）
		<ul style="list-style-type: none"> 材料減衰+散乱減衰 S波検層（既往3地点のみ） 	<ul style="list-style-type: none"> 既往3地点において得られているデータの周波数領域、減衰定数の大きさについて説明（6/20） 			
	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録を用いた検討 ➢ 伝達関数による検討 ➢ 応答スペクトルによる検討 	<ul style="list-style-type: none"> 中央地盤における観測記録との整合性を考慮した条件(周波数依存性考慮・非考慮)による検討内容を説明（9/4） 東側地盤・西側地盤・中央地盤の観測記録及び地震観測位置における地質構造の特徴の確認（10/13） 東側地盤・西側地盤における観測記録との整合性を考慮した条件(周波数依存性考慮・非考慮)による検討内容を説明（10/13,11/20） 				
	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録を用いた検討 ➢ 地震波干渉法による検討 	<ul style="list-style-type: none"> 中央地盤における検討内容を説明（9/4） 東側地盤における検討内容を説明（10/13） 西側地盤における検討内容を説明（11/20） 				
追加データによる検討	<ul style="list-style-type: none"> 材料減衰 岩石コアを用いた減衰測定（データを有していないことから新規取得） 	<ul style="list-style-type: none"> 追加調査の目的及び計画を説明（9/4） 実施状況を説明（10/13,11/20） 				
	<ul style="list-style-type: none"> 材料減衰+散乱減衰 S波検層（各Grごとに追加取得） 					
D. 表層地盤の物性値等	<ul style="list-style-type: none"> 既往データによる 埋戻し土及び流動化処理土に対して、既往のデータ（施工管理・物性データ）の整理 	<ul style="list-style-type: none"> 既存データに基づく物性データの整理結果を説明。（6/20） 既存データに基づく施工管理方法・物性データの整理結果に基づく物性値等の設定内容を説明。（9/4） 	<ul style="list-style-type: none"> データの整理結果及び信頼性の確認結果 	<ul style="list-style-type: none"> 分析方針及び結果 ➢ AA周辺グループ 	<ul style="list-style-type: none"> データの整理結果及び信頼性の確認結果（更なるデータ追加に関する検討反映） 	<ul style="list-style-type: none"> 分析方針及び結果 ➢ 全グループ
	<ul style="list-style-type: none"> 追加データによる 表層地盤の物性値に係る調査（施工年代別の範囲における採取されていない箇所や一部偏りがある深部について追加取得） 	<ul style="list-style-type: none"> 追加調査の目的及び計画を説明（9/4） 実施状況を説明（10/13,11/20） 				

2. データの取得及び信頼性の確認

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に加筆

2. データの取得及び信頼性の確認

：今回会合での追加説明範囲

■ 用いるデータ

- 今回地盤モデル設定に用いる、敷地の地盤の特徴を捉えるために取得する全データを以下に示す。
- 取得したデータに対しては、その取得方法ごとに、以下の観点で以下の方針で信頼性を確保している。
 - 各因子におけるパラメータの設定にあたって、適切な調査方法やデータの処理方法が選定されていること。
 - 調査データそのものの信頼性を確保するために、適切な機器・装置を用いていること。
 - 調査結果に対する信頼性を確保するために、原子力施設における実績を有する実施者により行われていること。

注：設定するパラメータ及びその検討項目については大文字アルファベットの番号を、上記の設定に用いるデータについては小文字アルファベットの番号を付している。
以降の各説明との対応を上記番号により紐づけて示す。

設定する パラメータ	A.岩盤部分の 物性値等		B.岩盤部分の 非線形性		C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の 物性値等
	速度構造 (層厚、 Vs, Vp, ρ)		ひずみ依存特性 (G/G ₀ -γ関係)		減衰定数 (h)					速度構造 (G ₀ , γ)
					材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
				C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を 用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層		
取得 データ	既往	PS検層 (a.-①)	三軸圧縮試験 (b.-①)	三軸圧縮試験 (c.-①)	-	地震観測記録 (c.-③)	地震観測記録 (c.-③)	S波検層 (敷地内3地点) (c.-⑤)	PS検層 (d.-①)	
	追加	PS検層 (a.-②)	-	-	岩石コア試験 (c.-②)	-	-	S波検層 (各グループ) (c.-⑥)	PS検層 (d.-②)	
データの 信頼性		<ul style="list-style-type: none"> ➢ 規格類に適合する調査方法の採用 ➢ 波形の読み取り精度の向上のための工夫 ➢ 校正された装置の使用 ➢ 常時微動による影響の確認 ➢ 原子力施設における調査実績を多数有する調査会社が実施 	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 規格類に適合する調査方法の採用 ➢ 調査誤差が低減可能な装置の使用 ➢ 原子力施設における多数の実績を有する調査会社が実施 	➢ 同左	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 解析手法の特性を踏まえた評価方法の適正化 ➢ 原子力施設における調査実績を多数有する調査会社が実施 	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 地震観測装置の設置時の施工管理、継続的な保守管理、校正がされている装置の使用 ➢ 観測記録に対する適切な補正 ➢ 常時微動 (c.-④) による影響の確認 ➢ 検討に用いる地震数の充分性の確認 	➢ 同左	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 規格類に適合する調査方法の採用 ➢ 校正された装置の使用 ➢ 検討の目的に照らしたデータを精度よく把握できる条件設定。 ➢ 常時微動、近接建屋、表層地盤等の影響の確認 ➢ 原子力施設における調査実績を多数有する調査会社が実施 	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 規格類に適合する調査方法の採用 ➢ 波形の読み取り精度の向上のための工夫 ➢ 原子力施設における調査実績を多数有する調査会社が実施 	

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に単位体積重量データを加筆

：今回会合での追加説明範囲

2. データの取得及び信頼性の確認

■ 岩盤部分のPS検層（a.-①,a.-②）

● データの信頼性の確保

- PS検層方法としては「JGS-1122 地盤の弾性波速度検層方法」に適合する方法を用いる。
→観測直後に記録した波形が特異なものでないこと及び信号の到達時間が妥当であることを現場にて確認。
- 速度構造の解析時に、初動走時を正確に把握するために、記録波形を位相反転した波形に対しても確認を実施し、読み取り精度の向上を図る。
- 調査データそのものの信頼性を確保するために、PS検層に用いた受信機は、校正されたものを用いている。また、起振波の振幅レベルに対して、常時微動による影響がないことを確認している。
- 調査結果に対する信頼性を確保するために、PS検層の作業及びデータの読み取り・分析については、原子力施設における多数の実績を有する調査会社によって実施する。

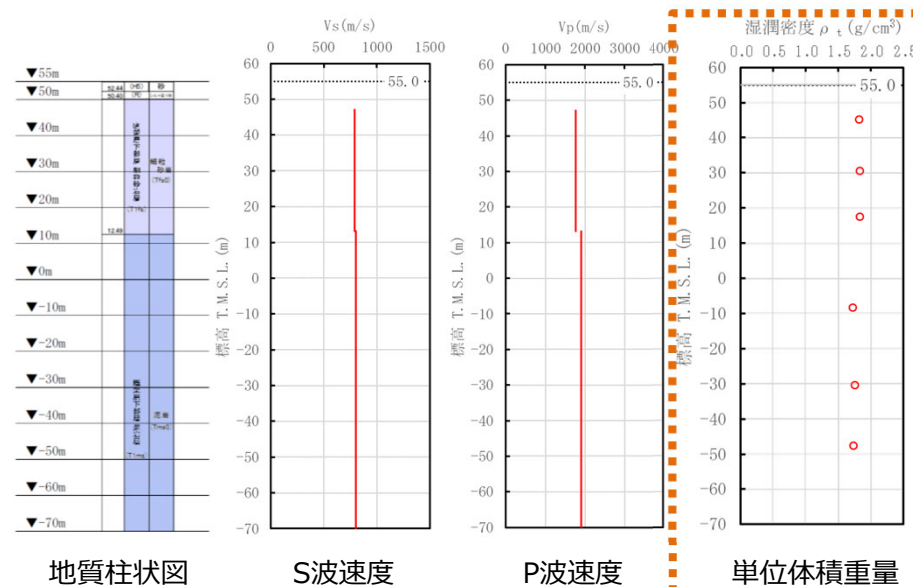
● 取得したデータ

【a.-①】：各建物・構築物直下又は近傍で実施されている既往のPS検層データ（●+●）計34孔における速度構造（S波速度、P波速度、各速度層の層厚）、単位体積重量及び当該孔における地質柱状図を整理した。

【a.-②】：後述の「C.岩盤部分の減衰定数」にて実施する各グループにおけるS波検層の追加調査孔においてPS検層データ（●）計12孔を追加取得し、速度構造（S波速度、P波速度、各速度層の層厚）、単位体積重量及び当該孔における地質柱状図を整理した。

PS検層データを取得した孔名一覧（敷地内の位置は次頁に示す）

区分	記号	PS検層孔
既往データ (a.-①)	●	N3_-U, N3-E5_, N3_-E5_, L-U_, M-S, L-T, M-T, M-5, D-T, D-6, D-5, D-4, D-3, O-E5, N6-V, N6_-4, N6_-E2, E-4, J_-5_, J-T, K-T
	●	D-E5_, M-V, N_-U, N3_-6, L-4, K_-V, K_-3, N6_-X, E_-W_, E_-E2_, H_-X_(2), J_-T_, C_-U,
追加データ (a.-②)	●	R5-Q1, R5-Q2, R5-Q3, R5-Q4, R5-Q5, R5-Q6, R5-Q7, R5-Q8, R5-Q9, R5-Q10, R5-Q11, R5-Q12



PS検層から得られたデータ（R5-Q6孔の例）

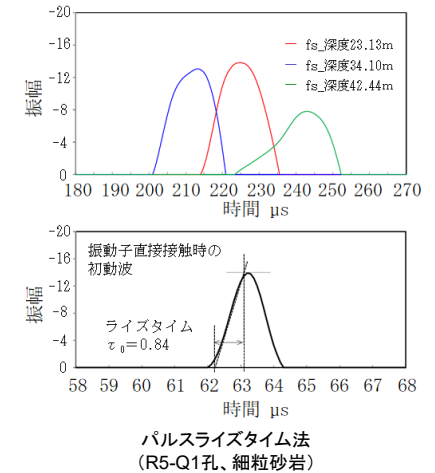
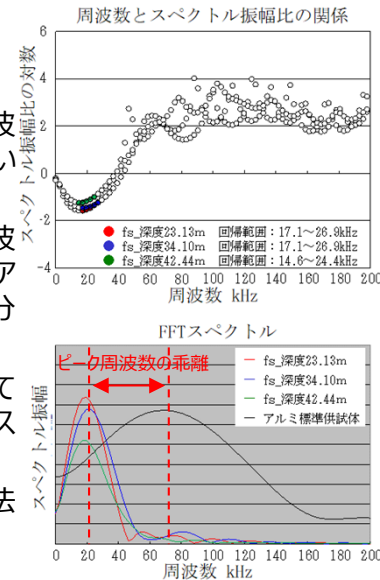
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

2. データの取得及び信頼性の確認

■ 岩石コア試験 (c.-②)

● データの信頼性の確保

- ▶ 岩石コア試験の超音波測定は、「JGS1220-2009 パルス透過法による超音波測定方法」に準じて実施されており、測定作業及びデータの読み取り・分析については、原子力施設における多数の実績を有する調査会社によって実施する。
- ▶ スペクトル比法については、減衰定数の算定には振幅スペクトル比の対数と透過波の周波数の関係における勾配 (Q値) を用いるが、試験に用いるリファレンス (アルミ供試体) と岩石コアの透過波のピークに乖離が見られ、透過波形の高次成分の影響が含まれる可能性がある。
- ▶ パルスライズタイム法についても、同じ透過波形データを用いて減衰定数を算定しているため、上記と同様の透過波形データの高次成分の影響は考えられるものの、スペクトル比法よりこれらの影響は小さく、信頼性が高い。
- ▶ 以上を踏まえ、スペクトル比法による減衰定数は参考値とし、パルスライズタイム法による減衰定数に基づく分析を実施する。

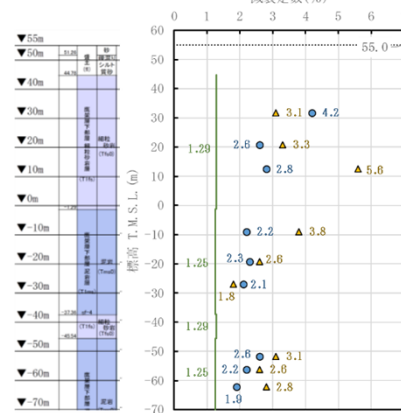


● 取得したデータ

【c.-②】：各地点における岩石コア試験結果により、2つの解析手法にて岩盤分類毎に減衰定数を算出。

同一岩種内における試験結果については、各地点・深さ間でばらつきを有するが、特定の地点において大きく減衰が異なる傾向は示さないことから、岩種ごとにデータを整理可能と判断。

- 繰返し三軸試験結果の最小減衰定数
- コアQ値測定結果の減衰定数(スペクトル比法)
- ▲ コアQ値測定結果の減衰定数(パルスライズタイム法)



各孔における岩石コア試験結果 (R5-Q1孔の例)

同一岩盤分類における地点ごとの試験結果一覧表 (細粒砂岩の例)

岩盤分類(層序)	調査位置	パルスライズタイム法	平均	
細粒砂岩	fs	R5-Q1	4.0	3.7
		R5-Q2	4.4	
		R5-Q2*	2.0	
		R5-Q6	3.0	
		R5-Q9	4.1	
		R5-Q9	4.1	
		R5-Q10	3.6	
		R5-Q10	4.5	
		R5-Q11	3.5	

*：他データと比較してばらつきの大きいが得られているが、同じR5-Q2孔において4.4%の値を示すデータも得られていることから、本調査位置の細粒砂岩において特異に小さい減衰定数を示す傾向には無いと判断。

岩石コアによる岩盤分類 (層序) 毎の試験結果一覧表

地盤範囲	地質区分		岩盤分類(層序)	岩石コア試験結果による減衰定数(%)
西側地盤	鷹架層上部層	泥岩層	泥岩	1.7
			砂岩・凝灰岩互層	1.1
東側地盤	鷹架層中部層	軽石混り砂岩	礫混り砂岩	3.9
			砂岩・泥岩互層	4.0
			軽石混り砂岩	3.3
			砂質軽石凝灰岩	3.3
中央地盤	鷹架層下部層	軽石凝灰岩層	凝灰岩	1.8
			軽石凝灰岩	3.4
			軽石質砂岩	3.2
中央地盤	鷹架層下部層	細粒砂岩層	細粒砂岩	3.7
		泥岩層	泥岩	2.7

注：パルスライズタイム法による各地点の結果を平均化した値を示す。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に加筆

2. データの取得及び信頼性の確認

今回会合での追加説明範囲

■ 表層地盤のPS検層データ（d.-①,d.-②）

● データの信頼性の確保

- PS検層方法としては「JGS-1122 地盤の弾性波速度検層方法」に適合する方法を用いる。
→観測直後に記録した波形が特異なものでないことを現場にて確認。地下水位観測孔を対象とした2孔についても、観測井処理（硬質ポリ塩化ビニル管設置）に伴う異常がないことを確認。
- 速度構造の解析時に、初動走時を正確に把握するために、記録波形を位相反転した波形に対しても確認を実施し、読み取り精度の向上を図る。
- 調査結果に対する信頼性を確保するために、PS検層の作業及びデータの読み取り・分析については、原子力施設における多数の実績を有する調査会社によって実施する。

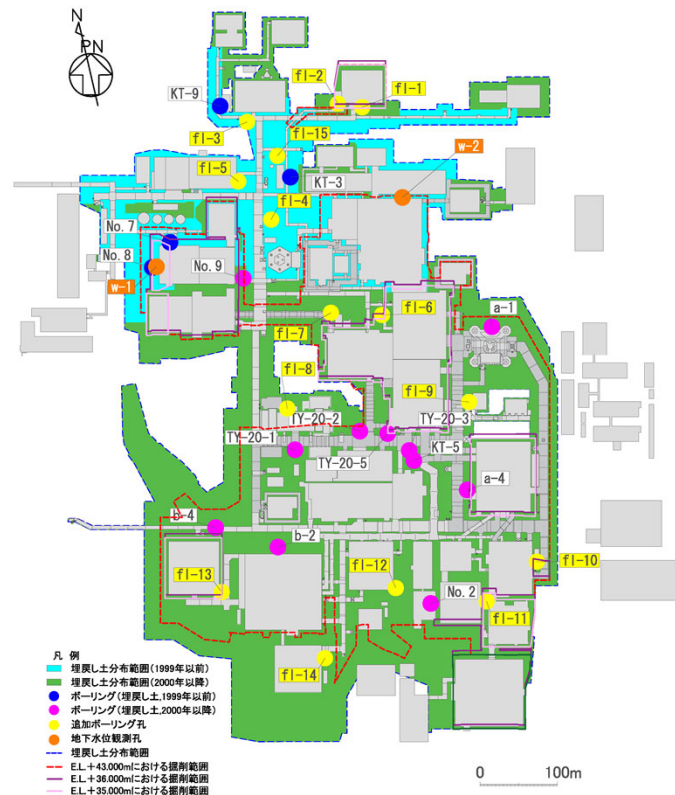
● 取得したデータ（埋戻し土）

【d.-①】：既往のPS検層データ（● + ●）計15孔における速度構造（S波速度、P波速度）、密度及び当該孔における地質柱状図を整理した。

【d.-②】：後述の「d.表層地盤の物性値等」にて実施する追加調査孔（● 15孔）に地下水位観測孔（● 2孔）を加えてPS検層データ計17孔を追加取得し、速度構造S波速度、P波速度）、密度及び当該孔における地質柱状図を整理した（地下水位観測孔2孔における密度は未取得）。

PS検層データを取得した孔名一覧（埋戻し土）

区分	記号	PS検層孔
既往データ (d.-①)	●	KT-3, KT-9, No.7, No.8
	●	KT-5, No.2, No.9, a-1, a-4, b-2, b-4, TY-20-1, TY-20-2, TY-20-3, TY-20-5
追加データ (d.-②)	●	fl-1, fl-2, fl-3, fl-4, fl-5, fl-6, fl-7, fl-8, fl-9, fl-10, fl-11, fl-12, fl-13, fl-14, fl-15, w-1, w-2
	●	w-1, w-2



PS検層データ取得位置図（埋戻し土）

孔名	fl-1					
孔口標高(m)	54.96					
深度(m)	地質	Vp m/s	Vs m/s	ρt Mg/m ³		
1	埋戻し土（フレンド材：2000年以降）	300	160	-		
2				-		
3				-		
4				-		
5				1.938		
6				-		
7				1.920		
8				-		
9				1.971		
10				-		
11				1.893		
12				-		
13				1.914		
14				-		
15				1.967		
16				-		
17				1.861		
18				-		
19				1.929		
20				-		
21				710	360	1.914
22				-		
23				23.22	-	-

PS検層から得られたデータ（埋戻し土 fl-1孔の例）

基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

2. データの取得及び信頼性の確認

■ 表層地盤のPS検層データ (d.-①,d.-②)

● 埋戻し土の施工年代別に整理した動せん断弾性係数 G_0

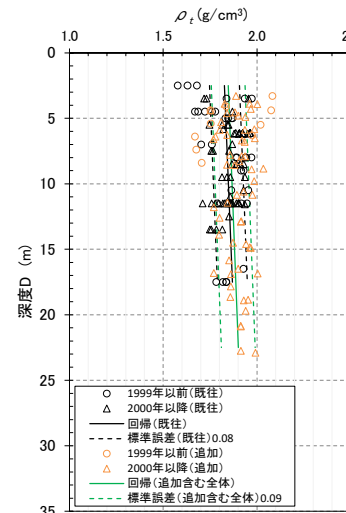
▶ ρ_t については、図aに示すとおり、既往のボーリング孔による平均回帰よりも全ボーリングでの平均回帰の方が若干高い値を示すが、標準誤差 $\pm\sigma$ の範囲は、両年代とも同程度のばらつきを示している。

▶ G_0 分布については、図bに示すとおり、深度依存を示す。また、全ボーリングの標準誤差 $\pm\sigma$ は既往ボーリングの標準誤差 $\pm\sigma$ の範囲(標準誤差減少 (47.6MPa→41.4MPa))に収まっており、既往ボーリングから全ボーリングの統計量(平均、標準誤差)が推定可能であることから同一母集団と判断できるような結果を示している。

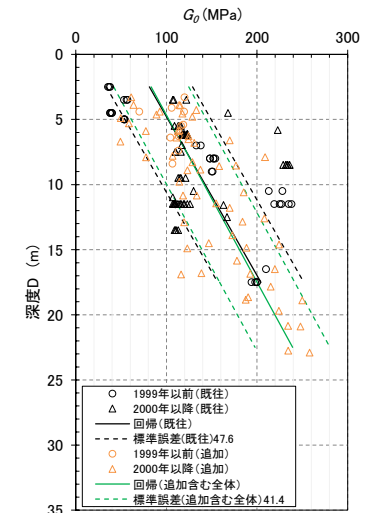
▶ 施工年代毎の V_s 分布について、前回会合より1999年以降に施工した領域における深部までを対象とした地下水位観測孔2孔のPS検層結果を追加 (ρ_t は未取得) した。図cに示すとおり、寒色系で示す1999年以降の V_s 分布と暖色系で示す2000年以降の V_s 分布は、施工年代にかかわらず0.1km/s程度から0.35km/sの速度範囲で分布し、離散化 V_s の平均値(○印)は深度依存の傾向を示している。

▶ 図dに示す1999年以前と2000年以降の V_s 分布(図c)と ρ_t 回帰(図a)による離散化した G_0 の分布は、各施工時期いずれも深度依存を示すとともに、既往ボーリング孔での標準誤差($\pm\sigma$)の $\pm 1\sigma$ 程度のばらつきとなっている。

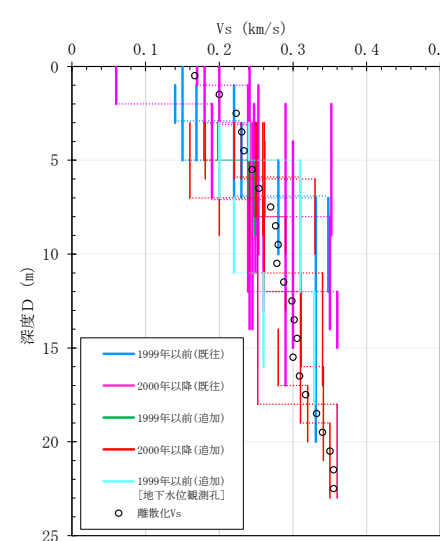
▶ 以上より、 G_0 分布の回帰は施工年代でデータを分けると若干異なる結果を示すものの差は僅かであり、土質材料として同一の母集団と判断できる。よって、埋戻し土の動せん断弾性係数 G_0 については、統一した物性値として既往データに追加データを合わせた ρ_t 及び V_s のデータセットから得られた深度依存回帰の平均(図b)を用いる。



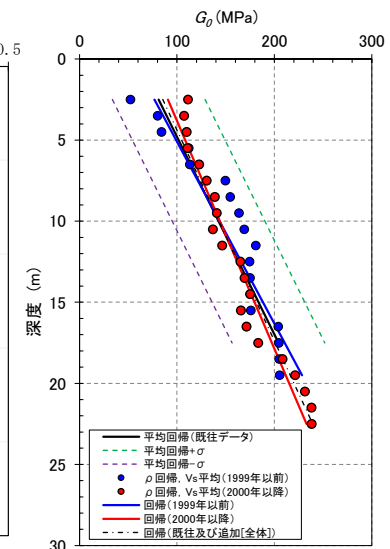
図a 湿潤密度 ρ_t 分布図



図b 動せん断弾性係数 G_0 分布図



図c ボーリング孔の V_s 分布図



図d V_s と ρ_t 回帰による G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

2. データの取得及び信頼性の確認

■ 表層地盤のPS検層データ（d.-①）

● 取得したデータ（流動化処理土）

【d.-①】：既往のPS検層データ（○+○）計7孔における速度構造(S波速度)、密度を整理した。

● 流動化処理土の施工状況・管理方法により整理した動せん断弾性係数 G_0

➤ 敷地全体における流動化処理土は、図 a によるブロック割りで施工されている。流動化処理土は、流動化処理土利用技術マニュアル等に基づき施工管理がなされており、一軸圧縮強度 qu の管理基準に応じて、2つのグループに大別され、一定の品質となるよう施工管理されている（図 b）。

第1グループ（○）： $qu \geq 0.3\text{MPa}$ 程度（一部 0.2MPa 程度設定あり）

第2グループ（○）： $qu \geq 0.6\text{MPa}$ 程度

➤ 流動化処理土はセメント添加による人工材料であるため、一般的に土質材料のような深度依存（拘束圧依存）はないものと考えられることから、第1、第2グループ共に深度依存のない平均物性値として整理する（図 c、d）。

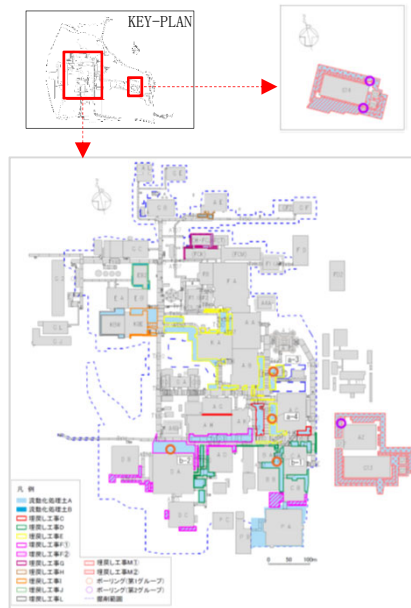


図 a 流動化処理土の分布状況

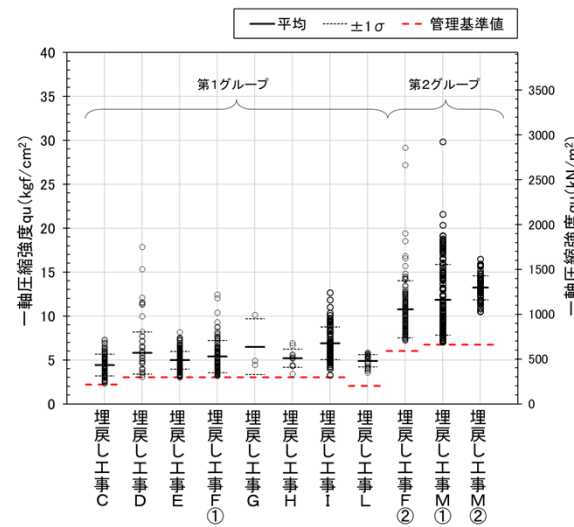


図 b 流動化処理土の施工管理記録（一軸圧縮強度）

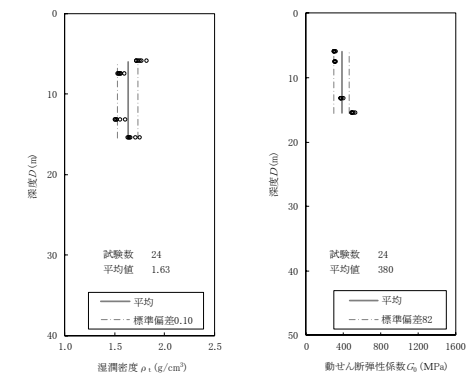


図 c 第1グループの湿潤密度 ρ_t 及び動せん断弾性係数 G_0 分布図

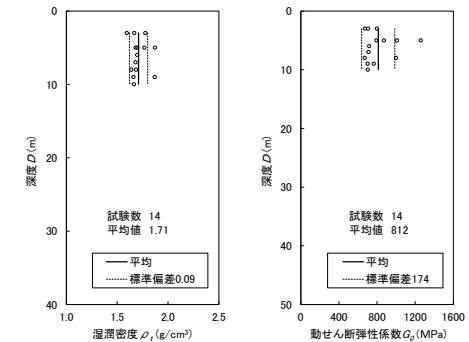


図 d 第2グループの湿潤密度 ρ_t 及び動せん断弾性係数 G_0 分布図

3. データの敷地への適用

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に加筆

3. データの敷地への適用

：今回会合での追加説明範囲

■ 敷地内各地点において用いるデータ（1/5）

- 前頁までに示した、信頼性を確保したデータについて、敷地内の各位置において用いるデータを整理した。
- 用いるデータについては、近接する建屋グループを仮定し、各グループの範囲内にて得られている既往データに加え、グループ周辺の既往データ及び追加データを用いることとした。これにより、一部の追加データについては、複数グループで共有している。
- なお、岩種ごとに習得しているデータについては、当該グループ内に分布する岩種に対応するデータを用いることとした。
- 地震観測記録については、敷地内のf-1,f-2断層により区切られる中央、西側、東側地盤の単位で適用させることとした。


設定する パラメータ	A.岩盤部分の 物性値等	B.岩盤部分の 非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の 物性値等
	速度構造 (層厚、 Vs, Vp, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G ₀ -γ関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G ₀ , γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を 用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
取得データ	PS検層 (a.-①, a.-②)	三軸圧縮試験 (b.-①)	三軸圧縮試験 (c.-①)	岩石コア試験 (c.-②)	地震観測記録 (c.-③)	地震観測記録 (c.-③)	S波検層 (c.-⑤, c.-⑥)	PS検層 (d.-①, d.-②)
AA周辺	<ul style="list-style-type: none"> • N3_-U • N3-E5_ • N3_-E5_ • L-U_ • D-E5_ • M-V • N_-U • R5-Q2 • R5-Q10 	<ul style="list-style-type: none"> • 細粒砂岩 • 泥岩（下部層） 	• 同左	• 同左	<ul style="list-style-type: none"> 【地震観測記録を用いた同定】 • 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> 【地震波干渉法】 • 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> • R5-Q2 • R5-Q10 	<ul style="list-style-type: none"> • 埋戻し土のPS検層結果

注記：三軸圧縮試験において整理した岩種は、薄層の砂岩・泥岩互層、限定箇所分布する礫岩、粗粒砂岩及び解放基盤以深に分布する凝灰質砂岩を除く岩種としており、岩石コア試験における対象岩種も同じものとなっている。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に加筆

3. データの敷地への適用

 : 今回会合での追加説明範囲

■ 敷地内各地点において用いるデータ（2/5）


設定するパラメータ	A. 岩盤部分の物性値等	B. 岩盤部分の非線形性	C. 岩盤部分の減衰定数					D. 表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 ($G/G_0-\gamma$ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
取得データ	PS検層 (a.-①, a.-②)	三軸圧縮試験 (b.-①)	三軸圧縮試験 (c.-①)	岩石コア試験 (c.-②)	地震観測記録 (c.-③)	地震観測記録 (c.-③)	S波検層 (c.-⑤, c.-⑥)	PS検層 (d.-①, d.-②)
F施設 周辺	<ul style="list-style-type: none"> M-S L-T M-T M-5 D-T D-5 R5-Q9 R5-Q10 	<ul style="list-style-type: none"> 細粒砂岩 泥岩（下部層） 	<ul style="list-style-type: none"> 同左 	<ul style="list-style-type: none"> 同左 	<ul style="list-style-type: none"> 【地震観測記録を用いた同定】 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> 【地震波干渉法】 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> R5-Q9 R5-Q10 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土のPS検層結果
AE	<ul style="list-style-type: none"> N3_-6 D-6 R5-Q6 	<ul style="list-style-type: none"> 細粒砂岩 泥岩（下部層） 	<ul style="list-style-type: none"> 同左 	<ul style="list-style-type: none"> 同左 	<ul style="list-style-type: none"> 【地震観測記録を用いた同定】 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> 【地震波干渉法】 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> R5-Q6 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土のPS検層結果
AG	<ul style="list-style-type: none"> L-4 D-4 R5-Q2 	<ul style="list-style-type: none"> 細粒砂岩 泥岩（下部層） 	<ul style="list-style-type: none"> 同左 	<ul style="list-style-type: none"> 同左 	<ul style="list-style-type: none"> 【地震観測記録を用いた同定】 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> 【地震波干渉法】 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> R5-Q2 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土のPS検層結果

注記：三軸圧縮試験において整理した岩種は、薄層の砂岩・泥岩互層、限定箇所分布する礫岩、粗粒砂岩及び解放基盤以深に分布する凝灰質砂岩を除く岩種としており、岩石コア試験における対象岩種も同じものとなっている。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に加筆

3. データの敷地への適用

 : 今回会合での追加説明範囲

■ 敷地内各地点において用いるデータ（3/5）

設定するパラメータ	A. 岩盤部分の物性値等	B. 岩盤部分の非線形性	C. 岩盤部分の減衰定数					D. 表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 ($G/G_0-\gamma$ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
取得データ	PS検層 (a.-①, a.-②)	三軸圧縮試験 (b.-①)	三軸圧縮試験 (c.-①)	岩石コア試験 (c.-②)	地震観測記録 (c.-③)	地震観測記録 (c.-③)	S波検層 (c.-⑤, c.-⑥)	PS検層 (d.-①, d.-②)
GA	<ul style="list-style-type: none"> • K_-V • R5-Q2 	<ul style="list-style-type: none"> • 細粒砂岩 • 泥岩（下部層） 	• 同左	• 同左	<ul style="list-style-type: none"> 【地震観測記録を用いた同定】 • 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> 【地震波干渉法】 • 中央地盤観測点の地震観測記録 	• R5-Q2	• 埋戻し土のPS検層結果
DC	<ul style="list-style-type: none"> • K_-3 • R5-Q1 • R5-Q11 	<ul style="list-style-type: none"> • 細粒砂岩 • 泥岩（下部層） 	• 同左	• 同左	<ul style="list-style-type: none"> 【地震観測記録を用いた同定】 • 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> 【地震波干渉法】 • 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> • R5-Q1 • R5-Q11 	• 埋戻し土のPS検層結果
E施設周辺	<ul style="list-style-type: none"> • J_-T_- • J_-5_- • C_-U • J-T • K-T • R5-Q5 	<ul style="list-style-type: none"> • 泥岩（上部層） • 砂岩・凝灰岩互層 • 礫混り砂岩 	• 同左	• 同左	<ul style="list-style-type: none"> 【地震観測記録を用いた同定】 • 西側地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> 【地震波干渉法】 • 西側地盤観測点の地震観測記録 	• R5-Q5	• 埋戻し土のPS検層結果

注記：三軸圧縮試験において整理した岩種は、薄層の砂岩・泥岩互層、限定箇所分布する礫岩、粗粒砂岩及び解放基盤以深に分布する凝灰質砂岩を除く岩種としており、岩石コア試験における対象岩種も同じものとなっている。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に加筆

3. データの敷地への適用

 : 今回会合での追加説明範囲

■ 敷地内各地点において用いるデータ（4/5）

設定する パラメータ	A.岩盤部分の 物性値等	B.岩盤部分の 非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の 物性値等
	速度構造 (層厚、 Vs, Vp, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G ₀ -γ関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G ₀ , γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を 用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
取得データ	PS検層 (a.-①, a.-②)	三軸圧縮試験 (b.-①)	三軸圧縮試験 (c.-①)	岩石コア試験 (c.-②)	地震観測記録 (c.-③)	地震観測記録 (c.-③)	S波検層 (c.-⑤, c.-⑥)	PS検層 (d.-①, d.-②)
AC	<ul style="list-style-type: none"> • N6_-4 • O-E5 • N6-V • R5-Q7 	<ul style="list-style-type: none"> • 砂質軽石凝灰岩 • 凝灰岩 • 軽石凝灰岩 • 軽石質砂岩 	• 同左	• 同左	<ul style="list-style-type: none"> • 【地震観測記録を用いた同定】 • 東側地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> • 【地震波干渉法】 • 東側地盤観測点の地震観測記録 	• R5-Q7	• 埋戻し土のPS検層結果
CA	<ul style="list-style-type: none"> • N6_-E2 • R5-Q7 • R5-Q12 	<ul style="list-style-type: none"> • 砂質軽石凝灰岩 • 凝灰岩 • 軽石凝灰岩 • 軽石質砂岩 • 細粒砂岩 	• 同左	• 同左	<ul style="list-style-type: none"> • 【地震観測記録を用いた同定】 • 東側地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> • 【地震波干渉法】 • 東側地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> • R5-Q7 • R5-Q12 	• 埋戻し土のPS検層結果
CB	<ul style="list-style-type: none"> • N6_-X • D-3 • R5-Q12 	<ul style="list-style-type: none"> • 砂質軽石凝灰岩 • 凝灰岩 • 軽石凝灰岩 • 軽石質砂岩 • 細粒砂岩 	• 同左	• 同左	<ul style="list-style-type: none"> • 【地震観測記録を用いた同定】 • 東側地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> • 【地震波干渉法】 • 東側地盤観測点の地震観測記録 	• R5-Q12	• 埋戻し土のPS検層結果

注記：三軸圧縮試験において整理した岩種は、薄層の砂岩・泥岩互層、限定箇所分布する礫岩、粗粒砂岩及び解放基盤以深に分布する凝灰質砂岩を除く岩種としており、岩石コア試験における対象岩種も同じものとなっている。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に加筆

3. データの敷地への適用

 : 今回会合での追加説明範囲

■ 敷地内各地点において用いるデータ（5/5）

設定する パラメータ	A.岩盤部分の 物性値等	B.岩盤部分の 非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の 物性値等
	速度構造 (層厚、 Vs,Vp,ρ)	ひずみ依存特性 (G/G ₀ -γ関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G ₀ ,γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を 用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
取得データ	PS検層 (a.-①, a.-②)	三軸圧縮試験 (b.-①)	三軸圧縮試験 (c.-①)	岩石コア試験 (c.-②)	地震観測記録 (c.-③)	地震観測記録 (c.-③)	S波検層 (c.-⑤, c.-⑥)	PS検層 (d.-①, d.-②)
AZ	<ul style="list-style-type: none"> E_-W_ E_-E2_ E-4 R5-Q7 R5-Q8 	<ul style="list-style-type: none"> 砂質軽石凝灰岩 軽石混り砂岩 凝灰岩 軽石凝灰岩 軽石質砂岩 	• 同左	• 同左	【地震観測記録を用いた同定】 • 東側地盤観測点の地震観測記録	【地震波干渉法】 • 東側地盤観測点の地震観測記録	<ul style="list-style-type: none"> R5-Q7 R5-Q8 	• 流動化処理土のPS検層結果
G14	<ul style="list-style-type: none"> H_-X_(2) R5-Q3 R5-Q4 	<ul style="list-style-type: none"> 軽石混り砂岩 砂質軽石凝灰岩 凝灰岩 軽石凝灰岩 	• 同左	• 同左	【地震観測記録を用いた同定】 • 東側地盤観測点の地震観測記録	【地震波干渉法】 • 東側地盤観測点の地震観測記録	<ul style="list-style-type: none"> R5-Q3 R5-Q4 	• 流動化処理土のPS検層結果

注記：三軸圧縮試験において整理した岩種は、薄層の砂岩・泥岩互層、限定箇所分布する礫岩、粗粒砂岩及び解放基盤以深に分布する凝灰質砂岩を除く岩種としており、岩石コア試験における対象岩種も同じものとなっている。

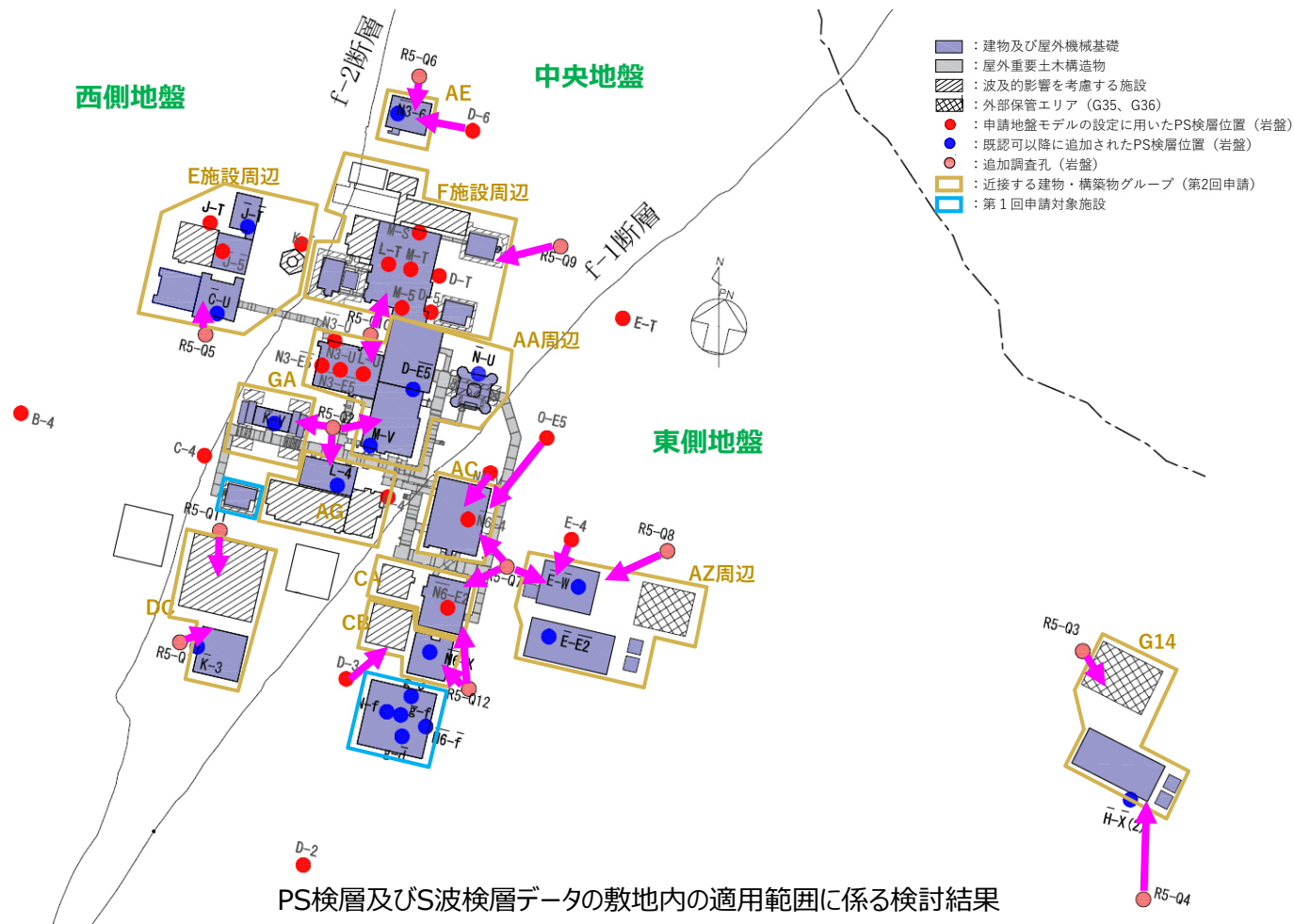
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

3. データの敷地への適用

■ 敷地内各地点において用いるデータの詳細

● 岩盤部分のPS検層（a.-①、a.-②）及びS波検層（c.-⑥）

- 用いるデータについては、近接する建屋グループを仮定し、各グループの範囲内（）にて得られている既往データ（● + ●）に加え、グループ周辺の既往データ（●）及び追加データ（●）を、図中矢印（➡）に示すとおり用いることとした。



4. データの整理

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に追記

4. データの整理

■ 敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造の設定に係る分析方針

- ▶ 「3. データの整理」に示したデータを各グループに適用し、敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造を把握する上で、下表に示す着目点に対する分析を行った。
- ▶ 各因子における分析に係る着目点の把握、分析の実施にあたっては、原子炉サイトにおける地盤モデルの策定において多数の検討実績を有する見識者を中心に実施した。
- ▶ また、各因子におけるデータ整理又は分析において、他因子に対して共有すべき知見がある場合には、その観点での分析も実施した。
- ▶ 次頁以降において、各グループにおけるデータの分析方針を示す。

設定するパラメータ	A. 岩盤部分の物性値等	B. 岩盤部分の非線形性	C. 岩盤部分の減衰定数					D. 表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 ($G/G_0-\gamma$ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> グループ内における各データ取得位置における地質構造及び速度構造の特徴を整理。 断層等の影響により建屋直下で地質構造が異なる場合の地盤応答への影響を確認。 (C. 岩盤部分の減衰定数に係る分析における知見を踏まえた着目点) 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル（ひずみの大きさ及び剛性低下率）及び入力地震動への影響を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 同一岩種の供試体に基づくデータを統計的にひずみ依存特性 ($h-\gamma$) に回帰したものであることから、そのデータが一樣のものとなっているか確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 岩石コアにより得られた材料減衰がごく小ひずみ領域における値であることを踏まえ、岩種ごとの線形条件における減衰定数として整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録と整合する減衰定数を同定。 既往実績等から、減衰定数の周波数依存特性は複数の仮定条件を設定。 同定値の妥当性を地震観測シミュレーションにより確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 小振幅の地震も含む多数の地震観測記録に見られる共通的な傾向を分析し、減衰定数を推定。 	<ul style="list-style-type: none"> 同左 敷地内の各地点で得られた減衰定数の実測データを踏まえ、敷地の地盤が類似地点と異なる傾向を示すか確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土または流動化処理土のデータの傾向を踏まえた物性を考慮する。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

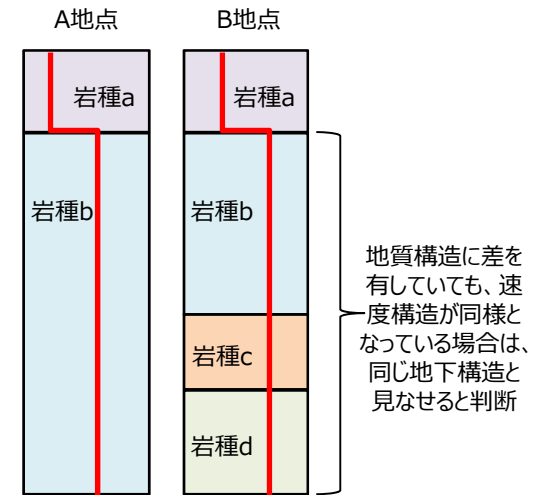
4. データの整理

■ 敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造の設定に係る整理方針

● A. 岩盤部分の物性値等

【地質構造及び速度構造の確認】

- ▶ 各グループ内で用いることとしたPS検層データについて、以下の観点で、グループ内の各地点における地下構造の比較を行う。
 - 地質構造の確認として、地質柱状図より、分布する岩種及びその岩種境界レベルが各地点間で同等であれば、同じ地下構造におけるデータであると判断する。
 - 各地点間の地質構造に差がある場合、PS検層データより、速度構造との対応関係を確認する。岩種境界に速度境界が見られない、または速度境界を有したとしても、同程度のコントラストを有する速度構造となっている場合については、同じ地下構造におけるデータであると判断する。
- ▶ 上記の比較より、各地点におけるPS検層データが、同じ地下構造におけるデータであると判断できる場合には、JEAG4601-1987の考え方に則り、各グループにおいて得られているデータを平均化した物性値として整理する。
- ▶ これにより、各グループにおいて用いるデータ数が増加することとなり、各グループにおける地盤の特徴を捉えた地下構造としての信頼性が向上すると考えられる。
- ▶ 上記の比較により、各地点におけるPS検層データが、同じ地下構造であると判断できない場合は各施設個別に物性値を整理する。



注：岩種の差は「B. 岩盤部分の剛性の非線形性」において考慮するはずみ依存特性に影響するが、B. の分析結果において岩盤部分の剛性の非線形性はSs地震時においても入力地震動に及ぼす影響が小さい傾向が全体的に見られることから、本検討では上記判断とした。

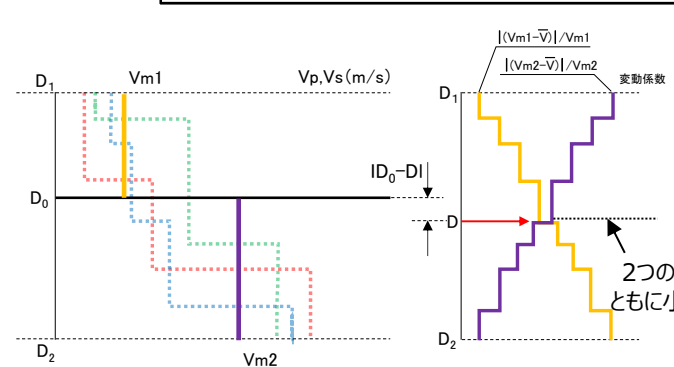
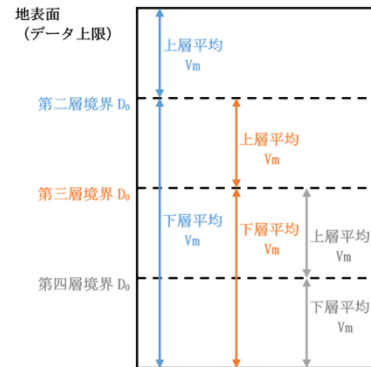
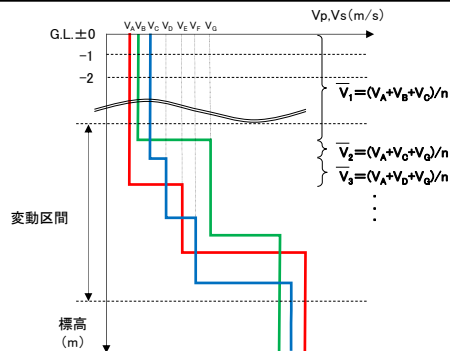
速度構造との対応関係の確認イメージ

【データを平均化した物性値の設定手順】

- 手順①：対象ボーリングデータを層厚1m毎に平均化し、Vを計算
 手順②：平均化で得られる速度の深さ方向分布図より、変化する区間（各ボーリング孔の速度境界が集中する区間と捉え、ここでは「変動区間」と呼ぶ。）を定める。

- 手順③：変動区間の任意の深度に速度境界 D_0 を仮定する。
 手順④：仮定した速度境界 D_0 を境に、上層・下層それぞれの平均値 V_m を計算し、各値に対して変動係数（＝標準偏差／平均値）の分布を求める。

- 手順⑤：上層・下層の平均速度を離散化することによる地盤内の連続速度変化との乖離を最小にするため、2本の変動係数分布について、交差する深度を求め、最初に仮定した速度境界と比較して概ね一致するまで繰り返す。
 S波速度、P波速度及び単位体積重量については、ここで設定した同一速度層内の試験結果の平均値として設定する。



2つの変動係数がとも小さくなる深度

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

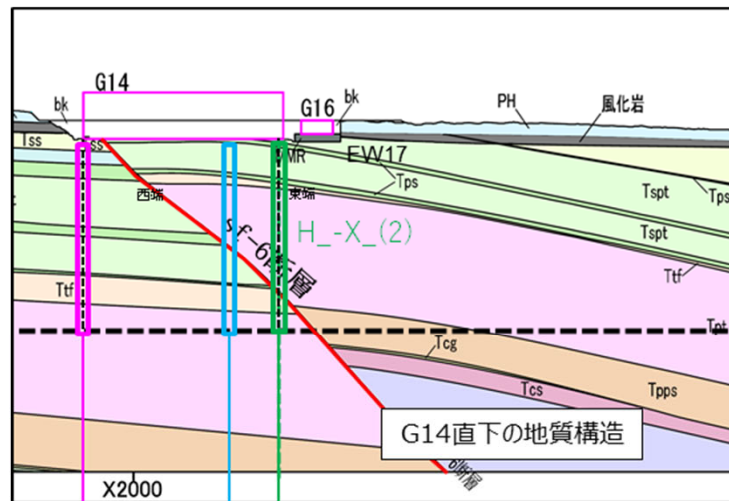
4. データの整理

■ 敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造の設定に係る整理方針

● A. 岩盤部分の物性値等

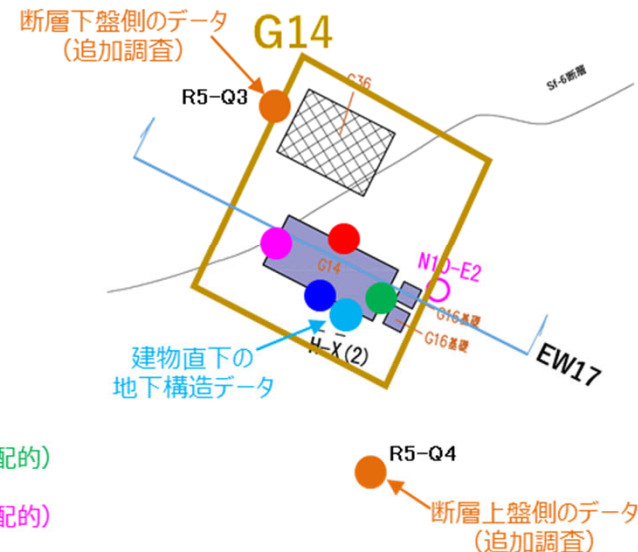
【建物・構築物直下の断層の影響確認】

- 建屋直下において断層を境として異なる岩種の分布が確認される施設を対象として、断層による異なる岩種分布による影響を確認するため、以下の検討を実施する。
- 以下のとおり設定した複数の地盤物性に基づき、一次元波動論により入力地震動の応答スペクトルを比較する。
 - ・断層の上盤側及び下盤側の地質構造の特徴を捉えたPS検層結果を用いて、建物設置範囲の各位置（建物の東西南北端(図中●、●、●、●の位置)）における地質構造の違いを反映した地盤物性を複数設定する。
 - ・設定にあたっては、断層の上盤側と下盤側のPS検層結果（図中●）に基づき、建物設置範囲の各位置に合わせた物性値を設定し、各グループで設定した物性値に基づく入力地震動との比較を行う。なお、この比較は一次元波動論による評価を前提としたものである。
- 応答スペクトルの比較にあたっては、施設の耐震設計において重要となる周期帯として、建物・構築物及び内包する設備への影響を考慮し、建物の1次固有周期よりも短周期側における応答スペクトルの大小関係に着目する。



- 建屋東端の地下構造（断層上盤側が支配的）
- G14直下のPS検層データ
- 建屋西端の地下構造（断層下盤側が支配的）

断層を境として異なる岩種の分布が確認される例



基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4. データの整理

■ 敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造の設定に係る整理方針

● B. 岩盤部分の剛性の非線形性

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合のSs地震時の地盤応答の応答スペクトルを算定比較することで、岩盤部分の非線形性を考慮した際の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルへの影響を確認する。
- 応答スペクトルの比較にあたっては、施設の耐震設計において重要となる周期帯として、各グループにおいて最も固有周期の長い施設よりも短周期側における応答スペクトルの大小関係に着目する。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回合資資料に岩石コアに関する考え方を追加

4. データの整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● 各データから得られる減衰定数の特徴

- 減衰定数に係るデータは、複数の手法により得られているため、手法毎の特徴を踏まえた分析を行う。
- 各着目点に応じた分析を行う上で、各データの取得条件等に応じた減衰定数の物理的な意味合いを整理した。

岩盤部分の減衰定数に係るデータ

データ	成分	着目周期帯	取得位置		考慮する地震動の振幅レベル	備考	
			既往データ	追加データ			
C-1 三軸圧縮試験	材料減衰	なし	敷地内各地点 および各岩種	—	直接地震動の振幅とは対応しないが、地盤のせん断ひずみ(1%程度まで)に対応した非線形特性を測定可能	—	
C-2 岩石コア試験	材料減衰	数百Hz~のごく 高振動数・短周期帯	—	各Gr(12地点)	微小振幅レベル	高次ピークの影響が小さいと考えられ、信頼性があると考えられるパルスライズタイム法を採用する。	
地震観測記録に基づく手法	C-3 地震観測記録を用いた同定	材料減衰 + 散乱減衰	0.1~1s程度	地震観測位置 (3地点)	—	実地震観測記録の振幅レベル(敷地においては40ガル程度まで)	既往知見及び審査実績を踏まえ、リニア型、バイリニア型、一定の複数の周波数依存性を仮定する。
	C-4 地震波干渉法	材料減衰 + 散乱減衰	デコンボリューション 波形の卓越周期周辺	地震観測位置 (3地点)	—	実地震観測記録の振幅レベル(敷地においては40ガル程度まで)	西側及び東側地盤においては、表層地盤の地下構造による影響が確認され、適切な評価が不可
C-5 S波検層	材料減衰 + 散乱減衰	0.01~0.1s程度のごく短周期領域	中央、西側、東側 地盤各1地点ずつ (合計3地点)	各Gr(12地点)	微小振幅レベル	—	

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4. データの整理

■ 敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造の設定に係るデータ整理方針

● C. 岩盤部分の減衰定数

材料減衰

【C-1：三軸圧縮試験】

- ひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）の傾向に着目し、岩盤のひずみレベルに応じた減衰定数の変動の傾向について確認する。
- 岩種ごとに近似的に整理されたデータであることを踏まえ、元となっている個別データの状況を、同じく各地点・深さにおけるデータである「C-2：岩石コア試験」のデータとの対応状況を踏まえて確認する。

【C-2：岩石コア試験】

- 微小ひずみレベルにおける材料減衰に対応するデータであることを踏まえ、C-1：三軸圧縮試験によるデータにおける微小ひずみ領域の減衰定数との対応関係を確認する。

【C-3：地震観測記録を用いた同定】

- 中央地盤、西側地盤、東側地盤の各地震観測点ごとに、当該地点の地下構造を踏まえた速度構造及び減衰定数を、地震観測記録における深さ間の伝達関数に整合するように同定する。
- 既往知見並びに審査実績における複数の仮定条件を網羅したデータ整理として、減衰定数の周波数依存性として、「周波数依存性なし」、「周波数依存型（リニア型）」、「周波数依存型（バイリニア型）」の3種類の条件を仮定する。
- 同定された速度構造及び減衰定数に基づき、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施し、地震観測記録の応答スペクトルの再現性を確認する。

材料減衰 + 散乱減衰

【C-4：地震波干渉法】

- 中央地盤、西側地盤、東側地盤の各地震観測点ごとに、解放基盤表面と地表間の入射波と反射波について、多数の地震に見られる共通的な傾向を、地震観測記録に基づくデコンボリューション波形により把握し、地盤中の減衰定数を推定する。




【C-5：S波検層】

- 各地点において得られたデータであることを踏まえ、既往知見における類似地点の減衰定数の傾向との対応関係を確認する。

● D. 表層地盤の物性値等

- 各グループにおける周辺の表層地盤を確認する。

減衰定数の周波数依存性の考え方

種別	減衰定数モデル式	モデル形状	文献
周波数依存性なし	$h=h_0$		Ohta(1975) 等
周波数依存型 (リニア型)	$h(f)=h_0 f^{-n}$		Takemura et al.(1993)等
周波数依存型 (バイリニア型)	$h(f)=h_0 f^{-n} \quad (f \leq f_0)$ $h(f)=h_0 f_0^{-n} \quad (f > f_0)$		佐藤(ほか)(2006)

4. データの整理

4.1 AA周辺グループ

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

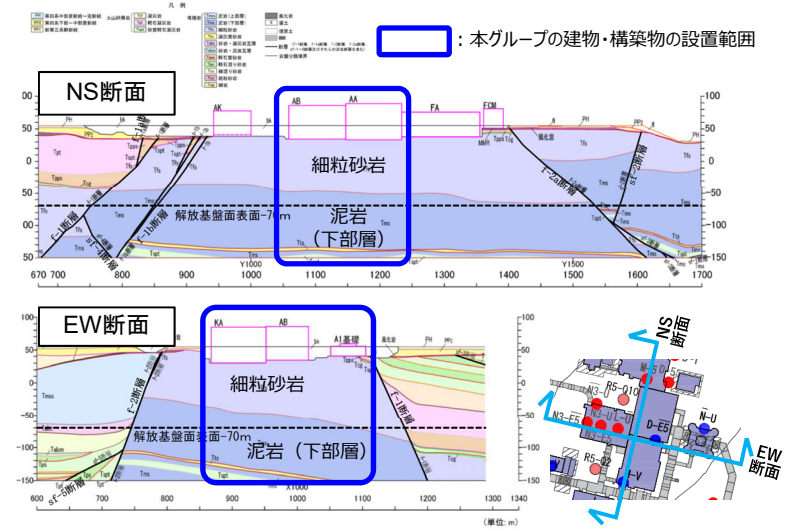
前回会合資料再掲

4.1 AA周辺グループのデータ整理

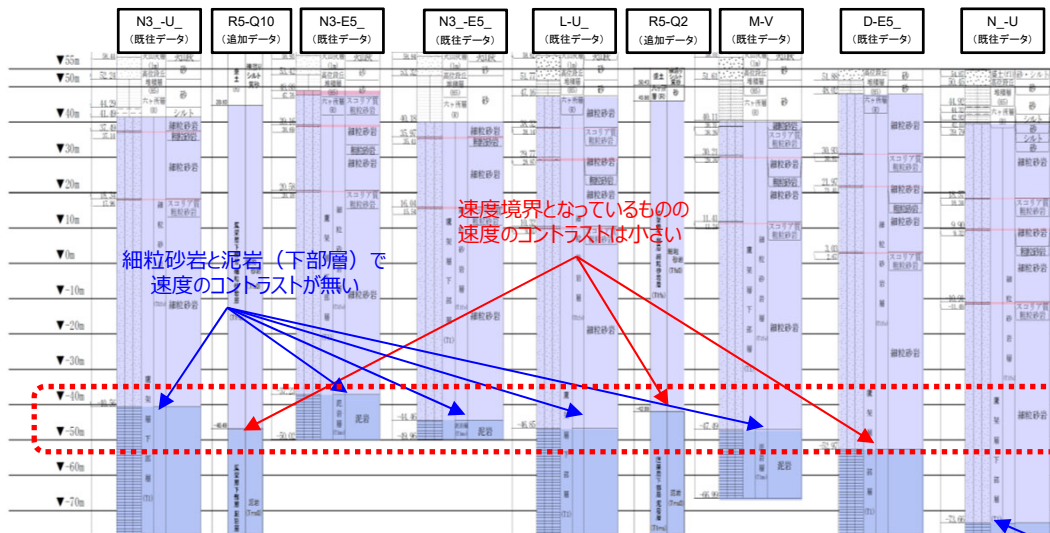
■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層（a.-①、a.-②）

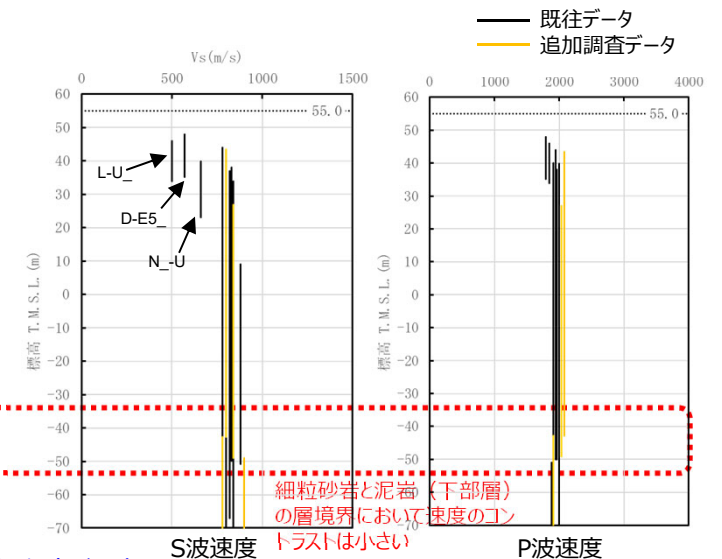
- 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層下部層の細粒砂岩及び泥岩が主に分布していることを確認した。
- 本グループの建物・構築物直下においては、岩種の分布に差を与えるような断層は見られない。
- PS検層（●+●+●）のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
- N₋U孔を除く8孔については、岩種境界レベルが同等となっており、その境界における速度のコントラストは小さいまたは無いことを確認。N₋U孔は岩種境界レベルは他地点と異なるものの、細粒砂岩と泥岩の境界では速度のコントラストは無いことを確認。
- L-U孔、D-E5孔及びN₋U孔、については、T.M.S.L.20mよりも浅部において、他の孔と比較してS波速度が小さいデータが得られているが、他の孔位置との地質構造の差は無いことから、同種の岩盤における速度構造として扱うことに問題は無いと判断した。
- 以上のことから、本グループにおけるPS検層データについては、同じ地下構造であると判断できることから、平均化した物性値として整理する。



岩盤分類図



地質柱状図の比較（グループ内の東西方向の順に整理）境界が他地点より深いものの、速度のコントラストは無い



PS検層結果

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

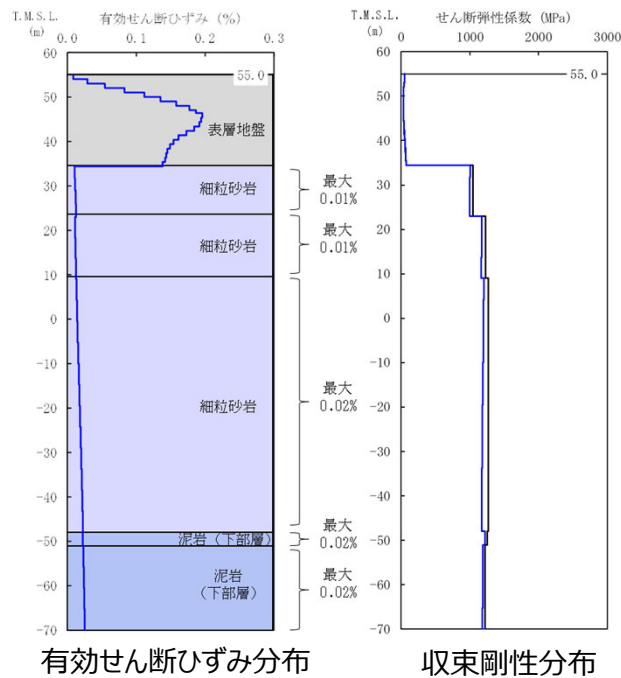
前回会合資料から
物性値見直し反映

4.1 AA周辺グループのデータ整理

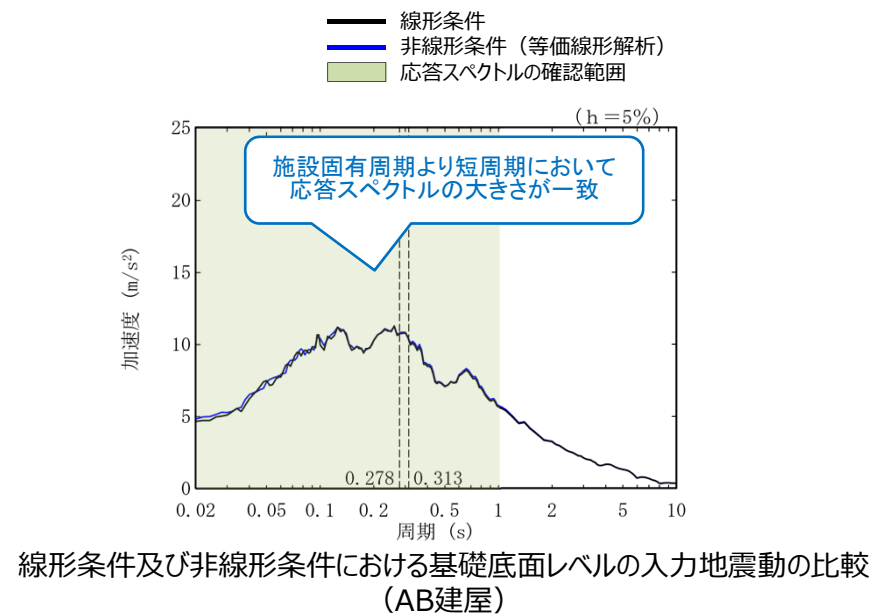
■ B.岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、施設固有周期より短周期において応答スペクトルの大きさが一致することから、岩盤部分の非線形性が、入力地震動の算定結果に及ぼす影響は小さい。



地盤の等価線形解析結果（AB建屋）



線形条件及び非線形条件における基礎底面レベルの入力地震動の比較（AB建屋）

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.1 AA周辺グループのデータ整理

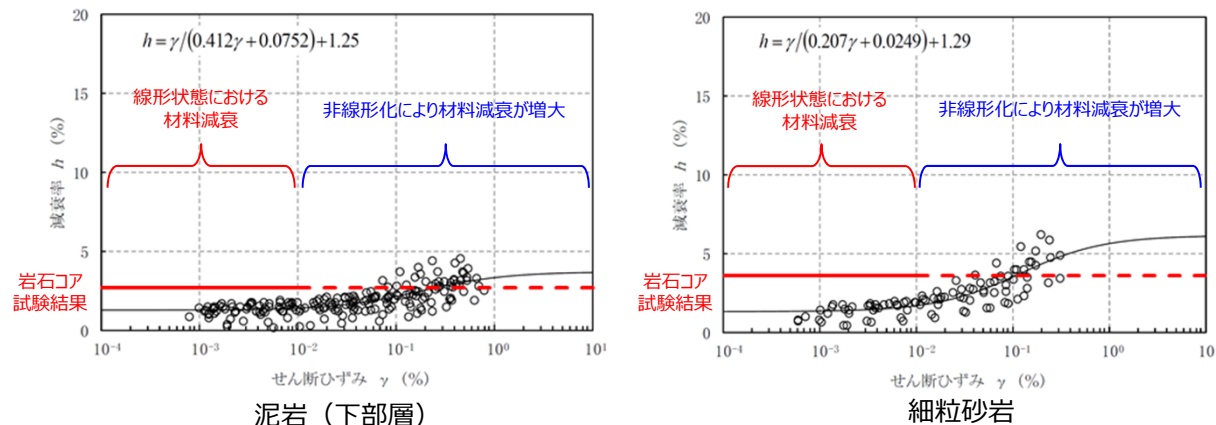
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ $10^{-2}\%$ 以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- AA周辺グループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

- AA周辺グループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。



岩盤部分のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ 曲線）及び岩石コア試験結果

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.1 AA周辺グループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-3 : 地震観測記録を用いた同定

- AA周辺グループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s~1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。

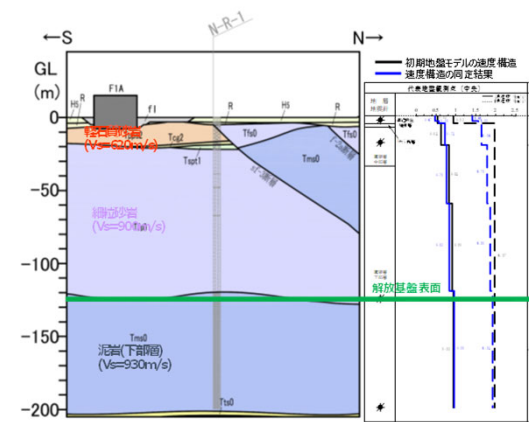
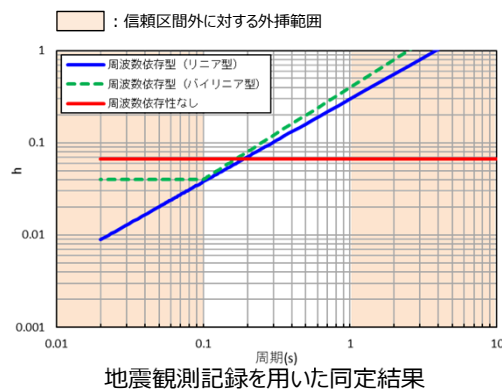


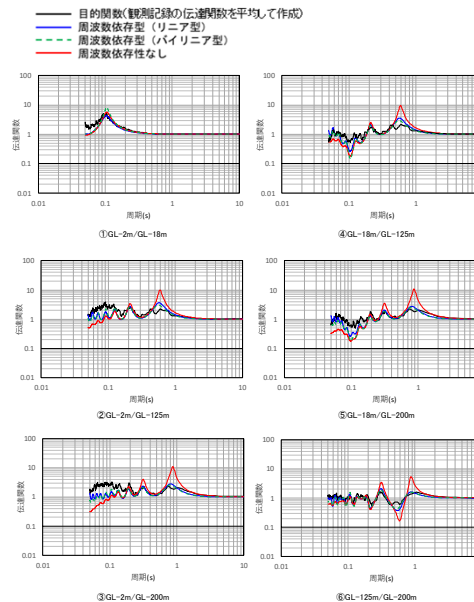
図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果



地震観測記録を用いた同定結果

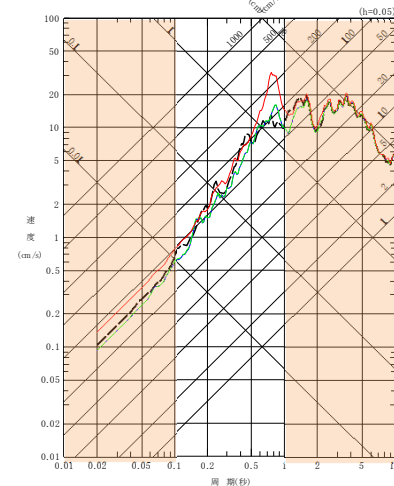
注1: 地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2: 佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象外としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。



中央地盤観測点（水平）の伝達関数

○ : 信頼区間外に対する外挿範囲
 — 建屋基礎底面相当レベル (GL-18m) における観測記録
 — 周波数依存型 (リニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
 — 周波数依存型 (バイリニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
 — 周波数依存性なしの減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答



(2011年3月11日14:46 (M9.0) EW成分の例)
地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

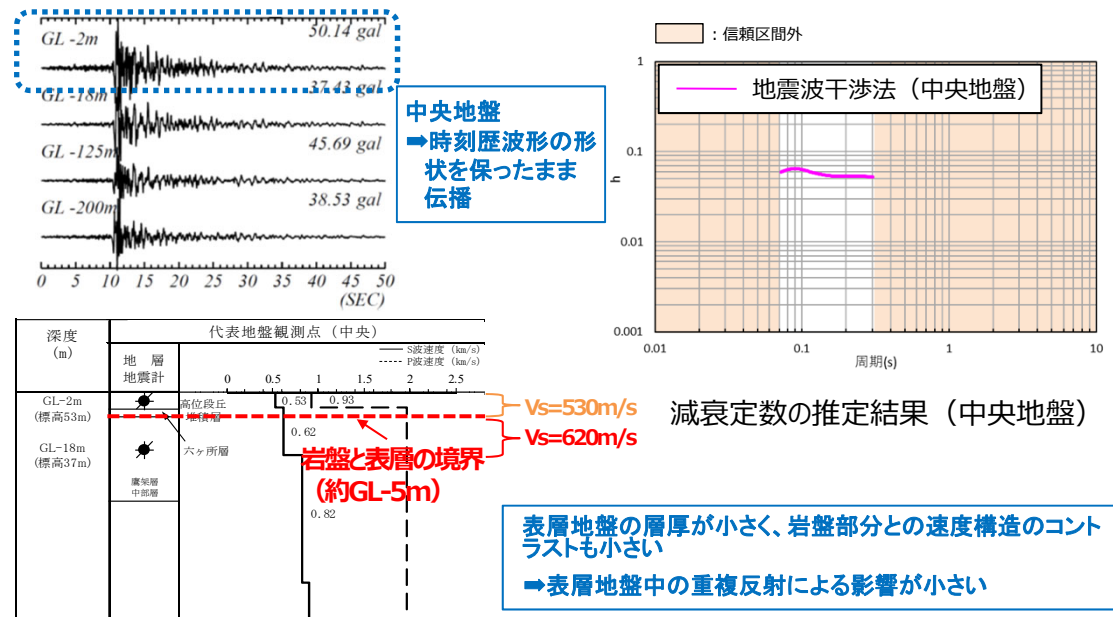
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.1 AA周辺グループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

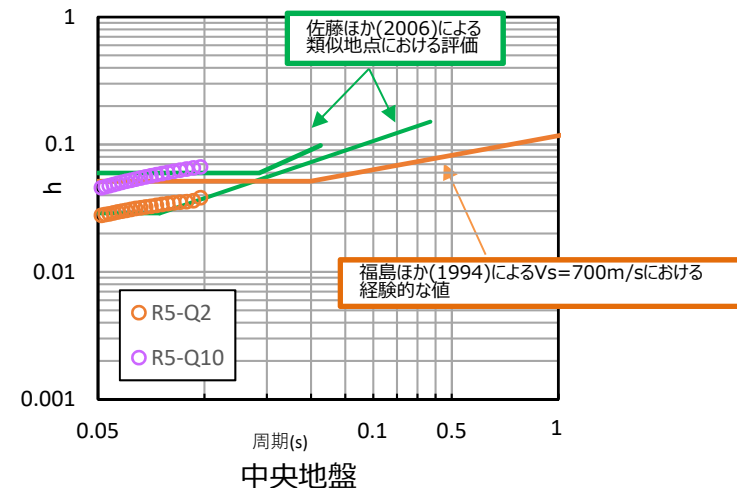
● C-4 : 地震波干渉法

- AA周辺グループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法を実施。
- 中央地盤においては、地震波干渉法による結果について、振動数依存性は確認できないものの、用いたデコンボリューション波形における卓越周期（約0.1秒）における減衰定数の値としては信頼性が高い結果が得られていると考えられる。



● C-5 : S波検層

- AA周辺グループでは、R5-Q2及びR5-Q10孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、AA周辺グループのS波検層データは、高振動数側まで周波数依存性を有し、複数データで同様の傾向となっており、散乱減衰が卓越している傾向。
- AA周辺グループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

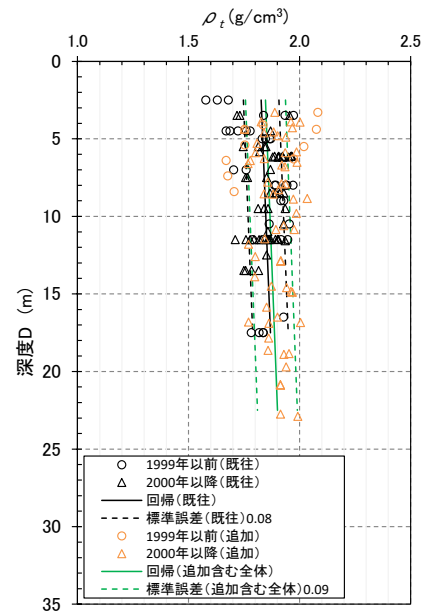
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

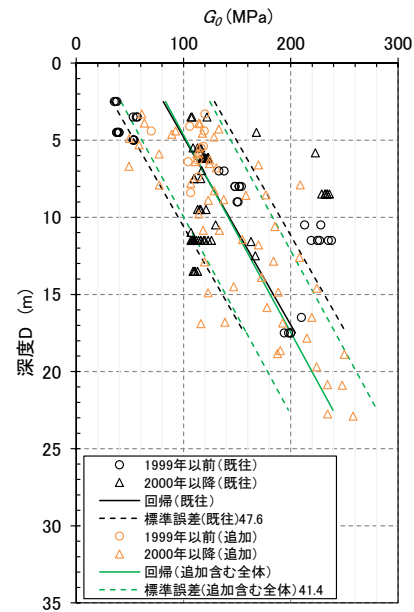
4.1 AA周辺グループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- AA周辺グループの表層地盤は埋戻し土であり、埋戻し土は土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理できる。



図a 湿潤密度 ρ_t 分布図



図b 動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.1 AA周辺グループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

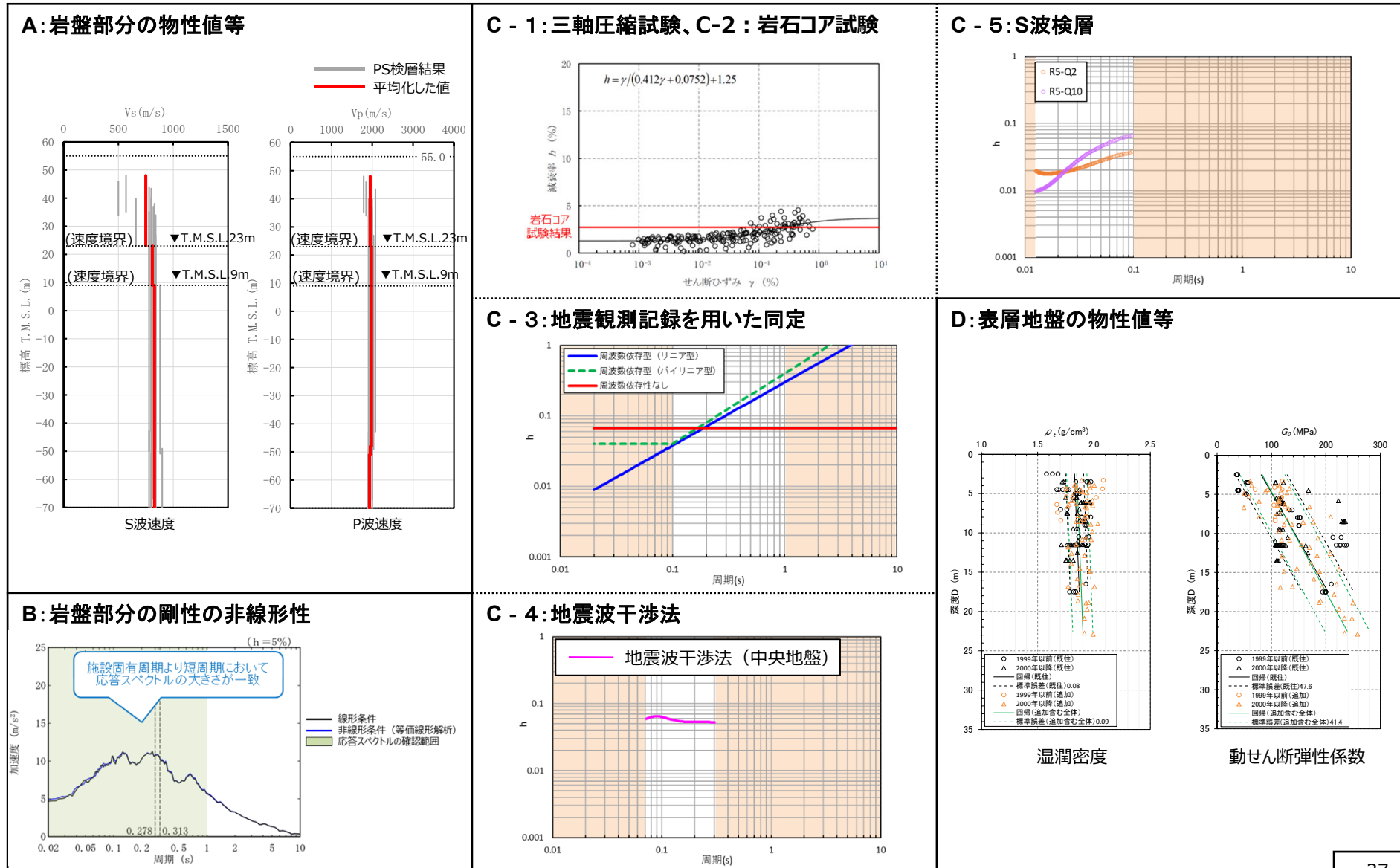
設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G_0 - γ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造におけるデータであると判断できることから、データを平均化した物性値として整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して入力地震動の算定結果に影響しない程度の非線形性となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 周波数依存性は本方法による結果では明瞭には確認できないものの、明瞭なスタッキング波形のピークが見られる周期約0.1秒における減衰定数の値は精度よく得られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土が分布しており、施工年代別に剛性の深度依存性の傾向を踏まえて土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理。

基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.1 AA周辺グループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

■ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲



4. データの整理

4.2 F施設周辺グループ

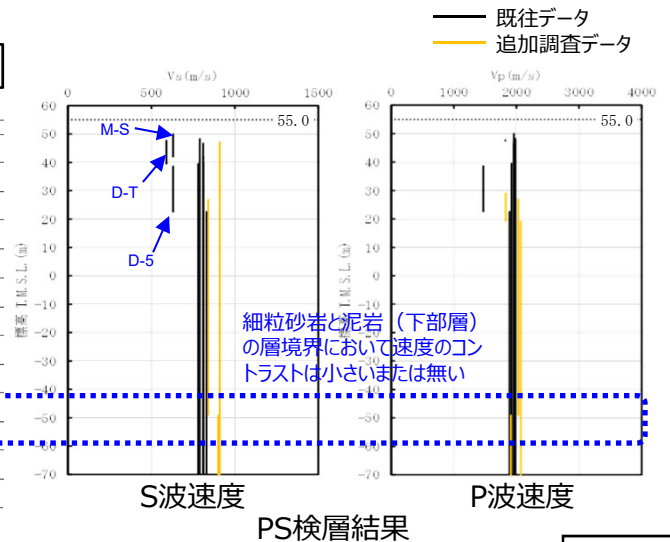
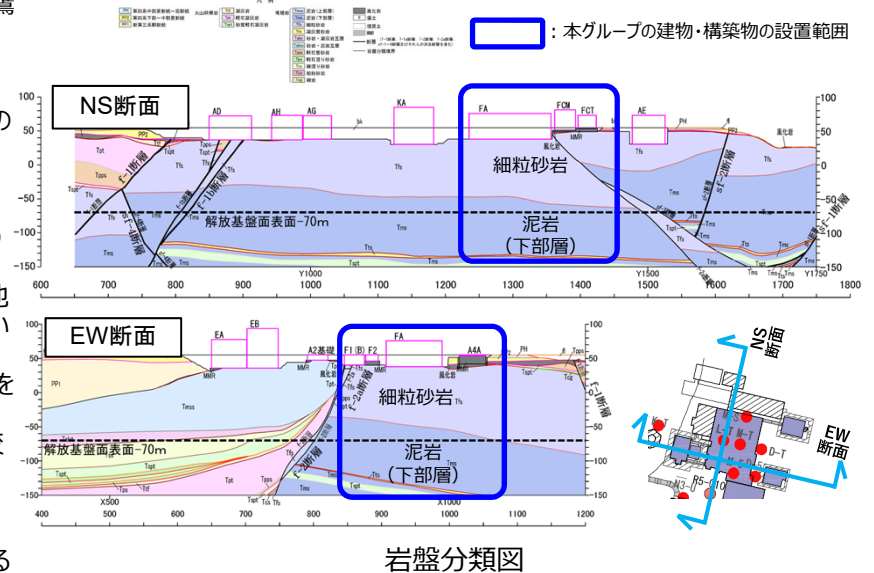
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.2 F施設周辺グループのデータ整理

■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層 (a.-①、a.-②)

- ▶ 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層下部層の細粒砂岩及び泥岩が主に分布していることを確認した。
- ▶ FCT直下においては、断層により岩種境界の深さに差が生じているものの、断層による地盤応答への影響は小さいことを確認した。
- ▶ PS検層 (● + ● + ●) のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
 - M-S孔及びR5-Q9を除く6孔については、岩種境界レベルが同等となっており、その境界における速度のコントラストは小さいまたは無いことを確認。
 - M-S孔については、境界レベルは他地点と異なるものの、細粒砂岩と泥岩の境界では速度のコントラストは無いことを確認。
 - R5-Q9孔については、細粒砂岩と泥岩 (下部層) の岩種境界が他地点より深いものの、他の孔で泥岩 (下部層) 上面レベルが確認されるT.M.S.L.-50mに速度のコントラストはないことを確認。
 - M-S孔、M-T孔及びD-T孔の浅部に軽石質砂岩が分布しており、速度構造に若干の影響を与えているが、入力地震動への影響はないことを確認している。
 - M-S孔、D-T孔及びD-5孔、については、T.M.S.L.20mよりも浅部において、他の孔と比較してS波速度が小さいデータが得られているが、D-5孔については他の孔位置との地質構造の差は無いこと、また、M-S孔及びD-T孔については前述のとおり速度構造の差の影響が小さいことから、同種の岩盤における速度構造として扱うことに問題は無いと判断した。
- ▶ 以上のことから、本グループにおけるPS検層データについては、同じ地下構造であると判断できることから、平均化した物性値として整理する。



地質柱状図の比較 (グループ内の東西方向の順に整理)

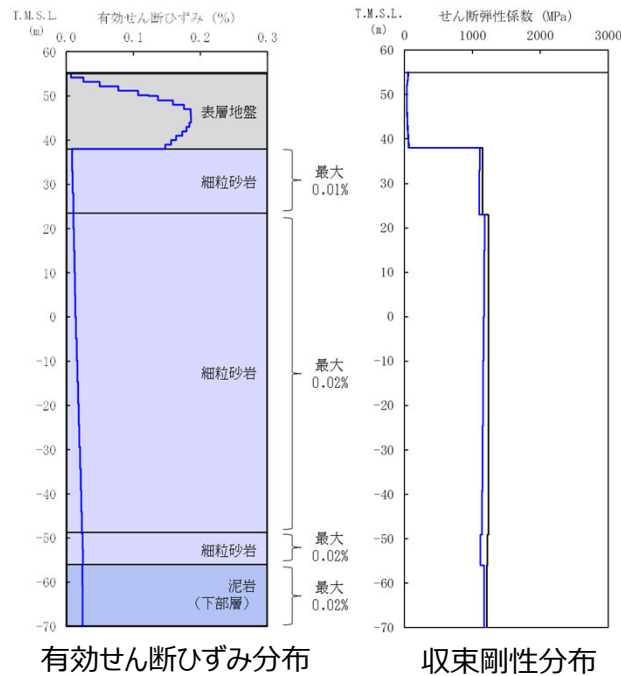
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.2 F施設周辺グループのデータ整理

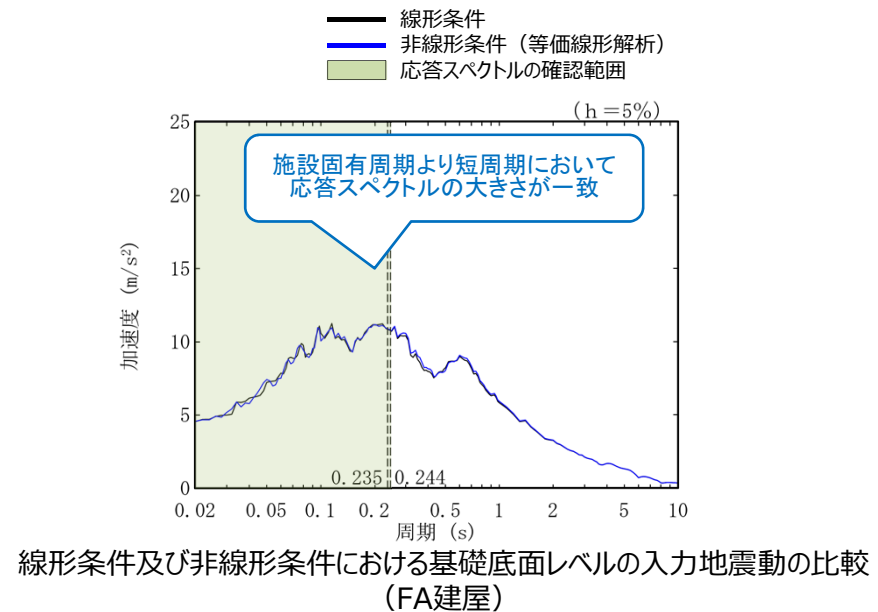
■ B.岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、施設固有周期より短周期において応答スペクトルの大きさが一致することから、岩盤部分の非線形性が、入力地震動の算定結果に及ぼす影響は小さい。



地盤の等価線形解析結果（FA建屋）



基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.2 F施設周辺グループのデータ整理

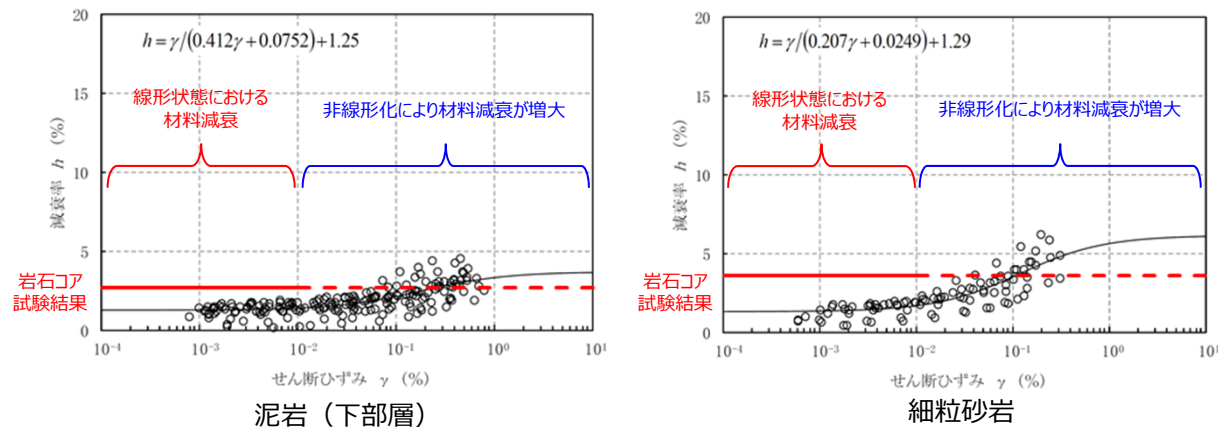
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ $10^{-2}\%$ 以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- F施設周辺グループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

- F施設周辺グループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。



岩盤部分のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ 曲線）及び岩石コア試験結果

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.2 F施設周辺グループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-3 : 地震観測記録を用いた同定

- F施設周辺グループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s~1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。

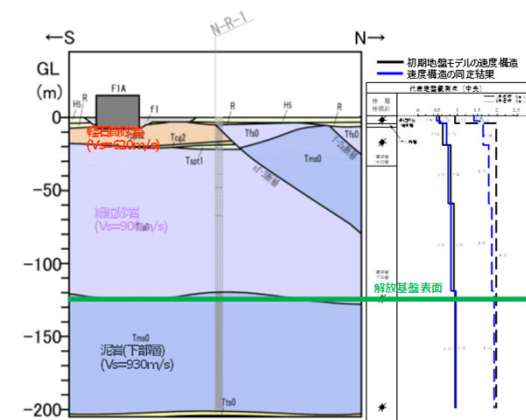
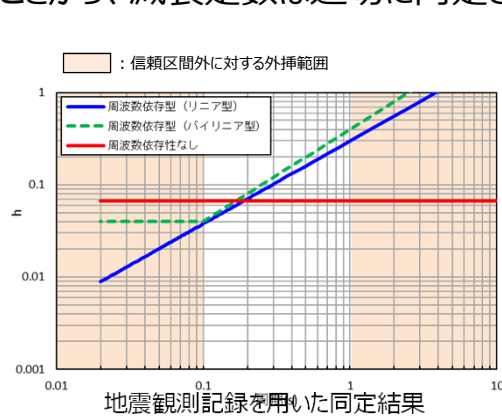
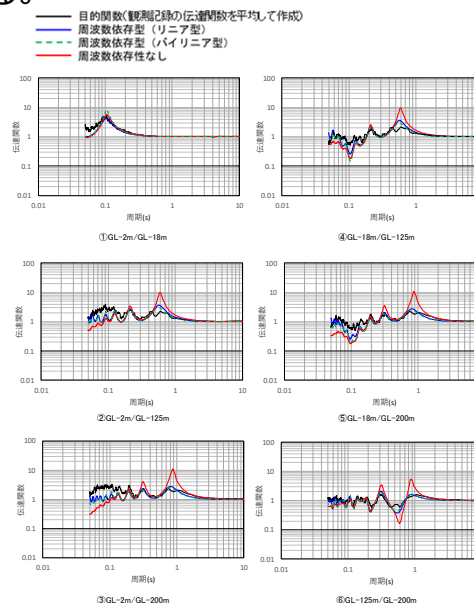


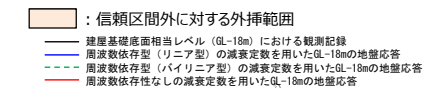
図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果



地震観測記録を用いた同定結果



中央地盤観測点（水平）の伝達関数



(2011年3月11日14:46 (M9.0) EW成分の例)

地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

注1: 地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2: 佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象外としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。

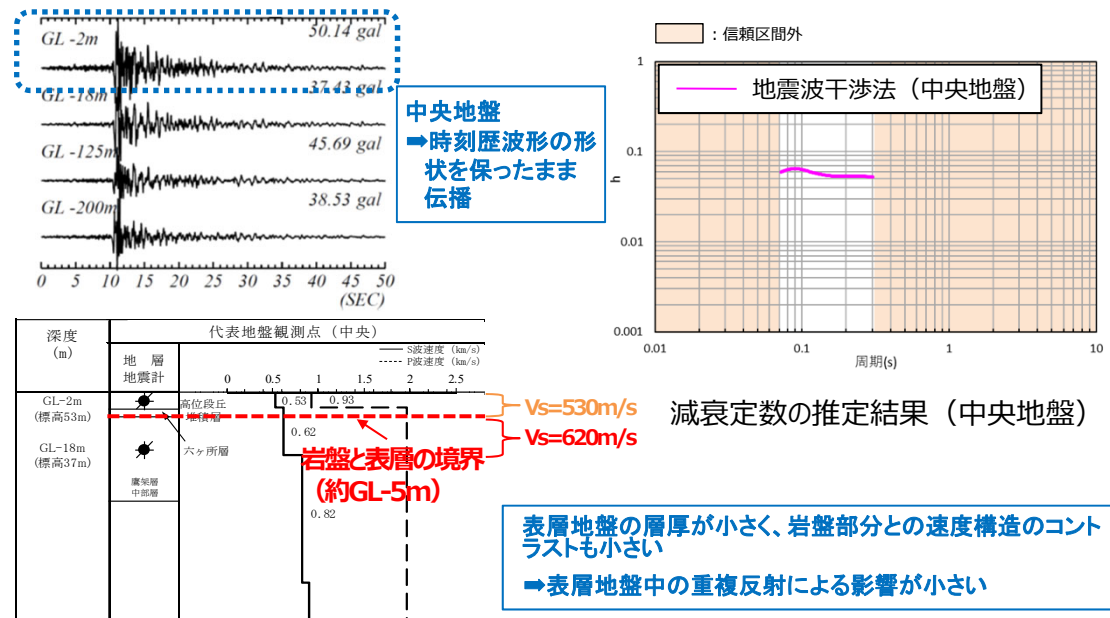
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.2 F施設周辺グループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

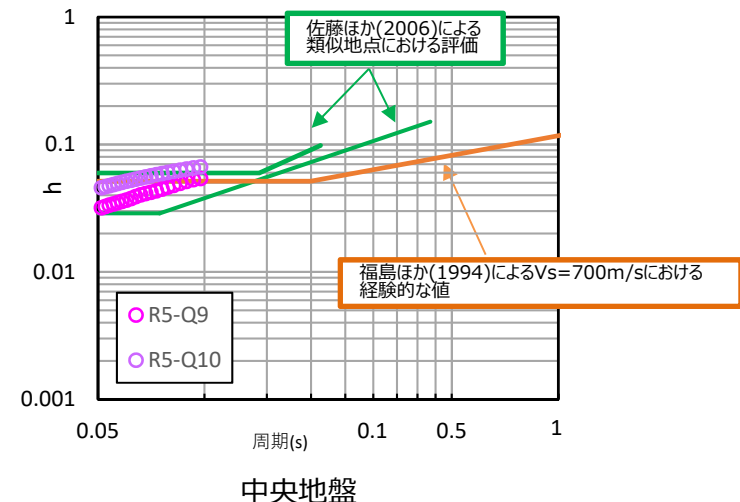
● C-4 : 地震波干渉法

- F施設周辺グループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法を実施。
- 中央地盤においては、地震波干渉法による結果について、振動数依存性は確認できないものの、用いたデコンボリューション波形における卓越周期（約0.1秒）における減衰定数の値としては信頼性が高い結果が得られていると考えられる。



● C-5 : S波検層

- F施設周辺グループでは、R5-Q9及びR5-Q10孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、F施設周辺グループのS波検層データは、高振動数側まで周波数依存性を有し、複数データで同様の傾向となっており、散乱減衰が卓越している傾向。
- F施設周辺グループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

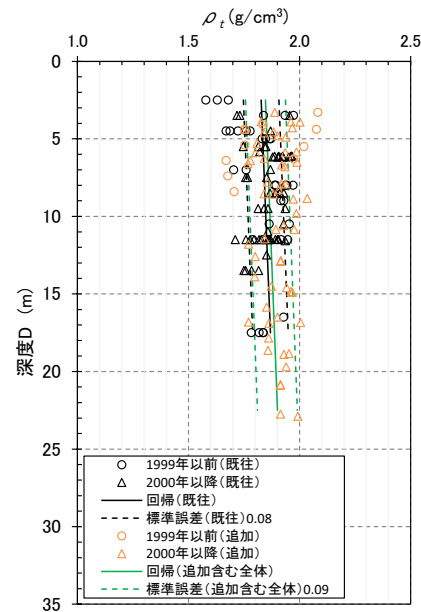
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

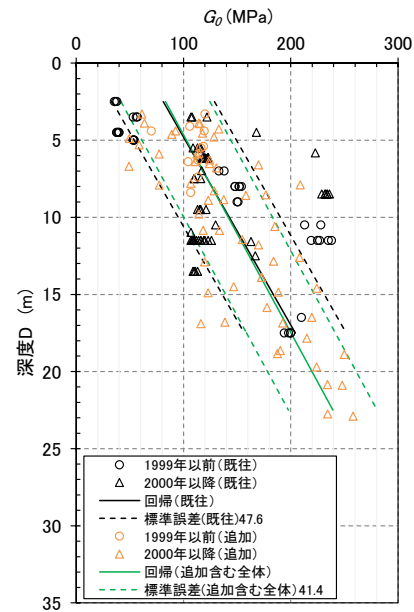
4.2 F施設周辺グループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- F施設周辺グループの表層地盤は埋戻し土であり、埋戻し土は土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理できる。



図a 湿潤密度 ρ_t 分布図



図b 動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.2 F施設周辺グループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

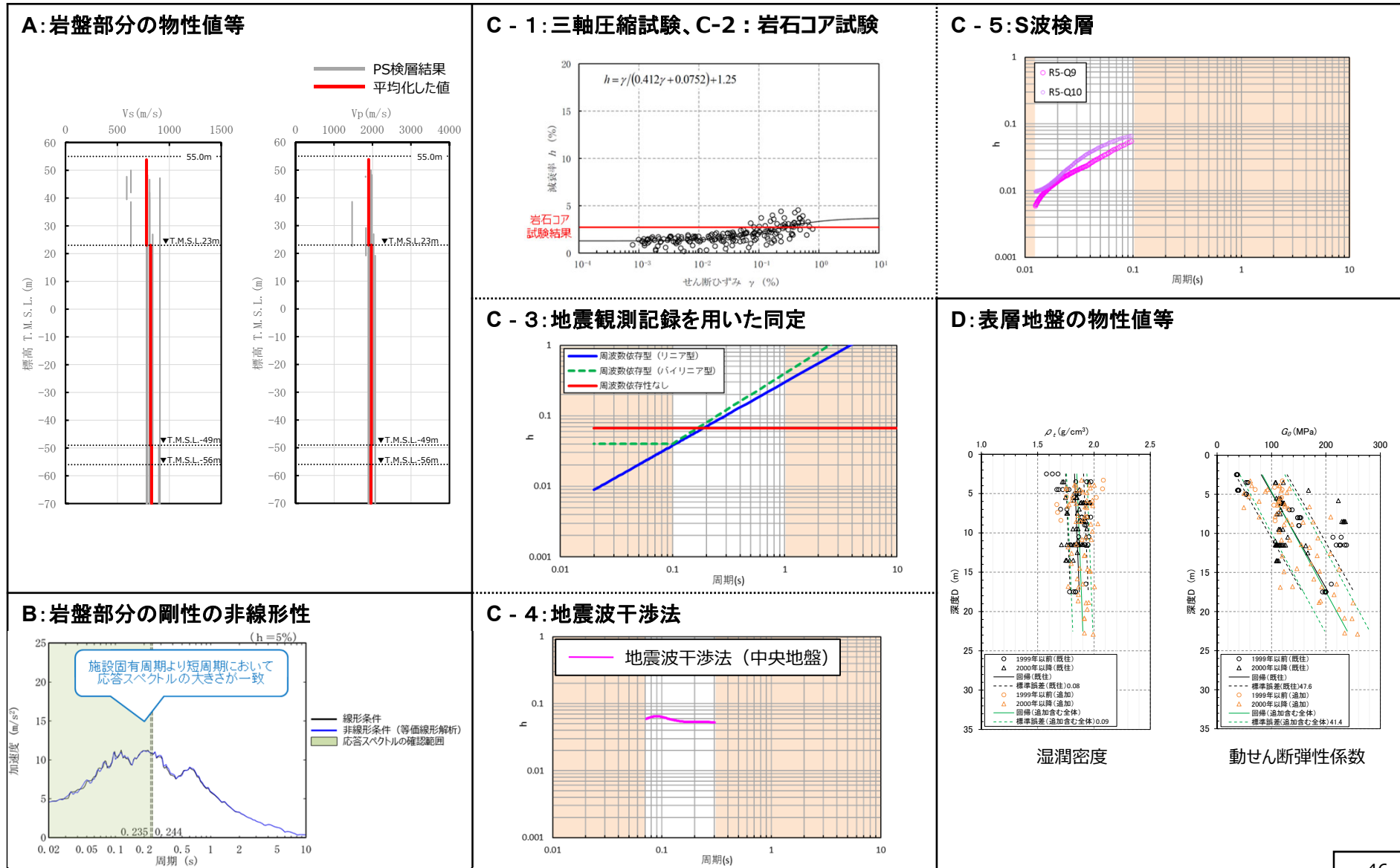
設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G_0 - γ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造におけるデータであると判断できることから、データを平均化した物性値として整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して入力地震動の算定結果に影響しない程度の非線形性となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 周波数依存性は本方法による結果では明瞭には確認できないものの、明瞭なスタッキング波形のピークが見られる周期約0.1秒における減衰定数の値は精度よく得られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土が分布しており、施工年代別に剛性の深度依存性の傾向を踏まえて土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理。

基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.2 F施設周辺グループのデータ整理

■ 整理結果のとりまとめ

■ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲



4. データの整理

4.3 AEグループ

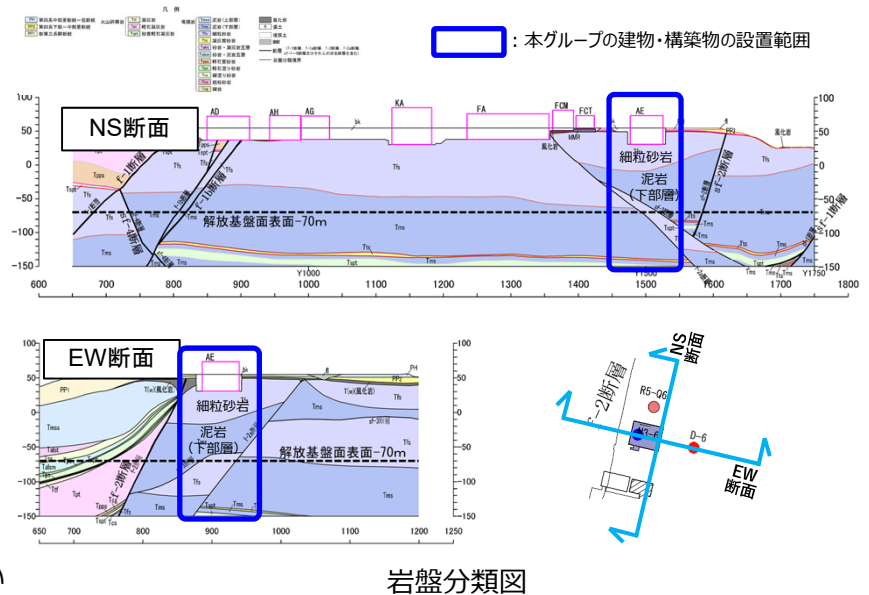
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.3 AEグループのデータ整理

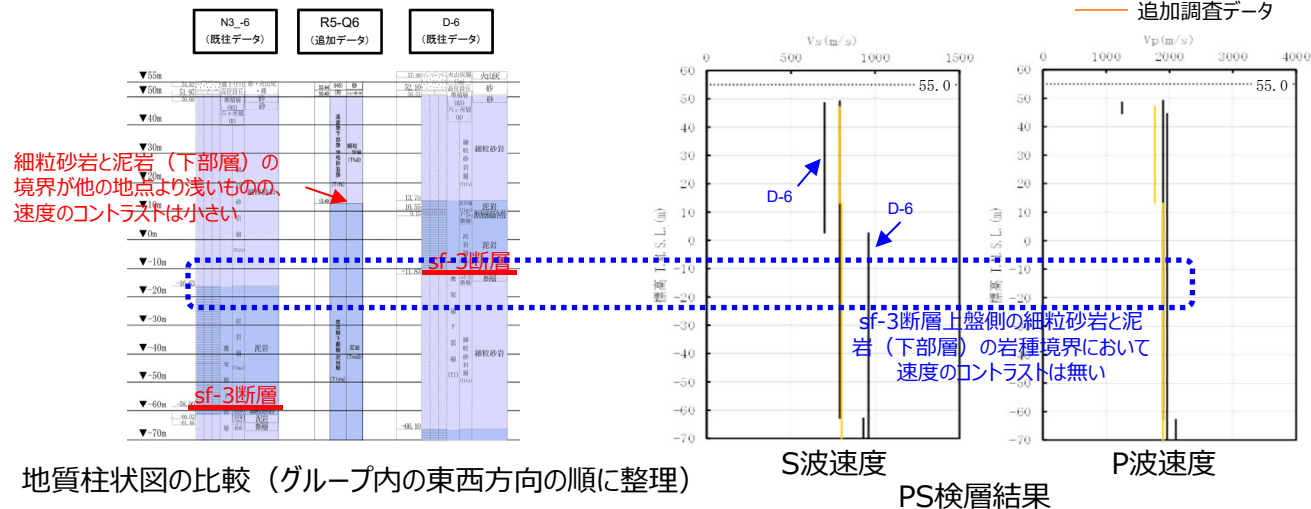
■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層 (a.-①、a.-②)

- 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層下部層の細粒砂岩及び泥岩が主に分布していることを確認した。
- 本グループの建物・構築物直下においては、断層を境に上盤と下盤で地質構造の切り替わりが見られるが、AE設置範囲内の直下では地質構造に大きな変化はなく、かつ、AE直下のN3_-6孔は、断層による上盤と下盤の地質構造の変化の特徴をとらえている。
- PS検層 (● + ● + ●) のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
 - N3_-6孔については、sf-3断層上盤側の細粒砂岩及び泥岩 (下部層) の岩種境界において速度のコントラストは無いことを確認。
 - R5-Q6孔については、細粒砂岩と泥岩 (下部層) の岩種境界深さがN3_-6孔よりも浅いものの、その境界における速度のコントラストは小さいことを確認。
 - D-6孔については、泥岩 (下部層) と細粒砂岩の境界にsf-3断層が分布する傾向がN3_-6孔と同様であり、T.M.S.L.12m程度に泥岩 (下部層) の上面レベルを有する特徴がR5-Q6孔と同様であることを確認。
 - D-6孔については、T.M.S.L.2mよりも浅部において、他の孔と比較してS波速度が小さいデータが得られており、深部では他の孔と比較してS波速度が大きいデータが得られているが、他の孔位置との地質構造の差は無いことから、同種の岩盤における速度構造として扱うことに問題は無いと判断した。
- 以上のことから、本グループにおけるPS検層データについては、同じ地下構造であると判断できることから、平均化した物性値として整理する。



岩盤分類図



地質柱状図の比較 (グループ内の東西方向の順に整理)

PS検層結果

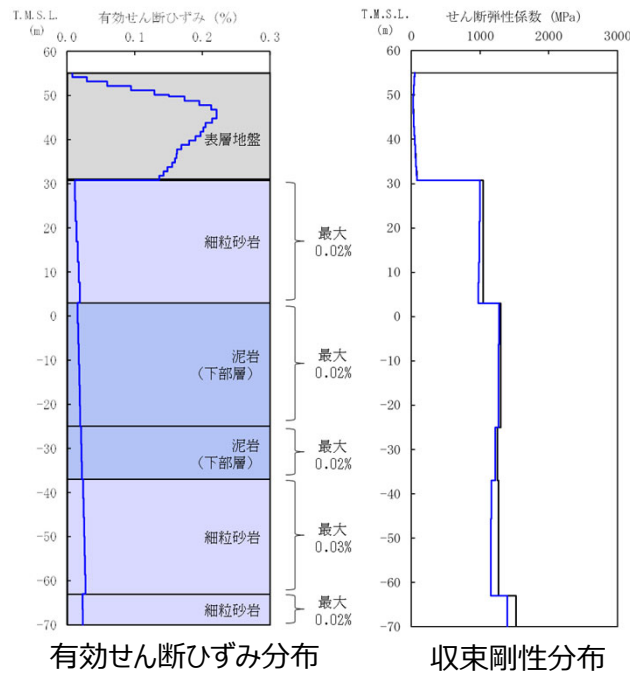
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.3 AEグループのデータ整理

■ B. 岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

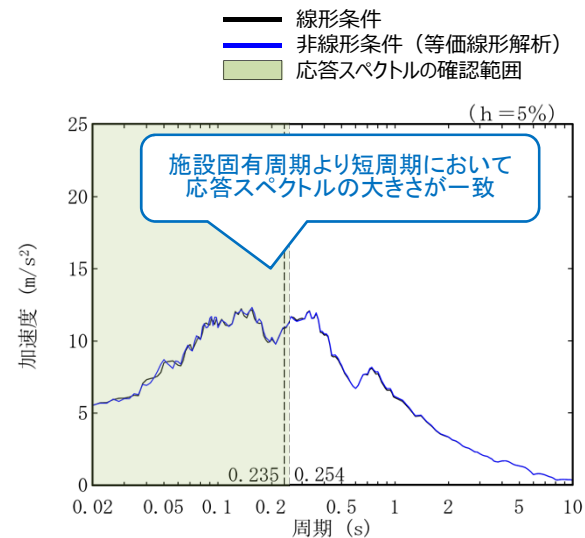
- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、施設固有周期より短周期において応答スペクトルの大きさが一致することから、岩盤部分の非線形性が、入力地震動の算定結果に及ぼす影響は小さい。



有効せん断ひずみ分布

収束剛性分布

地盤の等価線形解析結果（AE建屋）



線形条件及び非線形条件における基礎底面レベルの入力地震動の比較（AE建屋）

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.3 AEグループのデータ整理

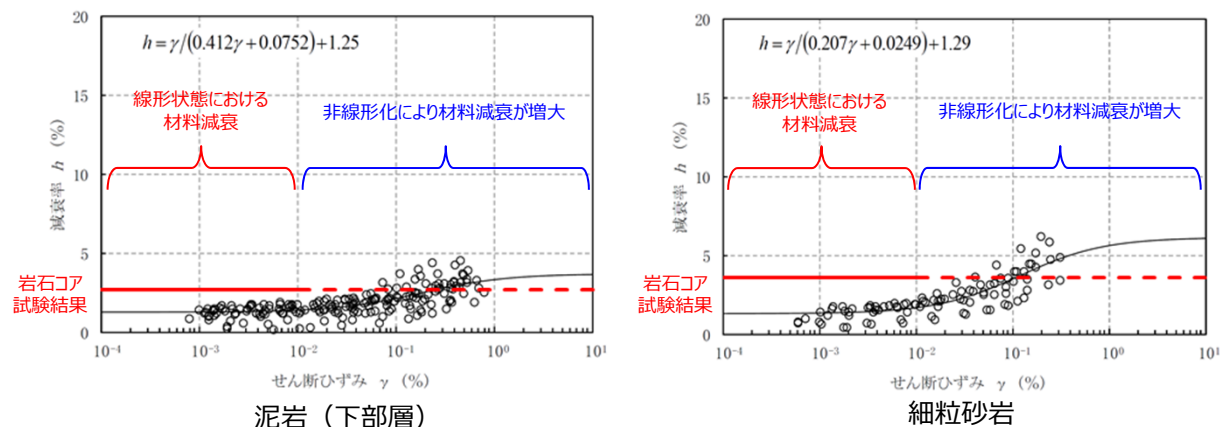
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ $10^{-2}\%$ 以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- AEグループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

- AEグループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。



岩盤部分のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ 曲線）及び岩石コア試験結果

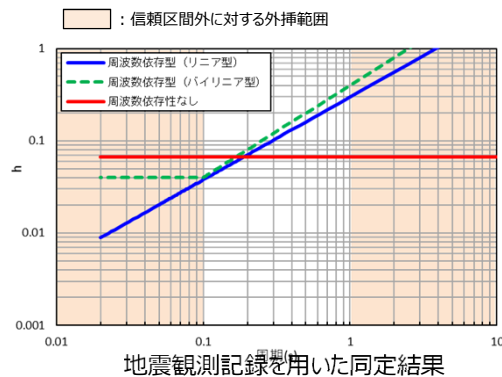
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.3 AEグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

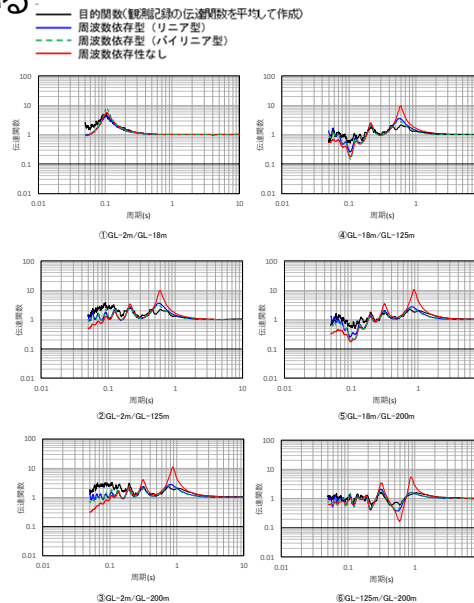
● C-3 : 地震観測記録を用いた同定

- AEグループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s~1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。



注1: 地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2: 佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。



中央地盤観測点（水平）の伝達関数

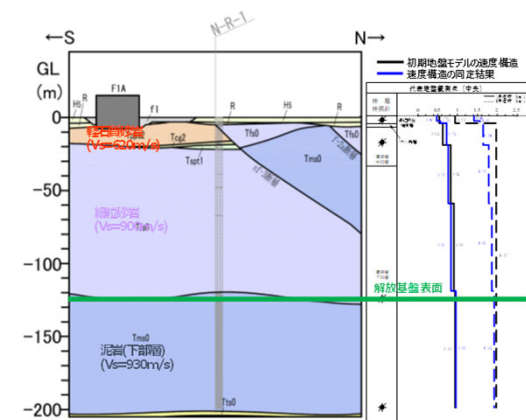
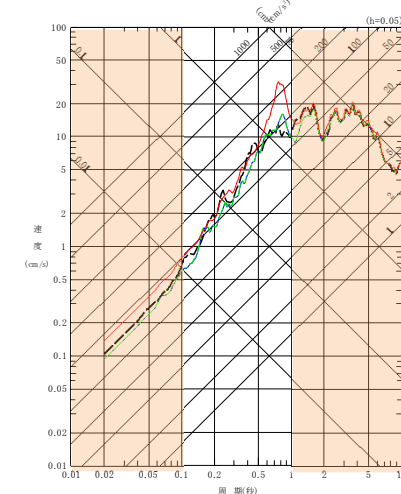


図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果

- ：信頼区間外に対する外挿範囲
- 建屋基礎底面相当レベル (GL-18m) における観測記録
- 周波数依存型 (リニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
- 周波数依存型 (バイリニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
- 周波数依存性なしの減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答



(2011年3月11日14:46 (M9.0) EW成分の例)
地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

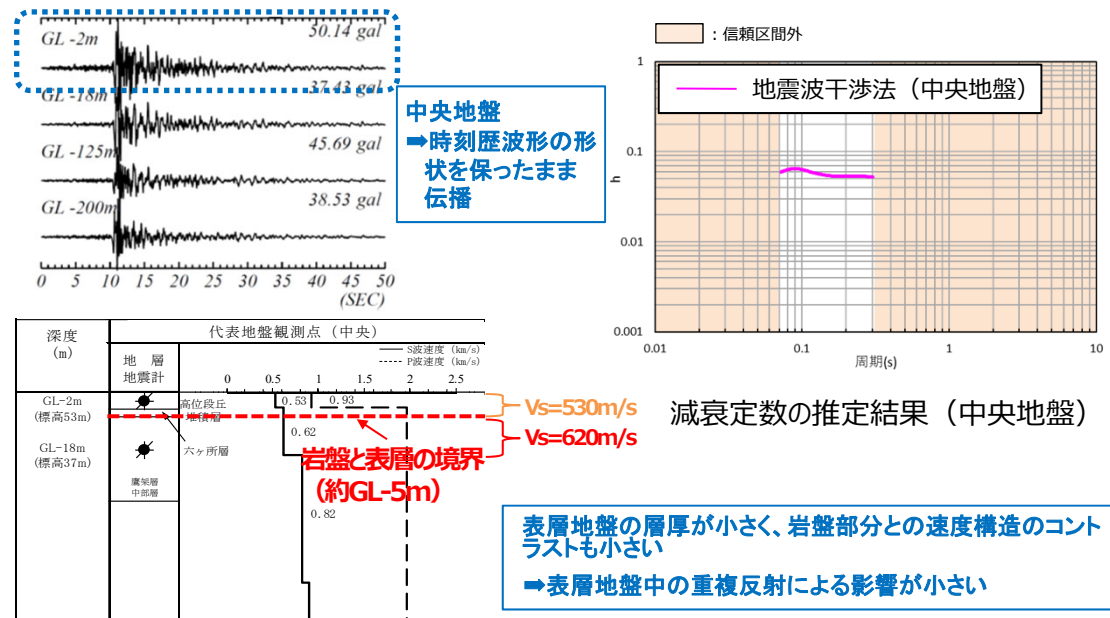
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.3 AEグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

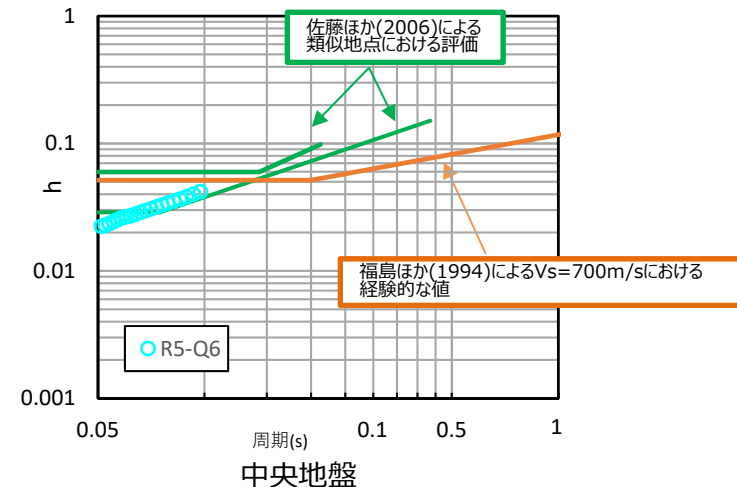
● C-4 : 地震波干渉法

- AEグループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法を実施。
- 中央地盤においては、地震波干渉法による結果について、振動数依存性は確認できないものの、用いたデコンボリューション波形における卓越周期（約0.1秒）における減衰定数の値としては信頼性が高い結果が得られていると考えられる。



● C-5 : S波検層

- AEグループでは、R5-Q6孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、AEグループのS波検層データは、高振動数側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越している傾向。
- AEグループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

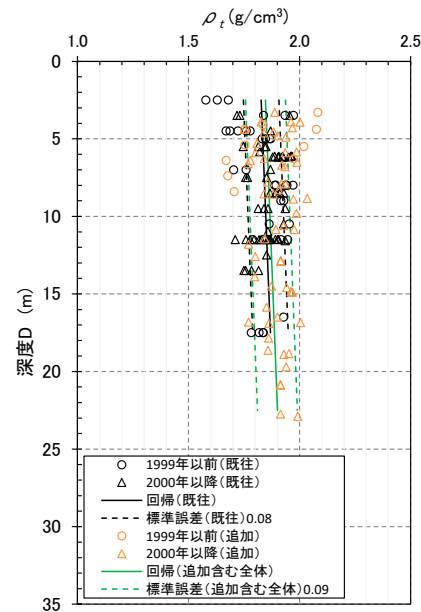
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

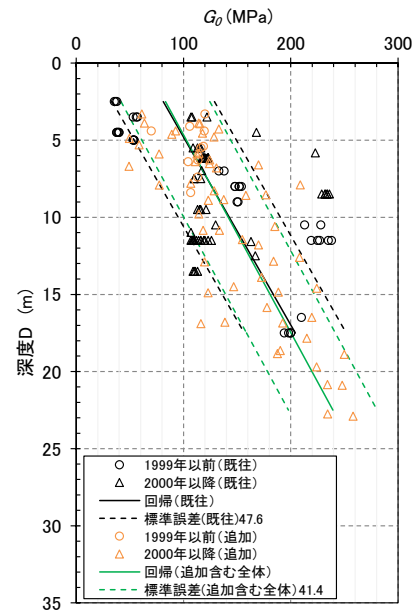
4.3 AEグループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- AEグループの表層地盤は埋戻し土であり、埋戻し土は土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理できる。



図a 湿潤密度 ρ_t 分布図



図b 動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.3 AEグループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

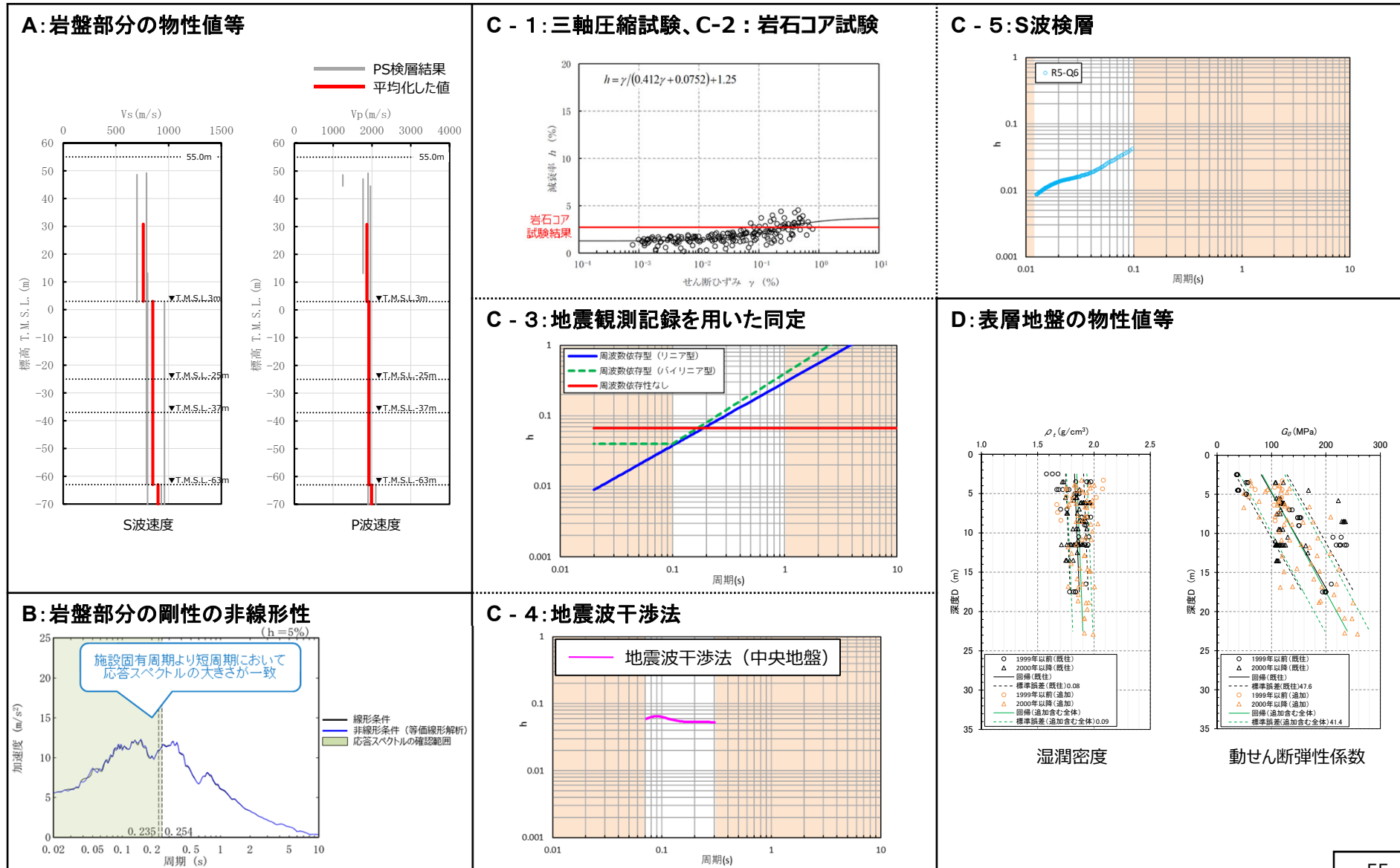
設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G_0 - γ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造におけるデータであると判断できることから、データを平均化した物性値として整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して入力地震動の算定結果に影響しない程度の非線形性となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 周波数依存性は本方法による結果では明瞭には確認できないものの、明瞭なスタッキング波形のピークが見られる周期約0.1秒における減衰定数の値は精度よく得られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土が分布しており、施工年代別に剛性の深度依存性の傾向を踏まえて土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理。

基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.3 AEグループのデータ整理

■ 整理結果のとりまとめ

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲



4. データの整理

4.4 AGグループ

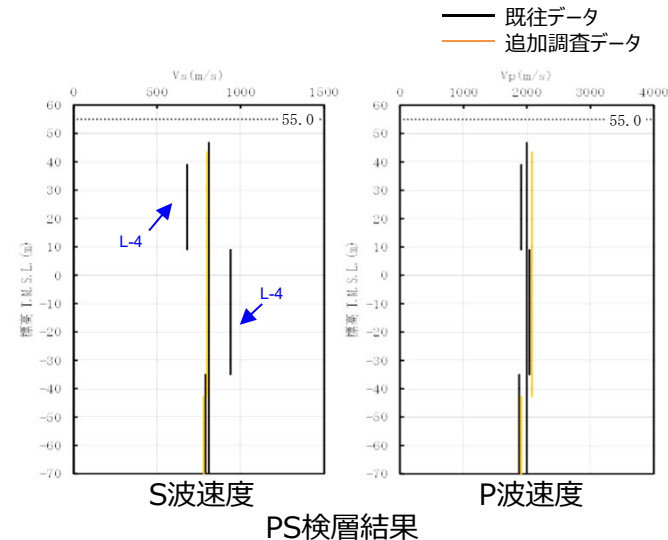
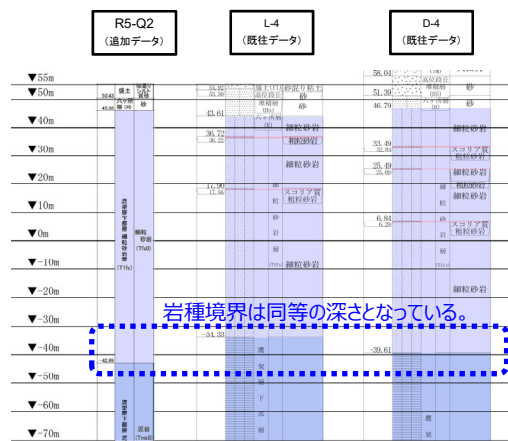
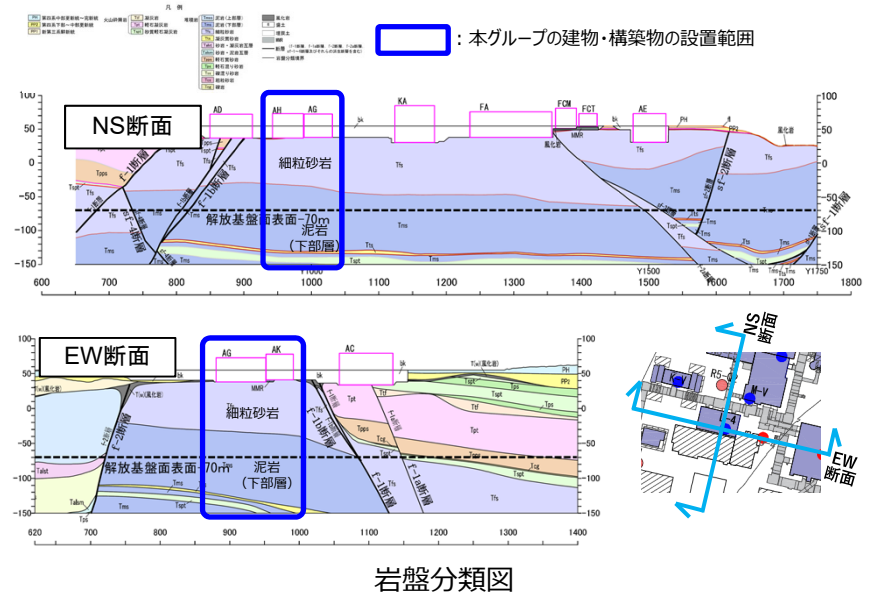
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.4 AGグループのデータ整理

■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層 (a.-①、a.-②)

- 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層下部層の細粒砂岩及び泥岩が主に分布していることを確認した。
- 本グループの建物・構築物直下においては、岩種の分布に差を与えるような断層は見られない。
- PS検層 (● + ● + ●) のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
 - L-4孔、D-4孔、R5-Q2孔のいずれについても、岩種境界は同等の深さとなっていることを確認。
 - L-4孔については、T.M.S.L.9mよりも浅部において、他の孔と比較してS波速度が小さいデータが得られており、深部では他の孔と比較してS波速度が大きいデータが得られているが、他の孔位置との地質構造の差は無いことから、同種の岩盤における速度構造として扱うことに問題は無いと判断した。
- 以上のことから、本グループにおけるPS検層データについては、同じ地下構造であると判断できることから、平均化した物性値として整理する。



地質柱状図の比較 (グループ内の東西方向の順に整理)

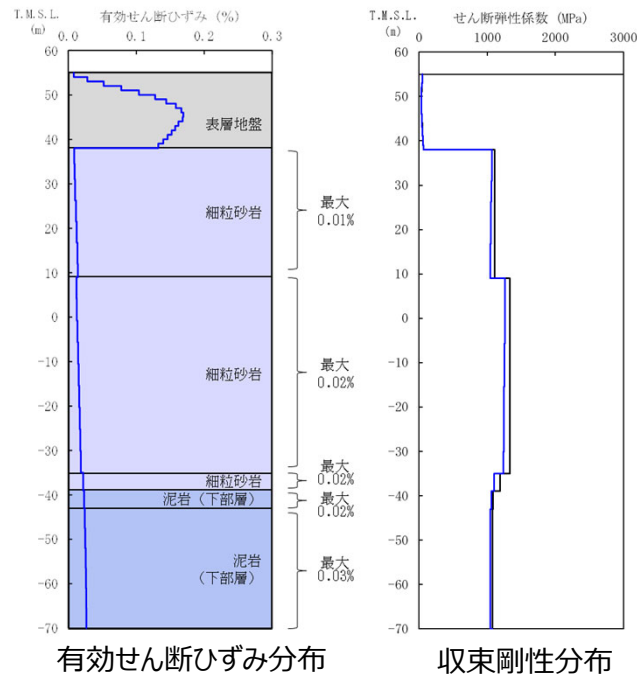
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.4 AGグループのデータ整理

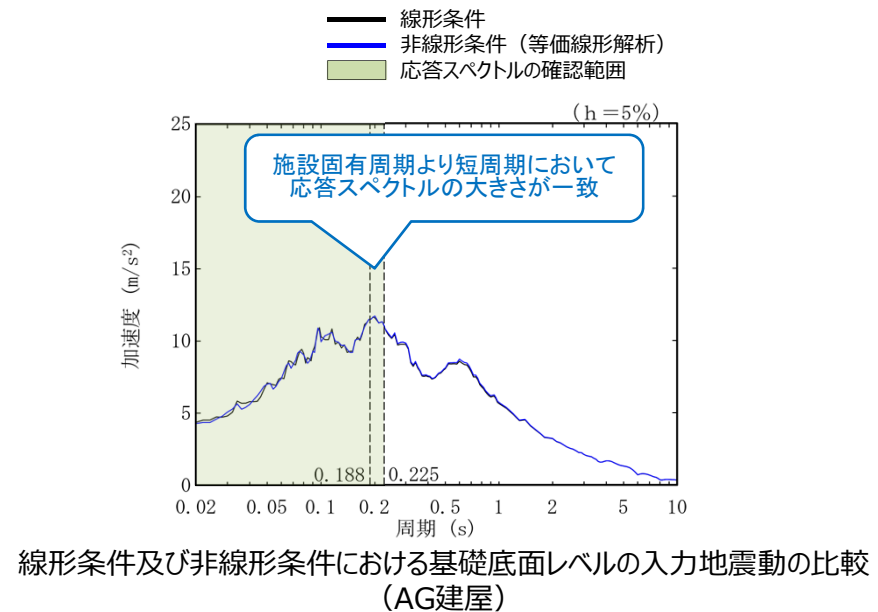
■ B. 岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、施設固有周期より短周期において応答スペクトルの大きさが一致することから、岩盤部分の非線形性が、入力地震動の算定結果に及ぼす影響は小さい。



地盤の等価線形解析結果 (AG建屋)



基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.4 AGグループのデータ整理

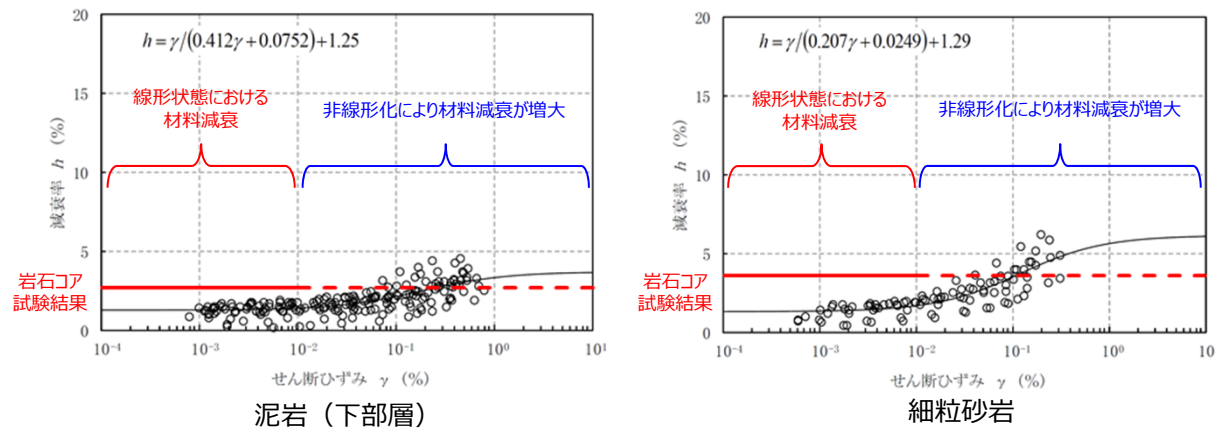
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ $10^{-2}\%$ 以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- AGグループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

- AGグループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。



岩盤部分のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ 曲線）及び岩石コア試験結果

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.4 AGグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-3：地震観測記録を用いた同定

- AGグループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s～1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。

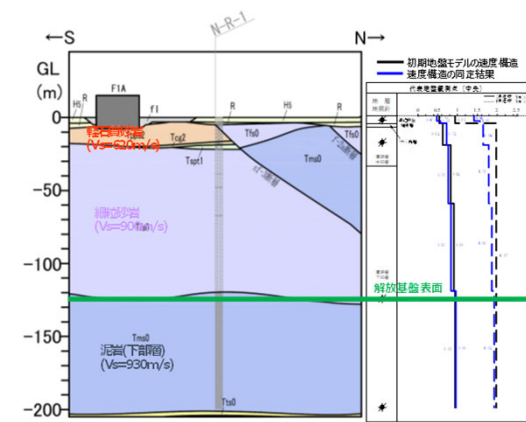
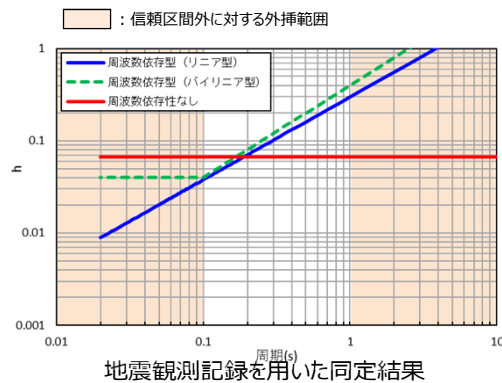
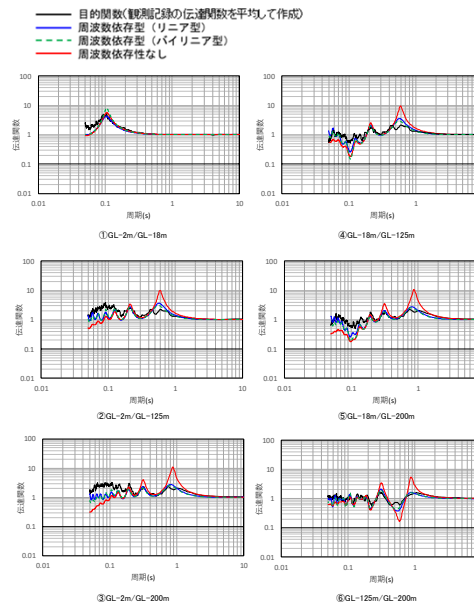


図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果



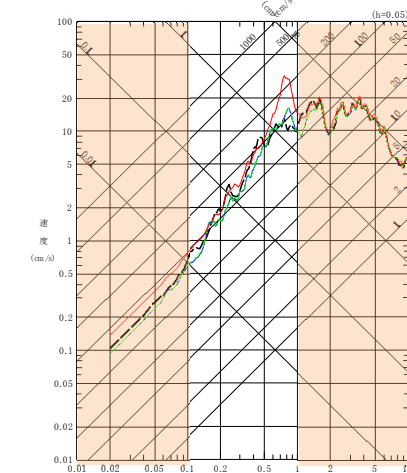
注1: 地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2: 佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。



中央地盤観測点（水平）の伝達関数

■ : 信頼区間外に対する外挿範囲
 — 建屋基礎底面相当レベル (GL-18m) における観測記録
 — 周波数依存型 (リニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
 — 周波数依存型 (バイリニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
 — 周波数依存性なしの減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答



(2011年3月11日14:46 (M9.0) EW成分の例)

地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

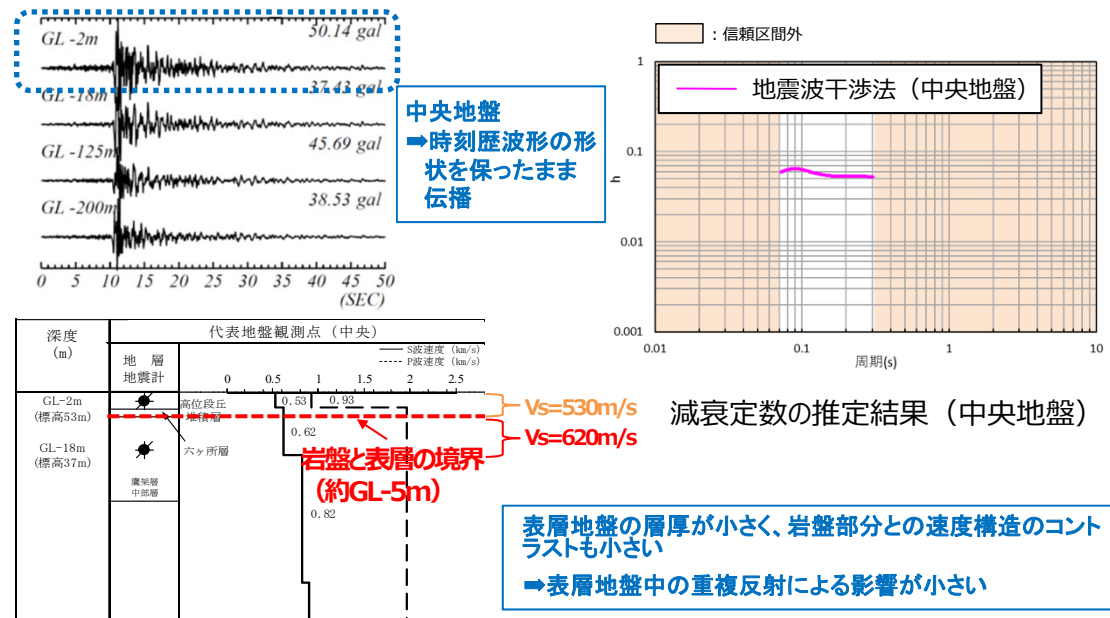
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.4 AGグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

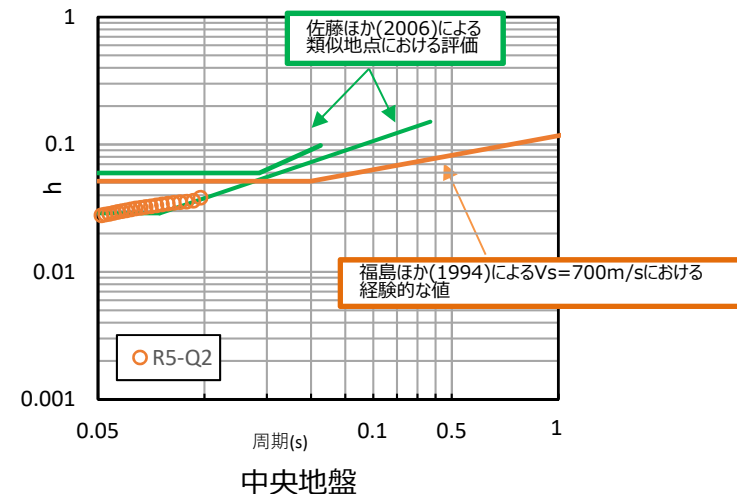
● C-4 : 地震波干渉法

- AGグループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法を実施。
- 中央地盤においては、地震波干渉法による結果について、振動数依存性は確認できないものの、用いたデコンボリューション波形における卓越周期（約0.1秒）における減衰定数の値としては信頼性が高い結果が得られていると考えられる。



● C-5 : S波検層

- AGグループでは、R5-Q2孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、AGグループのS波検層データは、高振動数側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越している傾向。
- AGグループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

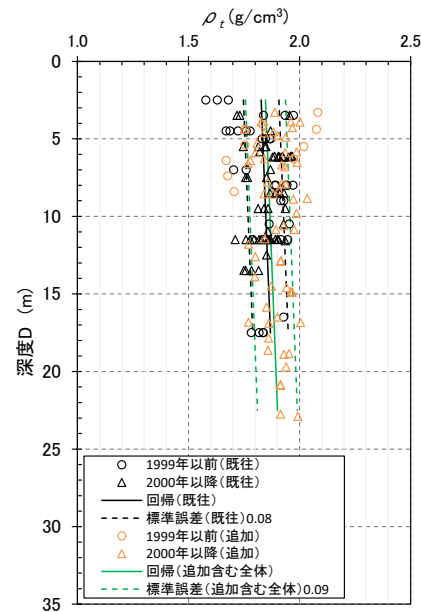
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

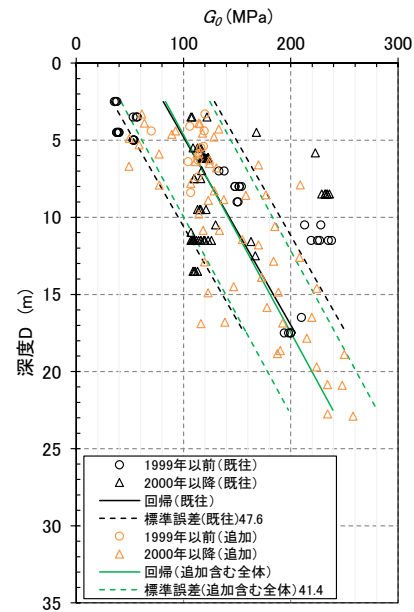
4.4 AGグループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- AGグループの表層地盤は埋戻し土であり、埋戻し土は土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理できる。



図a 湿潤密度 ρ_t 分布図



図b 動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.4 AGグループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G_0 - γ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造におけるデータであると判断できることから、データを平均化した物性値として整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して入力地震動の算定結果に影響しない程度の非線形性となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 周波数依存性は本方法による結果では明瞭には確認できないものの、明瞭なスタッキング波形のピークが見られる周期約0.1秒における減衰定数の値は精度よく得られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土が分布しており、施工年代別に剛性の深度依存性の傾向を踏まえて土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理。

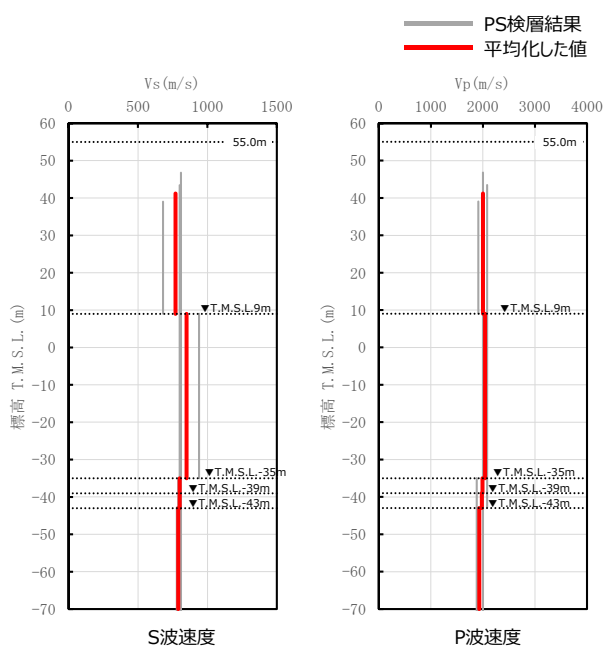
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.4 AGグループのデータ整理

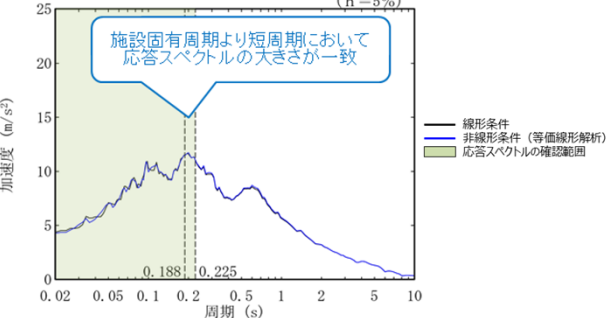
■ 整理結果のとりまとめ

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

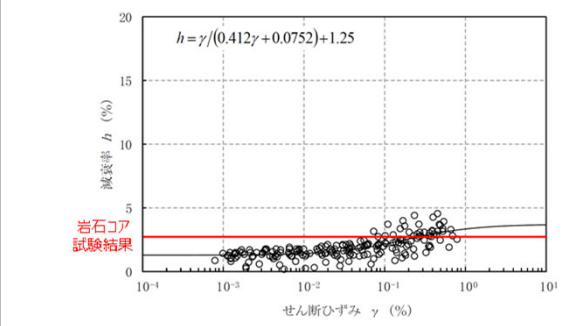
A: 岩盤部分の物性値等



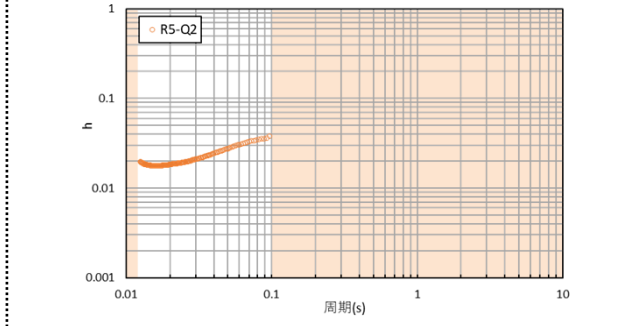
B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



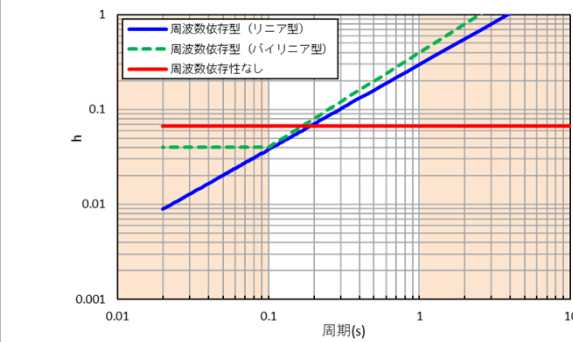
C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



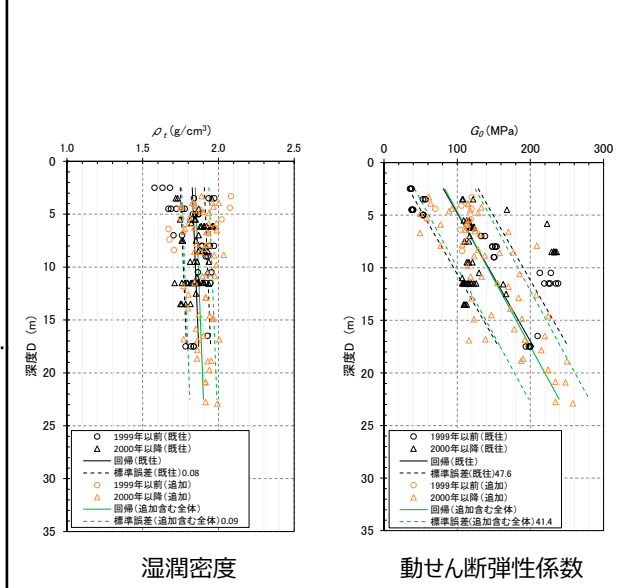
C - 5: S波検層



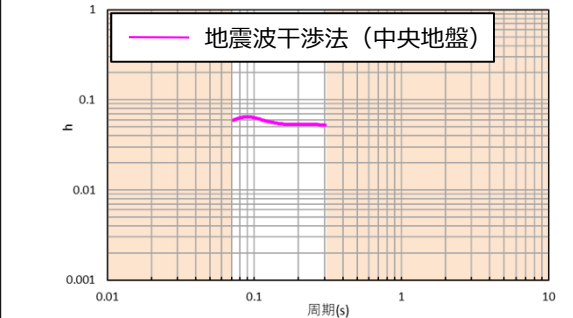
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



D: 表層地盤の物性値等



C - 4: 地震波干渉法



4. データの整理

4.5 GAグループ

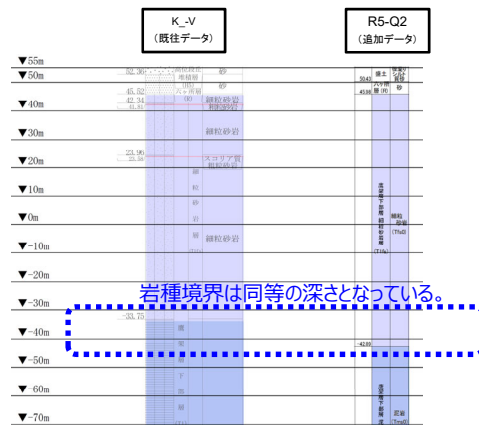
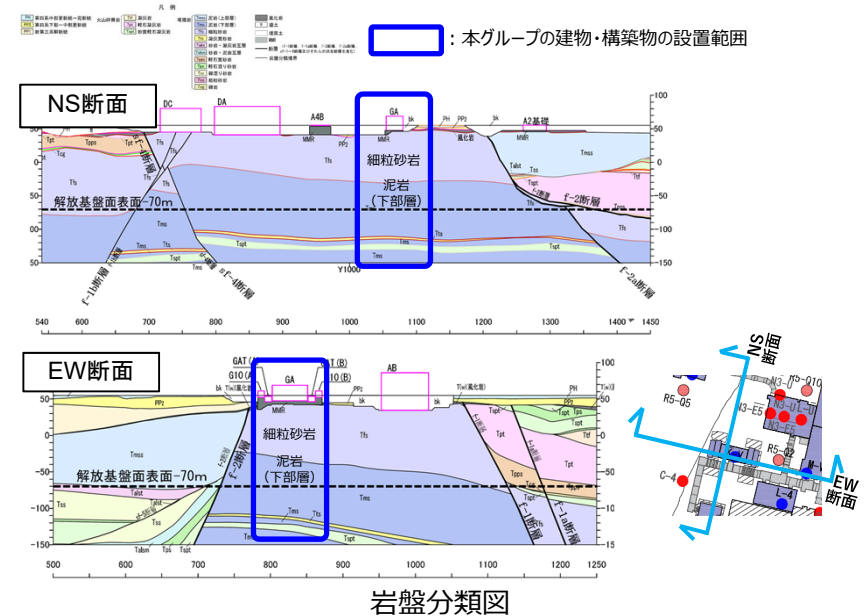
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.5 GAグループのデータ整理

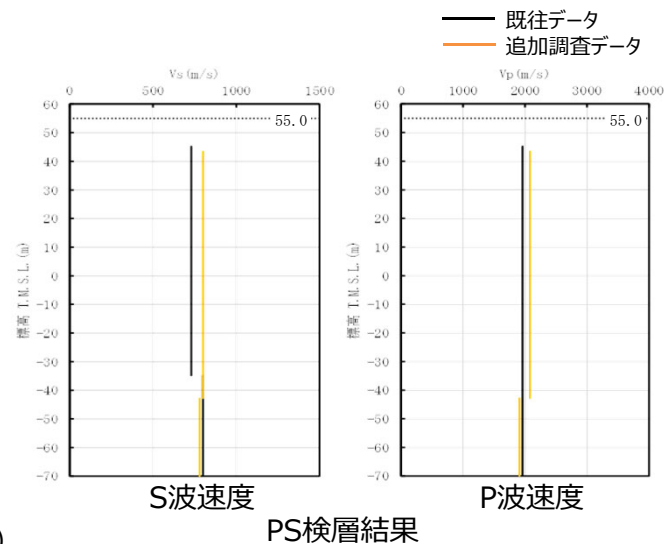
■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層 (a.-①、a.-②)

- 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層下部層の細粒砂岩及び泥岩が主に分布していることを確認した。
- 本グループの建物・構築物直下においては、岩種の分布に差を与えるような断層は見られない。
- PS検層 (● + ● + ●) のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
 - K_V孔、R5-Q2孔のいずれについても、岩種境界は同等の深さとなっていることを確認。
- 以上のことから、本グループにおけるPS検層データについては、同じ地下構造であると判断できることから、平均化した物性値として整理する。



地質柱状図の比較 (グループ内の東西方向の順に整理)



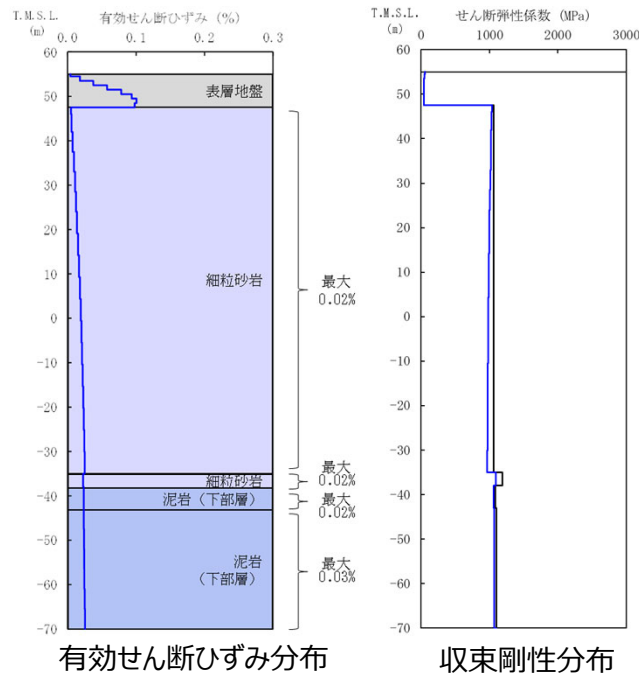
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.5 GAグループのデータ整理

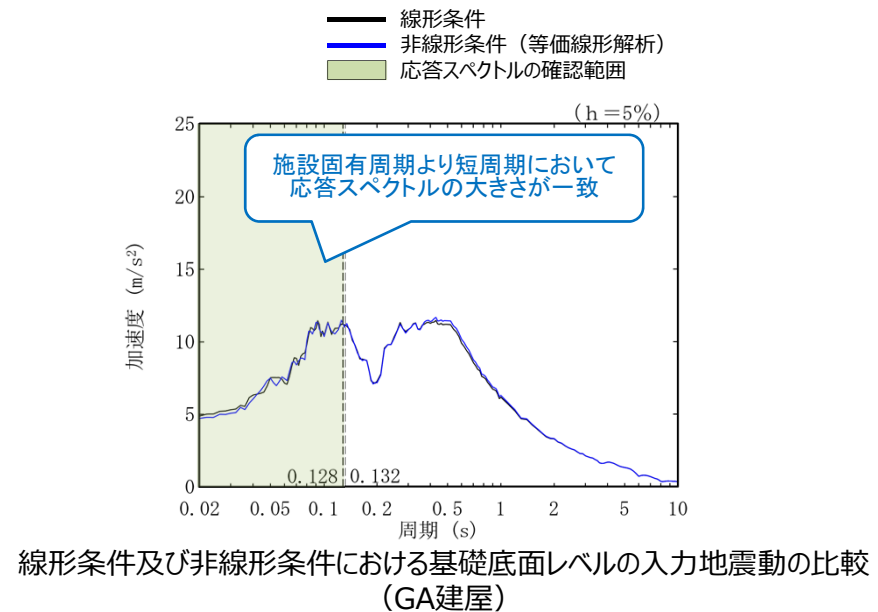
■ B.岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、施設固有周期より短周期において応答スペクトルの大きさが一致することから、岩盤部分の非線形性が、入力地震動の算定結果に及ぼす影響は小さい。



地盤の等価線形解析結果 (GA建屋)



線形条件及び非線形条件における基礎底面レベルの入力地震動の比較 (GA建屋)

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.5 GAグループのデータ整理

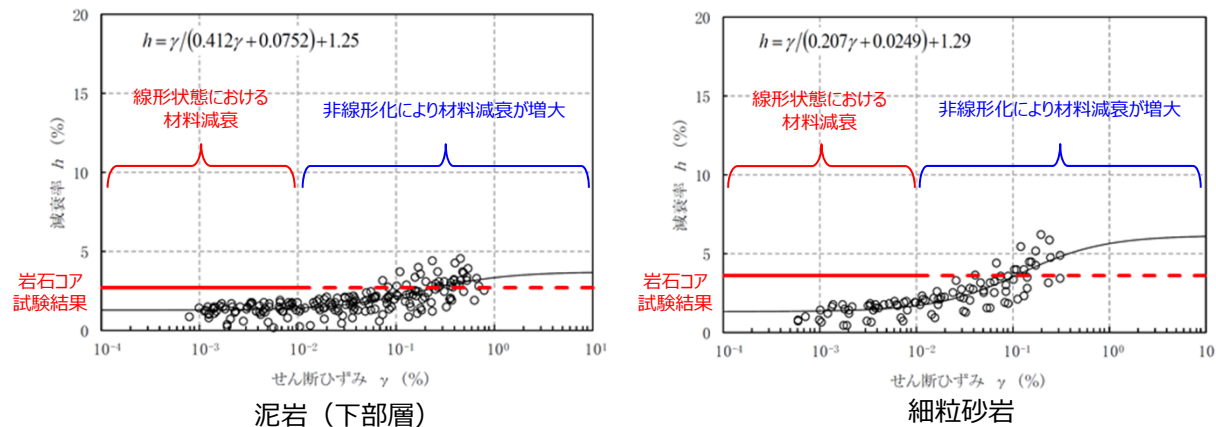
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ $10^{-2}\%$ 以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- GAグループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

- GAグループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。



岩盤部分のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ 曲線）及び岩石コア試験結果

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.5 GAグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-3：地震観測記録を用いた同定

- GAグループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s～1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。

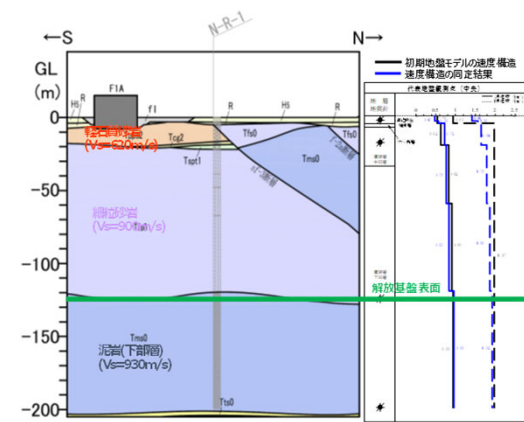
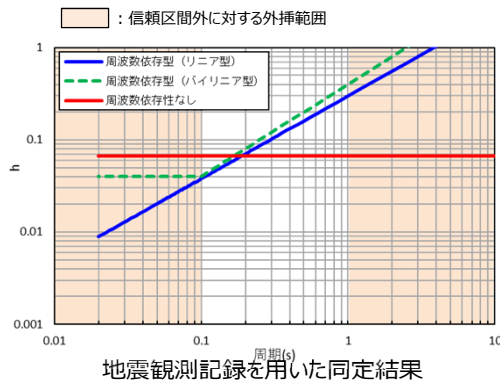


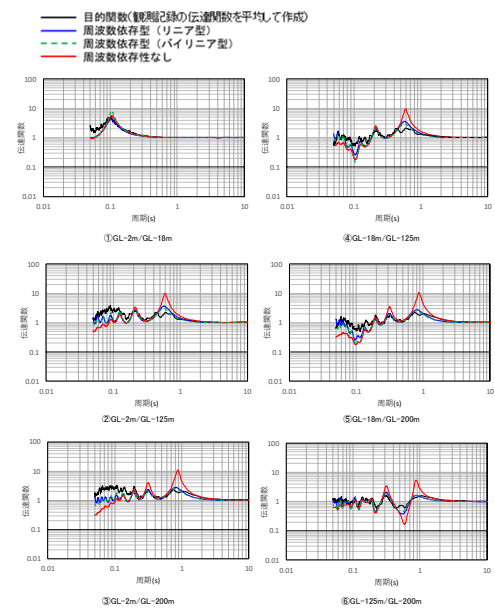
図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果



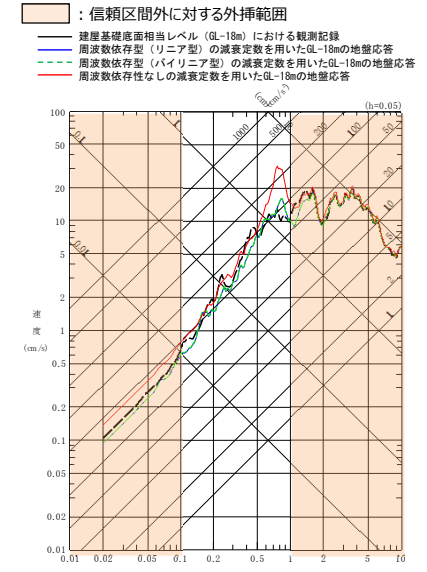
地震観測記録を用いた同定結果

注1: 地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2: 佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象外としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。



中央地盤観測点（水平）の伝達関数



(2011年3月11日14:46 (M9.0) EW成分の例)
地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

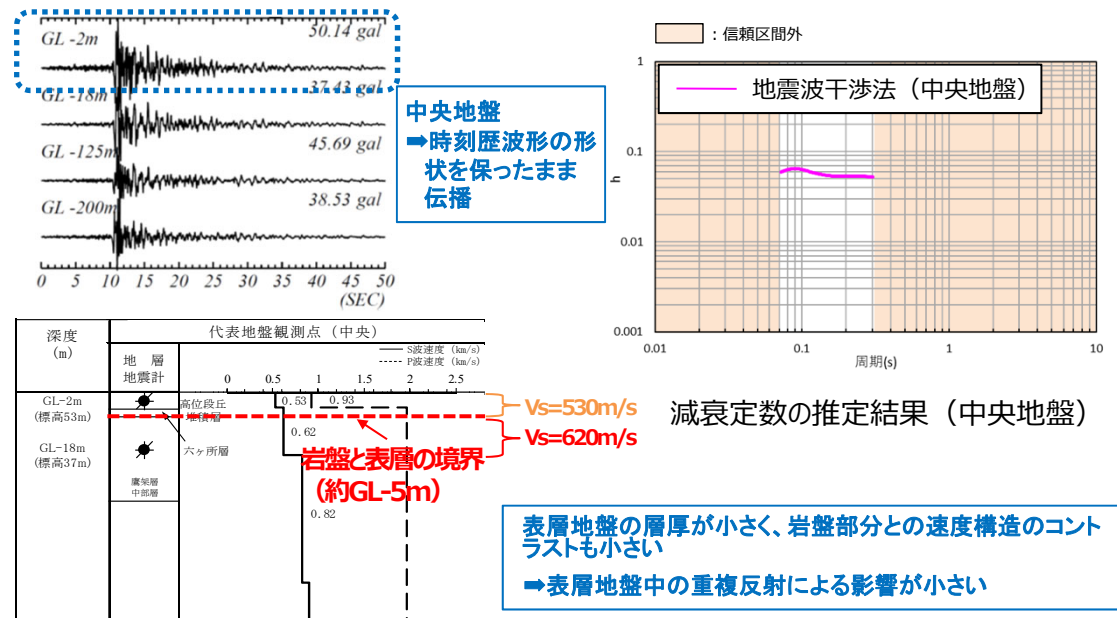
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.5 GAグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

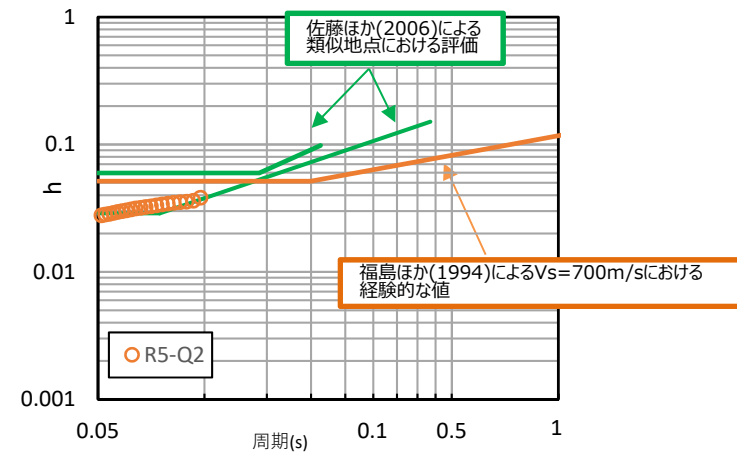
● C-4 : 地震波干渉法

- GAグループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法を実施。
- 中央地盤においては、地震波干渉法による結果について、振動数依存性は確認できないものの、用いたデコンボリューション波形における卓越周期（約0.1秒）における減衰定数の値としては信頼性が高い結果が得られていると考えられる。



● C-5 : S波検層

- GAグループでは、R5-Q2孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、GAグループのS波検層データは、高振動数側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越している傾向。
- GAグループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

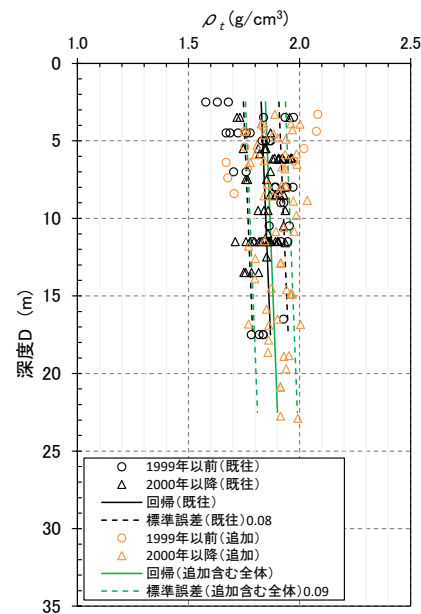
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

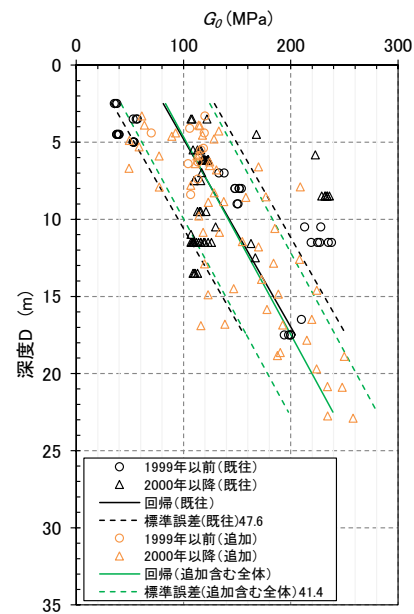
4.5 GAグループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- GAグループの表層地盤は埋戻し土であり、埋戻し土は土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理できる。



図a 湿潤密度 ρ_t 分布図



図b 動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.5 GAグループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G_0 - γ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造におけるデータであると判断できることから、データを平均化した物性値として整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して入力地震動の算定結果に影響しない程度の非線形性となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 周波数依存性は本方法による結果では明瞭には確認できないものの、明瞭なスタッキング波形のピークが見られる周期約0.1秒における減衰定数の値は精度よく得られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土が分布しており、施工年代別に剛性の深度依存性の傾向を踏まえて土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理。

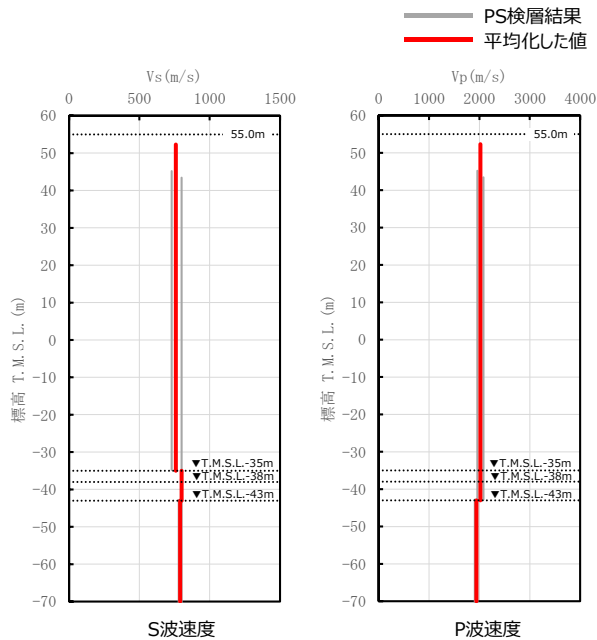
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.5 GAグループのデータ整理

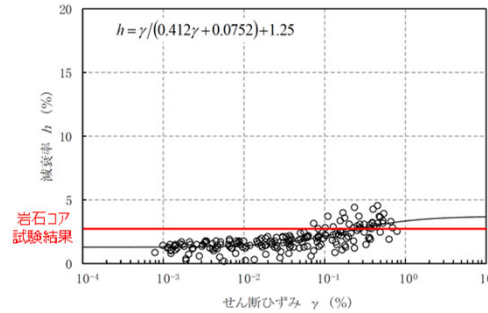
■ 整理結果のとりまとめ

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

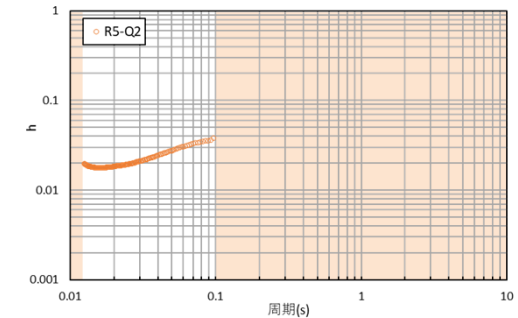
A: 岩盤部分の物性値等



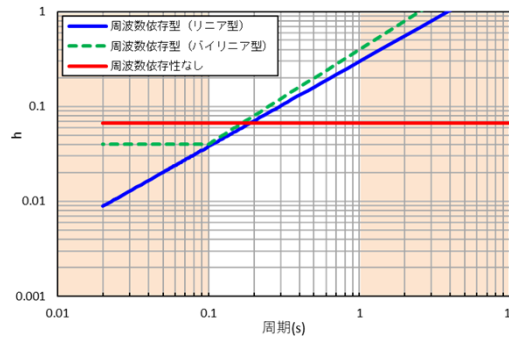
C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



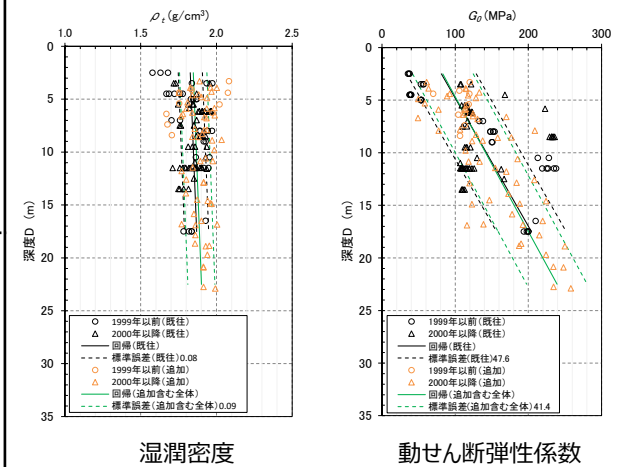
C - 5: S波検層



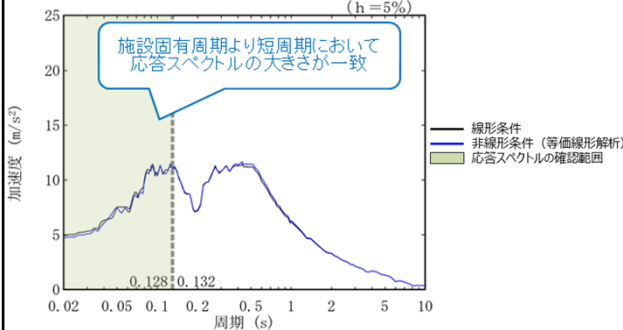
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



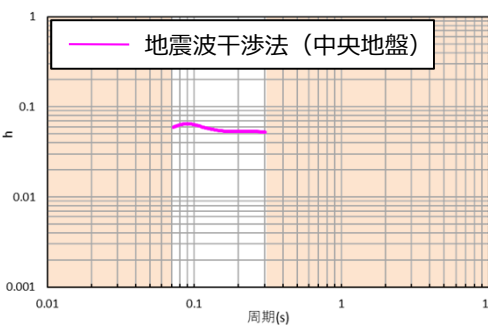
D: 表層地盤の物性値等



B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



C - 4: 地震波干渉法



4. データの整理

4.6 DCグループ

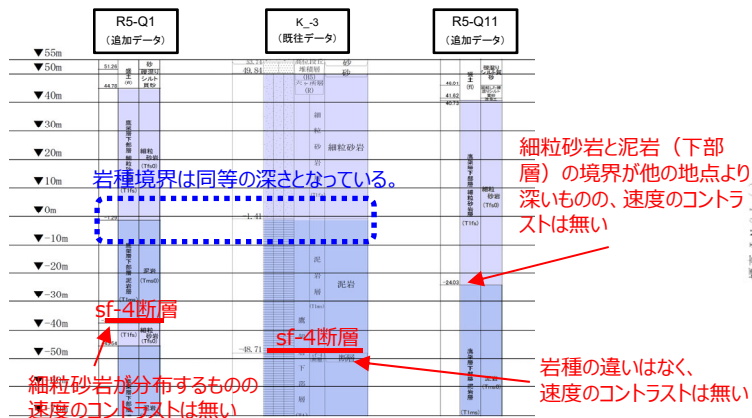
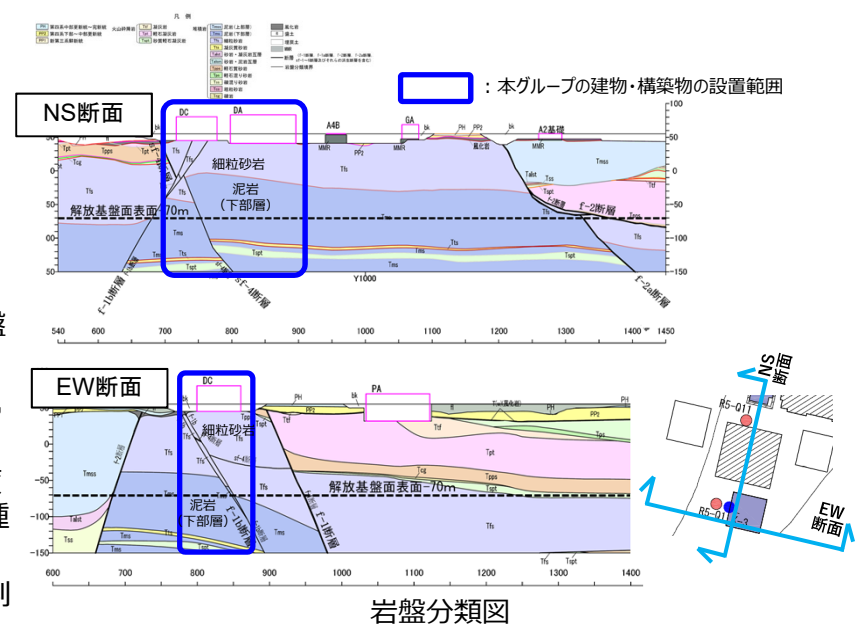
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.6 DCグループのデータ整理

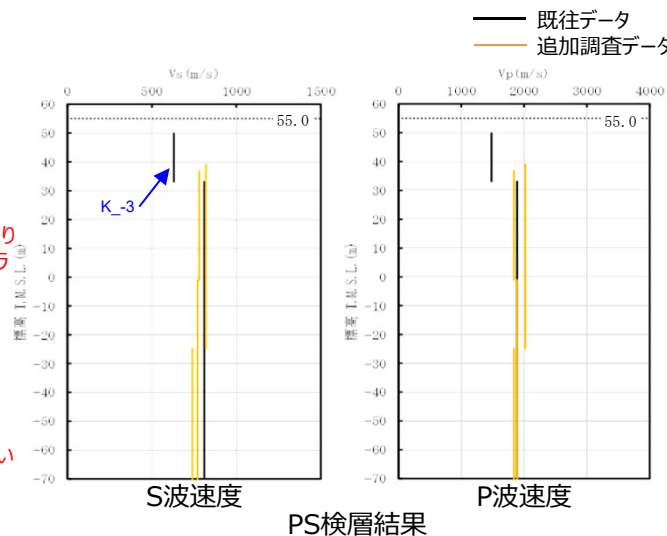
■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層 (a.-①、a.-②)

- 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層下部層の細粒砂岩及び泥岩が主に分布していることを確認した。
- PS検層 (● + ● + ●) のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
 - K_-3孔については、sf-4断層による岩種の違いはなく、速度のコントラストは無いことを確認。また、sf-4断層上盤側の細粒砂岩及び泥岩 (下部層) の岩種境界において、速度のコントラストは無いことを確認。
 - R5-Q1孔については、sf-4断層を境に泥岩 (下部層) の下層に細粒砂岩が分布するものの、当該岩種境界で速度のコントラストは無いことを確認。また、断層の上盤側においては、K_-3孔と岩種境界の深さが同等となっていることを確認。
 - R5-Q11孔の細粒砂岩と泥岩 (下部層) の岩種境界は、K_-3孔及びR5-Q1孔と比較し、深部に分布するが、速度のコントラストは小さいことを確認。
 - K_-3孔については、T.M.S.L.30mよりも浅部において、他の孔と比較してS波速度が小さいデータが得られているが、他の孔位置との地質構造の差は無いことから、同種の岩盤における速度構造として扱うことに問題は無いと判断した。
- 以上のことから、本グループにおけるPS検層データについては、同じ地下構造であると判断できることから、平均化した物性値として整理する。



地質柱状図の比較 (グループ内の東西方向の順に整理)



PS検層結果

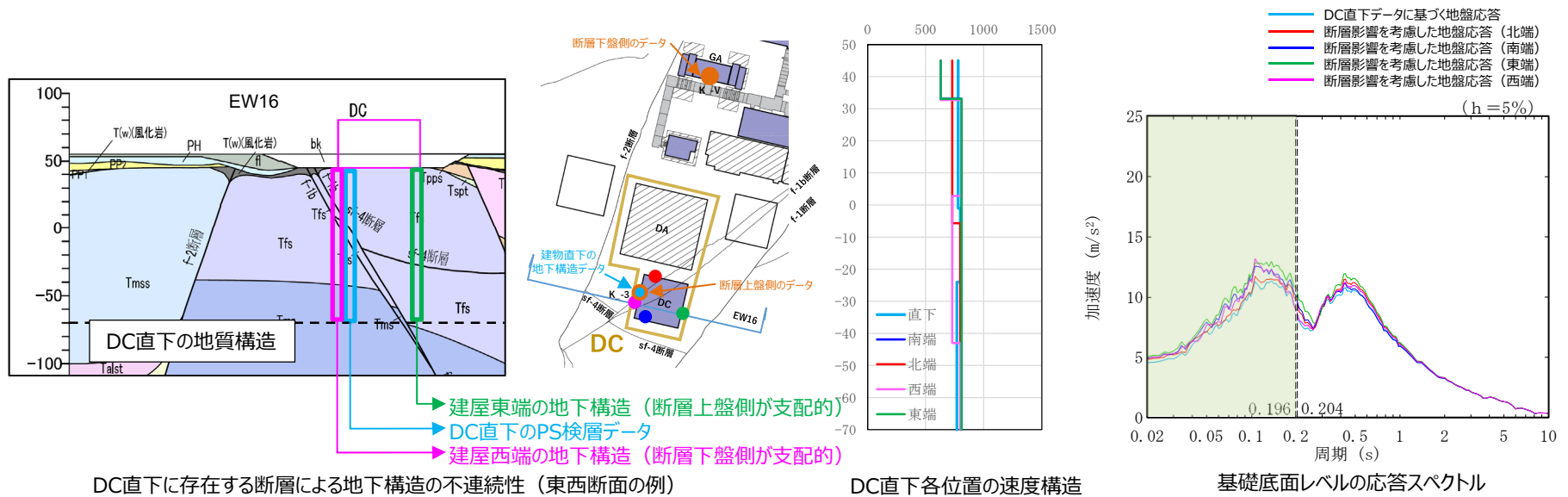
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.6 DCグループのデータ整理

■ A. 岩盤部分の物性値等

● 断層等の影響により、グループ内で地質構造が異なる場合の地盤応答への影響（DCグループ）

- 応答スペクトル形状はDC直下データに基づく地盤応答（図中●）と、建屋直下各位置の地盤応答（図中●、●、●、●）は同様となっていることから、断層による地盤応答への影響は小さく、DC直下データに基づく物性値を適用可能と考えられるものの、応答スペクトルの振幅については差が生じていることを踏まえ、設計に用いる地盤モデルの検討においては、上記の振幅の差にも留意した設定を行う。



- 以上の検討結果を踏まえ、DCグループ内の各施設に適用する物性値を以下のとおり整理する。
- 施設直下に断層があるDCについては、断層の影響を考慮し、「基本地盤モデル」におけるその他のパラメータの保守性等も考慮したうえで、建物・構築物直下の断層の影響を考慮した物性値等を設定する。

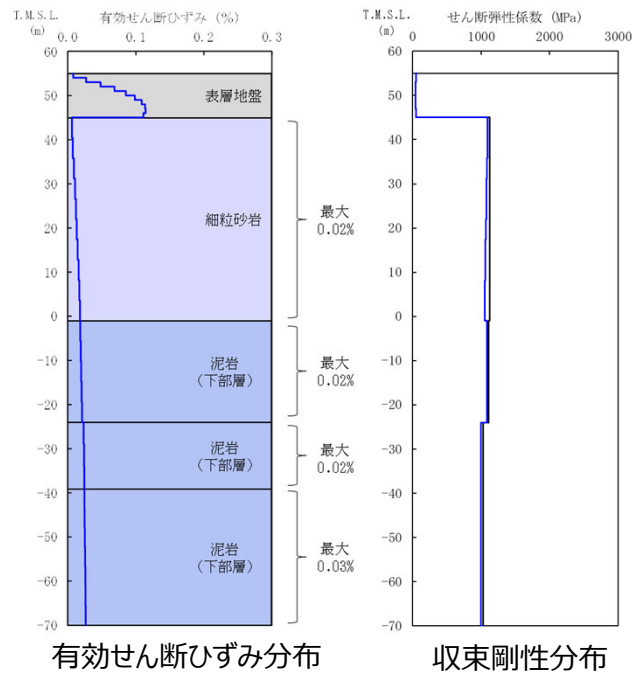
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.6 DCグループのデータ整理

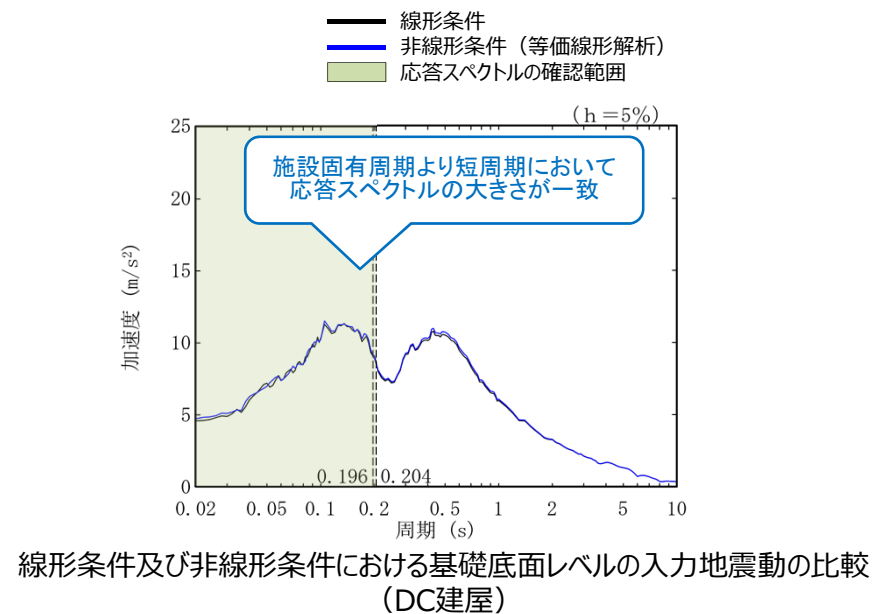
■ B. 岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、施設固有周期より短周期において応答スペクトルの大きさが一致することから、岩盤部分の非線形性が、入力地震動の算定結果に及ぼす影響は小さい。



地盤の等価線形解析結果 (DC建屋)



線形条件及び非線形条件における基礎底面レベルの入力地震動の比較 (DC建屋)

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.6 DCグループのデータ整理

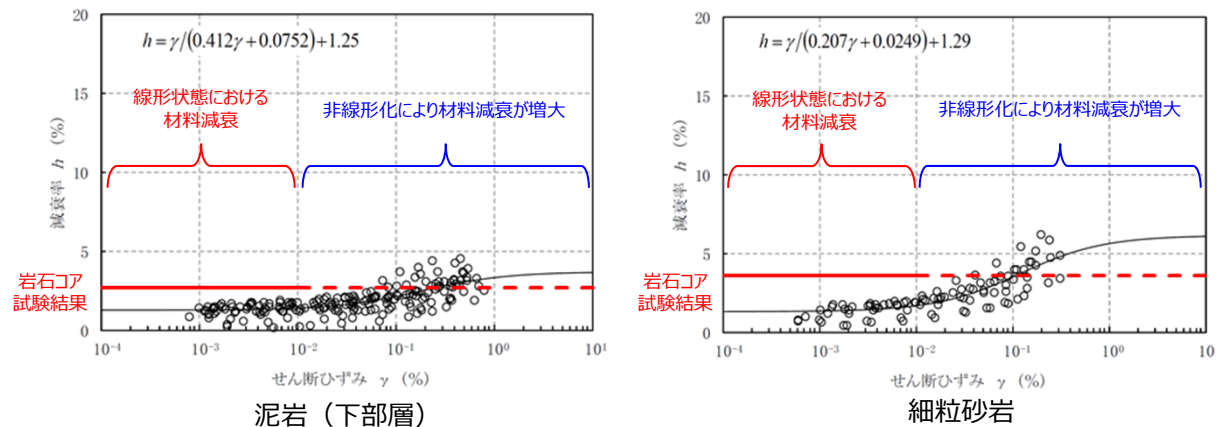
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ $10^{-2}\%$ 以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- DCグループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

- DCグループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。



岩盤部分のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ 曲線）及び岩石コア試験結果

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.6 DCグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-3：地震観測記録を用いた同定

- DCグループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s～1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。

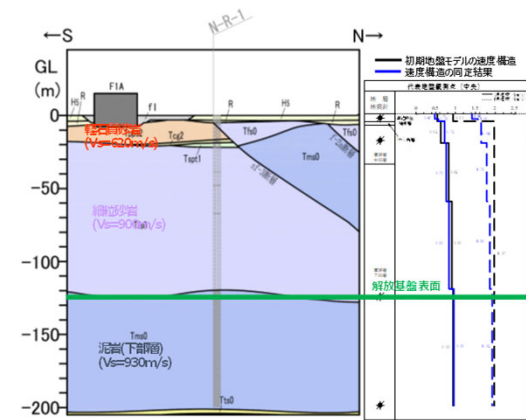
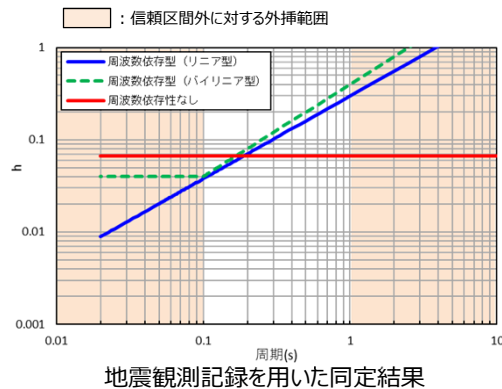


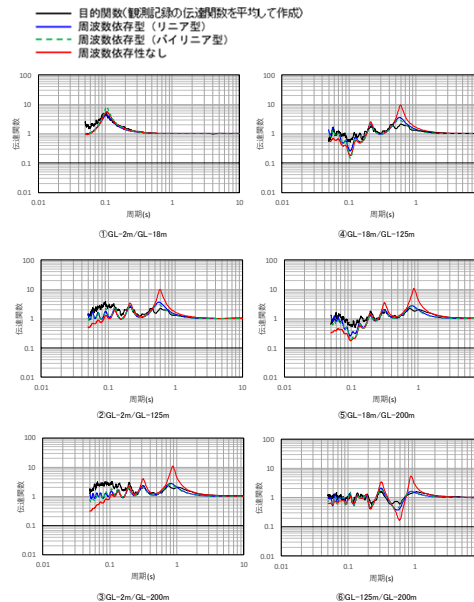
図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果



地震観測記録を用いた同定結果

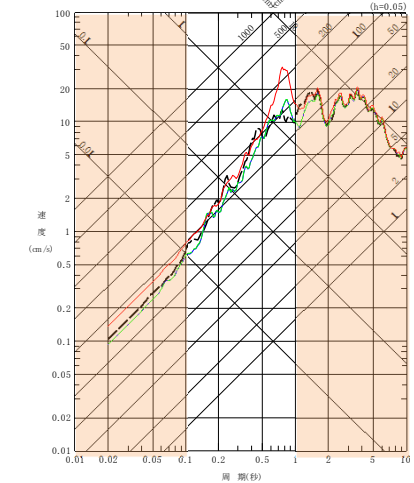
注1: 地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2: 佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象外としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。



中央地盤観測点（水平）の伝達関数

 : 信頼区間外に対する外挿範囲
— 建屋基礎底面相当レベル (GL-18m) における観測記録
— 周波数依存型 (リニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
— 周波数依存型 (バイリニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
— 周波数依存性なしの減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答



(2011年3月11日14:46 (M9.0) EW成分の例)

地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

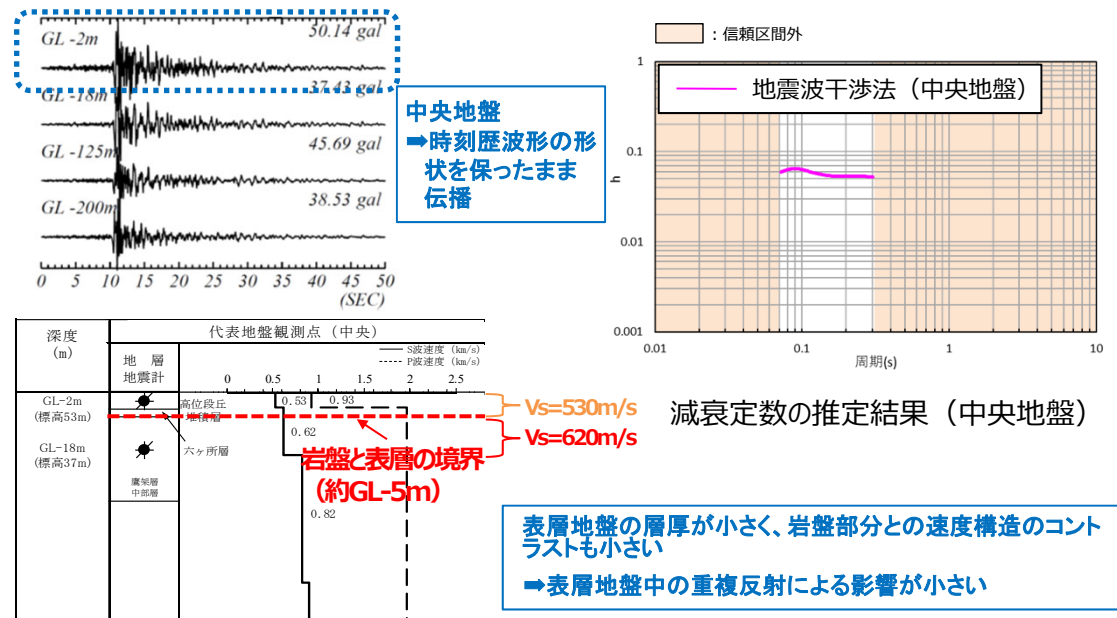
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.6 DCグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

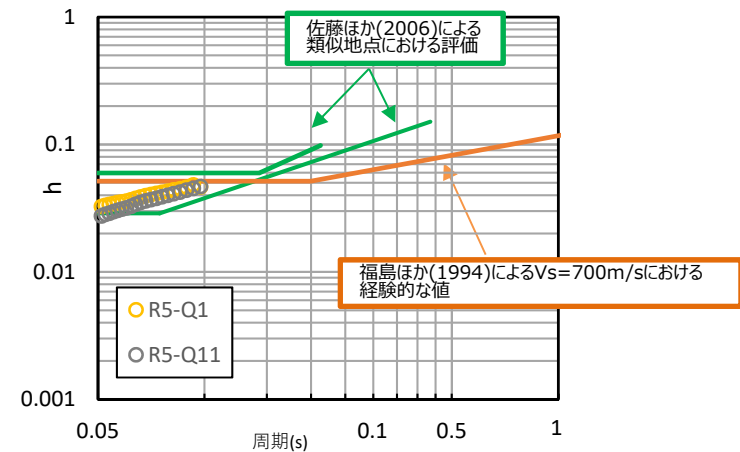
● C-4 : 地震波干渉法

- DCグループでは、中央地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法を実施。
- 中央地盤においては、地震波干渉法による結果について、振動数依存性は確認できないものの、用いたデコンボリューション波形における卓越周期（約0.1秒）における減衰定数の値としては信頼性が高い結果が得られていると考えられる。



● C-5 : S波検層

- DCグループでは、R5-Q1及びR5-Q11孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、DCグループのS波検層データは、高振動数側まで周波数依存性を有し、複数データで同様の傾向となっており、散乱減衰が卓越している傾向。
- DCグループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



中央地盤

エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

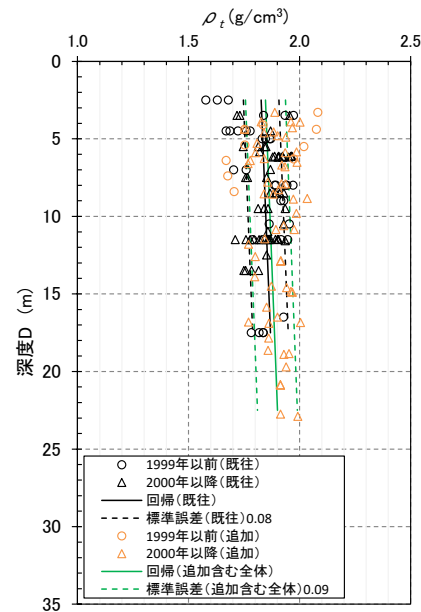
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

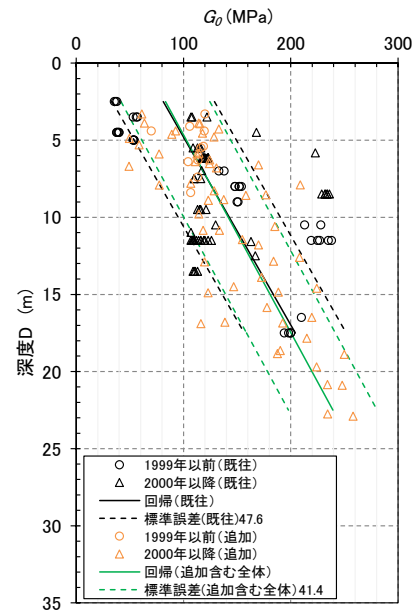
4.6 DCグループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- DCグループの表層地盤は埋戻し土であり、埋戻し土は土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理できる。



図a 湿潤密度 ρ_t 分布図



図b 動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.6 DCグループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G_0 - γ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造におけるデータであると判断できることから、データを平均化した物性値として整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して入力地震動の算定結果に影響しない程度の非線形性となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 周波数依存性は本方法による結果では明瞭には確認できないものの、明瞭なスタッキング波形のピークが見られる周期約0.1秒における減衰定数の値は精度よく得られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土が分布しており、施工年代別に剛性の深度依存性の傾向を踏まえて土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理。

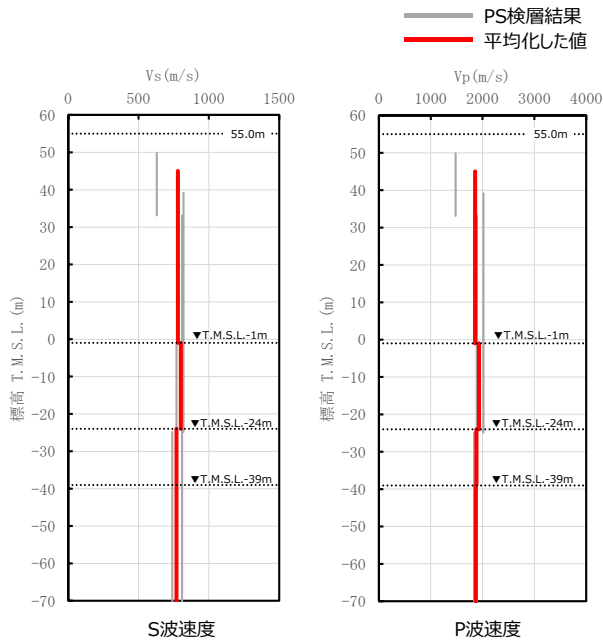
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.6 DCグループのデータ整理

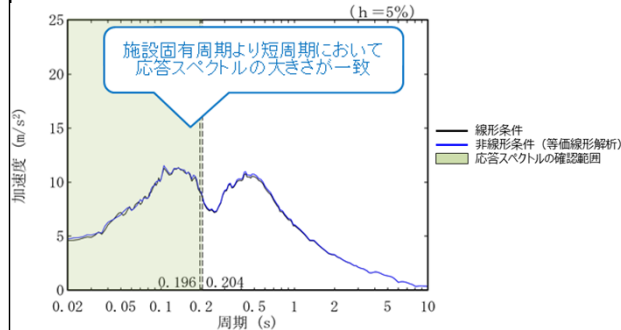
■ 整理結果のとりまとめ

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

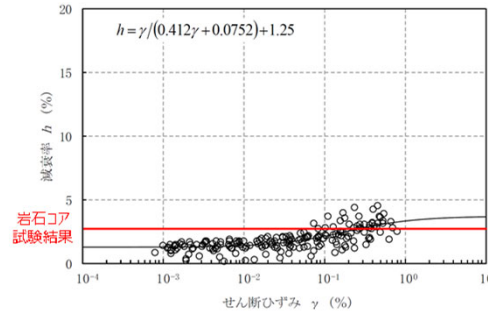
A: 岩盤部分の物性値等



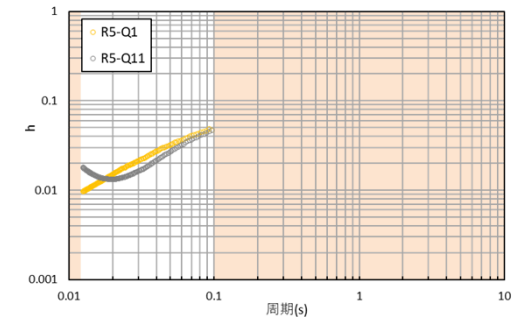
B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



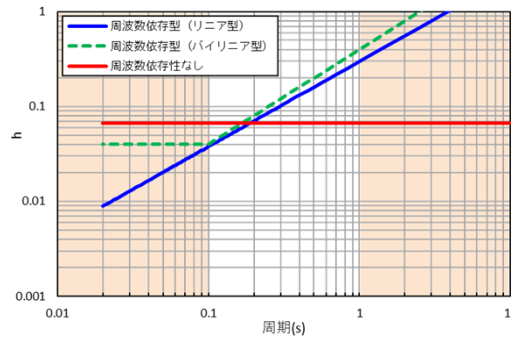
C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



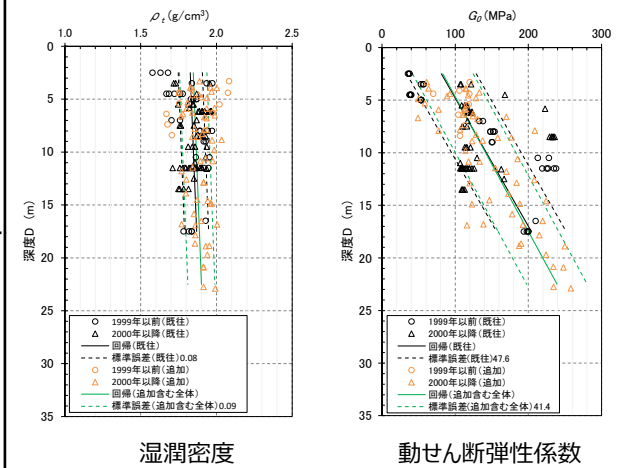
C - 5: S波検層



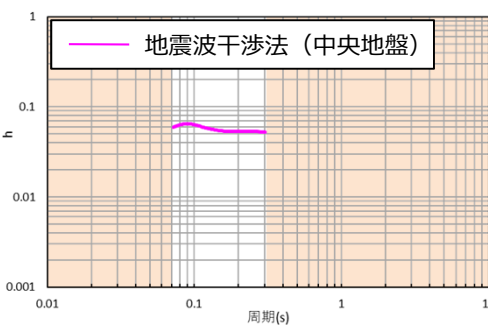
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



D: 表層地盤の物性値等



C - 4: 地震波干渉法



4. データの整理

4.7 E施設周辺グループ

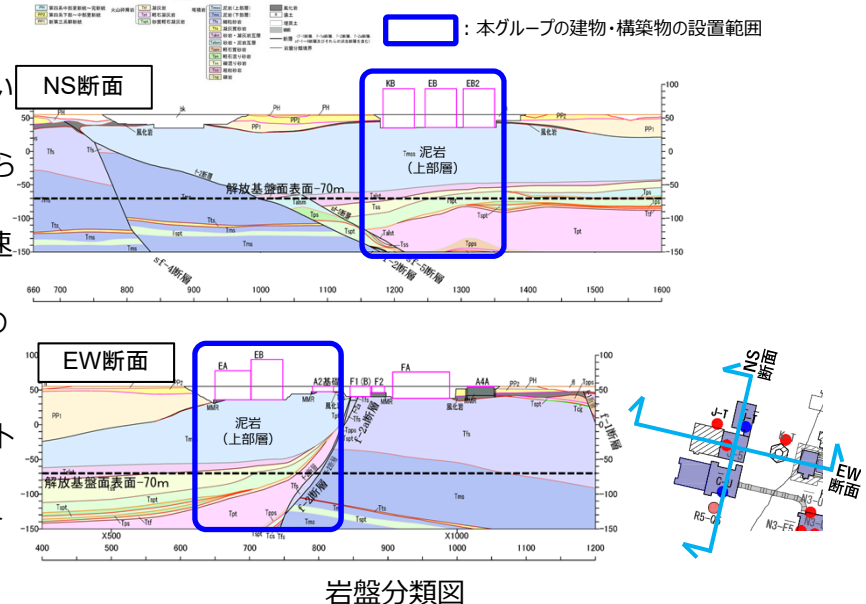
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.7 E施設周辺グループのデータ整理

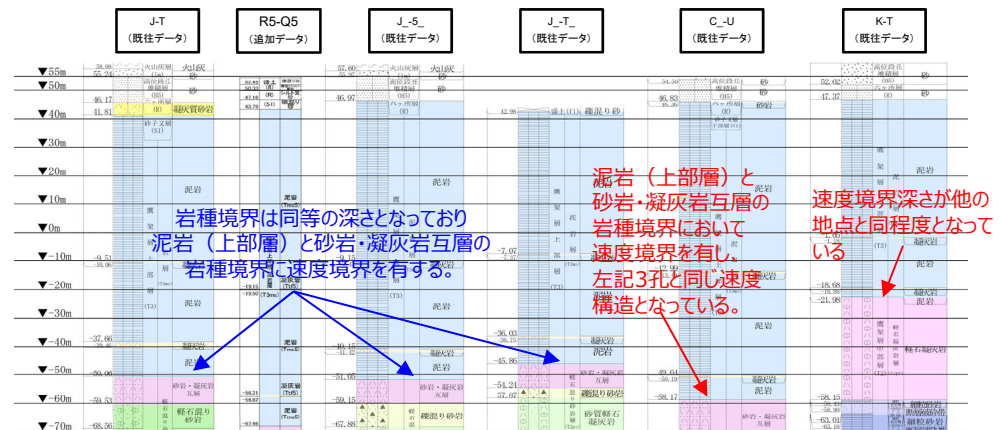
■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層 (a.-①、a.-②)

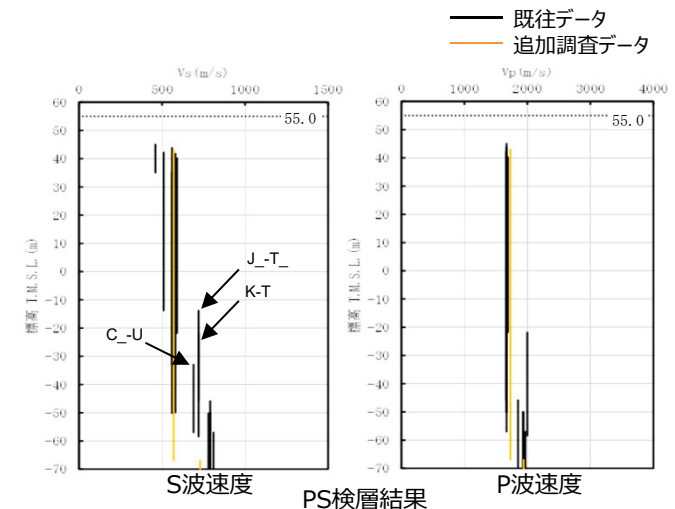
- 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層上部層の泥岩が主に分布していることを確認した。
- 本グループの建物・構築物直下においては、岩種の分布に差を与えるような断層は見られない。
- PS検層 (● + ● + ●) のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
 - J-T孔、J_-5_孔、J_-T_孔については、泥岩 (上部層) 及び砂岩・凝灰岩互層の岩種境界の深さは同等となっていることを確認。
 - C_-U孔については、上記3孔と同様に、泥岩 (上部層) と砂岩・凝灰岩互層の岩種境界において速度のコントラストを有し、砂岩・凝灰岩互層の下層では速度のコントラストがないことから、同様の速度構造となっている。
 - R5-Q5孔については、C_-U孔の泥岩 (上部層) と砂岩・凝灰岩互層の岩種境界の深さが同等となっている。
 - K-T孔については、その他地点と比べ、岩種境界の深さに差があるものの、速度境界深さはJ_-T_孔及びC_-U孔と同等となっており、速度としても同等となっていることから、同種の岩盤における速度構造として扱うことに問題は無いと判断した。
- 以上のことから、本グループにおけるPS検層データについては、同じ地下構造であると判断できることから、平均化した物性値として整理する。



岩盤分類図



地質柱状図の比較 (グループ内の東西方向の順に整理)



PS検層結果

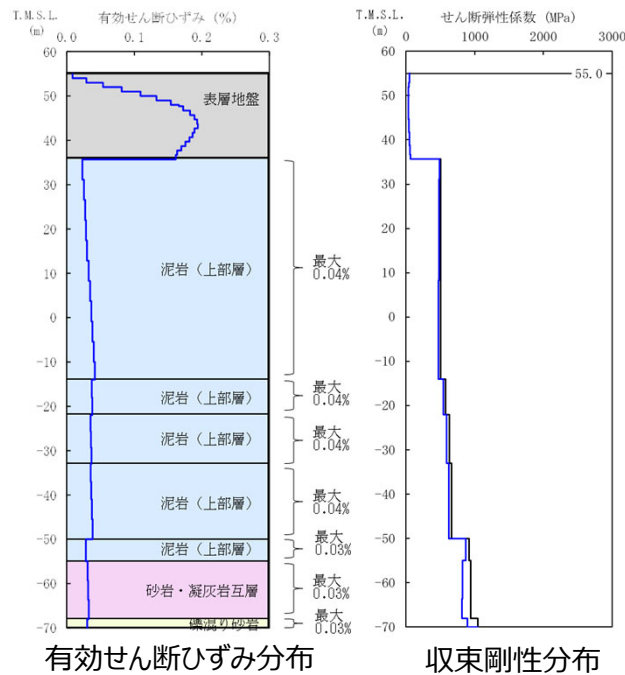
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.7 E施設周辺グループのデータ整理

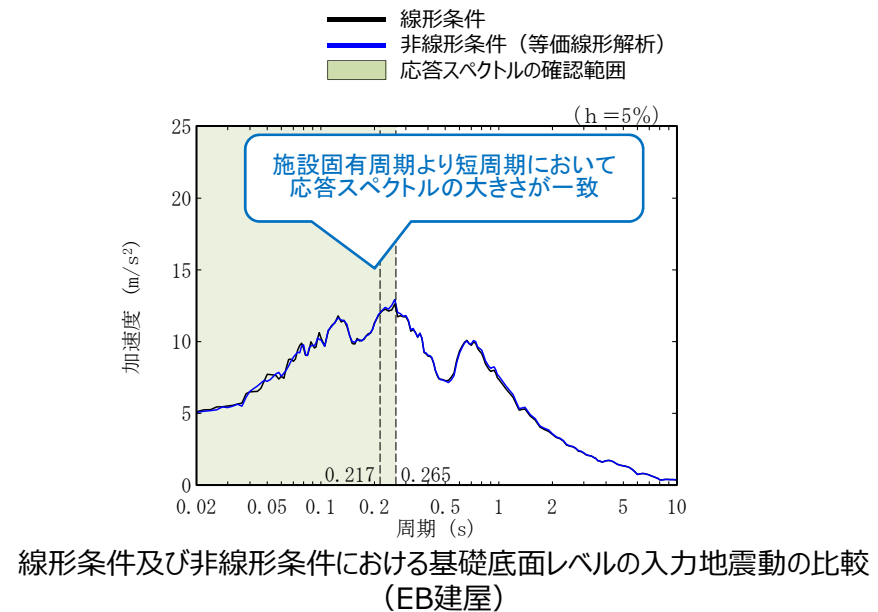
■ B.岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、施設固有周期より短周期において応答スペクトルの大きさが一致することから、岩盤部分の非線形性が、入力地震動の算定結果に及ぼす影響は小さい。



地盤の等価線形解析結果 (EB建屋)



基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.7 E施設周辺グループのデータ整理

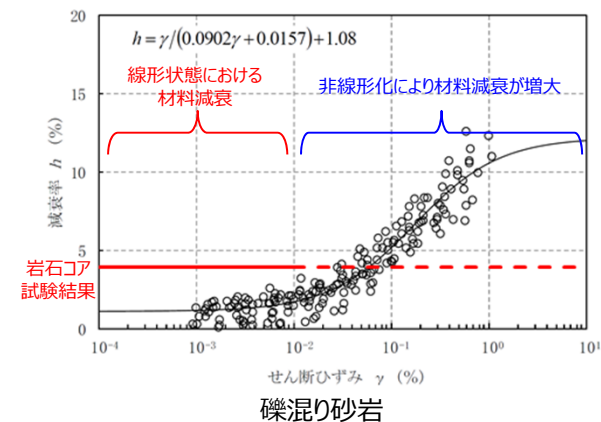
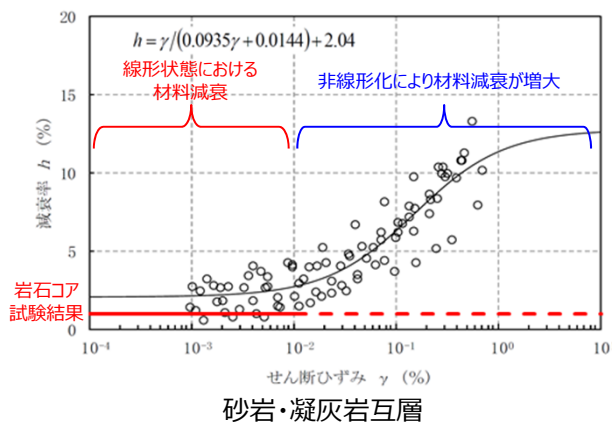
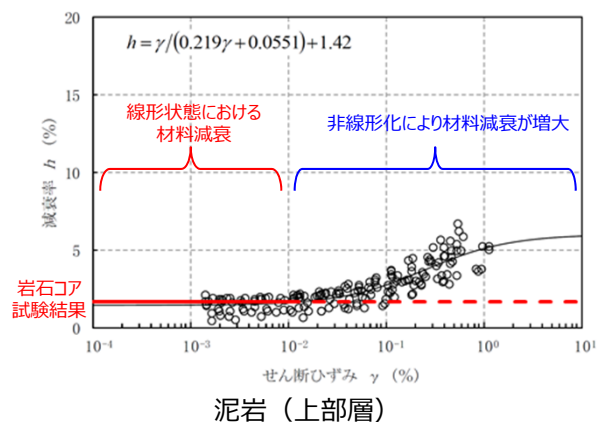
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ $10^{-2}\%$ 以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- E施設周辺グループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

- E施設周辺グループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、泥岩（上部層）及び礫混り砂岩については、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値と同等または上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。
- 砂岩・凝灰岩互層については、三軸圧縮試験結果を下回る結果が得られているが、三軸圧縮試験において元としている個別の供試体に対する試験結果におけるばらつきの範囲内の値とはなっており、特異な値とはなっていない。



岩盤部分のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ 曲線）及び岩石コア試験結果

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.7 E施設周辺グループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-3 : 地震観測記録を用いた同定

- E施設周辺グループでは、西側地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s~1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。

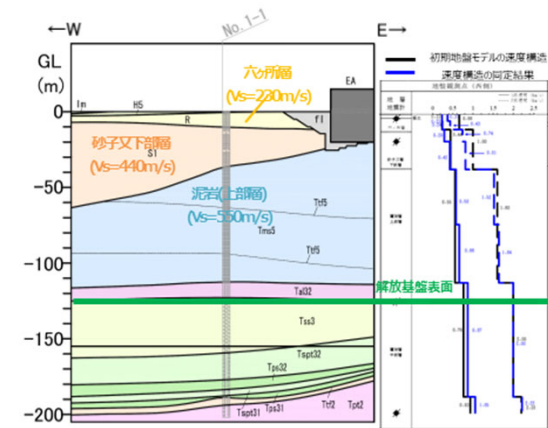
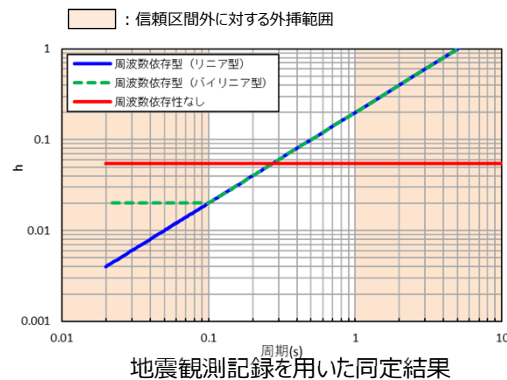
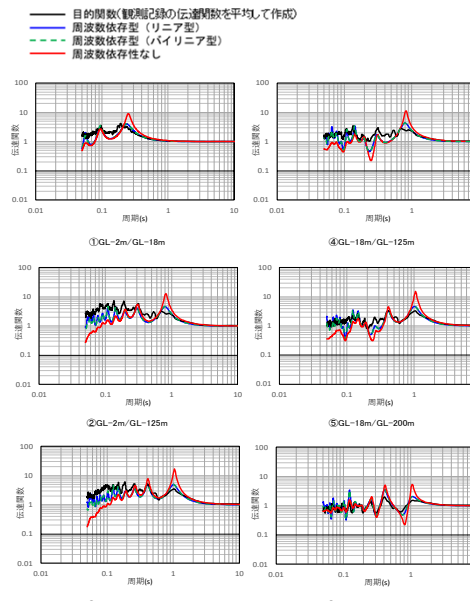


図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果



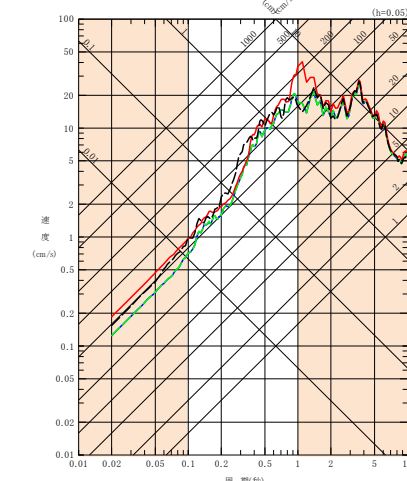
注1: 地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2: 佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象外としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。



西側地盤観測点（水平）の伝達関数

 : 信頼区間外に対する外挿範囲
— 建屋基礎底面相当レベル (GL-18m) における観測記録
— 周波数依存型 (リニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
— 周波数依存型 (バイリニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
— 周波数依存性なしの減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答



(2011年3月11日14:46 (M9.0) EW成分の例)

地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

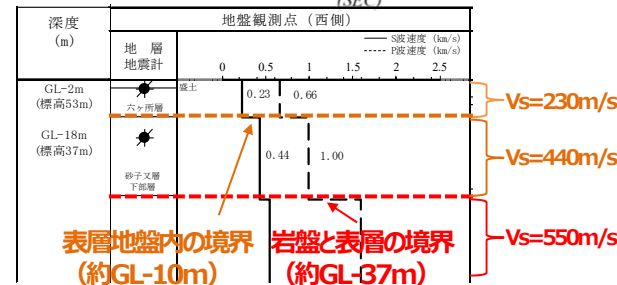
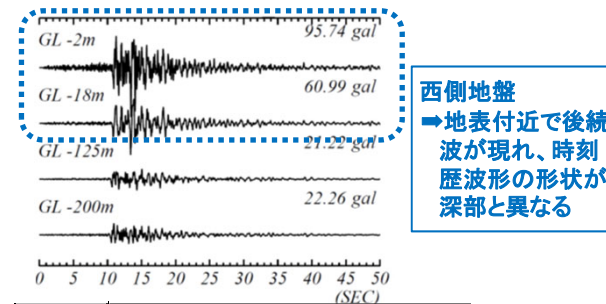
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.7 E施設周辺グループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-4 : 地震波干渉法

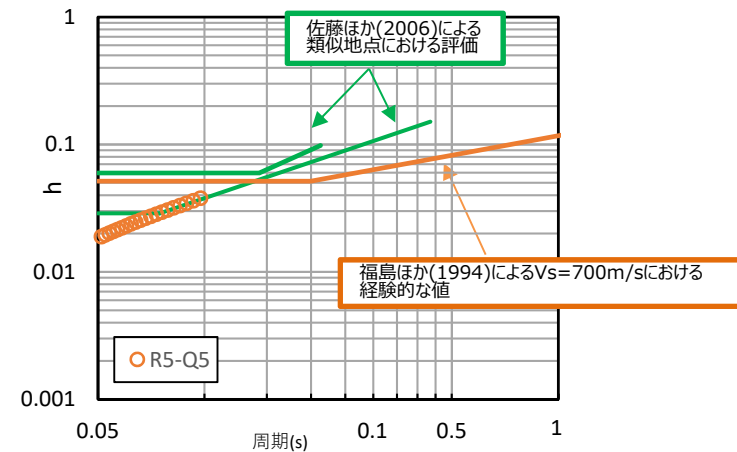
- E施設周辺グループでは、西側地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法の適用性を検討。
- 西側地盤においては、地震波の重複反射による影響が大きく、表層地盤における地盤応答が複雑な傾向となっている。
- 表層地盤における波形が、単純な入射と反射の現象とは異なる傾向を示す場合には、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討はできないと判断した。



岩盤部分と表層地盤の境界面に傾斜が見られる。
 表層地盤の層厚が中央地盤と比較して大きく、表層地盤内に大きな速度のコントラストを有する。
 → 表層地盤内及び岩盤との境界面における重複反射による影響が大きい

● C-5 : S波検層

- E施設周辺グループでは、R5-Q5孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、E施設周辺グループのS波検層データは、高振動数側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越している傾向。
- E施設周辺グループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



西側地盤

エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

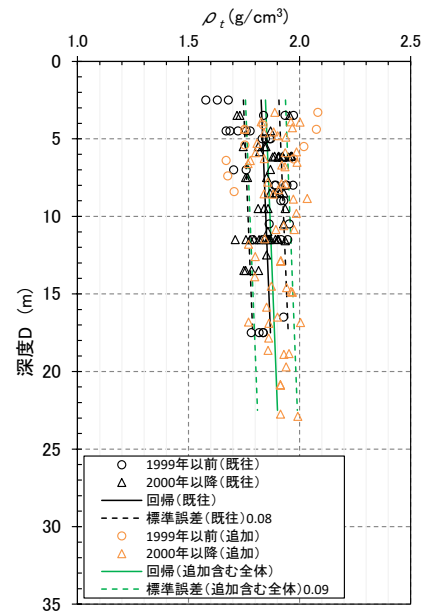
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

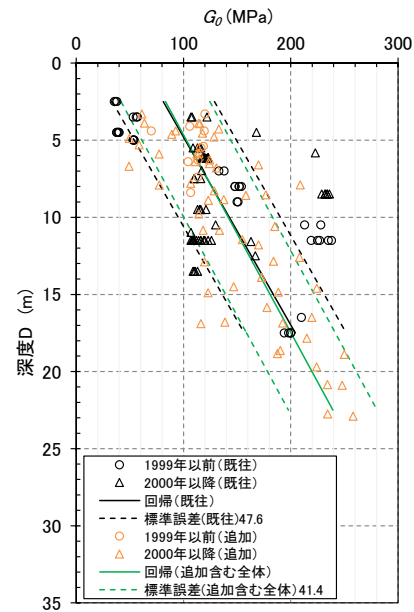
4.7 E施設周辺グループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- E施設周辺グループの表層地盤は埋戻し土であり、埋戻し土は土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理できる。



図a 湿潤密度 ρ_t 分布図



図b 動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.7 E施設周辺グループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

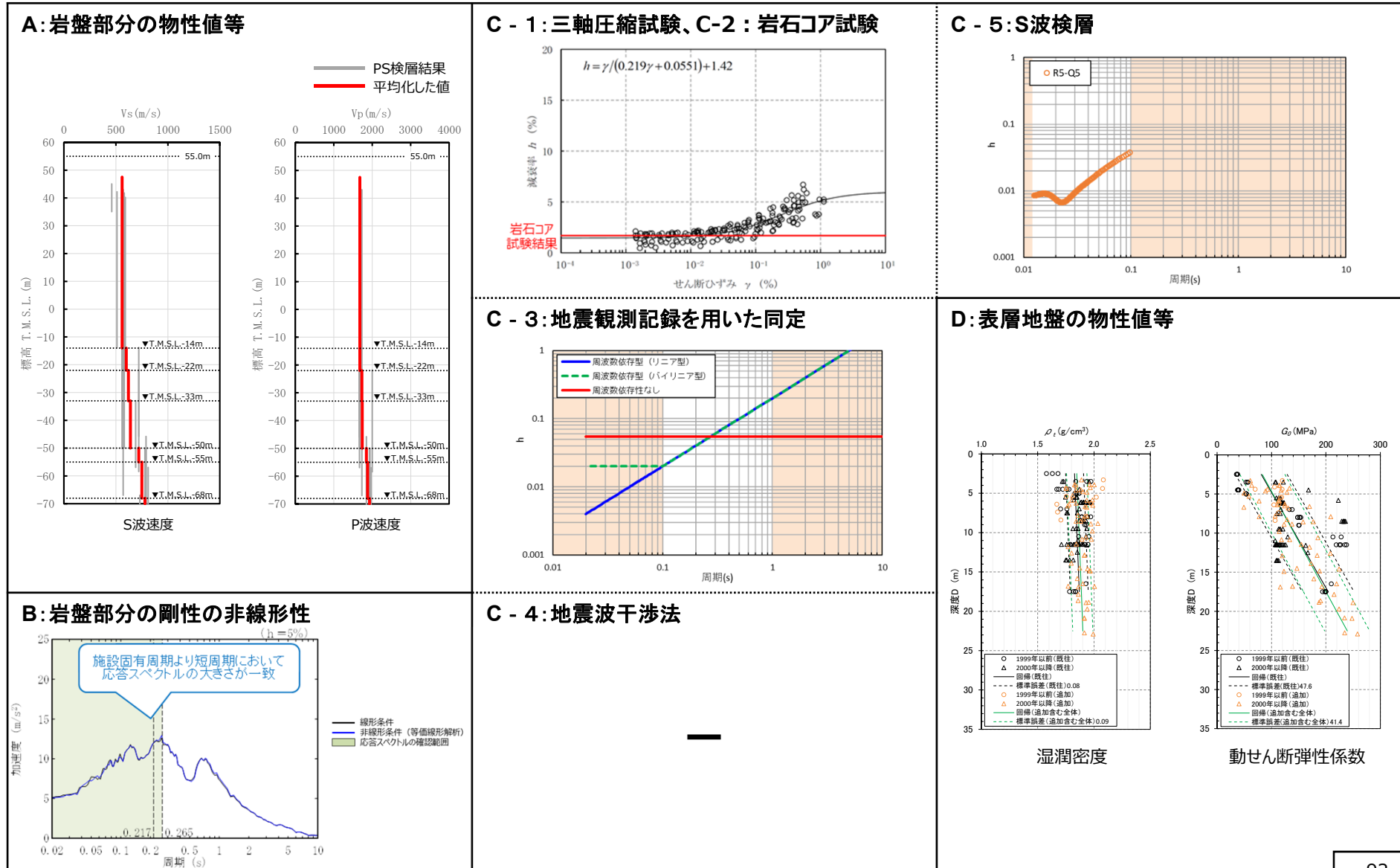
設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G_0 - γ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造におけるデータであると判断できることから、データを平均化した物性値として整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して入力地震動の算定結果に影響しない程度の非線形性となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値を上回る、または下回るデータは三軸圧縮試験の個別データのばらつきの範囲内。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 地盤中の重複反射の影響により、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討は出来ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土が分布しており、施工年代別に剛性の深度依存性の傾向を踏まえて土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理。

基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.7 E施設周辺グループのデータ整理

■ 整理結果のとりまとめ

■ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲



4. データの整理

4.8 ACグループ

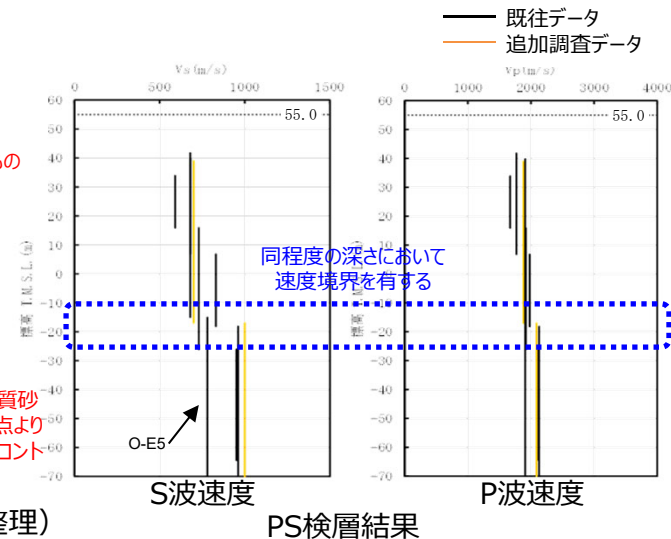
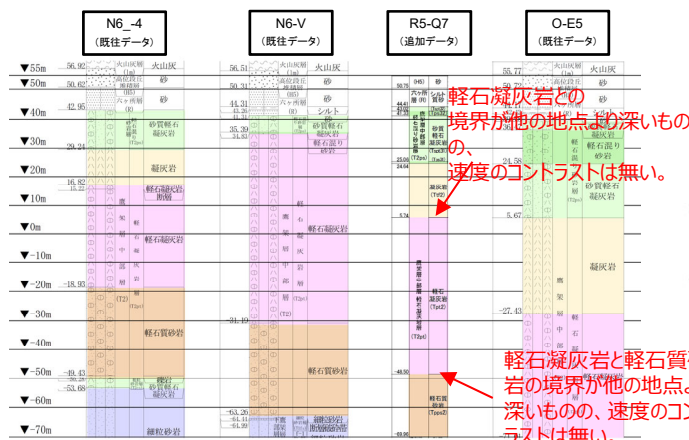
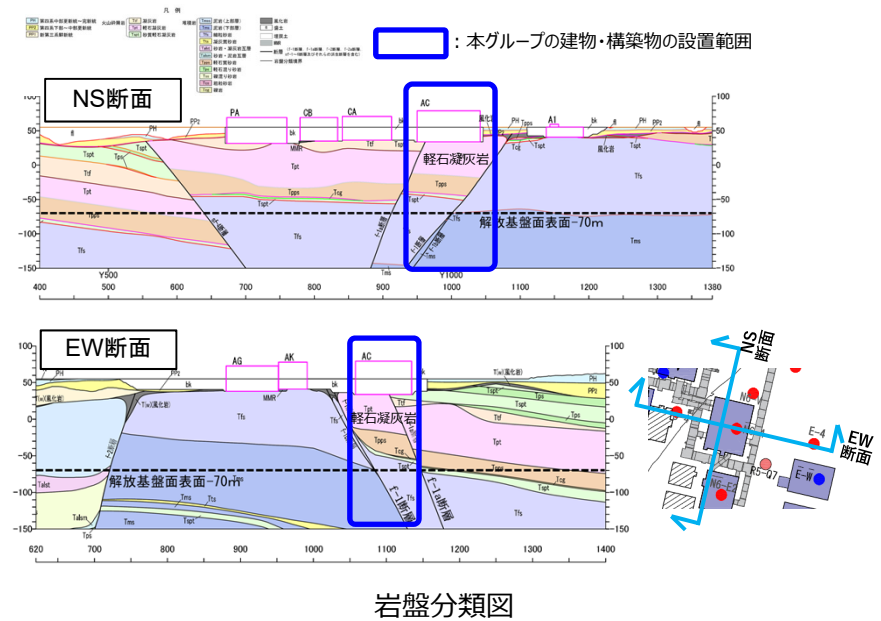
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.8 ACグループのデータ整理

■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層 (a.-①、a.-②)

- 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層中部層の軽石凝灰岩、軽石質砂岩、鷹架層下部層の細粒砂岩が主に分布していることを確認した。
- PS検層 (●+●+●) のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
 - R5-Q7孔及びN6-V孔については、N6_-4孔と比較し、軽石凝灰岩が厚く分布しているが、速度構造としては、いずれの孔においても同程度の深さにおいて速度のコントラストを有することを確認。
 - O-E5孔については、N6_-4孔と比較し、軽石凝灰岩が深く分布し、S波速度が小さいものの、他の3孔と同程度の深さにおいて速度境界を有することを確認。
 - R5-Q7孔及びO-E5孔の軽石凝灰岩と軽石質砂岩の岩種境界はN6_-4孔に比べ深いものの、その境界においては、速度のコントラストは無いことを確認。
- 以上のことから、本グループにおけるPS検層データについては、同じ地下構造であると判断できることから、平均化した物性値として整理する。



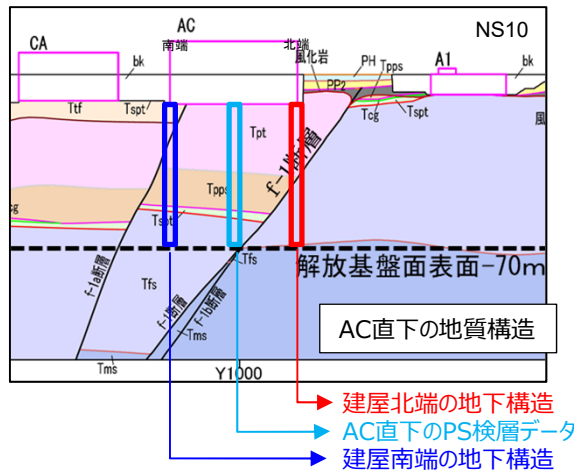
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.8 ACグループのデータ整理

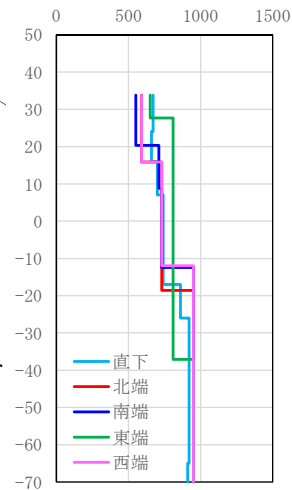
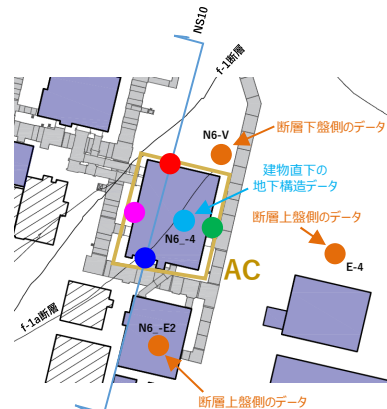
■ A. 岩盤部分の物性値等

● 断層等の影響により、グループ内で地質構造が異なる場合の地盤応答への影響（ACグループ）

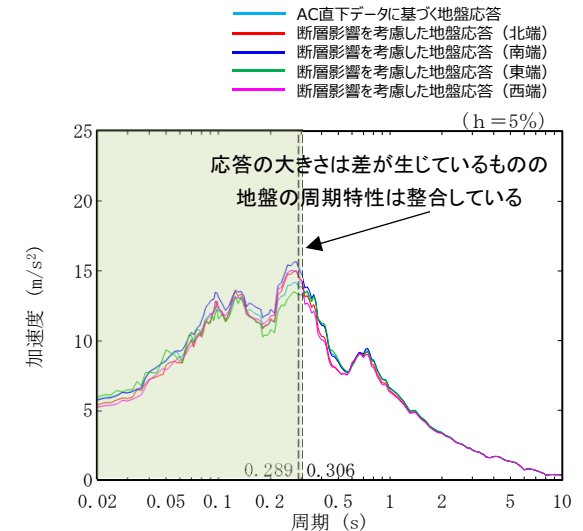
- 応答スペクトル形状はAC直下データに基づく地盤応答（図中●）と、建屋直下各位置の地盤応答（図中●, ●, ●, ●）は同様となっていることから、断層による地盤応答への影響は小さく、AC直下データに基づく物性値を適用可能と考えられるものの、応答スペクトルの振幅については差が生じていることを踏まえ、設計に用いる地盤モデルの検討においては、上記の振幅の差にも留意した設定を行う。



AC直下に存在する断層による地下構造の不連続性（南北断面の例）



AC直下各位置の速度構造



基礎底面レベルの応答スペクトル

- 以上の検討結果を踏まえ、ACグループ内の各施設に適用する物性値を以下のとおり整理する。
- 施設直下に断層があるACについては、断層の影響を考慮し、「基本地盤モデル」におけるその他のパラメータの保守性等も考慮したうえで、建物・構築物直下の断層の影響を考慮した物性値等を設定する。

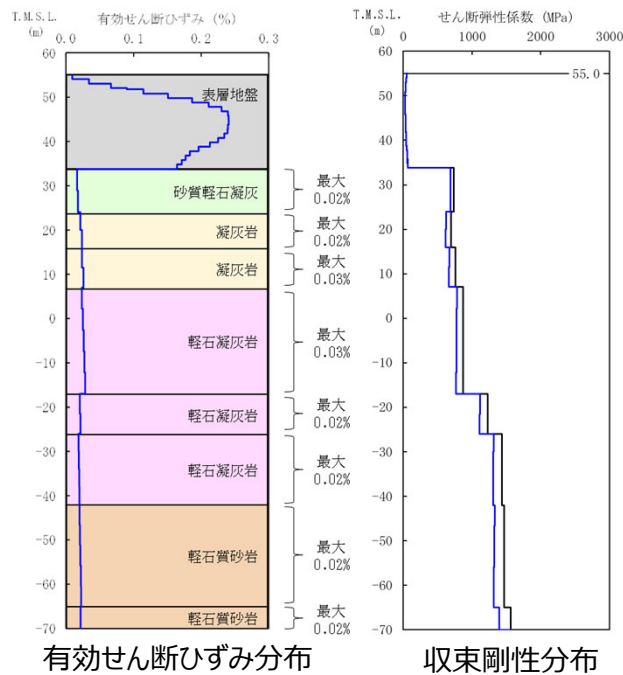
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.8 ACグループのデータ整理

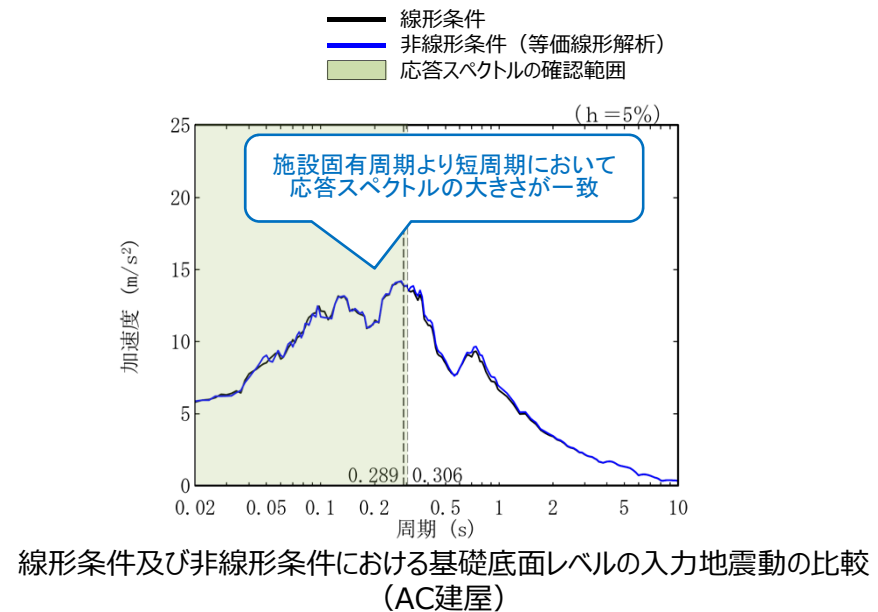
■ B.岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、施設固有周期より短周期において応答スペクトルの大きさが一致することから、岩盤部分の非線形性が、入力地震動の算定結果に及ぼす影響は小さい。



地盤の等価線形解析結果（AC建屋）



線形条件及び非線形条件における基礎底面レベルの入力地震動の比較（AC建屋）

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.8 ACグループのデータ整理

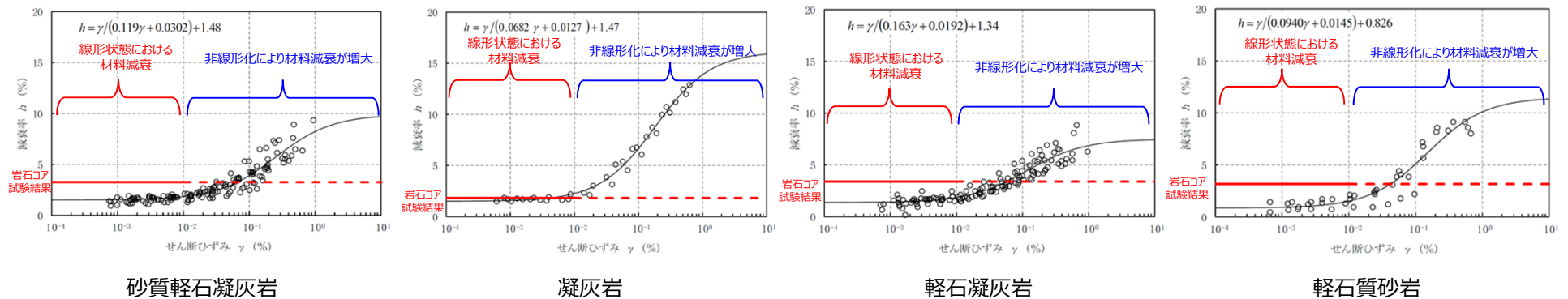
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ10⁻²%以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- ACグループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

- ACグループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値に対して同等または上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。



砂質軽石凝灰岩

凝灰岩

軽石凝灰岩

軽石質砂岩

岩盤部分のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ 曲線）及び岩石コア試験結果

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.8 ACグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-3：地震観測記録を用いた同定

- ACグループでは、東側地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s～1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。

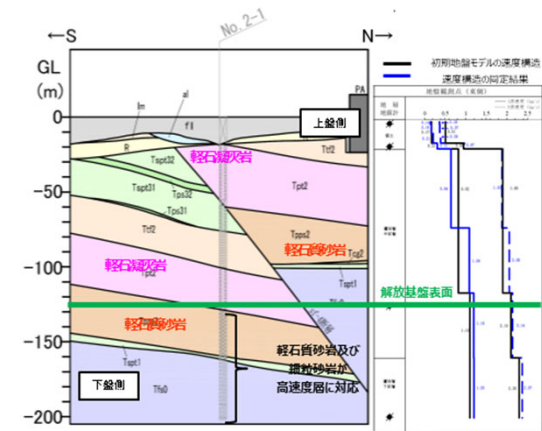
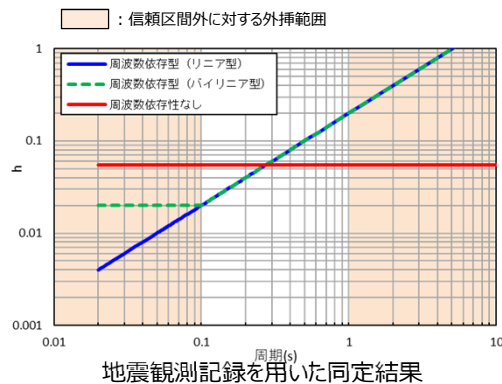
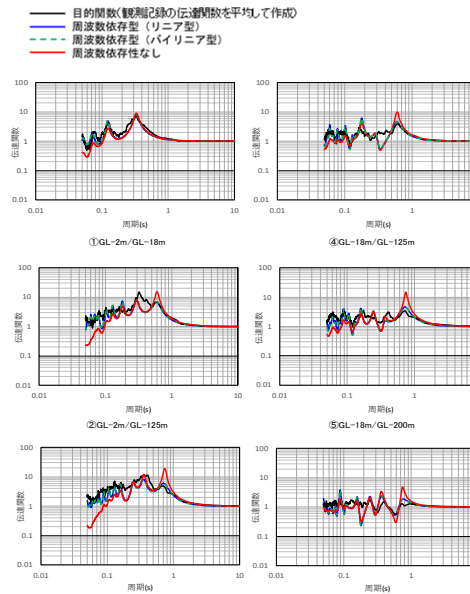


図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果

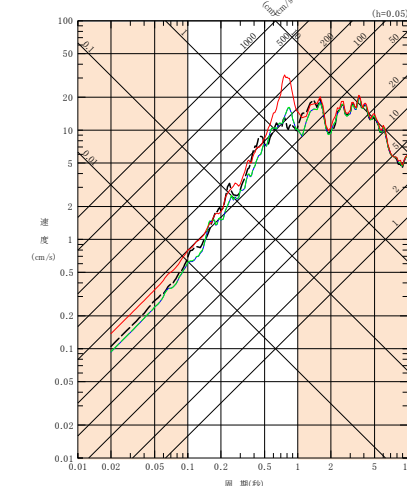


地震観測記録を用いた同定結果



東側地盤観測点（水平）の伝達関数

- 信頼区間外に対する外挿範囲
- 建屋基礎底面相当レベル (GL-18m) における観測記録
- 周波数依存型 (リニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
- 周波数依存型 (バイリニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
- 周波数依存性なしの減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答



(2011年3月11日14:46 (M9.0) EW成分の例)

地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

注1: 地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2: 佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象外としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。

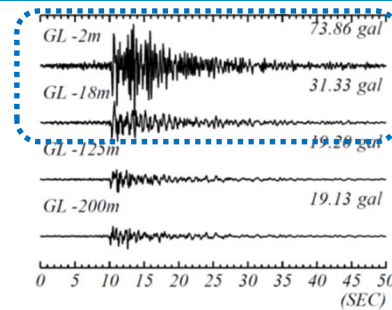
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.8 ACグループのデータ整理

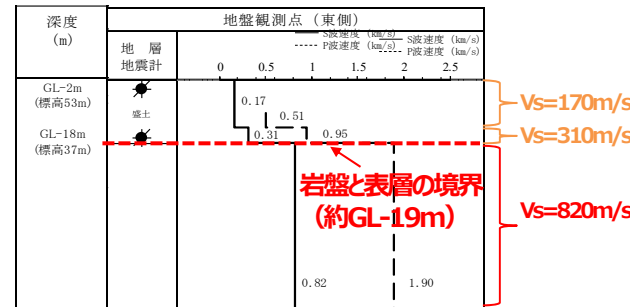
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-4 : 地震波干渉法

- ACグループでは、東側地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法の適用性を検討。
- 東側地盤においては、地震波の重複反射による影響が大きく、表層地盤における地盤応答が複雑な傾向となっている。
- 表層地盤における波形が、単純な入射と反射の現象とは異なる傾向を示す場合には、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討はできないと判断した。



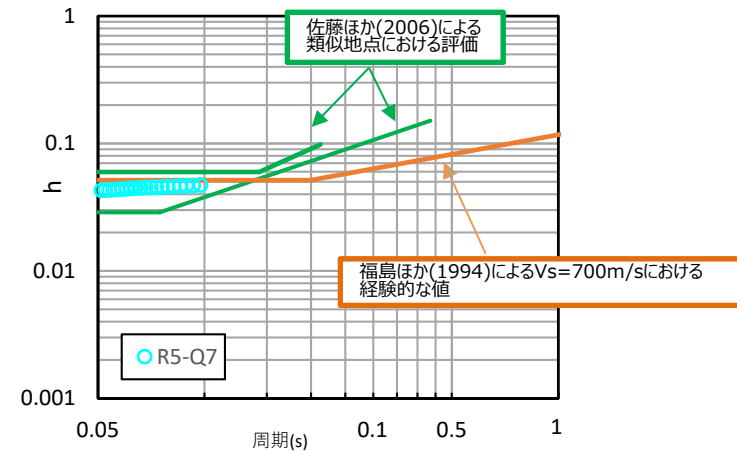
東側地盤
 → 地表付近で後続波が現れ、時刻歴波形の形状が深部と異なる



表層地盤の層厚が中央地盤と比較して大きく、岩盤部分との速度構造とのコントラストが大きい
 → 表層地盤中の重複反射による影響が大きい

● C-5 : S波検層

- ACグループでは、R5-Q7孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、ACグループのS波検層データは、傾きは小さいものの、高振動数側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越している傾向。
- ACグループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



東側地盤

エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

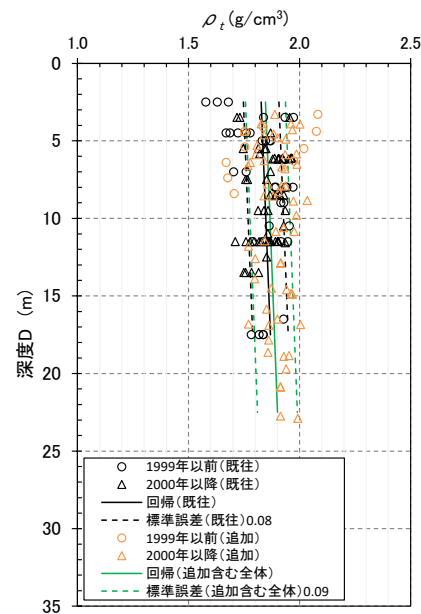
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

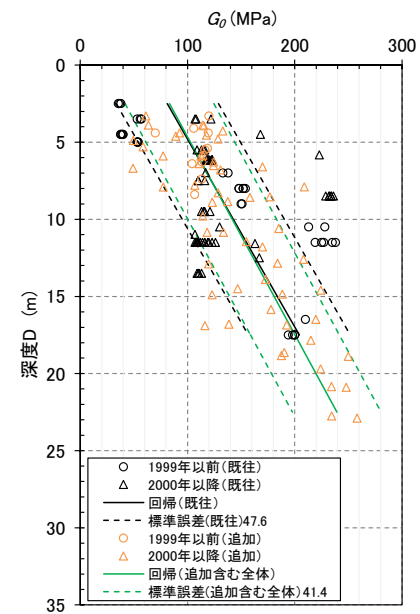
4.8 ACグループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- ACグループの表層地盤は埋戻し土であり、埋戻し土は土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理できる。



図a 湿潤密度 ρ_t 分布図



図b 動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.8 ACグループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

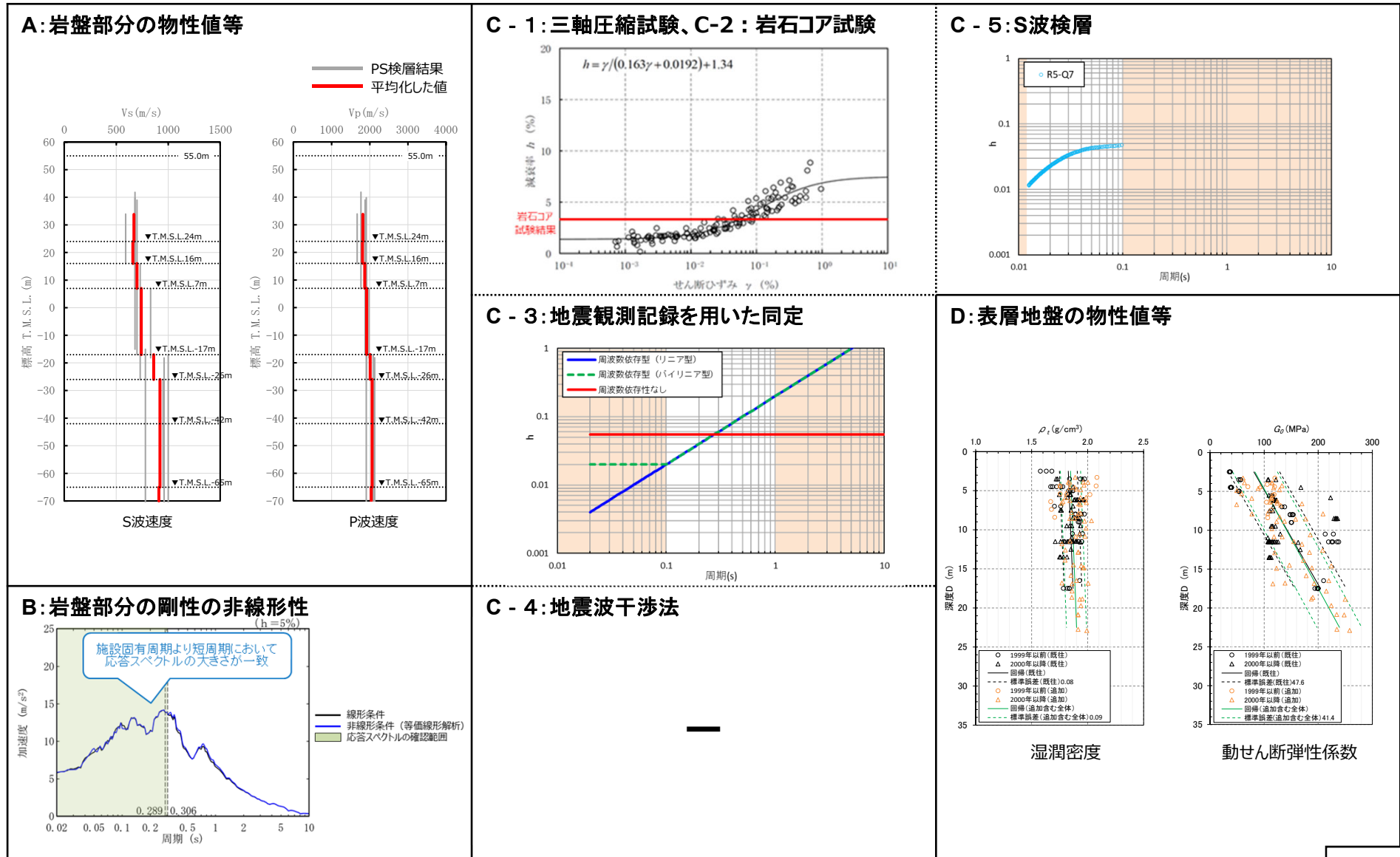
設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G_0 - γ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造におけるデータであると判断できることから、データを平均化した物性値として整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して入力地震動の算定結果に影響しない程度の非線形性となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値に対して同等または上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 地盤中の重複反射の影響により、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討は出来ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土が分布しており、施工年代別に剛性の深度依存性の傾向を踏まえて土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理。

基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.8 ACグループのデータ整理

■ 整理結果のとりまとめ

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲



4. データの整理

4.9 CAグループ

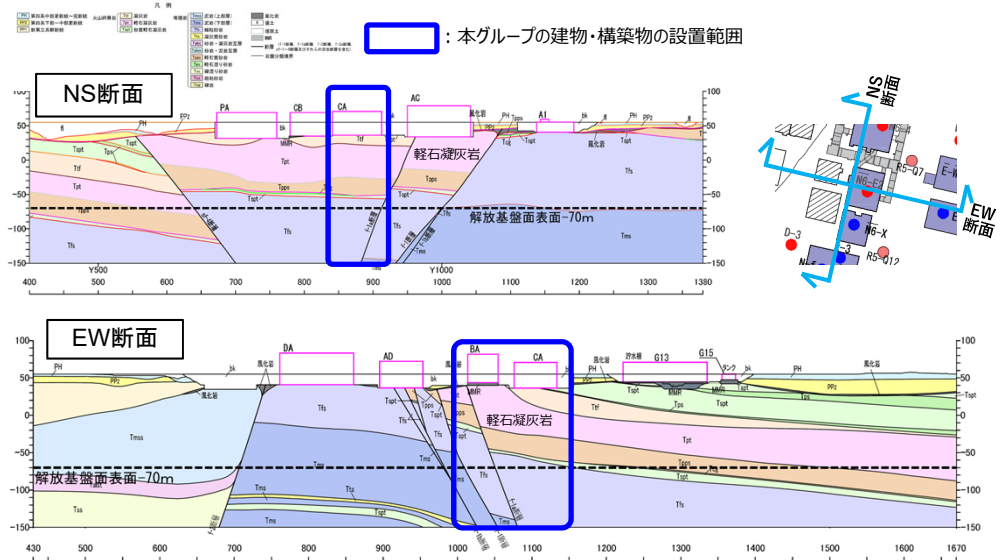
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.9 CAグループのデータ整理

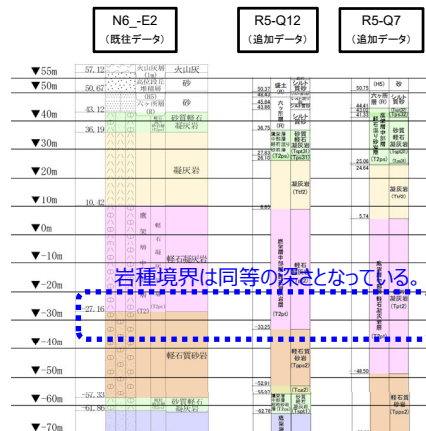
■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層（a.-①、a.-②）

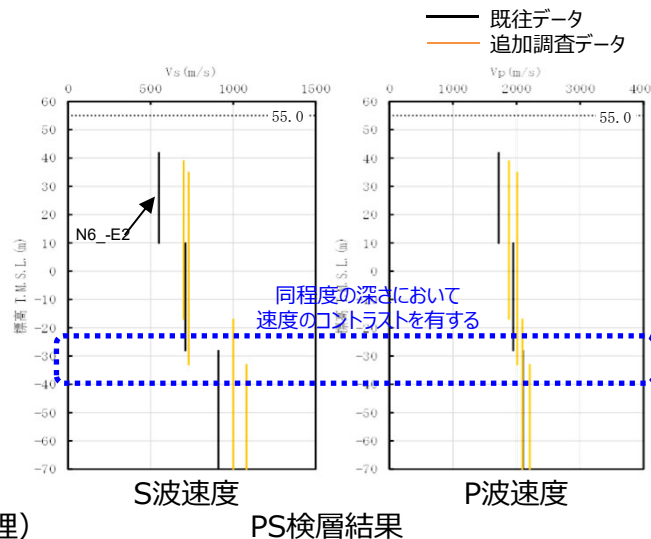
- ▶ 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層中部層の凝灰岩、軽石凝灰岩、軽石質砂岩、鷹架層下部層の細粒砂岩が主に分布していることを確認した。
- ▶ BA直下においては、断層により岩種境界の深さに差が生じているものの、断層による地盤応答への影響は小さいことを確認した。
- ▶ PS検層（● + ● + ●）のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
 - N6_-E2孔及びR5-Q12孔については、凝灰岩と軽石凝灰岩及び軽石凝灰岩と軽石質砂岩の岩種境界の深さが同等となっていることを確認。
 - R5-Q12孔の凝灰岩はN6_-E2孔と比べ薄いものの、凝灰岩においては速度のコントラストは無いことを確認。
 - R5-Q7孔については、N6_-E2孔と比較し、軽石凝灰岩が厚く分布しているものの、同程度の深さにおいて速度のコントラストを有することを確認。
 - N6_-E2孔については、T.M.S.L.10mよりも浅部において、他の孔と比較してS波速度が小さいデータが得られているが、他の孔位置との地下構造の差は無いことから、同種の岩盤における速度構造として扱うことに問題は無いと判断した。
- ▶ 以上のことから、本グループにおけるPS検層データについては、同じ地下構造であると判断できることから、平均化した物性値として整理する。



岩盤分類図



地質柱状図の比較（グループ内の東西方向の順に整理）



PS検層結果

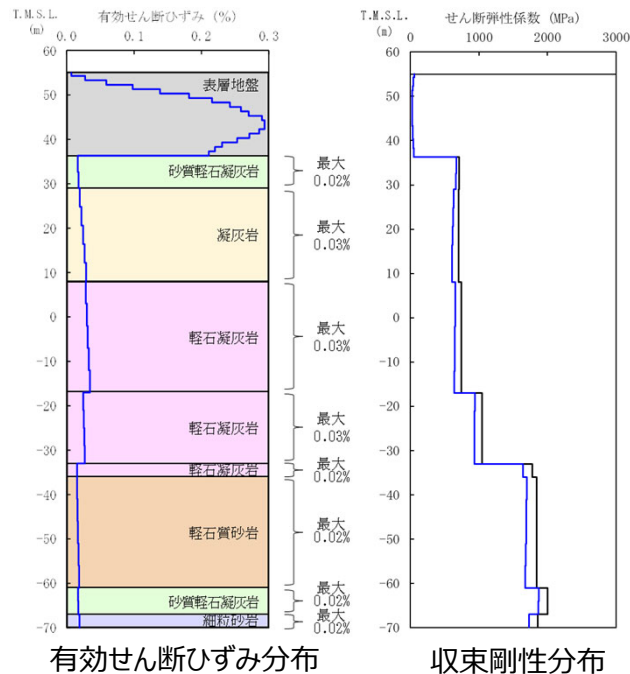
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.9 CAグループのデータ整理

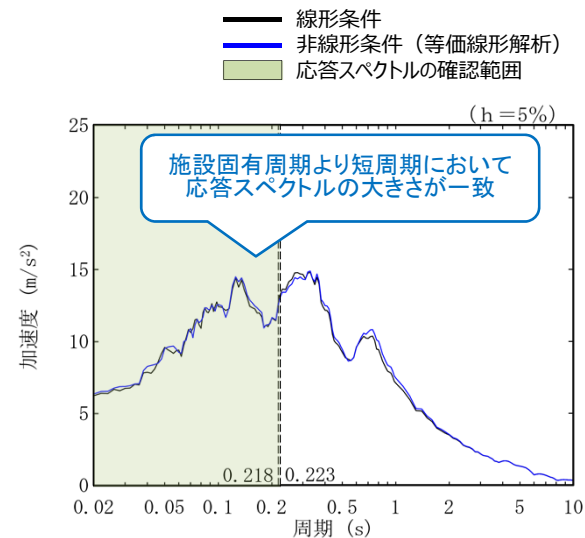
■ B.岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、施設固有周期より短周期において応答スペクトルの大きさが一致することから、岩盤部分の非線形性が、入力地震動の算定結果に及ぼす影響は小さい。



地盤の等価線形解析結果（CA建屋）



線形条件及び非線形条件における基礎底面レベルの入力地震動の比較（CA建屋）

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.9 CAグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ $10^{-2}\%$ 以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- CAグループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

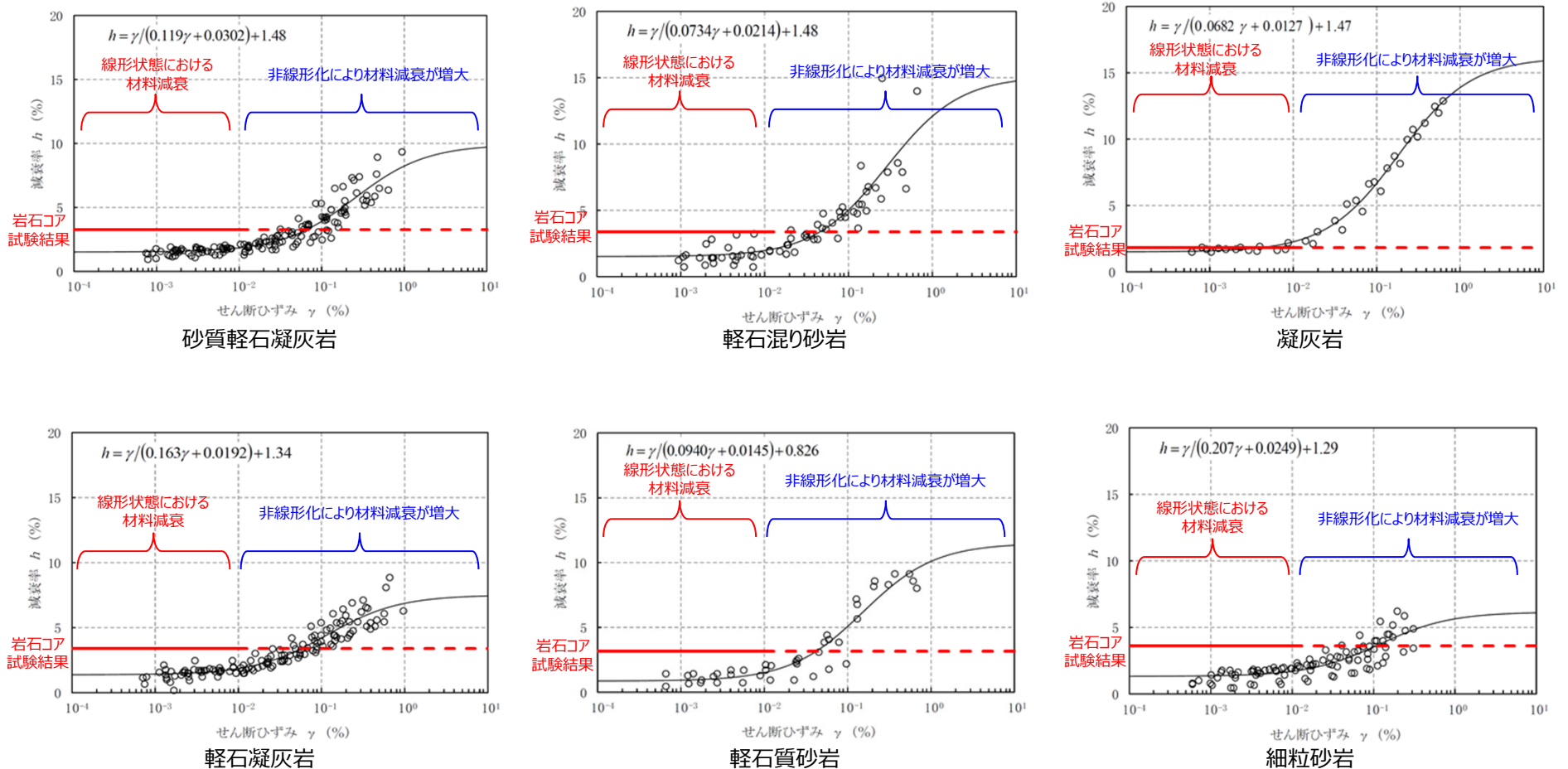
- CAグループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値に対して同等または上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.9 CAグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験／C-2：岩石コア試験



岩盤部分のひずみ依存特性（ h - γ 曲線）及び岩石コア試験結果

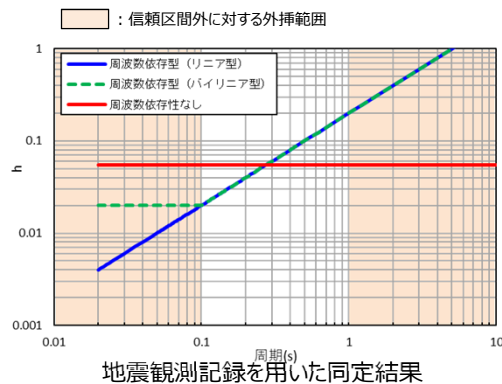
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.9 CAグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

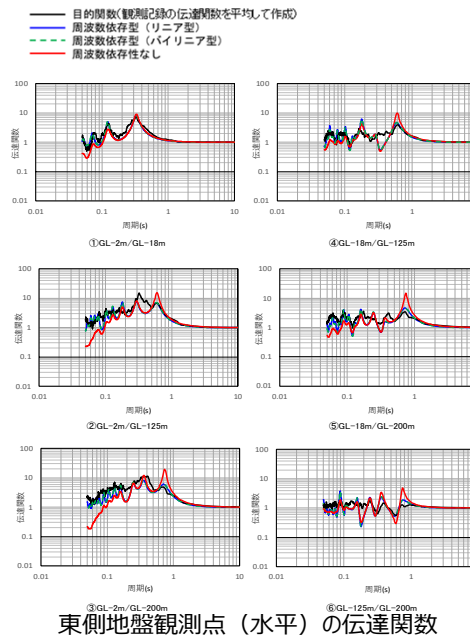
● C-3：地震観測記録を用いた同定

- CAグループでは、東側地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s～1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。



注1：地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2：佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象外としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。



東側地盤観測点（水平）の伝達関数

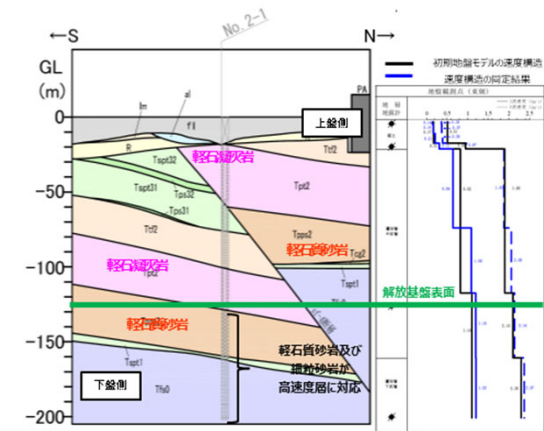
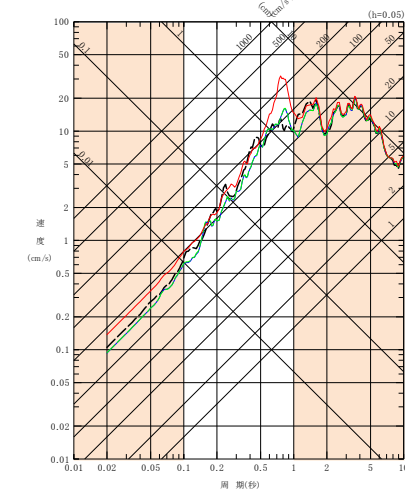


図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果

: 信頼区間外に対する外挿範囲
— 建屋基礎底面相当レベル (GL-18m) における観測記録
— 周波数依存型 (リニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
— 周波数依存型 (バイリニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
— 周波数依存性なしの減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答



(2011年3月11日14:46 (M9.0) EW成分の例)

地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

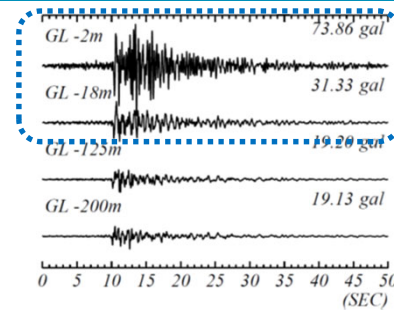
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.9 CAグループのデータ整理

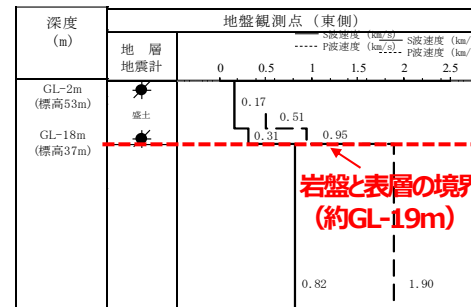
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-4 : 地震波干渉法

- CAグループでは、東側地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法の適用性を検討。
- 東側地盤においては、地震波の重複反射による影響が大きく、表層地盤における地盤応答が複雑な傾向となっている。
- 表層地盤における波形が、単純な入射と反射の現象とは異なる傾向を示す場合には、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討はできないと判断した。



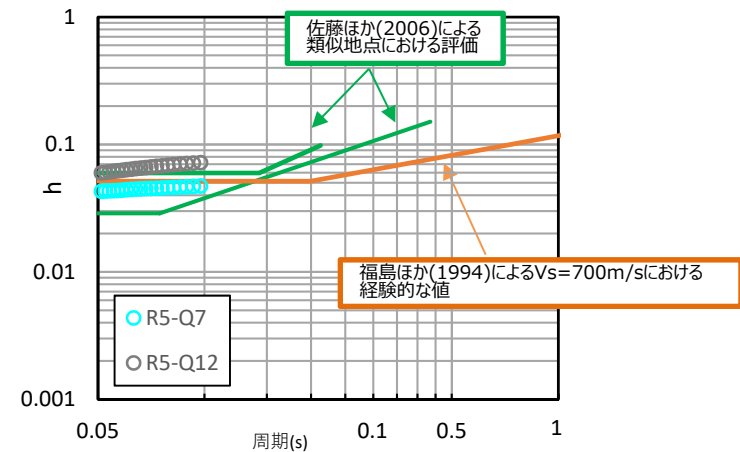
東側地盤
 → 地表付近で後続波が現れ、時刻歴波形の形状が深部と異なる



表層地盤の層厚が中央地盤と比較して大きく、岩盤部分との速度構造のコントラストが大きい
 → 表層地盤中の重複反射による影響が大きい

● C-5 : S波検層

- CAグループでは、R5-Q7孔及びR5-Q12孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、G14グループのS波検層データは、複数データで同様の傾向となっており、傾きは小さいものの、高振動数側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越している傾向。
- CAグループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



東側地盤

エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

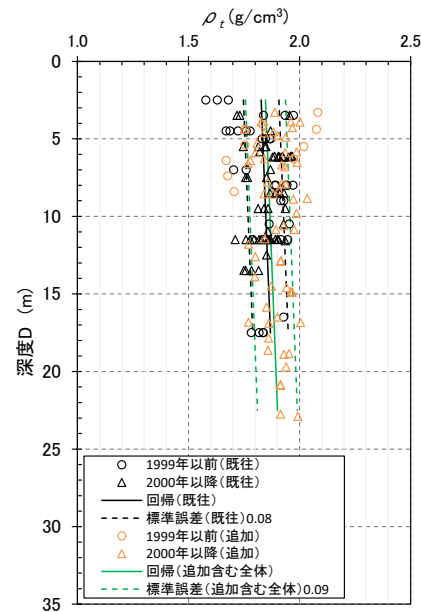
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

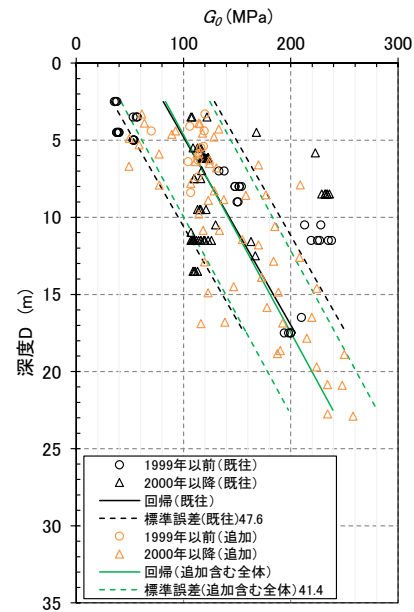
4.9 CAグループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- CAグループの表層地盤は埋戻し土であり、埋戻し土は土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理できる。



図a 湿潤密度 ρ_t 分布図



図b 動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.9 CAグループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

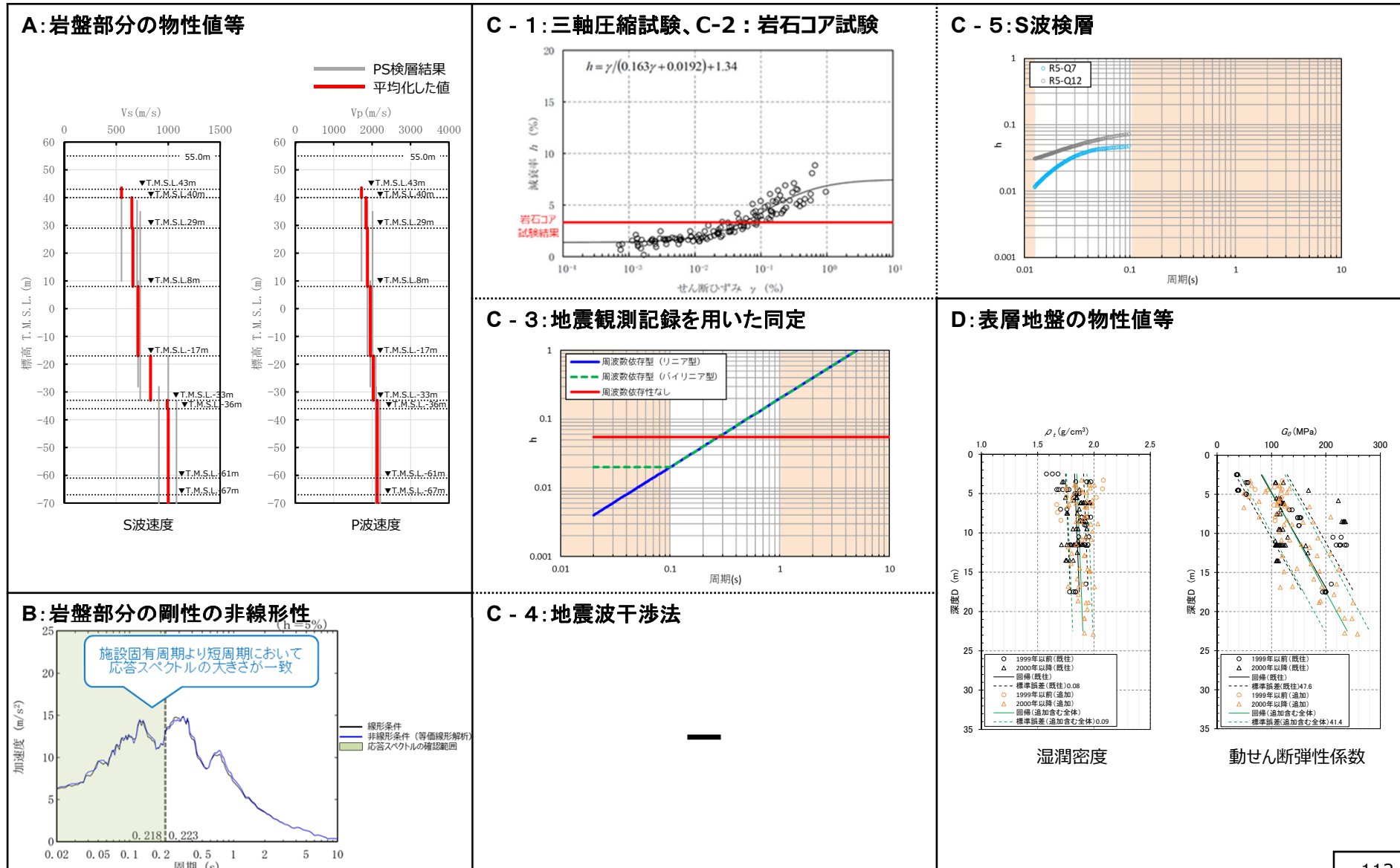
設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G_0 - γ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造におけるデータであると判断できることから、データを平均化した物性値として整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して入力地震動の算定結果に影響しない程度の非線形性となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値に対して同等または上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 地盤中の重複反射の影響により、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討は出来ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土が分布しており、施工年代別に剛性の深度依存性の傾向を踏まえて土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理。

基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.9 CAグループのデータ整理

■ 整理結果のとりまとめ

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲



4. データの整理

4.10 CBグループ

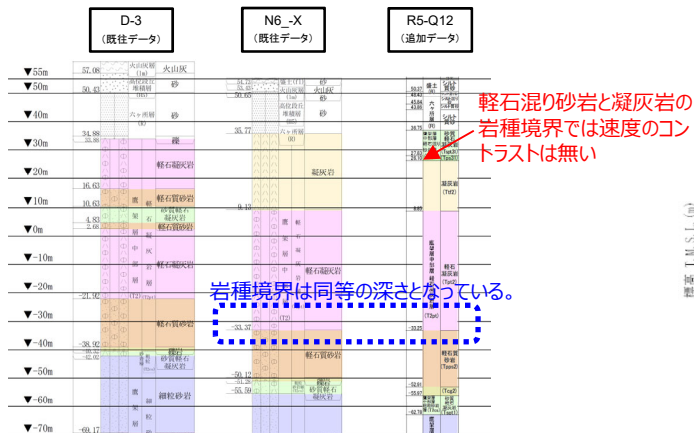
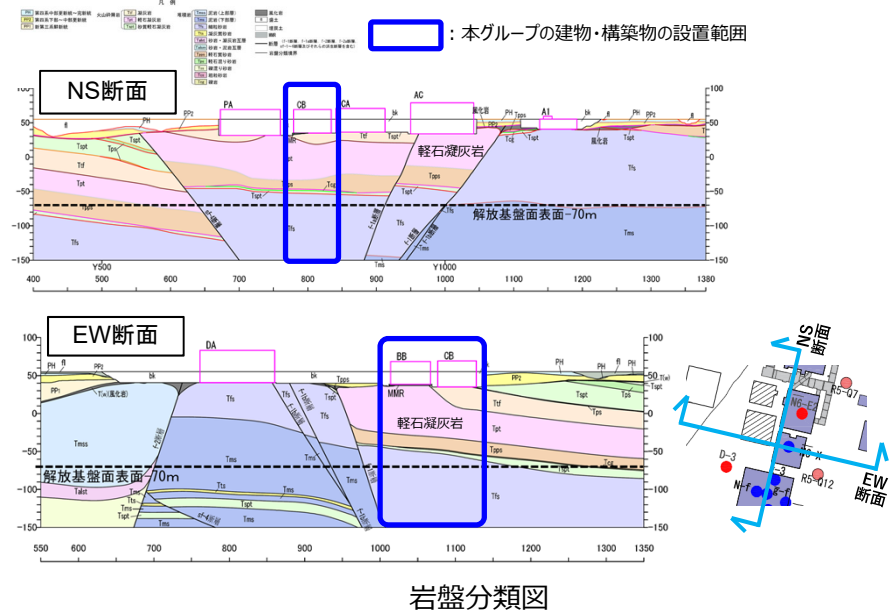
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.10 CBグループのデータ整理

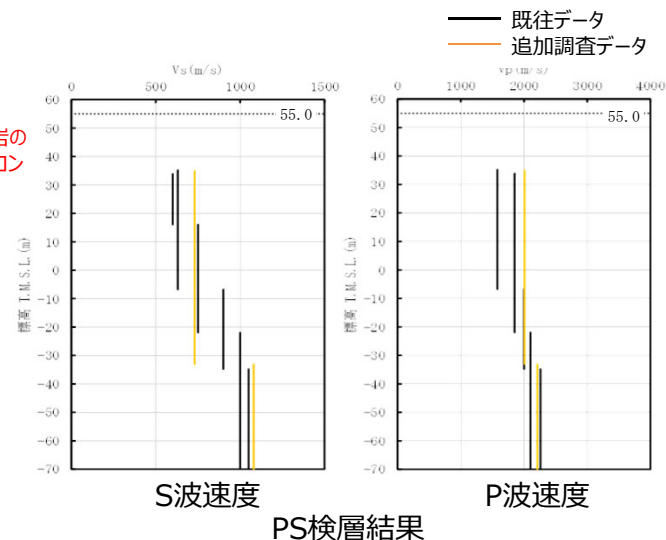
■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層 (a.-①、a.-②)

- 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層中部層の凝灰岩、軽石凝灰岩、軽石質砂岩、鷹架層下部層の細粒砂岩が主に分布していることを確認した。
- 本グループの建物・構築物直下においては、岩種の分布に差を与えるような断層は見られない。
- PS検層 (● + ● + ●) のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
 - N6_-X孔及びR5-Q12孔については、凝灰岩と軽石凝灰岩及び軽石凝灰岩と軽石質砂岩の岩種境界の深さが同等となっていることを確認。
 - D-3孔については、N6_-X孔と同様に軽石凝灰岩と軽石質砂岩の岩種境界に速度のコントラストを有することを確認。
 - R5-Q12孔の凝灰岩はN6_-X孔と比べ薄いものの、凝灰岩においては速度のコントラストは無いことを確認。
 - R5-Q12孔の浅部にN6_-X孔に見られない砂質軽石凝灰岩及び軽石混り砂岩が分布しているものの、当該深さにおいて速度のコントラストは無いことを確認。
- 以上のことから、本グループにおけるPS検層データについては、同じ地下構造であると判断できることから、平均化した物性値として整理する。



地質柱状図の比較 (グループ内の東西方向の順に整理)



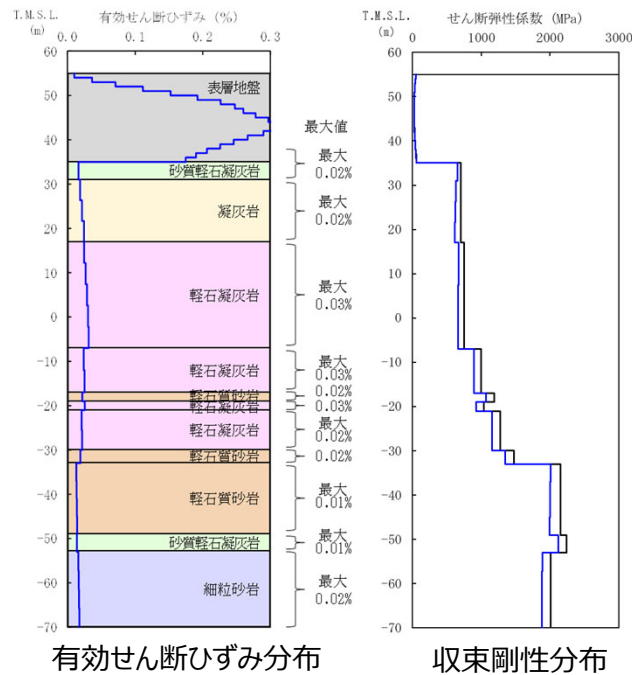
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.10 CBグループのデータ整理

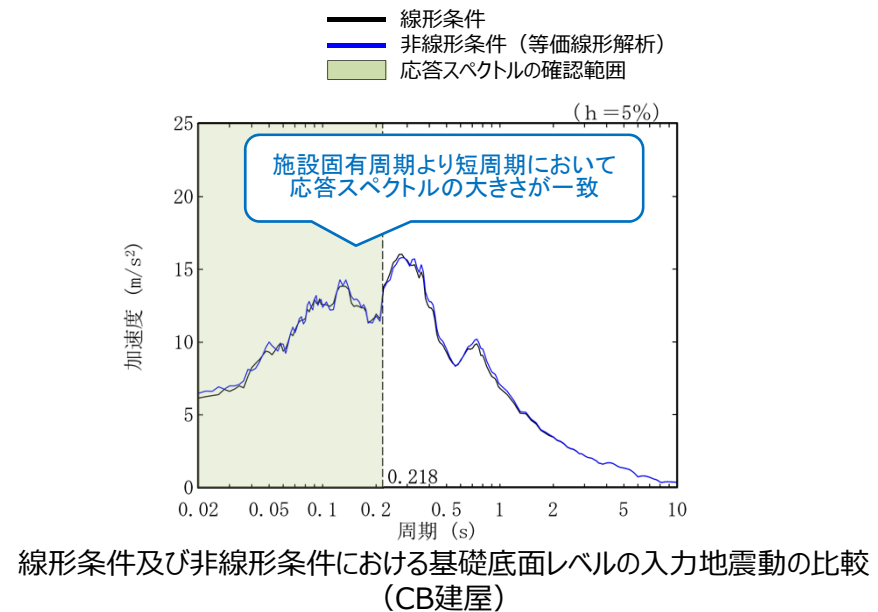
■ B.岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、施設固有周期より短周期において応答スペクトルの大きさが一致することから、岩盤部分の非線形性が、入力地震動の算定結果に及ぼす影響は小さい。



地盤の等価線形解析結果 (CB建屋)



線形条件及び非線形条件における基礎底面レベルの入力地震動の比較 (CB建屋)

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.10 CBグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ $10^{-2}\%$ 以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- CBグループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

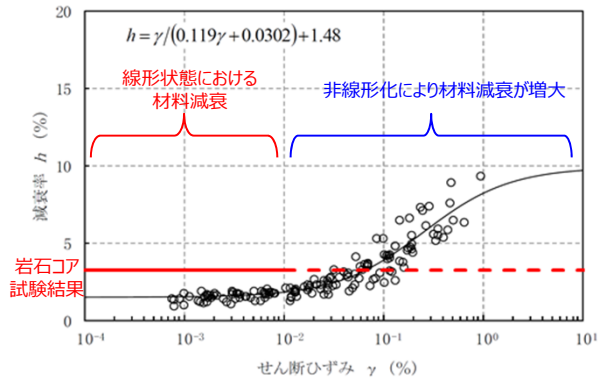
- CBグループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値に対して同等または上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

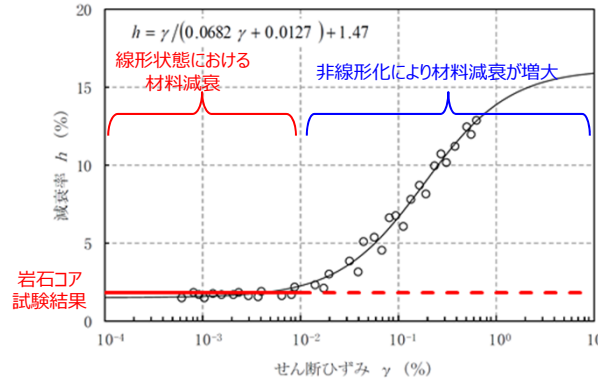
4.10 CBグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

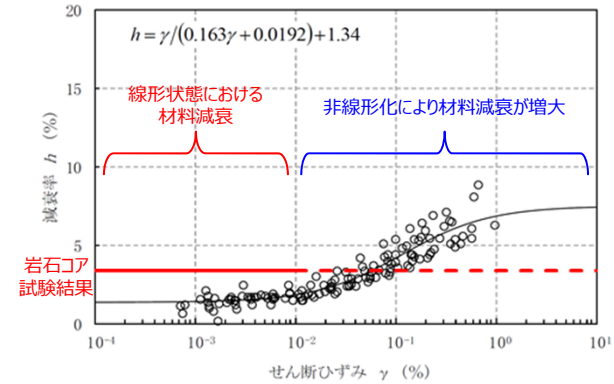
● C-1：三軸圧縮試験／C-2：岩石コア試験



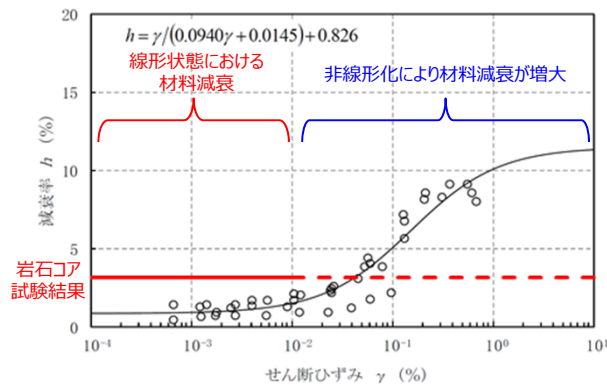
砂質軽石凝灰岩



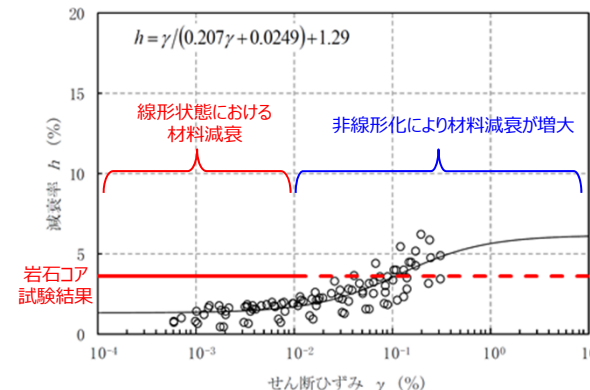
凝灰岩



軽石凝灰岩



軽石質砂岩



細粒砂岩

岩盤部分のひずみ依存特性（h- γ 曲線）及び岩石コア試験結果

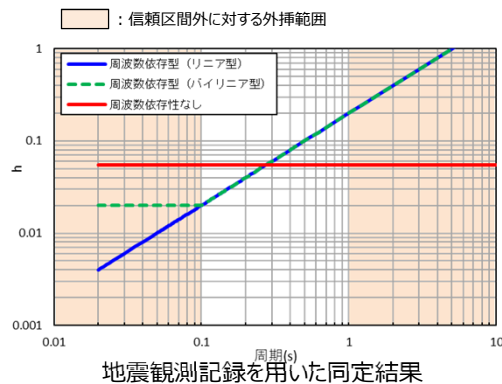
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.10 CBグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

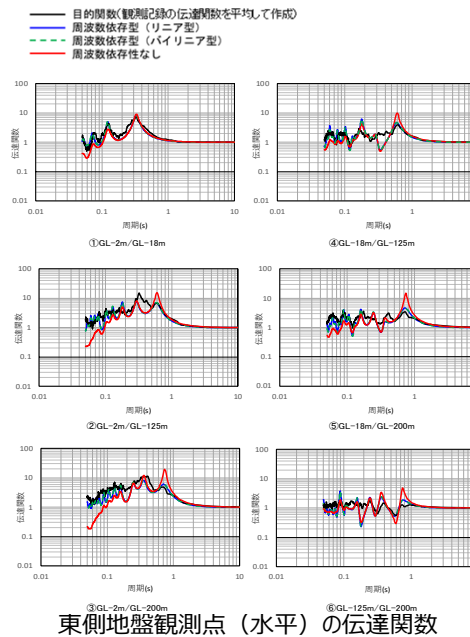
● C-3：地震観測記録を用いた同定

- CBグループでは、東側地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s～1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。



注1：地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2：佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象外としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。



東側地盤観測点（水平）の伝達関数

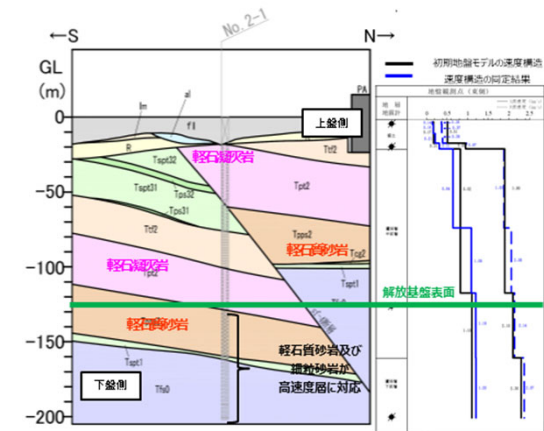
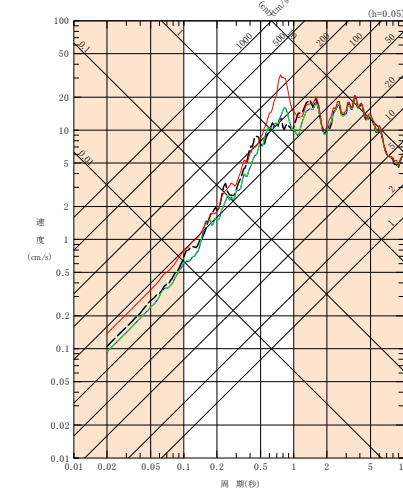


図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果

: 信頼区間外に対する外挿範囲
— 建屋基礎底面相当レベル（GL-18m）における観測記録
— 周波数依存型（リニア型）の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
— 周波数依存型（バイリニア型）の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
— 周波数依存性なしの減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答



(2011年3月11日14:46 (M9.0) EW成分の例)
地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

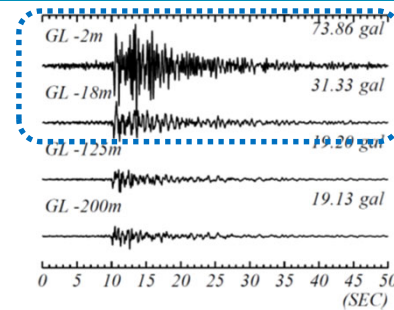
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.10 CBグループのデータ整理

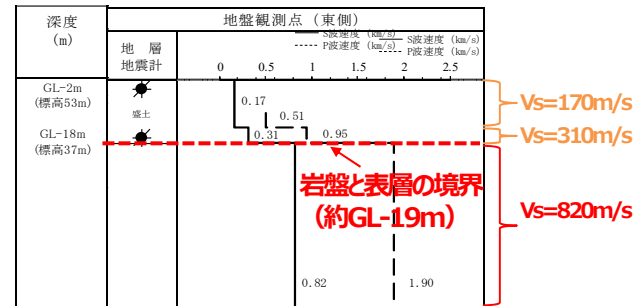
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-4 : 地震波干渉法

- CBグループでは、東側地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法の適用性を検討。
- 東側地盤においては、地震波の重複反射による影響が大きく、表層地盤における地盤応答が複雑な傾向となっている。
- 表層地盤における波形が、単純な入射と反射の現象とは異なる傾向を示す場合には、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討はできないと判断した。



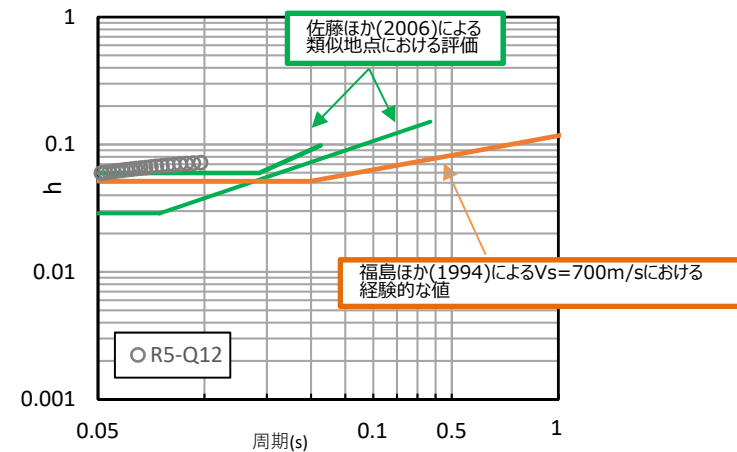
東側地盤
 → 地表付近で後続波が現れ、時刻歴波形の形状が深部と異なる



表層地盤の層厚が中央地盤と比較して大きく、岩盤部分との速度構造のコントラストが大きい
 → 表層地盤中の重複反射による影響が大きい

● C-5 : S波検層

- CBグループでは、R5-Q12孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、CBグループのS波検層データは、傾きは小さいものの、高振動数側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越している傾向。
- CBグループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



東側地盤

エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

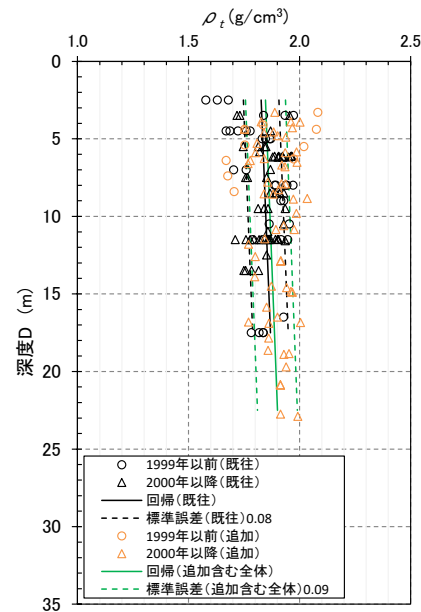
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

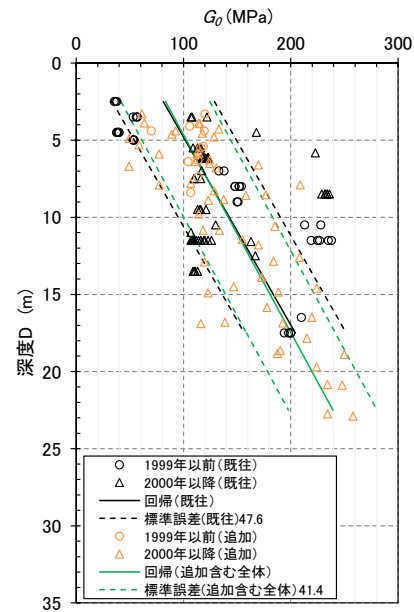
4.10 CBグループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- CBグループの表層地盤は埋戻し土であり、埋戻し土は土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理できる。



図a 湿潤密度 ρ_t 分布図



図b 動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.10 CBグループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G_0 - γ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造におけるデータであると判断できることから、データを平均化した物性値として整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して入力地震動の算定結果に影響しない程度の非線形性となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値に対して同等または上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 地盤中の重複反射の影響により、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討は出来ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土が分布しており、施工年代別に剛性の深度依存性の傾向を踏まえて土質材料として同一の母集団と判断できることから、統一した物性値として深度依存回帰の平均として整理。

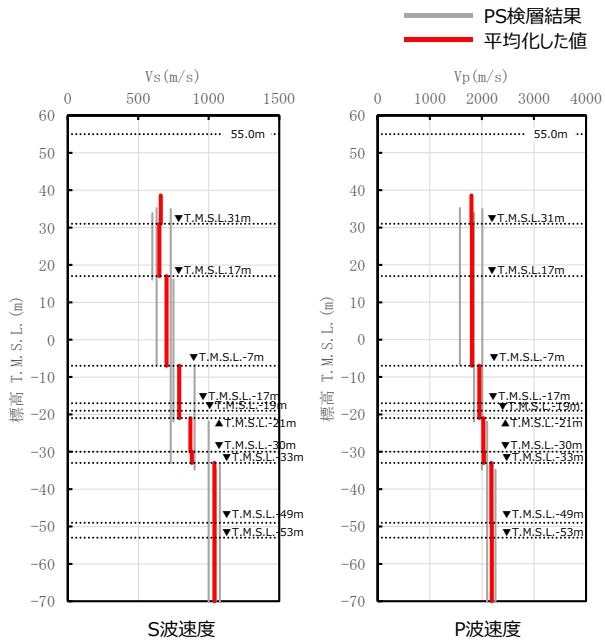
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.10 CBグループのデータ整理

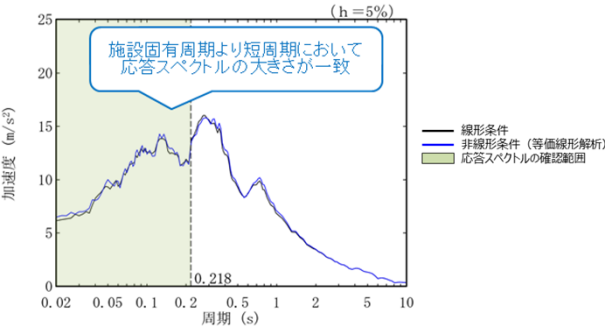
■ 整理結果のとりまとめ

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

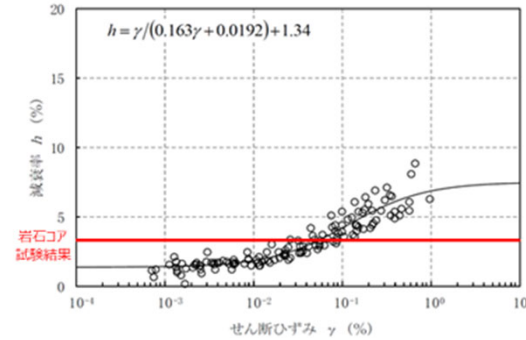
A: 岩盤部分の物性値等



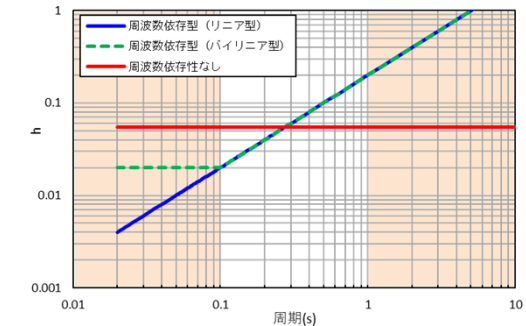
B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



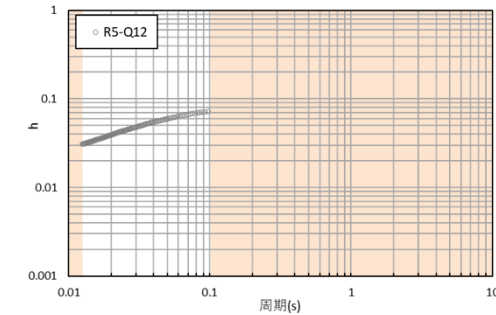
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



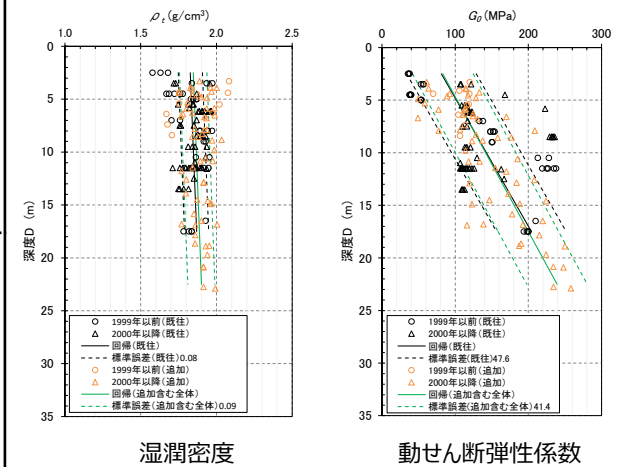
C - 4: 地震波干渉法

—

C - 5: S波検層



D: 表層地盤の物性値等



4. データの整理

4.11 AZ周辺グループ

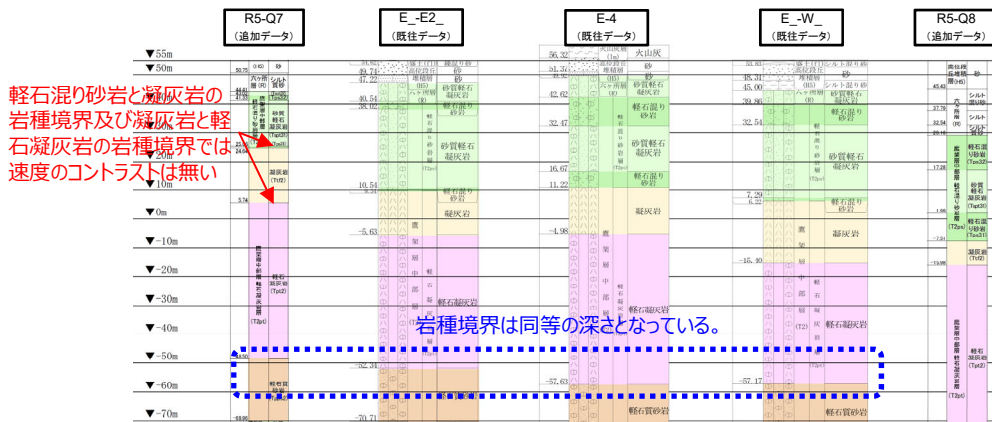
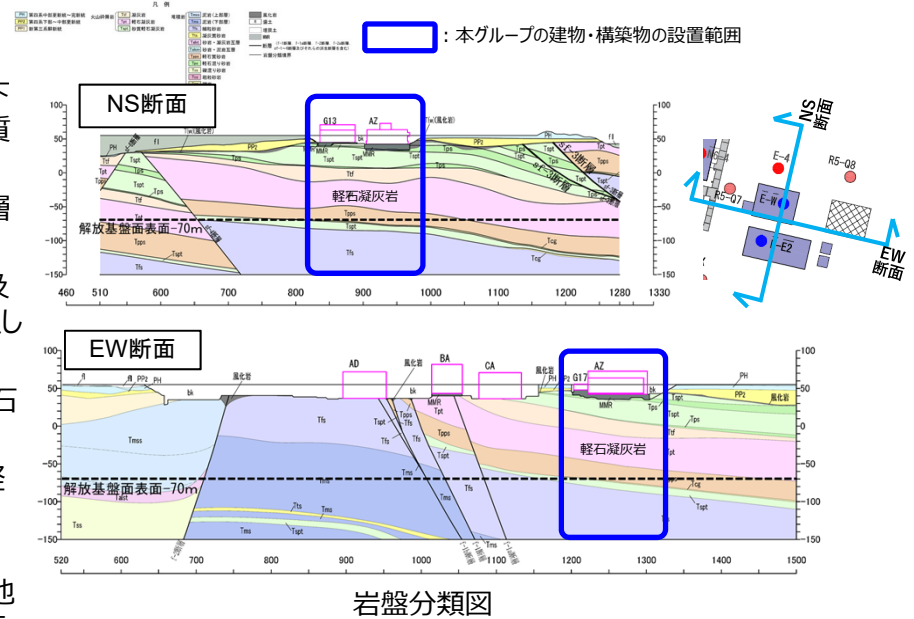
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.11 AZ周辺グループのデータ整理

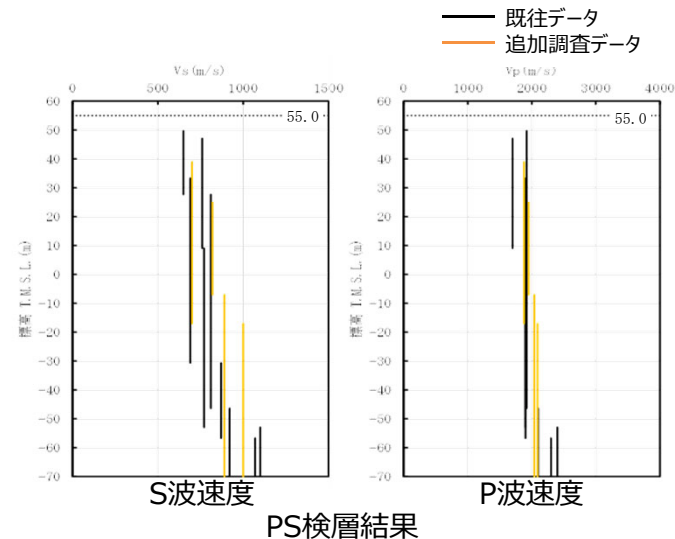
■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層 (a.-①、a.-②)

- 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層中部層の砂質軽石凝灰岩、凝灰岩、軽石凝灰岩、軽石質砂岩が主に分布していることを確認した。
- 本グループの建物・構築物直下においては、岩種の分布に差を与えるような断層は見られない。
- PS検層 (● + ● + ●) のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
 - E-W_孔、E-E2_孔、E-4孔及びR5-Q7孔については、軽石凝灰岩と軽石質砂岩の岩種境界の深さが同等となっていることを確認。
 - R5-Q7孔については、他地点と比べ、砂質軽石凝灰岩が薄く、凝灰岩及び軽石凝灰岩の岩種境界が浅いものの、岩種境界において、速度のコントラストは無いことを確認。
 - R5-Q8孔については、軽石凝灰岩が他地点と比べ厚くなっているものの、その他地点の軽石凝灰岩の速度 ($V_s=770\sim 1000\text{m/s}$) と比較し、同等の速度となっている。
- 以上のことから、本グループにおけるPS検層データについては、同じ地下構造であると判断できることから、平均化した物性値として整理する。



地質柱状図の比較 (グループ内の東西方向の順に整理)



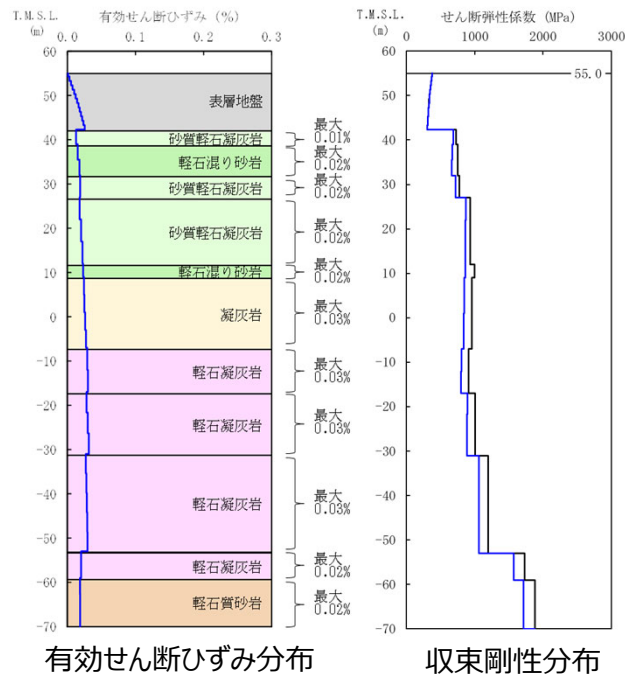
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.11 AZ周辺グループのデータ整理

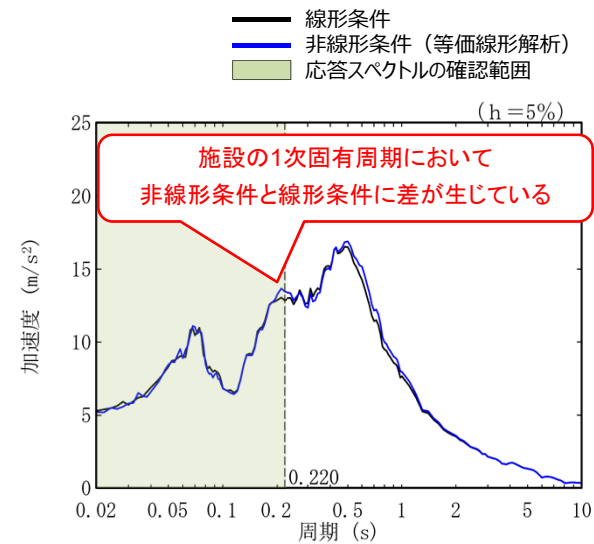
■ B.岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、AZ周辺については、施設の1次固有周期において、非線形条件と線形条件の応答スペクトルに差が生じていることを確認。



地盤の等価線形解析結果（AZ建屋）



線形条件及び非線形条件における基礎底面レベルの入力地震動の比較（AZ建屋）

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.11 AZグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ $10^{-2}\%$ 以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- AZグループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

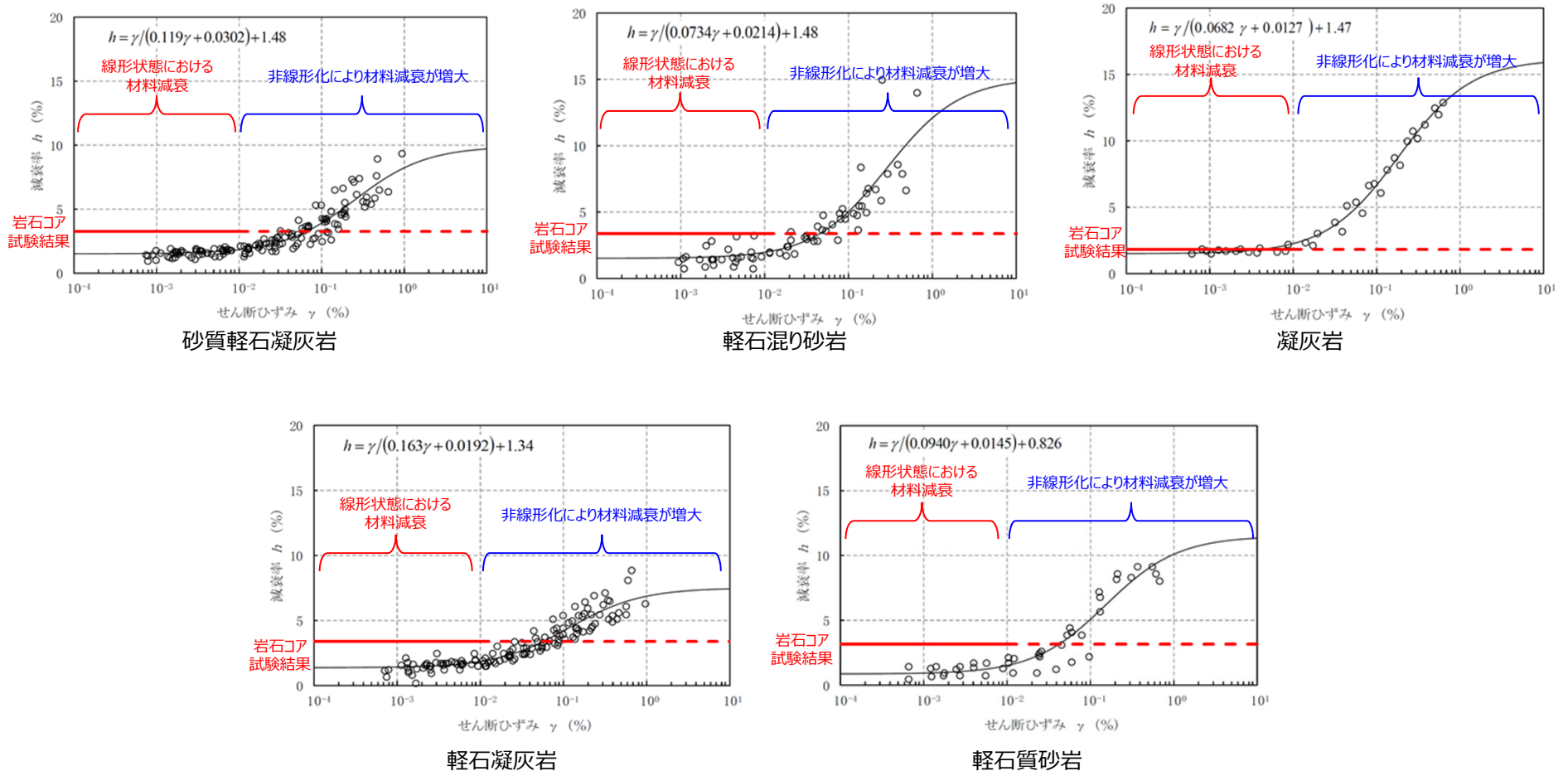
- AZグループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値に対して同等または上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.11 AZグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験／C-2：岩石コア試験



岩盤部分のひずみ依存特性（h- γ 曲線）及び岩石コア試験結果

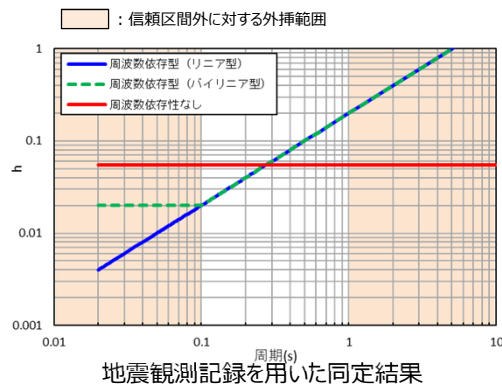
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.11 AZグループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

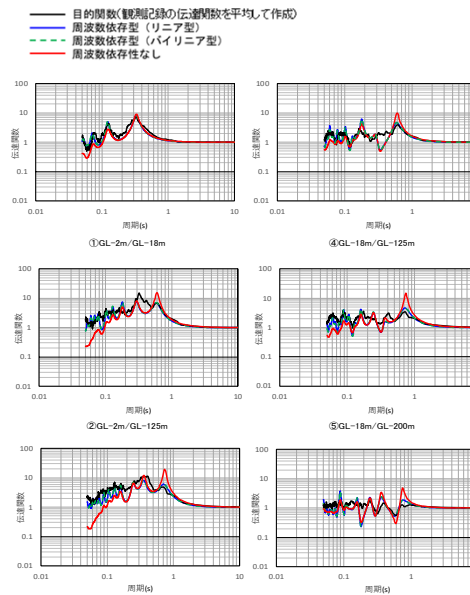
● C-3：地震観測記録を用いた同定

- AZグループでは、東側地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s～1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。



注1：地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2：佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象外としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。



東側地盤観測点（水平）の伝達関数

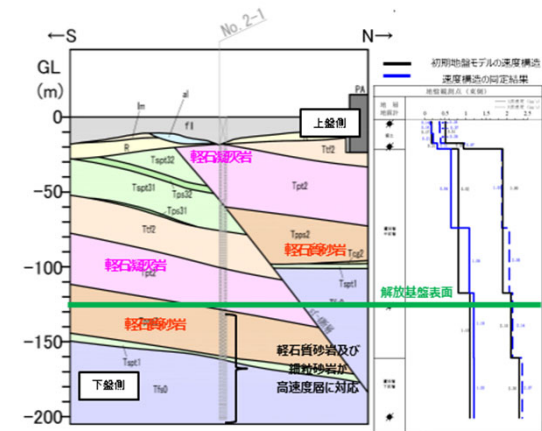
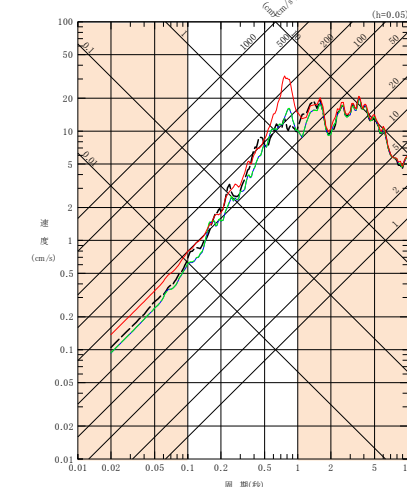


図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果

：信頼区間外に対する外挿範囲

— 建屋基礎底面相当レベル（GL-18m）における観測記録
 - - 周波数依存型（リニア型）の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
 - - 周波数依存型（バイリニア型）の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
 — 周波数依存性なしの減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答



地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

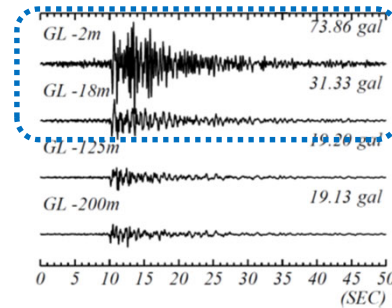
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.11 AZグループのデータ整理

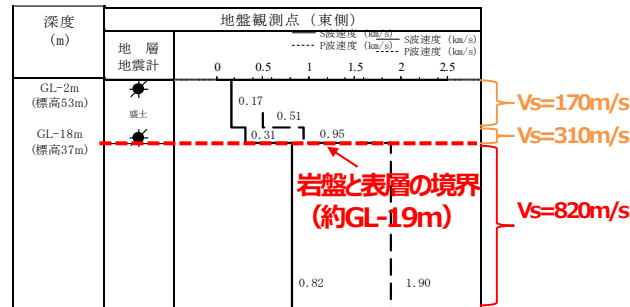
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-4 : 地震波干渉法

- AZグループでは、東側地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法の適用性を検討。
- 東側地盤においては、地震波の重複反射による影響が大きく、表層地盤における地盤応答が複雑な傾向となっている。
- 表層地盤における波形が、単純な入射と反射の現象とは異なる傾向を示す場合には、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討はできないと判断した。



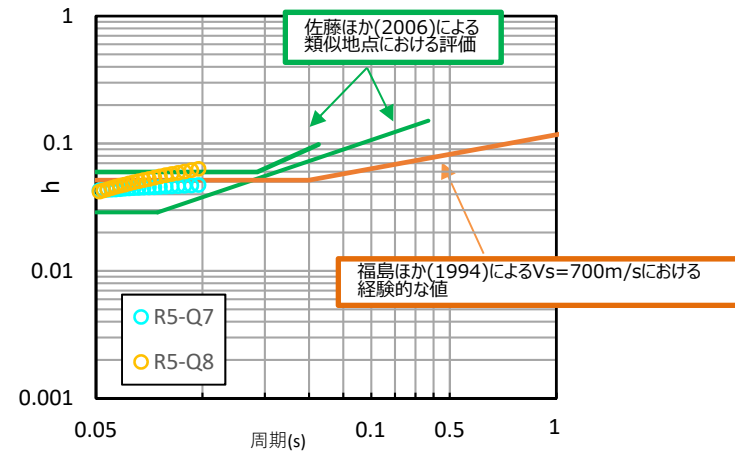
東側地盤
 ➔ 地表付近で後続波が現れ、時刻歴波形の形状が深部と異なる



表層地盤の層厚が中央地盤と比較して大きく、岩盤部分との速度構造のコントラストが大きい
 ➔ 表層地盤中の重複反射による影響が大きい

● C-5 : S波検層

- AZグループでは、R5-Q7孔及びR5-Q8孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、AZグループのS波検層データは、R5-Q7孔における傾きは小さいものの、高振動数側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越している傾向。
- AZグループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



東側地盤

エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

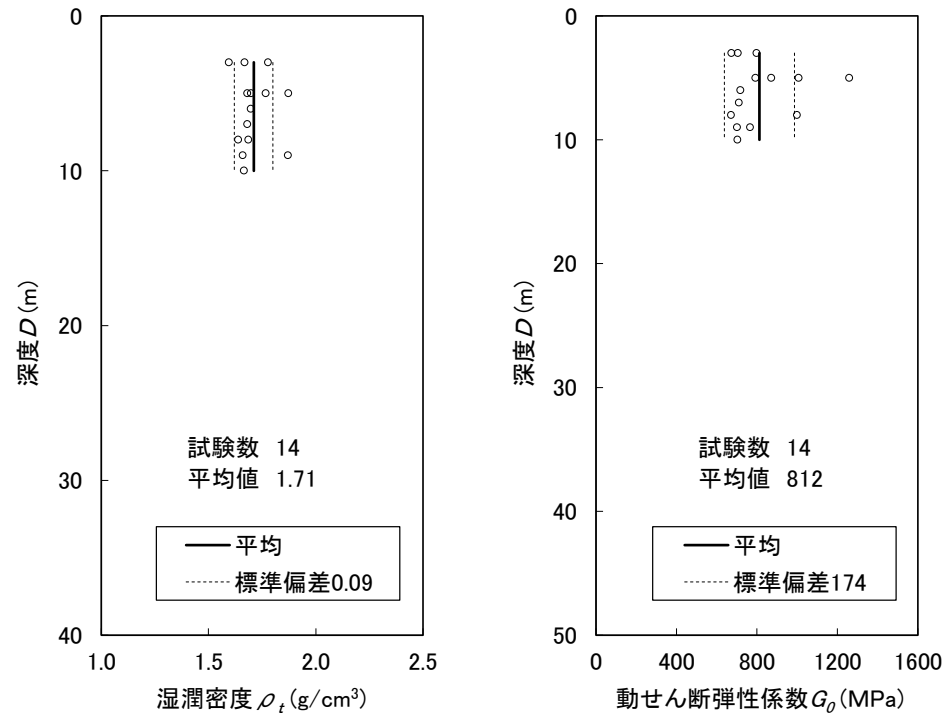
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.11 AZ周辺グループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- AZ周辺グループの表層地盤は流動化処理土（第2グループ）であり、流動化処理土はセメント添加による人工材料であるため、一般的に土質材料のような深度依存（拘束圧依存）はないものと考えられることから、深度依存のない平均物性値として整理できる。



第2グループの湿潤密度 ρ_t 及び動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.11 AZ周辺グループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 ($G/G_0-\gamma$ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造におけるデータであると判断できることから、データを平均化した物性値として整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して建物の1次固有周期において差が生じている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値に対して同等または上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 地盤中の重複反射の影響により、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討は出来ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 流動化処理土（第2グループ）が分布しており、流動化処理土はセメント添加による人工材料であるため、一般的に土質材料のような深度依存（拘束圧依存）はないものと考えられることから、深度依存のない平均物性値として整理。

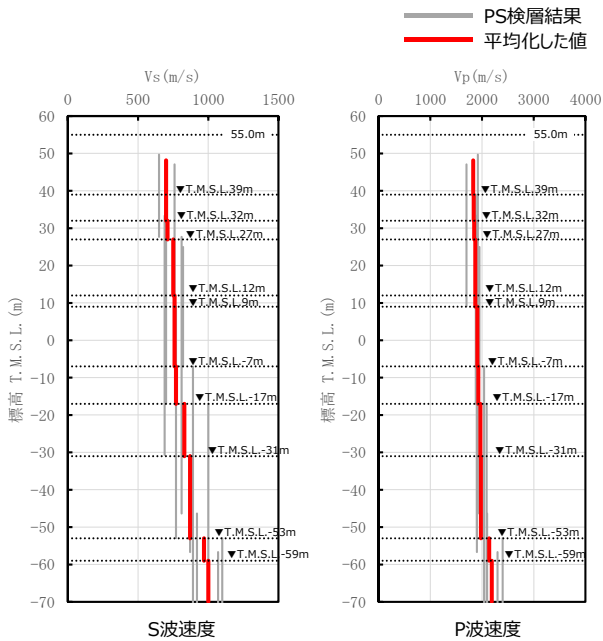
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.11 AZグループのデータ整理

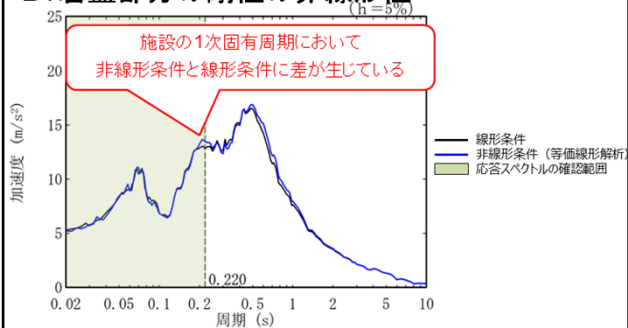
■ 整理結果のとりまとめ

■ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

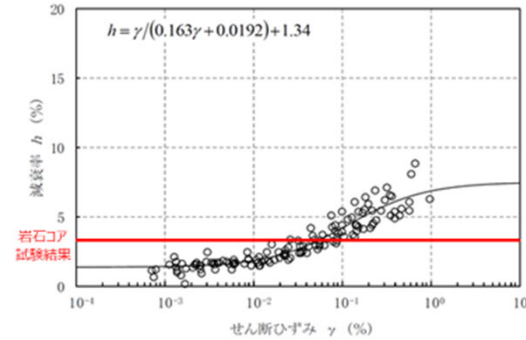
A: 岩盤部分の物性値等



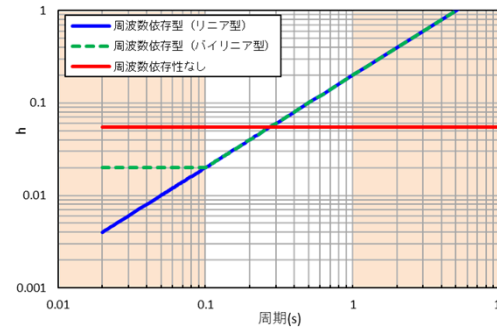
B: 岩盤部分の剛性の非線形性



C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



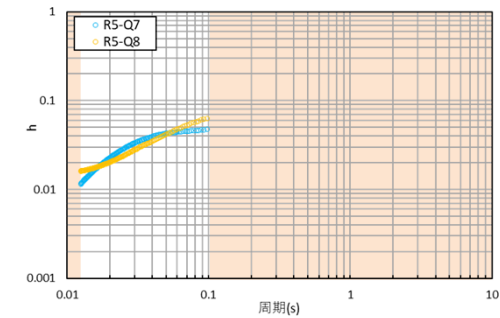
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



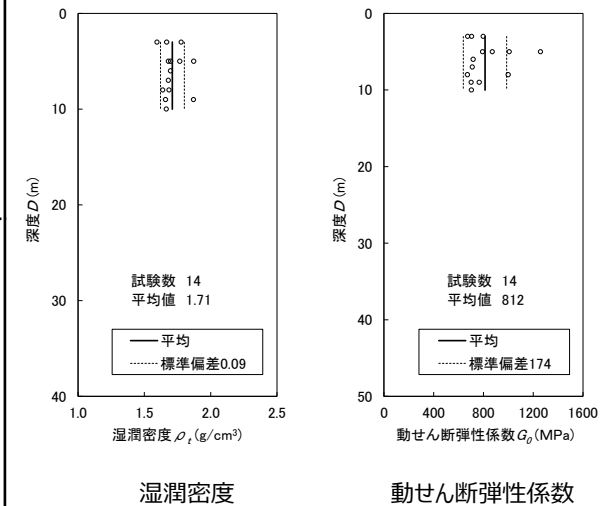
C - 4: 地震波干渉法

—

C - 5: S波検層



D: 表層地盤の物性値等



4. データの整理

4.12 G14グループ

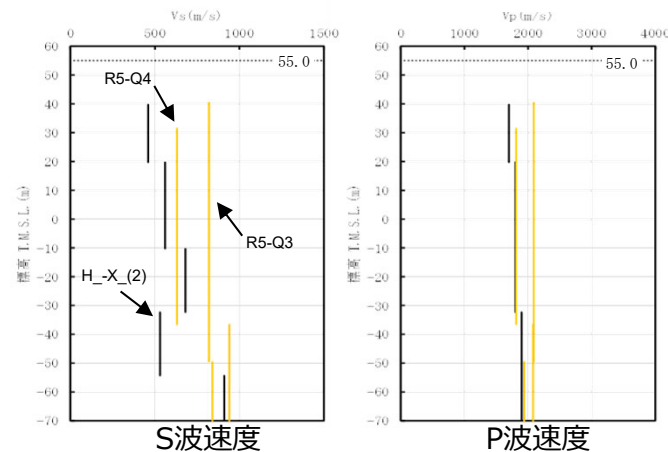
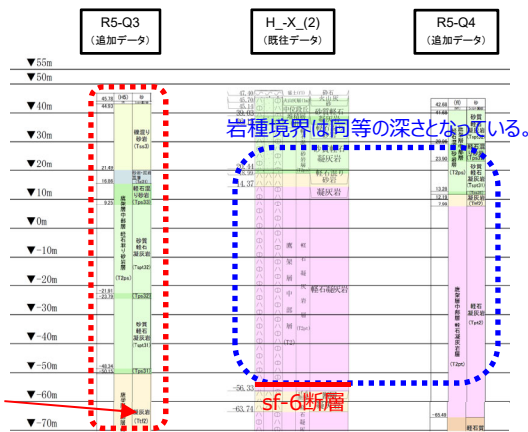
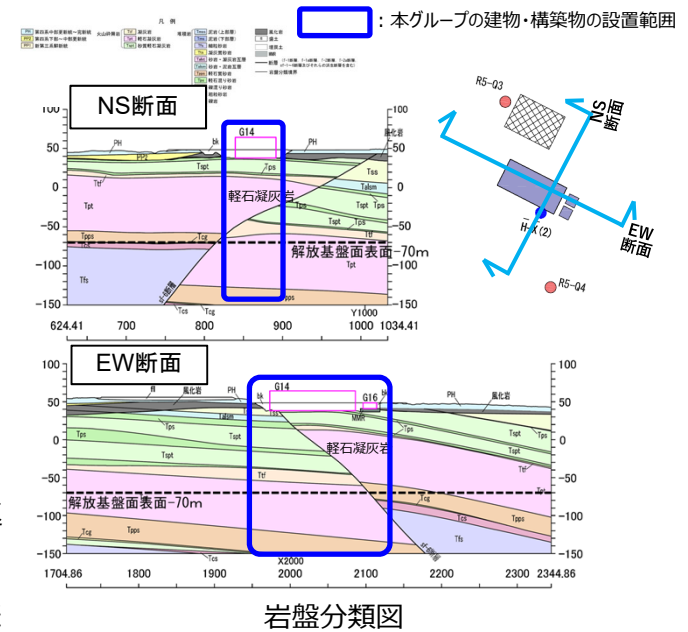
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.12 G14グループのデータ整理

■ A. 岩盤部分の物性値等

● 岩盤部分のPS検層（a.-①、a.-②）

- 岩盤分類図を用いて本グループの地下構造について確認し、建物・構築物直下においては、鷹架層中部層の砂質軽石凝灰岩、軽石凝灰岩が主に分布していることを確認した。
- PS検層（●+●+●）のうち、本グループにおけるPS検層孔の地質柱状図及び速度構造の比較を行い、建物・構築物直下の地下構造の特徴について整理した。
- G14建屋の直下において、sf-6断層が分布し、断層の上盤側と下盤側それぞれにおいて、地質構造が異なる特徴を有している。
 - H_{-X}(2)孔においては、深部においてsf-6断層がみられ、断層の上盤側、下盤側で地質構造の差が生じており、上盤側では軽石凝灰岩が、下盤側では砂質軽石凝灰岩が厚く分布する。
 - R5-Q4については、sf-6断層の上盤側のデータが得られており、H_{-X}(2)孔の上盤側のデータと比較すると、岩種境界の深さは同等となっているが、速度構造の傾向は異なっている。
 - R5-Q3孔については、sf-6断層の下盤側のデータが得られ、H_{-X}(2)孔及びR5-Q4孔とは岩種分布が異なっている。
 - G14の直下孔（H_{-X}(2)孔）のS波速度の値は、断層の上盤側のデータであるR5-Q4孔のS波速度と比較して、T.M.S.L.-30m程度を境に上側では同程度の大きさとなっているが、下側では異なっている。
- 以上のことから、G14グループについては、各ボーリング位置における地質構造及び速度構造の特徴に差が見られ、同じ地下構造となっていないことから、グループ内の各施設個別に物性値を整理する。
- 上記を踏まえ、G14は、建屋直下のH_{-X}(2)孔、G16は断層の上盤側のデータが得られているR5-Q4孔、G36は断層の下盤側のデータが得られているR5-Q3孔に基づく物性値を整理する。



地質柱状図の比較（グループ内の東西方向の順に整理）

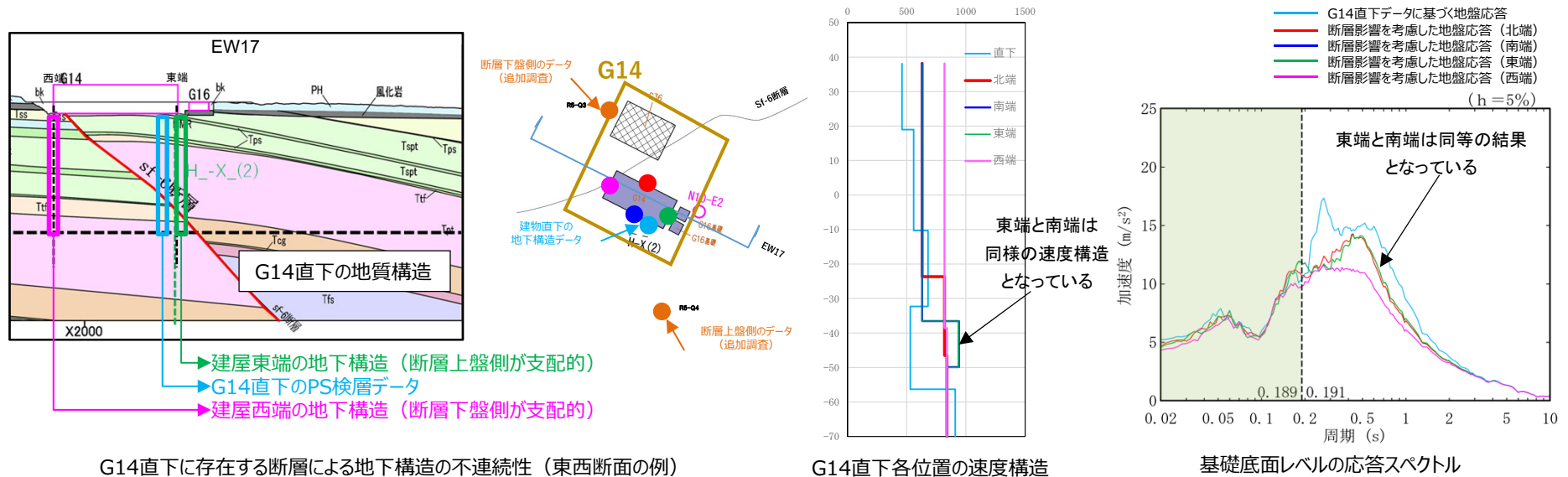
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.12 G14グループのデータ整理

■ A. 岩盤部分の物性値等

● 断層等の影響により、グループ内で地質構造が異なる場合の地盤応答への影響（G14グループ）

- 長周期側では、下盤側の地盤が支配的な構造となっている建屋西端（図中●）よりも、上盤側の地盤が支配的となっている北端（図中●）、南端（図中●）、東端（図中●）のほうが、大きな地盤応答を与え、建屋直下各位置の地盤物性（図中●, ●, ●, ●）に対し、G14直下データに基づく地盤物性（図中●）は、建屋1次固有周期では小さな地盤応答を与え、それよりも短周期では同等となっている。



- 以上の検討結果を踏まえ、G14グループ内の各施設に適用する物性値を以下のとおり整理する。
 - 各ボーリング位置における地質構造及び速度構造の特徴に差が見られ、同じ地下構造となっていないことから、G14グループにおける各施設個別に物性値等の整理を行うこととし、G14は、建屋直下のH-X(2)孔、G16は断層の上盤側のデータが得られているR5-Q4孔、G36は断層の下盤側のデータが得られているR5-Q3孔に基づく物性値を整理する。
 - 施設直下に断層があるG14については、断層が否定できず、直下データに基づく物性値は建屋の1次固有周期で小さな地盤応答を与える可能性がある。この影響については、「基本地盤モデル」設定の段階でその他のパラメータの保守性等も考慮したうえで、建物・構築物直下の断層の影響を考慮した物性値等を設定する。

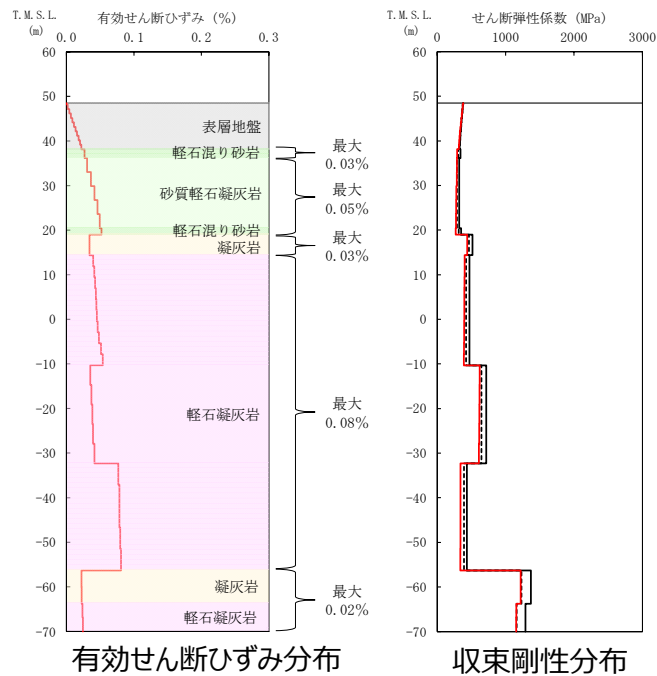
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.12 G14グループのデータ整理

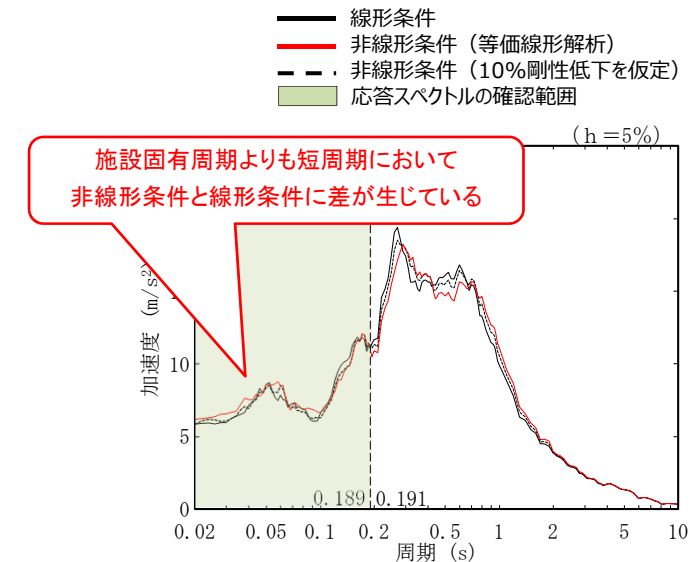
■ B.岩盤部分の剛性の非線形性

● Ss地震時の岩盤部分の非線形レベル及び非線形性が入力地震動に与える影響確認

- 非線形条件とした場合と線形条件とした場合の地盤のせん断ひずみ度及び入力地震動の応答スペクトルを比較した結果、G14については、施設固有周期よりも短周期において、非線形条件と線形条件の応答スペクトルに差が生じていることを確認。



地盤の等価線形解析結果（G14建屋）



線形条件及び非線形条件における基礎底面レベルの入力地震動の比較（G14建屋）

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

前回会合資料に
岩石コア試験結果を追加

4.12 G14グループのデータ整理

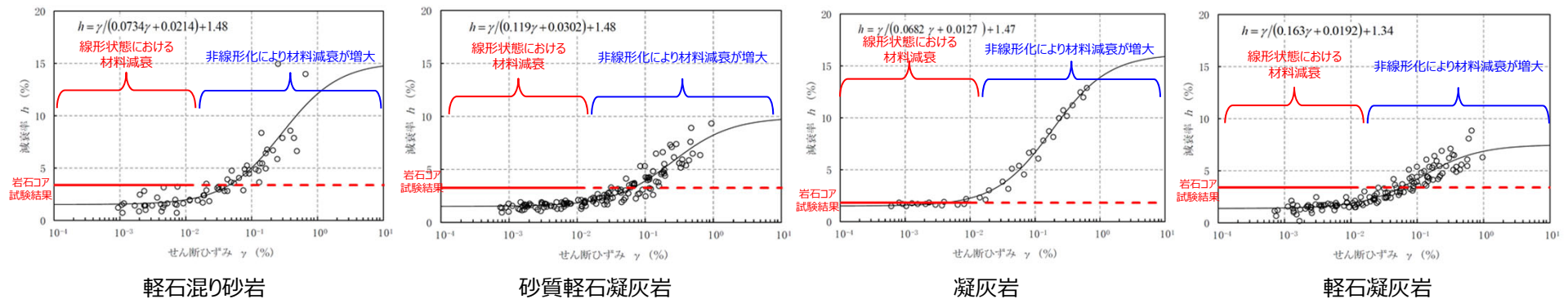
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-1：三軸圧縮試験

- 三軸圧縮試験において元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数（せん断ひずみ10⁻²%以下）における減衰定数の値は、概ね一定に収束している。
- G14グループにて考慮する岩種のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ ）によれば、地盤の材料減衰は、地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。

● C-2：岩石コア試験

- G14グループにて考慮する岩種の岩石コア試験（パルスライズタイム法）に基づく材料減衰は、三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値に対して同等または上回る結果が得られている。
- この傾向は、スペクトル比ほど顕著ではないと考えられるものの、試験におけるリファレンス（アルミ供試体）と岩石コアの透過波の周波数成分の乖離が影響し、減衰を大きく評価したためであると考えられる。



岩盤部分のひずみ依存特性（ $h-\gamma$ 曲線）及び岩石コア試験結果

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.12 G14グループのデータ整理

■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-3：地震観測記録を用いた同定

- G14グループでは、東側地盤観測点の地震観測記録を用いて以下のとおり減衰定数を同定。
- 減衰定数の同定結果の信頼区間は周期0.1s～1sの範囲であるが、その範囲外の周期に外挿した設定を行った上で、地震観測記録を用いたシミュレーション解析を実施。
- シミュレーション解析の結果、周波数依存性あり（リニア型及びバイリニア型）と周波数依存性なしのケースのいずれについても、外挿範囲も含む全周期帯において、シミュレーション解析結果は地震観測記録と概ね同等または上回ることから、減衰定数は適切に同定されている。

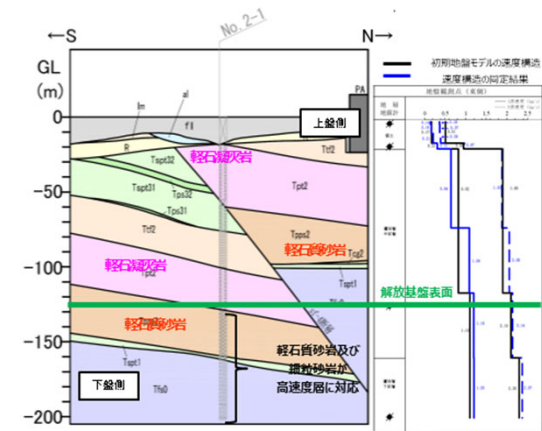
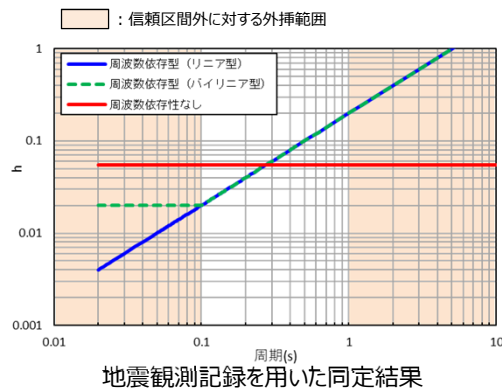


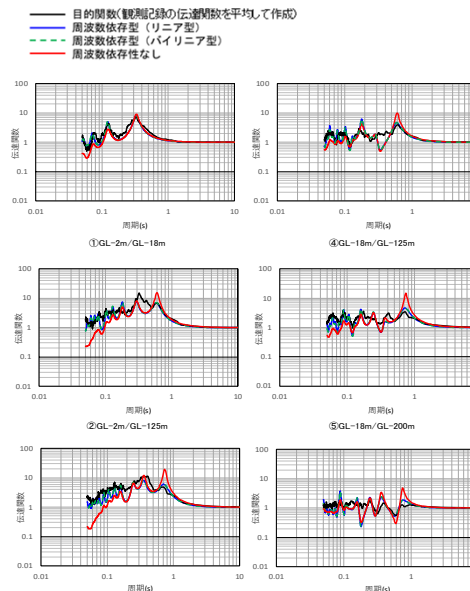
図 地震観測位置の地質断面図及び速度構造・速度境界の同定結果



地震観測記録を用いた同定結果

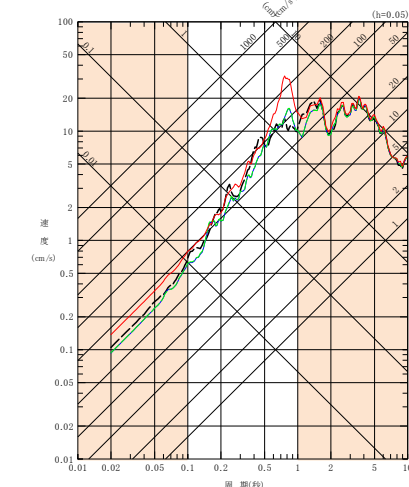
注1: 地震観測記録を用いた同定結果において観測記録との整合性の良い0.1sよりも長周期側が信頼区間となるが、シミュレーション解析を行う上で、0.1sよりも短周期側の減衰定数を設定する必要があるため、0.1sよりも短周期側については、各ケースの評価された減衰定数を外挿して設定。また、シミュレーション解析上は $h=1.0$ で頭打ちとなるよう設定している。

注2: 佐藤ほか(2006)においては周期1s以上の長周期側を解析対象外としているが、シミュレーション解析において長周期側も含んだ応答スペクトルの評価を行うことから、長周期側にも解析対象を拡張している。



東側地盤観測点（水平）の伝達関数

 : 信頼区間外に対する外挿範囲
— : 建屋基礎底面相当レベル (GL-18m) における観測記録
— : 周波数依存型 (リニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
— : 周波数依存型 (バイリニア型) の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
— : 周波数依存性なしの減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答



(2011年3月11日14:46 (M9.0) EW成分の例)

地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果

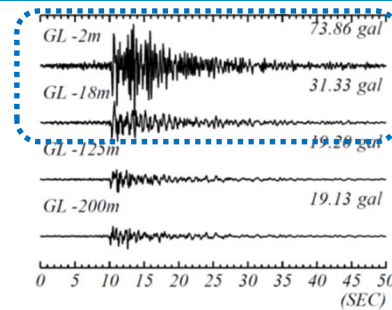
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.12 G14グループのデータ整理

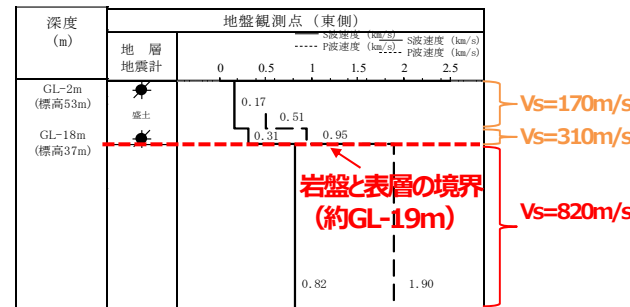
■ C. 岩盤部分の減衰定数

● C-4 : 地震波干渉法

- G14グループでは、東側地盤観測点の地震観測記録を用い、地震波干渉法の適用性を検討。
- 東側地盤においては、地震波の重複反射による影響が大きく、表層地盤における地盤応答が複雑な傾向となっている。
- 表層地盤における波形が、単純な入射と反射の現象とは異なる傾向を示す場合には、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討はできないと判断した。



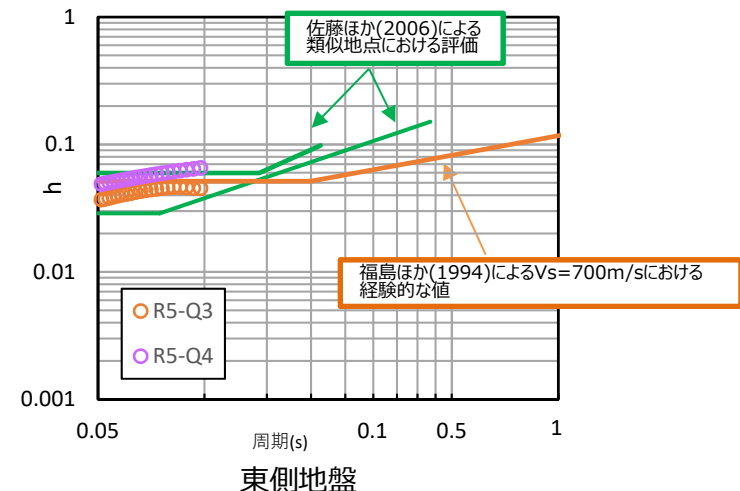
東側地盤
 → 地表付近で後続波が現れ、時刻歴波形の形状が深部と異なる



表層地盤の層厚が中央地盤と比較して大きく、岩盤部分との速度構造のコントラストが大きい
 → 表層地盤中の重複反射による影響が大きい

● C-5 : S波検層

- G14グループでは、R5-Q3孔及びR5-Q4孔におけるS波検層結果を参照。
- 既往知見と比較して、G14グループのS波検層データは、複数データで同様の傾向となっており、傾きは小さいものの、高振動数側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越している傾向。
- G14グループのS波検層データは、敷地と地下構造が類似している地点の減衰定数に係る既往知見における減衰定数の大きさの幅の概ね範囲内にある。



エリア内及びエリア間のS波検層結果の傾向分析結果

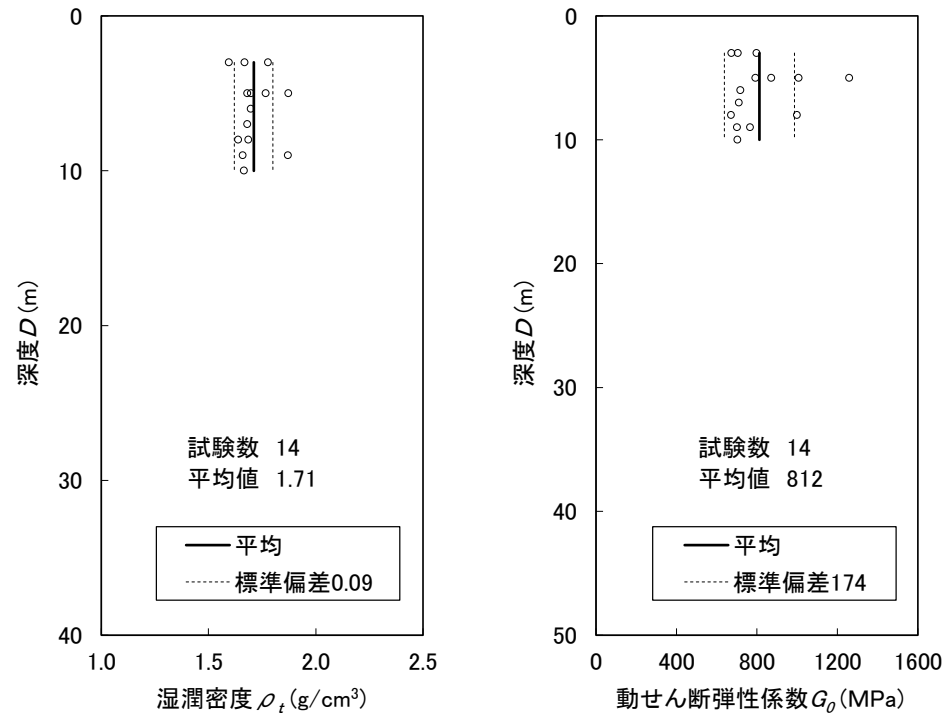
注：本図は佐藤ほか（2006）に示されるデータを目視にて読み取った内容を、当社取得データと重ね書きを行ったもの。

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.12 G14グループのデータ整理

■ D.表層地盤の物性値等

- G14グループの表層地盤は流動化処理土（第2グループ）であり、流動化処理土はセメント添加による人工材料であるため、一般的に土質材料のような深度依存（拘束圧依存）はないものと考えられることから、深度依存のない平均物性値として整理できる。



第2グループの湿潤密度 ρ_t 及び動せん断弾性係数 G_0 分布図

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

4.12 G14グループのデータ整理

■ 整理結果の取りまとめ

➤ 各因子について、着目点ごとに、各データの分析結果を以下にまとめて示す。

設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G_0 - γ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
科学的な着目点	<ul style="list-style-type: none"> 「3.」において整理した本グループに適用するPS検層結果は各地点における同じ地下構造ではないことから、各施設個別に物性値を整理。 	<ul style="list-style-type: none"> Ss地震の振幅レベルにおいても、線形条件と比較して施設固有周期よりも短周期において差が生じている。 	<ul style="list-style-type: none"> 元となっているデータのばらつき幅は小さく、線形状態に対応する減衰定数の値は概ね一定に収束。 地盤のせん断ひずみが大きくなり、非線形化が進行するほど増大する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> 三軸圧縮試験における小ひずみ領域における減衰定数の値に対して同等または上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震観測記録から同定された減衰定数は、いずれの周波数依存性の仮定条件においても、地震観測記録をよく説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 地盤中の重複反射の影響により、安定したデコンボリューション波形の算定が困難であり、本手法による検討は出来ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ごく短周期側まで周波数依存性を有しており、散乱減衰が卓越。 既往知見における類似地点における減衰定数の大きさと整合。 	<ul style="list-style-type: none"> 流動化処理土（第2グループ）が分布しており、流動化処理土はセメント添加による人工材料であるため、一般的に土質材料のような深度依存（拘束圧依存）はないものと考えられることから、深度依存のない平均物性値として整理。

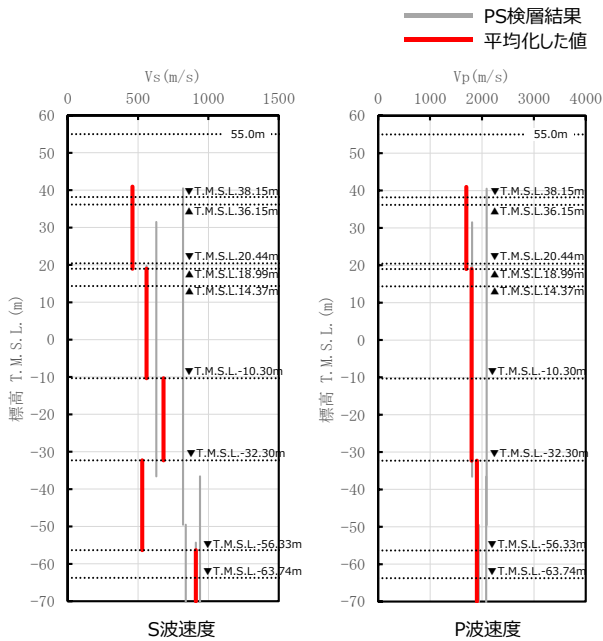
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

4.12 G14グループのデータ整理

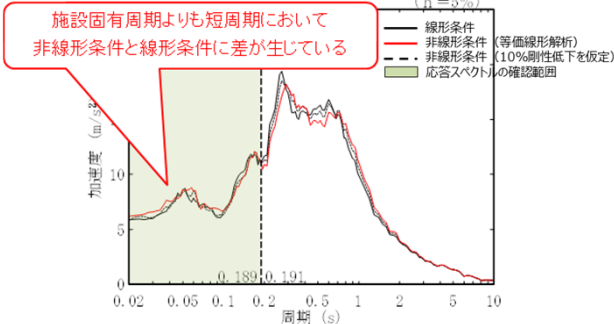
■ 整理結果のとりまとめ

■ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

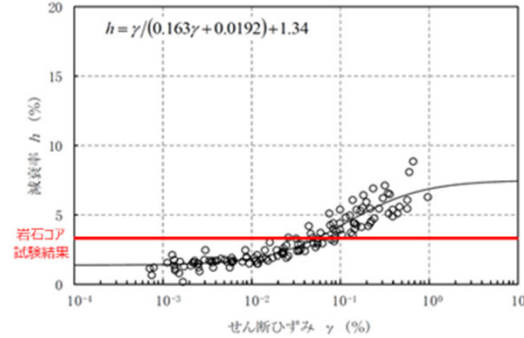
A: 岩盤部分の物性値等



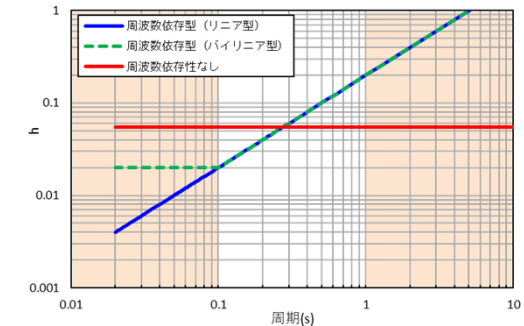
B: 岩盤部分の剛性の非線形性



C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



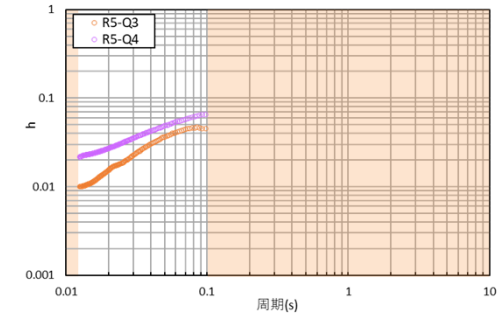
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



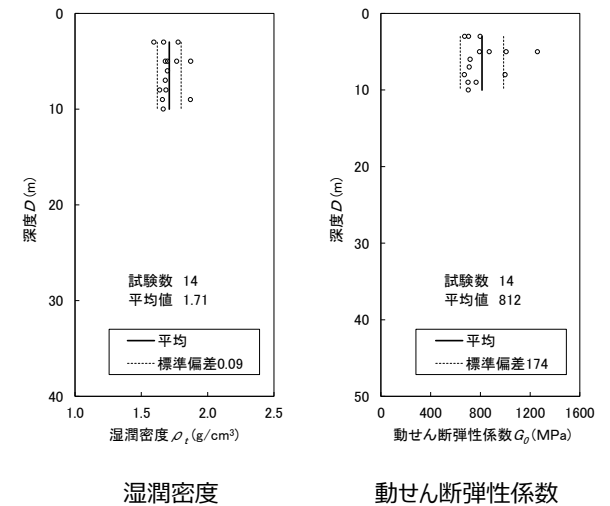
C - 4: 地震波干渉法

—

C - 5: S波検層



D: 表層地盤の物性値等



5. データの再整理

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

5. データの再整理

■各グループにおいて整理されたデータの再整理

- 4.にて整理した各グループにおけるデータの整理結果を踏まえ、ここではグループ間のデータの傾向について確認を実施する。
- 確認にあたっては、各グループにおいて個別にデータを取得している「A.岩盤部分の物性値」及び「C-5：S波検層」について、以下の観点より確認を実施する。
- グループ間のデータの整理においては、再処理施設の敷地の特徴としてf-1断層及びf-2断層を境として地下構造が異なることから、大局的に地質構造が類似している下図に示す3つのエリア（中央、西側、東側）内で、グループ間のデータの比較を行う。
- 上記確認の結果、グループ間で同じ地盤におけるデータであるとみなすことが可能である場合、グループ間で統合したデータを各グループに適用する。これにより、各グループにて参照するデータが増加することになり、各グループにおける地盤の特徴を捉える上での信頼性の向上が期待できる。

設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 ($G/G_0-\gamma$ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
データ再整理の方針	<ul style="list-style-type: none"> 地質構造が類似しているグループ単位でデータを再整理 速度構造の傾向が類似しているグループ単位でデータを再整理 地盤応答の観点の比較分析（地震観測記録との整合性等）により再整理の妥当性を確認 	<ul style="list-style-type: none"> グループ毎ではなく、岩種ごとに整理されているデータとして整理（A.の整理結果に応じて整理） 	同左	同左	<ul style="list-style-type: none"> 中央地盤、西側地盤、東側地盤の地震観測点で整理（「3.」の整理結果と同じ） 	同左	<ul style="list-style-type: none"> 減衰定数及び速度構造の傾向が類似しているグループ単位でデータを再整理 地盤応答の観点の比較分析（地震観測記録との整合性等）により再整理の妥当性を確認 	<ul style="list-style-type: none"> 埋戻し土又は流動化処理土ごとに整理（「3.」の整理結果と同じ）

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

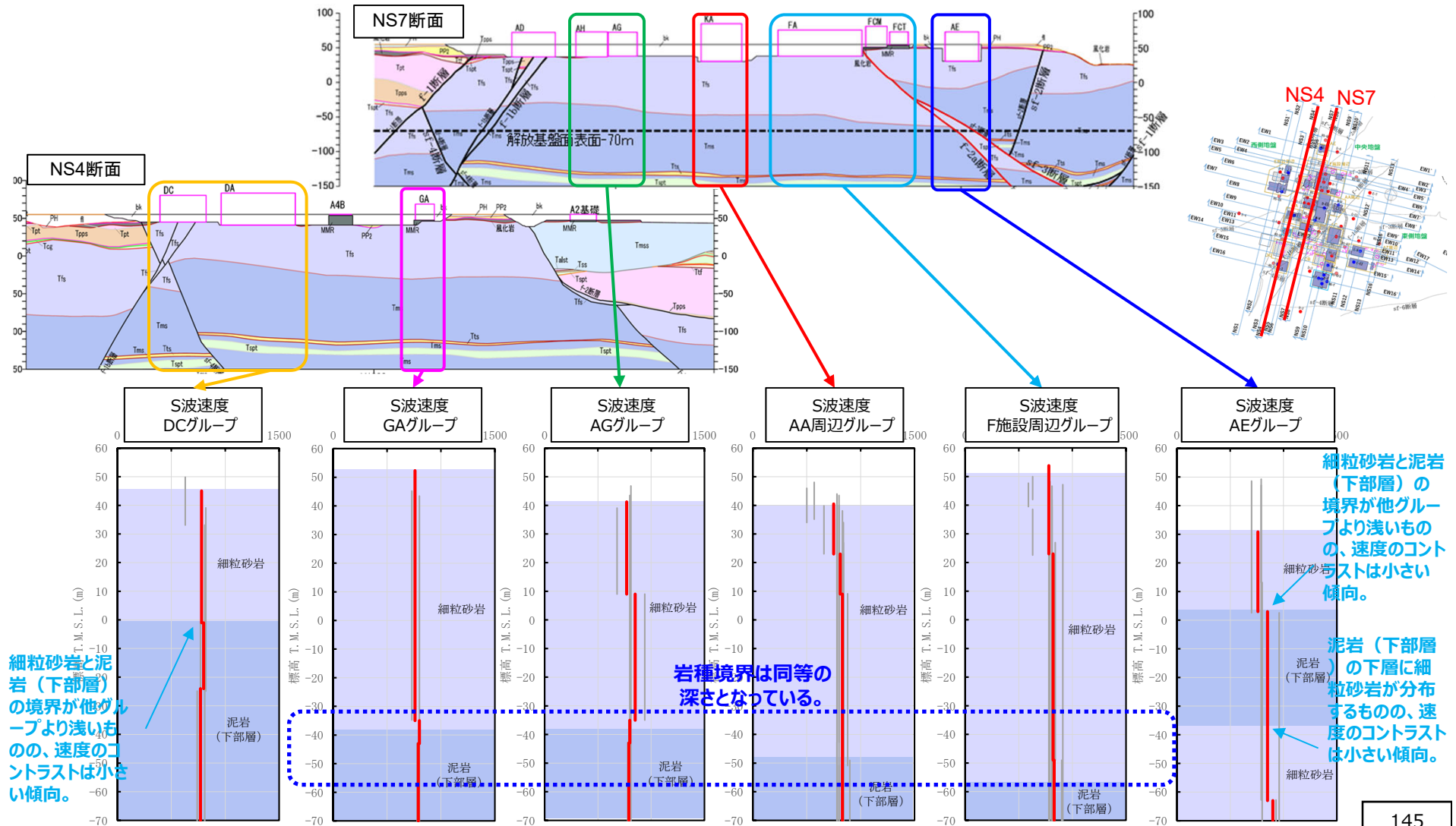
5. データの再整理

■ 各グループにおいて整理されたデータの再整理（中央エリア）

A. 岩盤部分の物性値等

【地質構造・速度構造の比較】

➢ 「4.1」～「4.6」に示した中央エリアの各グループにおけるデータの整理結果の比較を以下に示す。



基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

5. データの再整理

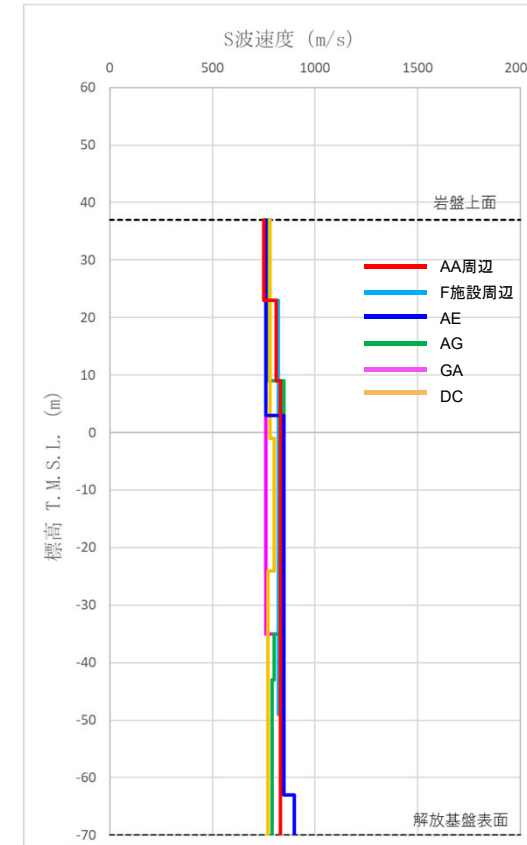
■各グループにおいて整理されたデータの再整理（中央エリア）

A. 岩盤部分の物性値等

【地質構造・速度構造の比較】

- 前頁に示した中央エリアの各グループにおける地質構造及び速度構造の比較の結果を以下に示す。
 - いずれのグループにおいても、鷹架層下部層の細粒砂岩及び泥岩（下部層）で構成されることを確認。
 - AA周辺、F施設周辺、AG、GAの4グループについては、細粒砂岩と泥岩（下部層）の岩種境界レベルは同等の深さとなっていることを確認。
 - AE及びDCについては、細粒砂岩と泥岩（下部層）の岩種境界が、その他グループと比べ浅部に位置するものの、岩種境界における速度のコントラストはいずれも小さいことを確認。
- 以上のことから、中央エリアの各グループについては、同じ地下構造を有すると考えられる。

次回、地盤の応答の確認について実施。



S波速度の比較結果
(中央エリア全グループ)

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

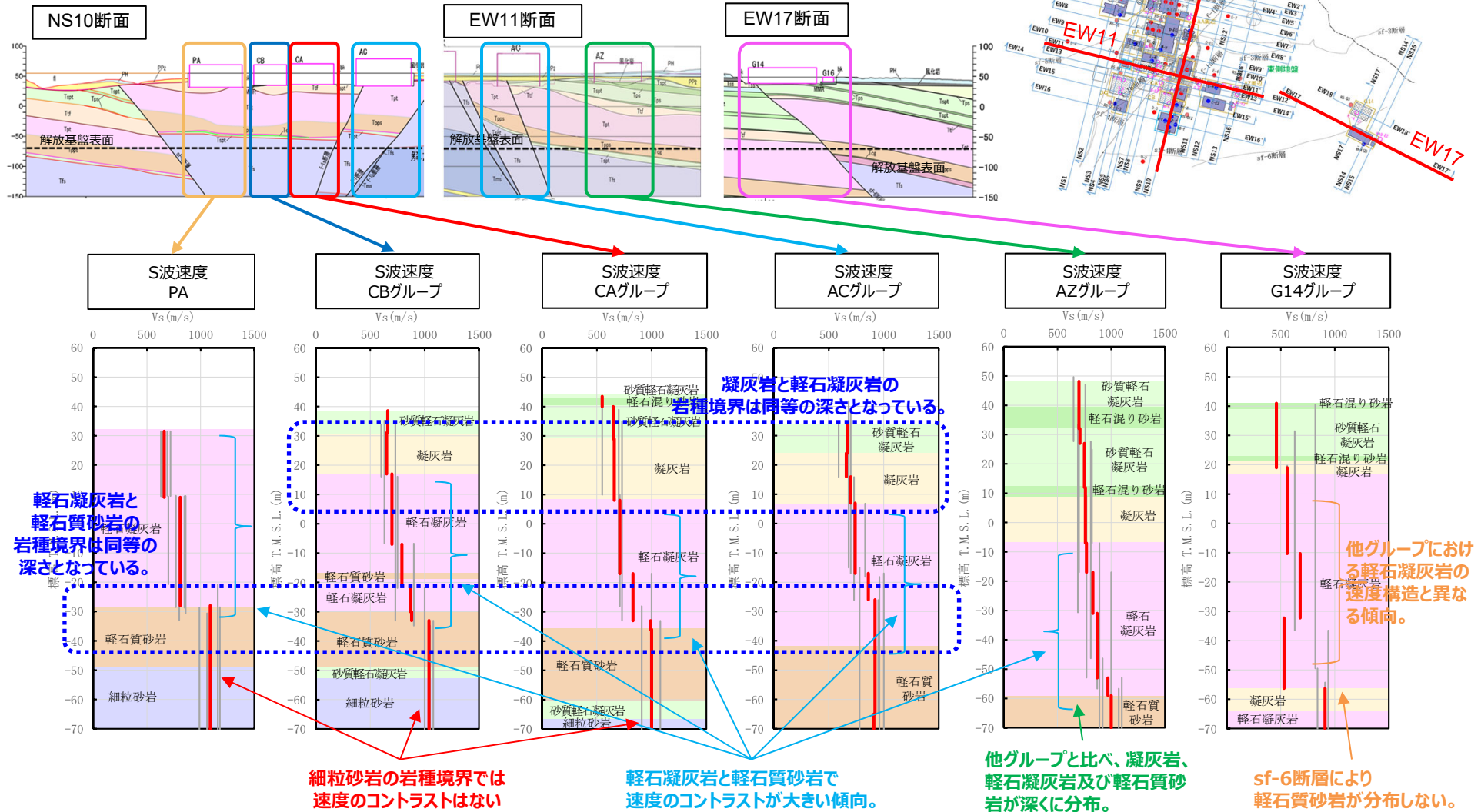
5. データの再整理

■各グループにおいて整理されたデータの再整理（東エリア）

A. 岩盤部分の物性値等

【地質構造・速度構造の比較】

➢ 「4.8」～「4.12」に示した東エリアの各グループにおけるデータの整理結果の比較を以下に示す。



基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

5. データの再整理

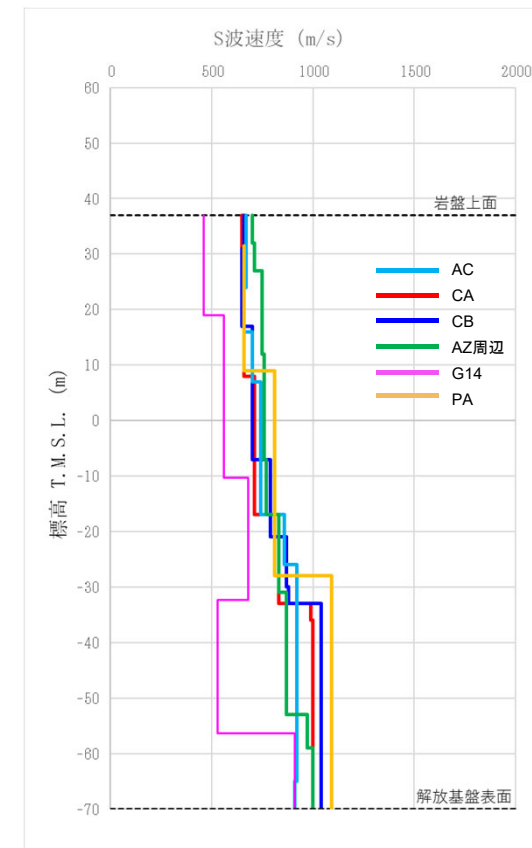
■ 各グループにおいて整理されたデータの再整理（東エリア）

A. 岩盤部分の物性値等

【地質構造・速度構造の比較】

- 前頁に示した東エリアの各グループにおける地質構造及び速度構造の比較の結果を以下に示す。
 - いずれのグループにおいても、鷹架層中部層の岩種で構成され、一部のグループについては、鷹架層下部層の細粒砂岩が分布するものの、細粒砂岩の境界では速度のコントラストはないことを確認。
 - AC、CA、CBの3グループについては、軽石凝灰岩と軽石質砂岩で速度のコントラストが大きく、凝灰岩と軽石凝灰岩、軽石凝灰岩と軽石質砂岩の岩種境界深さも同等となっていることを確認。
 - AZ周辺グループについては、他グループと比べ、凝灰岩、軽石凝灰岩、軽石質砂岩の分布深さが深くなっていることを確認。
 - G14グループについては、軽石凝灰岩中の速度構造が他のグループと異なっており、また、sf-6断層により軽石質砂岩が分布していないことを確認。
- 以上のことから、東エリアの各グループのうち、AC、CA、CBについては、同じ地下構造を有すると考えられ、AZ周辺、G14及びPAについては、個別の特徴を有すると考えられる。

次回、地盤の応答の確認について実施。



S波速度の比較結果
(東エリア全グループ)

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

5. データの再整理

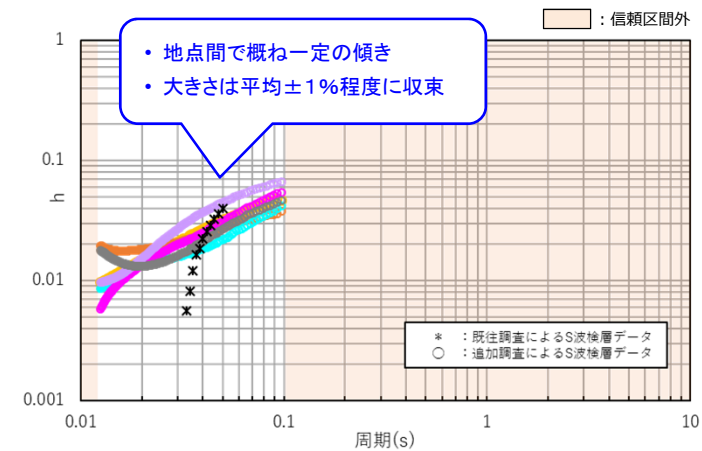
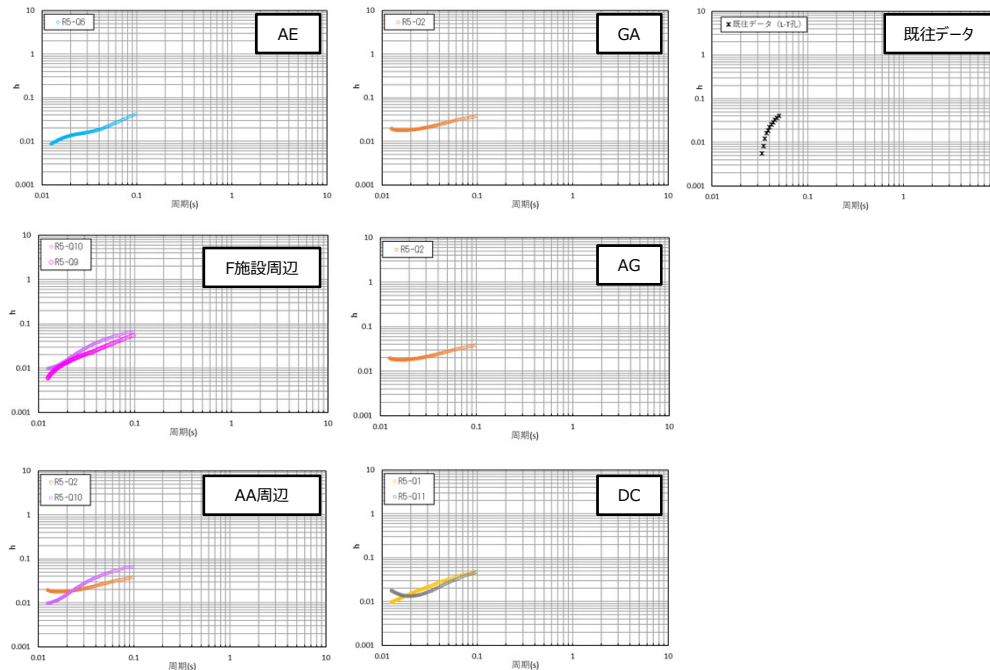
■ 各グループにおいて整理されたデータの再整理

C-5 : S波検層

● 減衰定数の傾向に係る分析

【中央地盤】

- 中央地盤における各グループにおいて得られた追加調査によるS波検層データは、いずれも周波数依存性の傾きが類似しており、その大きさも、各周期で概ね2%程度の幅の範囲に収束している。
- 既往データについては、周波数依存性が異なる傾向を示しているが、信頼区間のうち低周波数側（0.05秒程度）では追加調査と同等の値を示している。周波数依存性が異なる要因としては、既往データは、今回追加調査と異なる板叩き法により実施したものであることに起因していると考えられる。
- 福島ほか（1994）等の既往知見によれば、減衰定数の大きさは、地盤の速度構造と関係があるとされていることから、既往知見におけるS波速度と減衰定数の相関性に着目した分析を行い、グループ間の速度構造の差が、減衰定数に差を与える差となっているかの確認を実施する。



減衰定数の比較

各グループにおけるS波検層結果

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

5. データの再整理

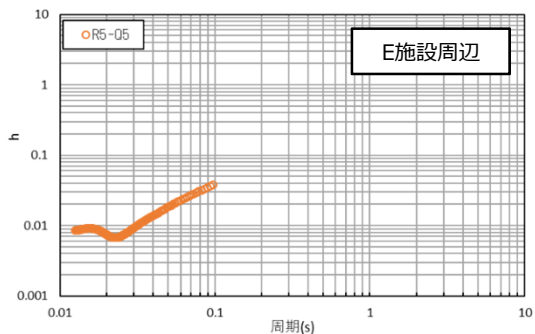
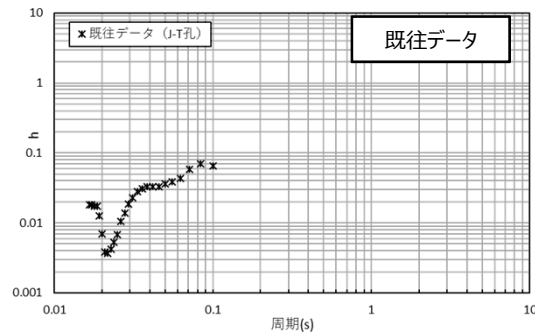
■ 各グループにおいて整理されたデータの再整理

C-5 : S波検層

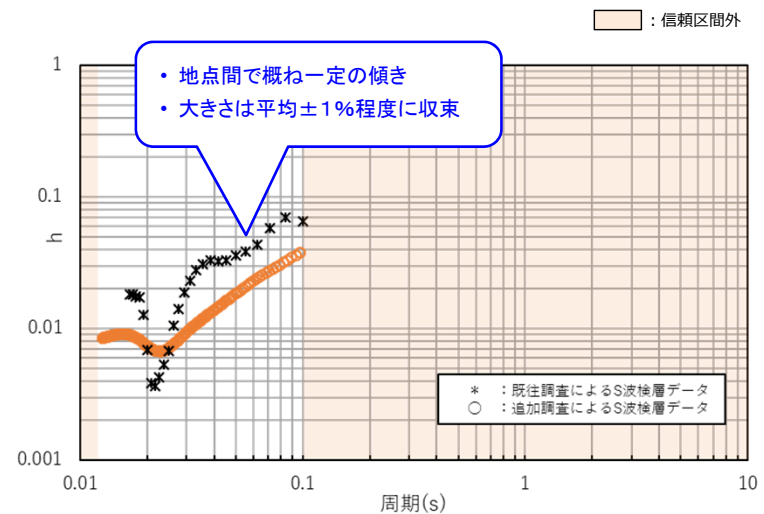
● 減衰定数の傾向に係る分析

【西側地盤】

- 西側地盤におけるグループにおいて得られたS波検層データは、追加調査データ及び既往データのいずれも周波数依存性の傾きが類似しており、その大きさも、各周期で概ね2%程度の幅の範囲に収束しており、同様の傾向を示している。
- 既往データと追加調査データの両方に見られる傾向として、周期0.02~0.03秒程度の谷が見られる。
- 福島ほか（1994）等の既往知見によれば、減衰定数の大きさは、地盤の速度構造と関係があるとされていることから、既往知見におけるS波速度と減衰定数の相関性に着目した分析を行い、グループ間の速度構造の差が、減衰定数に差を与える差となっているかの確認を実施する。



各グループにおけるS波検層結果



減衰定数の比較

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

5. データの再整理

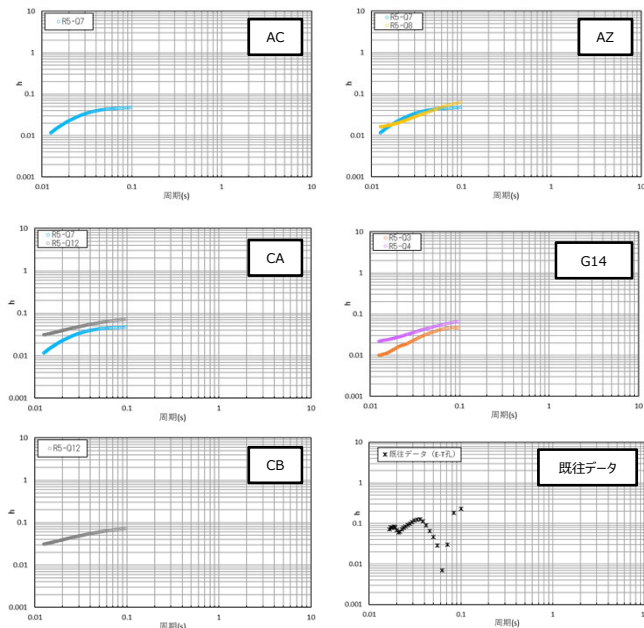
■ 各グループにおいて整理されたデータの再整理

C-5 : S波検層

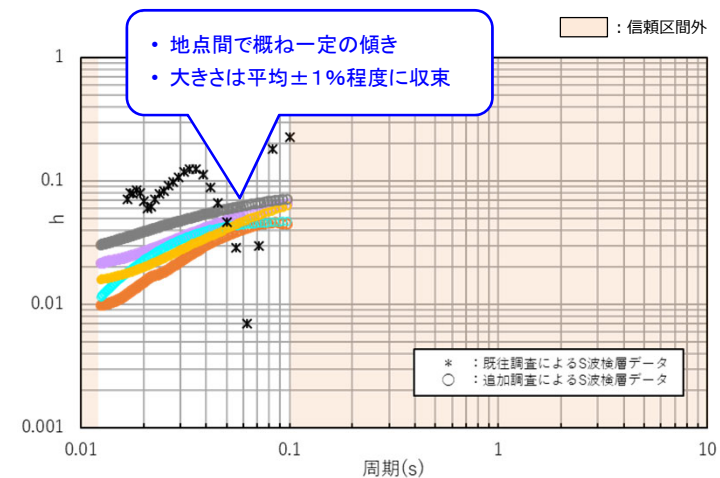
● 減衰定数の傾向に係る分析

【東側地盤】

- 東側地盤における各グループにおいて得られた追加調査によるS波検層データは、中央地盤及び西側地盤よりも傾きが小さいとの共通的な特徴を有するものの、いずれも周波数依存性の傾きが類似しており、その大きさも、各周期で概ね2%程度の幅の範囲に収束している。
- 既往データについては、ばらつきが大きく、明確な周波数依存性を有したデータとして得られていない。また、東側地盤における既往データの取得位置は、建屋設置位置から離れている。
- 福島ほか（1994）等の既往知見によれば、減衰定数の大きさは、地盤の速度構造と関係があるとされていることから、既往知見におけるS波速度と減衰定数の相関性に着目した分析を行い、グループ間の速度構造の差が、減衰定数に差を与える差となっているかの確認を実施する。



各グループにおけるS波検層結果



減衰定数の比較

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

5. データの再整理

■ 各グループにおいて整理されたデータの再整理

C-5 : S波検層

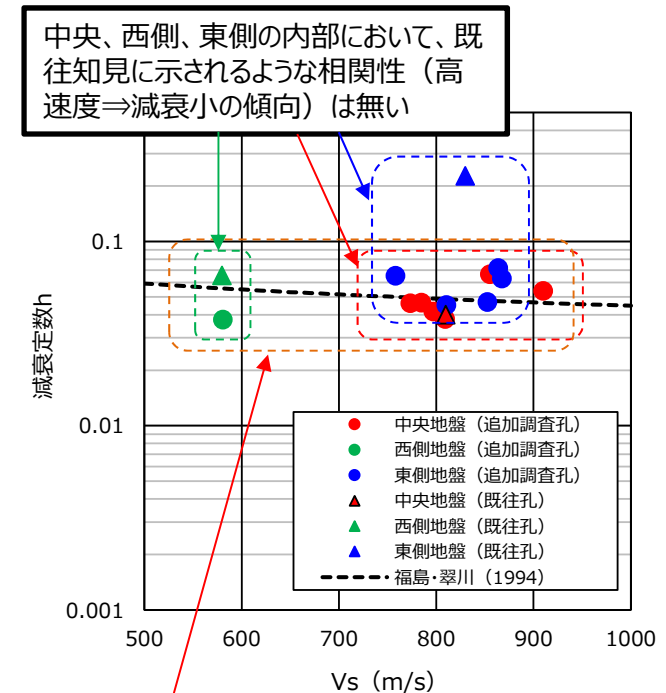
● 地点間の速度構造との対応関係に係る分析

- 既往知見（福島ほか（1994））に基づき、グループ間における速度構造の差と減衰定数の大きさの相関性について分析を実施。

【分析結果】

- 各グループにおけるデータに着目すると、中央地盤、西側地盤、東側地盤それぞれの中での傾向としては、Vsの大きさと減衰定数の大きさに相関性は見られない。
 - 既往知見における経験式（福島ほか（1994））においても、敷地内のVsの範囲内（約600m/s～1000m/s）においては、減衰定数は大きく変動しない範囲に該当しており、敷地において得られた減衰定数データも、既往知見の経験式による値と整合。
- 以上のことから、当社敷地における地盤の特徴としては、概ね同等の減衰定数を与えるような地下構造の範囲内にあると考えられる。

⇒地震観測記録データの適用において考慮している範囲と同様に、f-1、f-2断層を境とした中央地盤、西側地盤、東側地盤の単位で、エリア内の複数データに基づき設定することで、敷地の地盤の特徴を捉えた値が設定可能。



敷地全体の減衰定数の大きさの傾向は、同等の速度構造における既往知見の傾向（Vs500m/s～1000m/sで変動量小）と整合。

- 注1：上図における減衰定数はS波検層データのうち周期0.1sにおける値をサンプリング。Vsは当該地点におけるPS検層結果について層厚重みづけ平均により算定。
- 注2：東側地盤における既往孔のデータ（▲）についてはばらつきが大きいことから傾向分析上は参考扱いとしている。

基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

5. データの再整理

■ 各グループにおいて整理されたデータの再整理

▶ 以下に、データを再整理結果を示す。

設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等			
	速度構造 (層厚、Vs,Vp,ρ)	ひずみ依存特性 (G/G ₀ -γ関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G ₀ ,γ)			
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰						
取得データ	PS検層 (a.-①, a.-②)	三軸圧縮試験 (b.-①)	C-1 三軸圧縮試験 (c.-①)	C-2 岩石コア試験 (c.-②)	C-3 地震観測記録を用いた同定 (c.-③)	C-4 地震波干渉法 (c.-③)	C-5 S波検層 (c.-⑤, c.-⑥)	PS検層 (d.-①, d.-②)			
AA周辺	<ul style="list-style-type: none"> • N3_U • N3-E5 • N3_E5 • L-U • D-E5 • M-V • N_U • R5-Q2 • R5-Q10 	<ul style="list-style-type: none"> • M-S • L-T • M-T • M-5 • D-T • D-5 • R5-Q9 • (R5-Q10) • N3_6 • D-6 • R5-Q6 • L-4 • D-4 • (R5-Q2) • K_V • (R5-Q2) • K_3 • R5-Q1 • R5-Q11 	<ul style="list-style-type: none"> • 細粒砂岩 • 泥岩 (下部層) 	<ul style="list-style-type: none"> • 同左 	<ul style="list-style-type: none"> • 同左 	<ul style="list-style-type: none"> • 【地震観測記録を用いた同定】 • 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> • 【地震波干渉法】 • 中央地盤観測点の地震観測記録 	<ul style="list-style-type: none"> • R5-Q2 • R5-Q10 	<ul style="list-style-type: none"> • 埋戻し土のPS検層結果 		
F施設周辺										<ul style="list-style-type: none"> • R5-Q9 } F施設周辺Grのデータ • R5-Q6 } AEGrのデータ • R5-Q1 } DCGrのデータ • R5-Q11 } DCGrのデータ 	<ul style="list-style-type: none"> • 既往データ(L-T)
AE											
AG											
GA											
DC											
E施設周辺											

次回以降、地盤応答の確認結果を踏まえ必要に応じて見直し

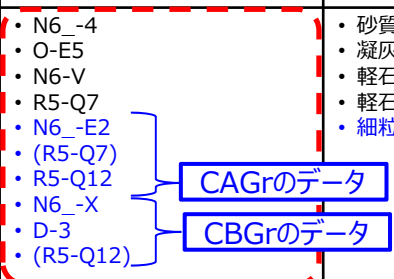
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

5. データの再整理

■ 各グループにおいて整理されたデータの再整理

➤ 以下に、データを再整理結果を示す。

設定する パラメータ	A. 岩盤部分の 物性値等	B. 岩盤部分の 非線形性	C. 岩盤部分の減衰定数					D. 表層地盤の 物性値等							
	速度構造 (層厚、Vs, Vp, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G ₀ -γ関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G ₀ , γ)							
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰										
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用 いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層								
取得データ	PS検層 (a.-①, a.-②)	三軸圧縮試験 (b.- ①)	三軸圧縮試験 (c.-①)	岩石コア試験 (c.-②)	地震観測記録 (c.- ③)	地震観測記録 (c.- ③)	S波検層 (c.-⑤, c.-⑥)	PS検層 (d.-①, d.-②)							
AC	<ul style="list-style-type: none"> • N6_-4 • O-E5 • N6-V • R5-Q7 • N6_-E2 • (R5-Q7) • R5-Q12 • N6_-X • D-3 • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • 砂質軽石凝灰岩 • 凝灰岩 • 軽石凝灰岩 • 軽石質砂岩 • 細粒砂岩 	• 同左	• 同左	【地震観測記録を用 いた同定】 • 東側地盤観測点の 地震観測記録	【地震波干渉法】 • 東側地盤観測点の 地震観測記録	<ul style="list-style-type: none"> • R5-Q7 • R5-Q12 • R5-Q8 • R5-Q3 • R5-Q4 • 既往データ(E-T) 	<ul style="list-style-type: none"> • 埋戻し土のPS検層 結果 							
CA									<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12)
CB									<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12) 	<ul style="list-style-type: none"> • (R5-Q7) • (R5-Q12)
AZ	<ul style="list-style-type: none"> • E_-W_ • E_-E2_ • E-4 • R5-Q7 • R5-Q8 	<ul style="list-style-type: none"> • 砂質軽石凝灰岩 • 軽石混り砂岩 • 凝灰岩 • 軽石凝灰岩 • 軽石質砂岩 	• 同左	• 同左				<ul style="list-style-type: none"> • 流動化処理土の PS検層結果 							
G14	<ul style="list-style-type: none"> • H_-X_(2) • R5-Q3 • R5-Q4 	<ul style="list-style-type: none"> • 軽石混り砂岩 • 砂質軽石凝灰岩 • 凝灰岩 • 軽石凝灰岩 	• 同左	• 同左				<ul style="list-style-type: none"> • 流動化処理土の PS検層結果 							



CAGr及びCBGr
のデータ

CAGrのデータ

CBGrのデータ

CAGr及びCBGr
のデータ

AZ周辺Gr
のデータ

G14Grのデータ

次回以降、地盤応答の確認結果を
踏まえ必要に応じて見直し

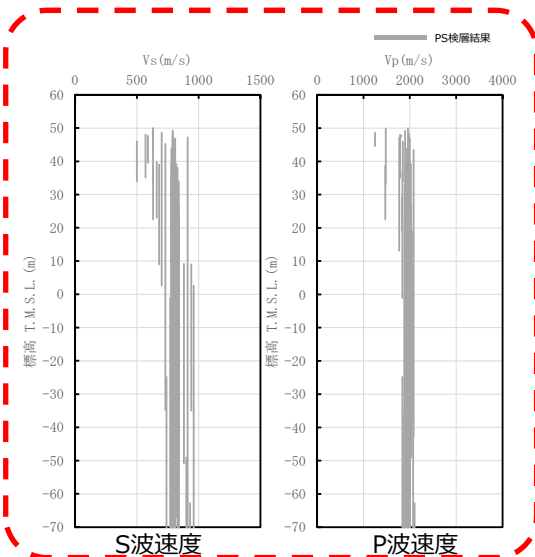
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

5. データの再整理

■ 整理結果のとりまとめ (AA周辺グループ)

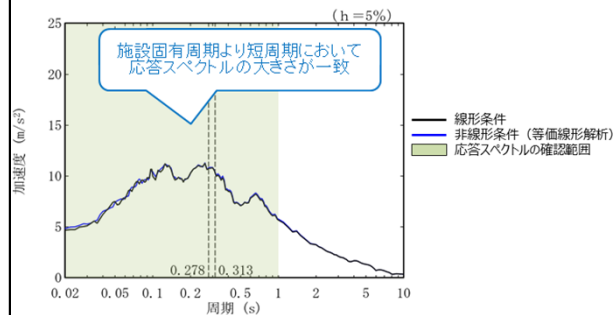
□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

A: 岩盤部分の物性値等

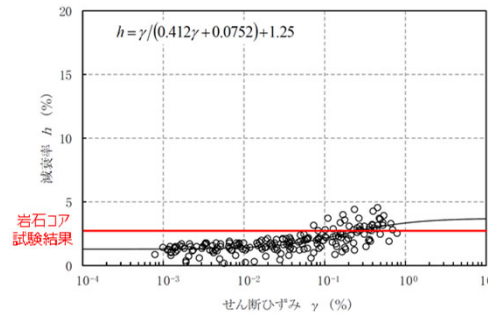


次回以降、地盤応答の確認結果を踏まえ必要に応じて見直し

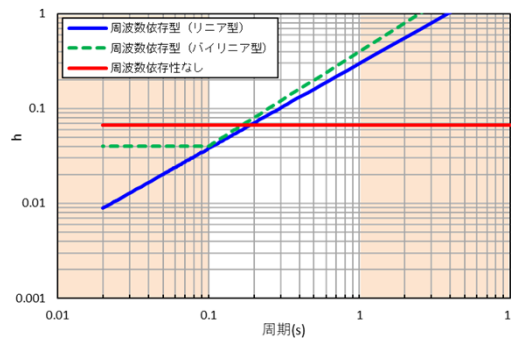
B: 岩盤部分の剛性の非線形性



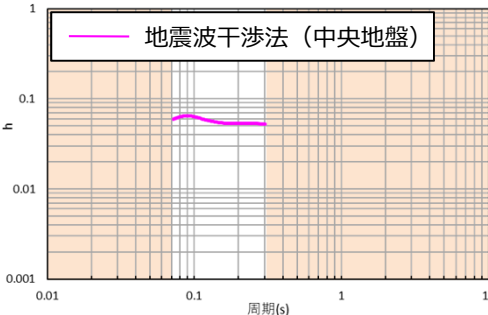
C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



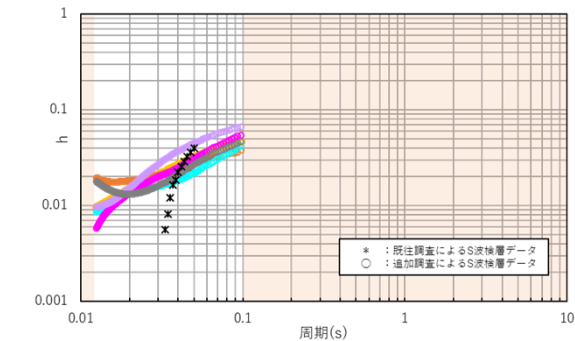
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



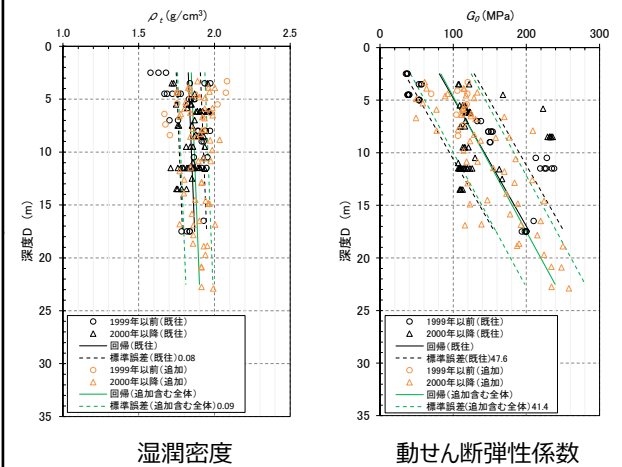
C - 4: 地震波干渉法



C - 5: S波検層



D: 表層地盤の物性値等



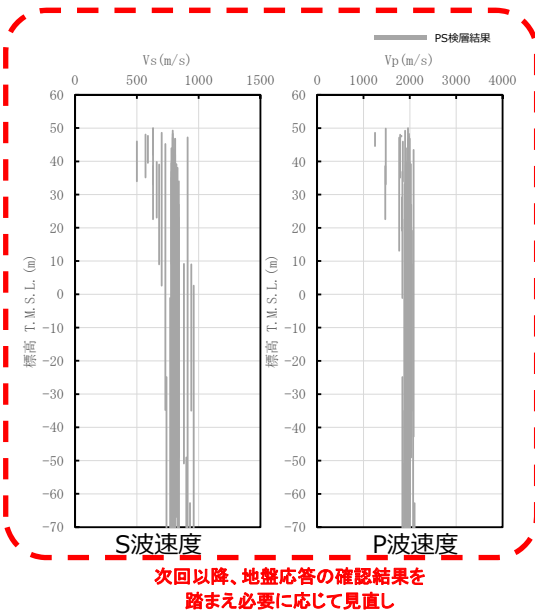
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

5. データの再整理

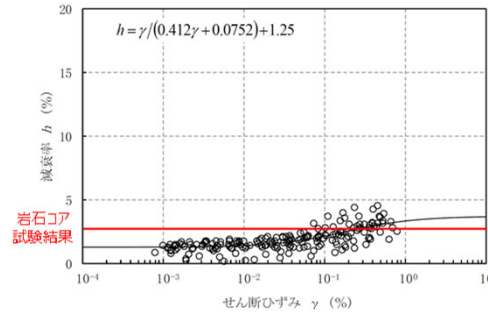
■ 整理結果のとりまとめ（F施設周辺グループ）

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

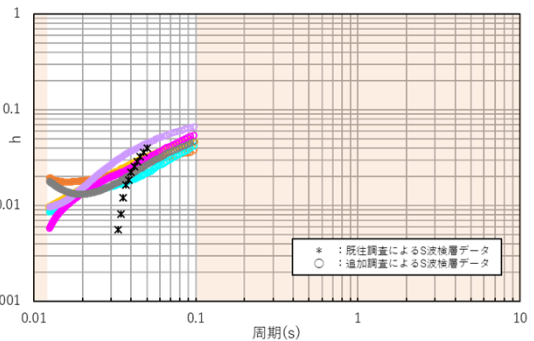
A: 岩盤部分の物性値等



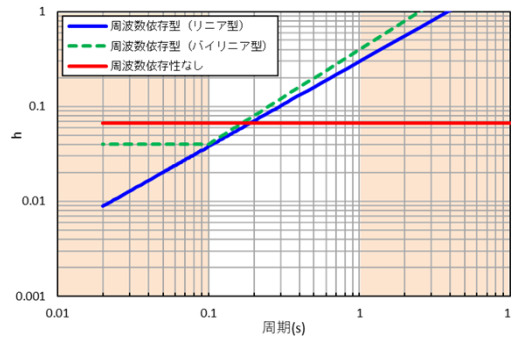
C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



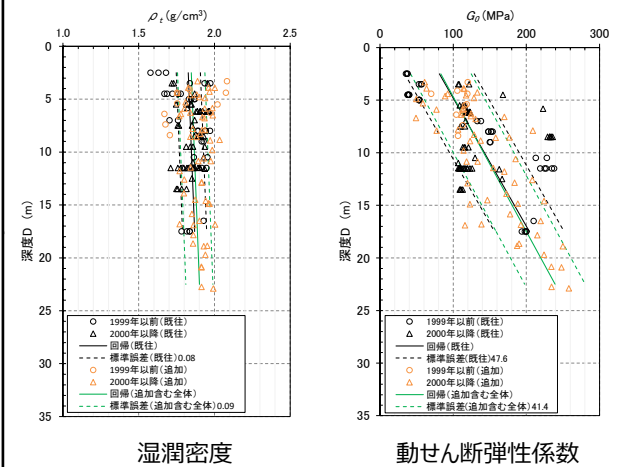
C - 5: S波検層



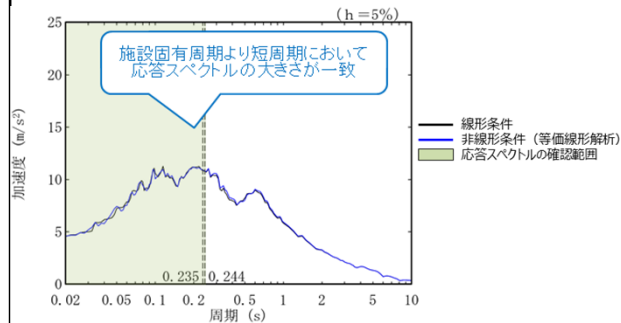
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



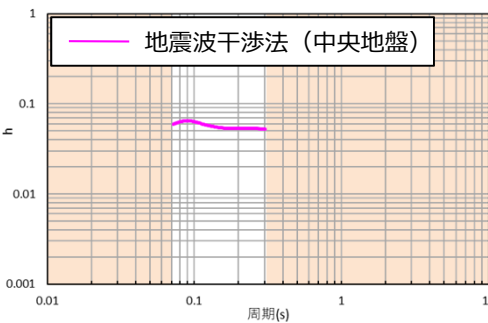
D: 表層地盤の物性値等



B: 岩盤部分の剛性の非線形性



C - 4: 地震波干渉法



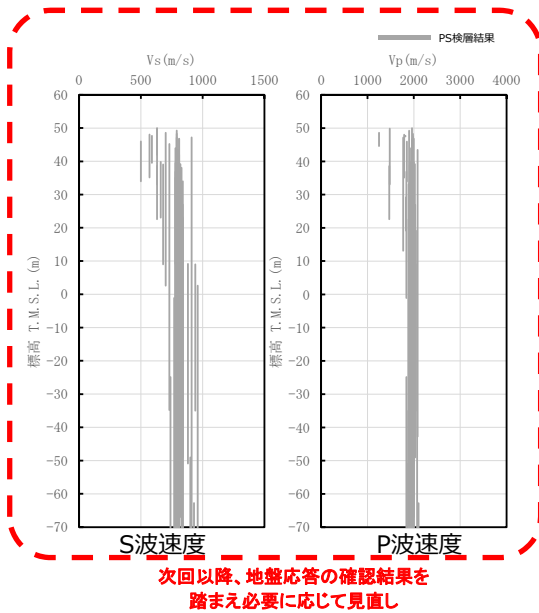
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

5. データの再整理

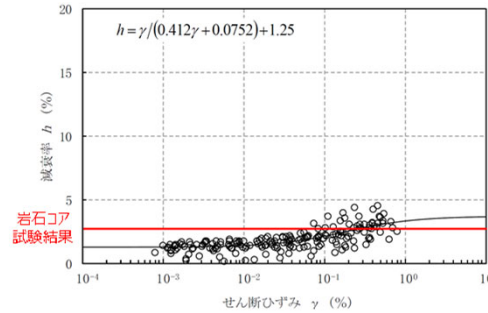
■ 整理結果のとりまとめ (AEグループ)

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

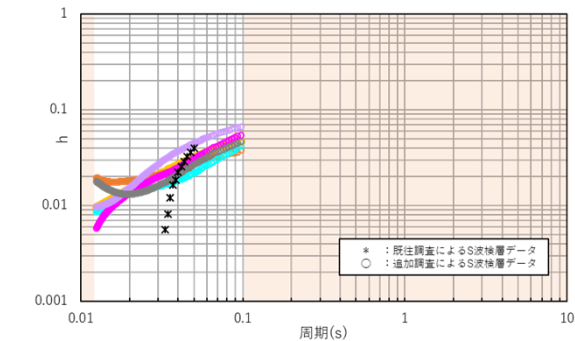
A: 岩盤部分の物性値等



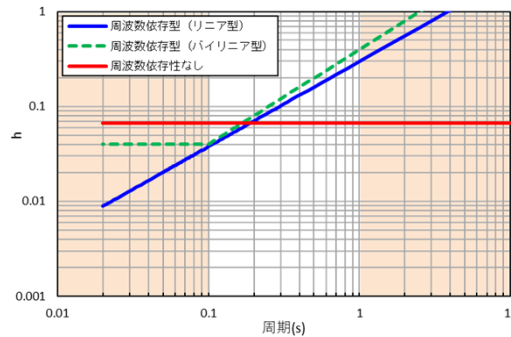
C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



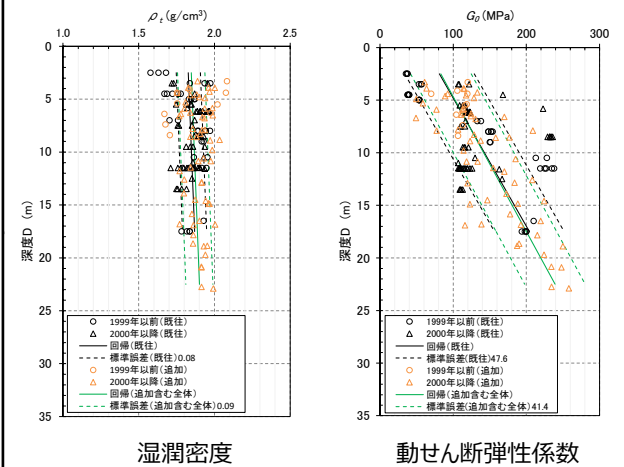
C - 5: S波検層



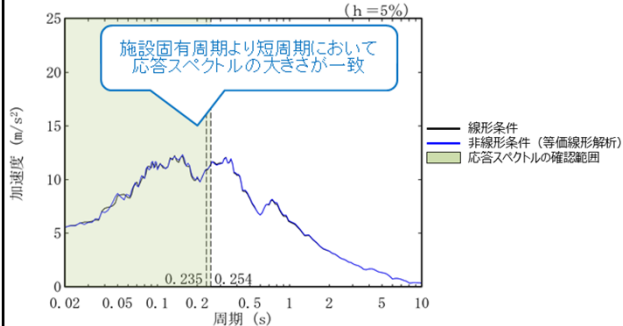
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



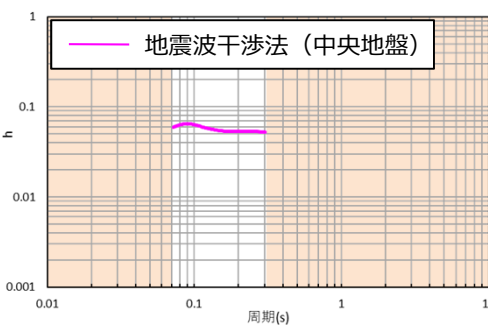
D: 表層地盤の物性値等



B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



C - 4: 地震波干渉法



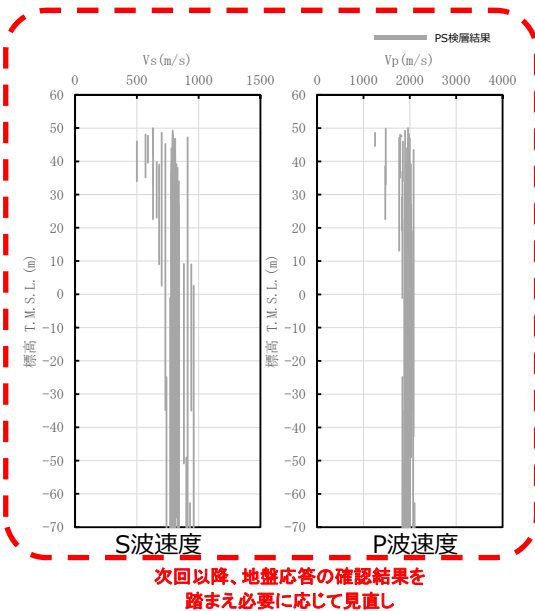
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

5. データの再整理

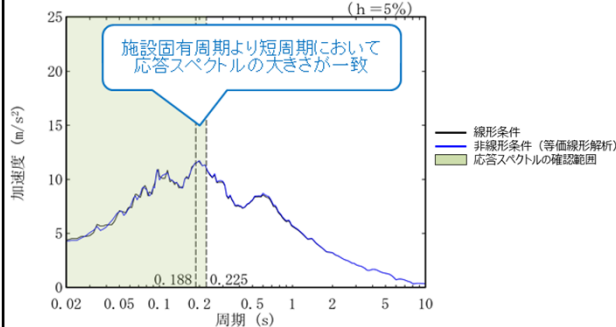
■ 整理結果のとりまとめ (AGグループ)

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

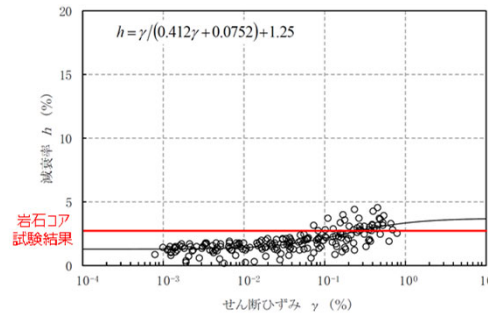
A: 岩盤部分の物性値等



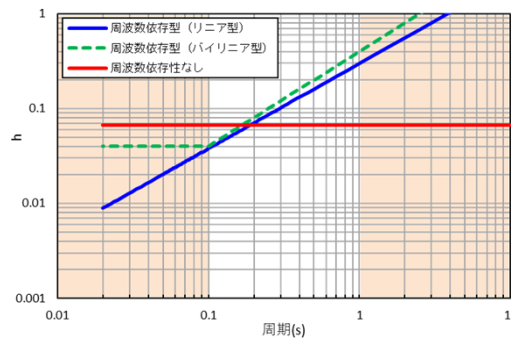
B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



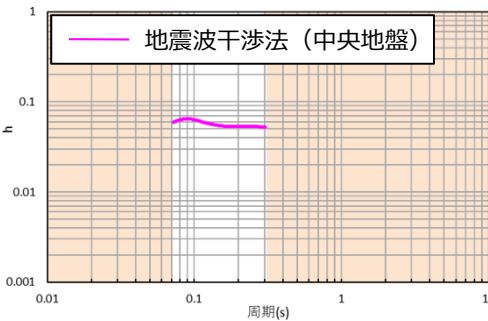
C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



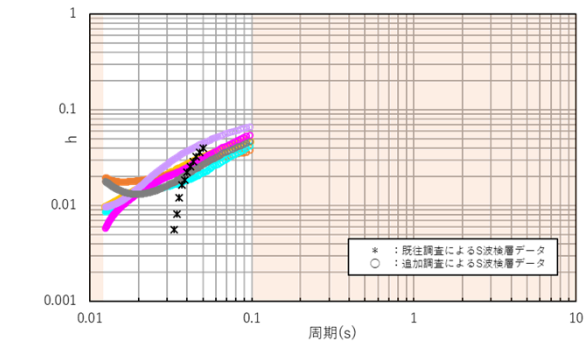
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



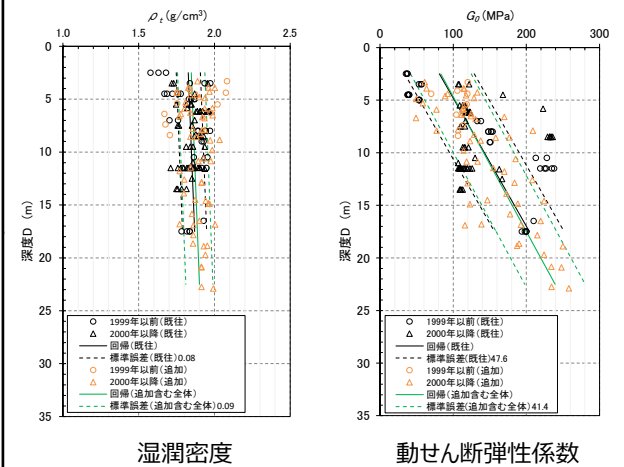
C - 4: 地震波干渉法



C - 5: S波検層



D: 表層地盤の物性値等



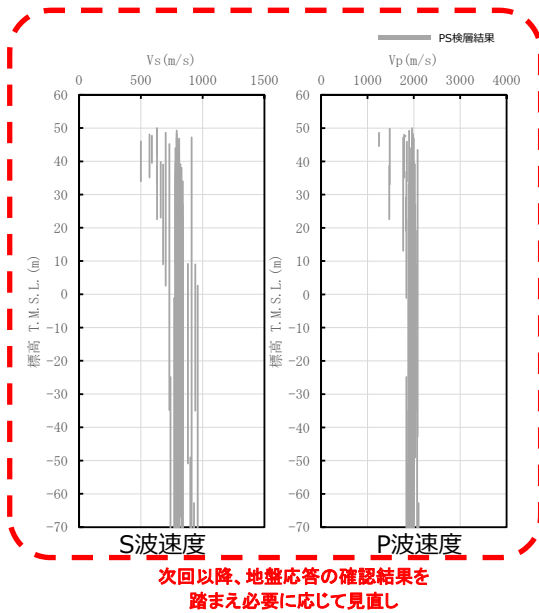
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

5. データの再整理

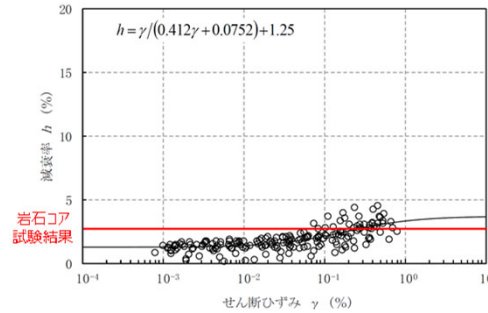
■ 整理結果のとりまとめ (GAグループ)

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

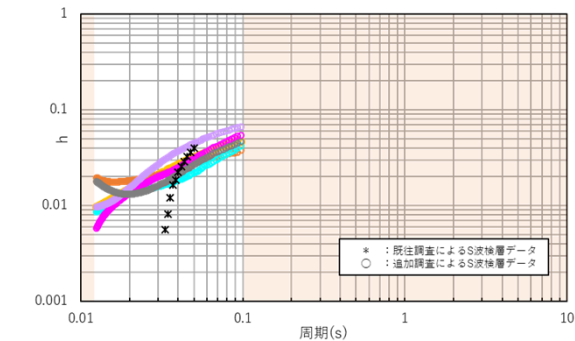
A: 岩盤部分の物性値等



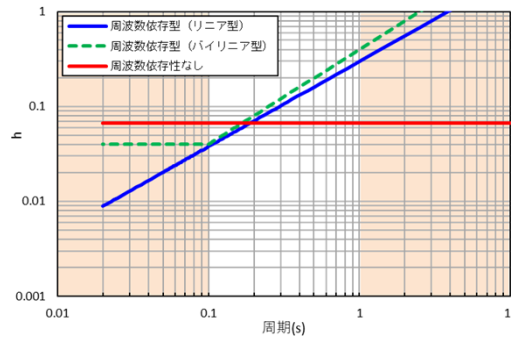
C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



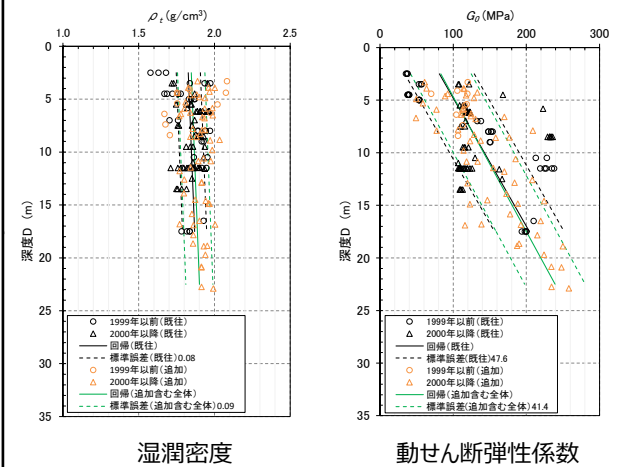
C - 5: S波検層



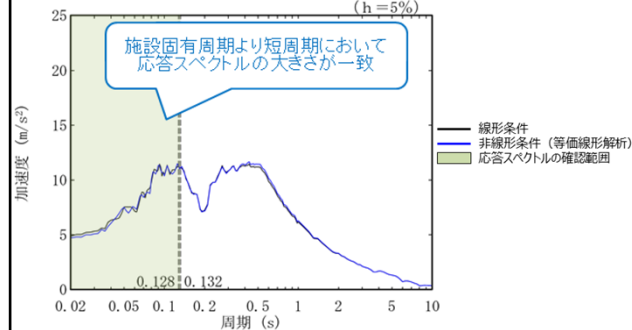
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



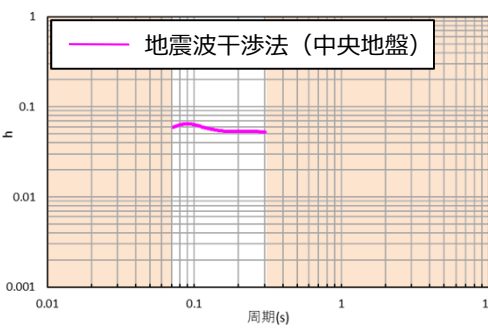
D: 表層地盤の物性値等



B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



C - 4: 地震波干渉法



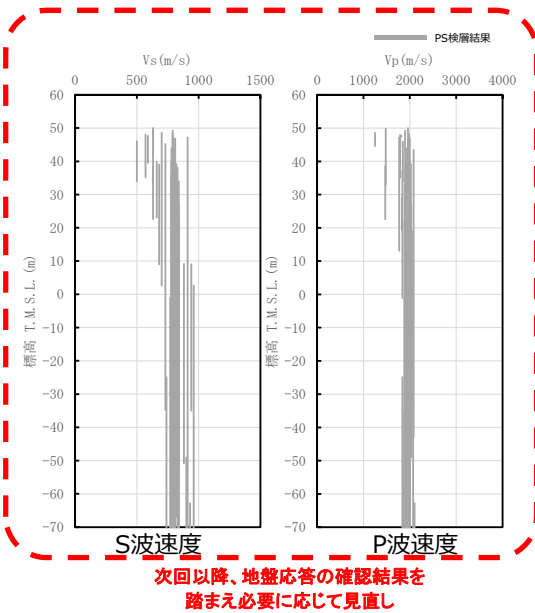
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

5. データの再整理

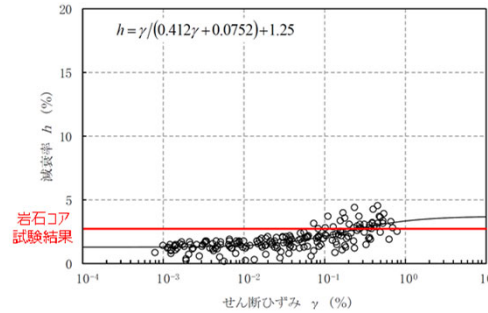
■ 整理結果のとりまとめ (DCグループ)

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

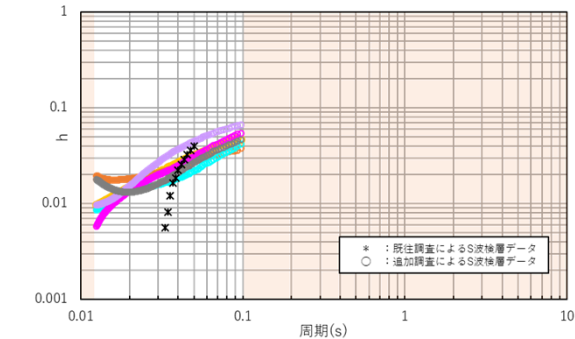
A: 岩盤部分の物性値等



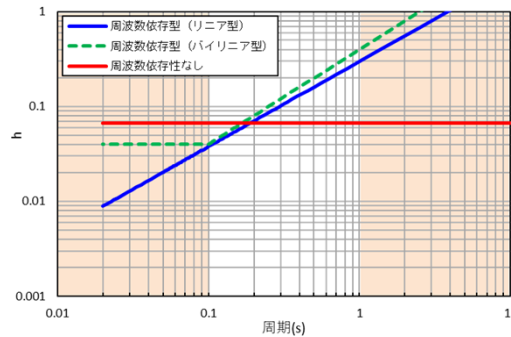
C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



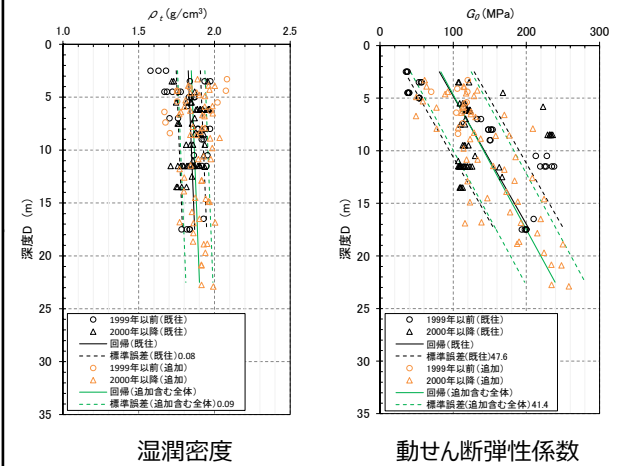
C - 5: S波検層



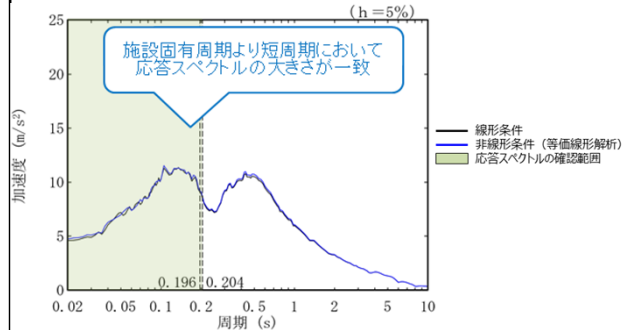
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



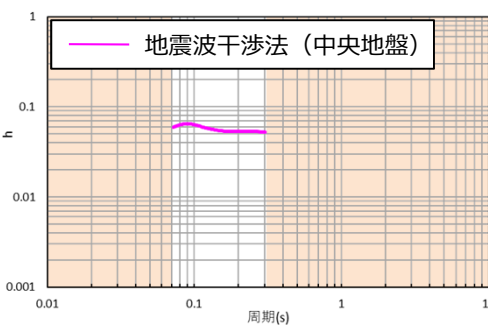
D: 表層地盤の物性値等



B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



C - 4: 地震波干渉法



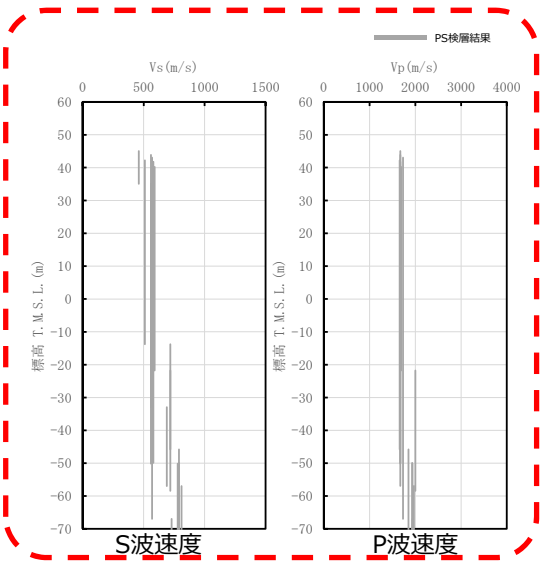
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

5. データの再整理

■ 整理結果のとりまとめ（E施設周辺グループ）

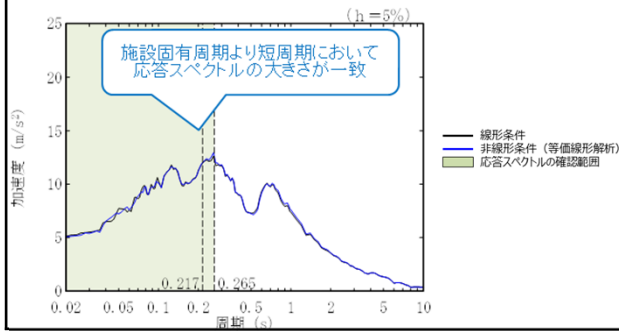
□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

A: 岩盤部分の物性値等

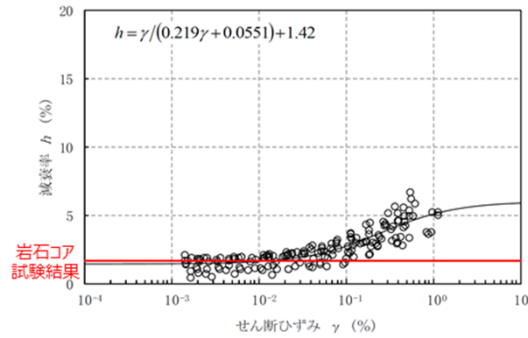


次回以降、地盤応答の確認結果を踏まえ必要に応じて見直し

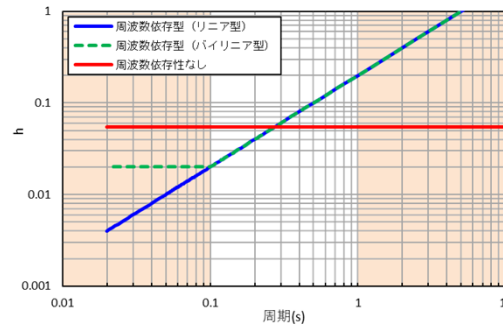
B: 岩盤部分の剛性の非線形性



C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



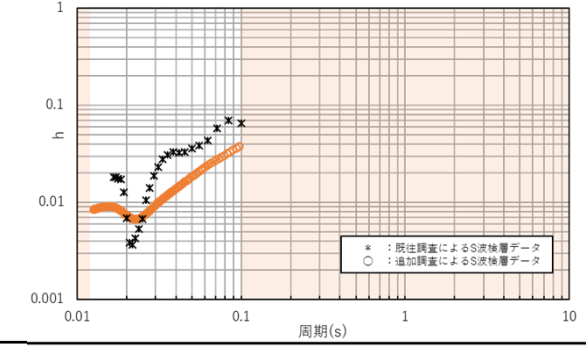
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



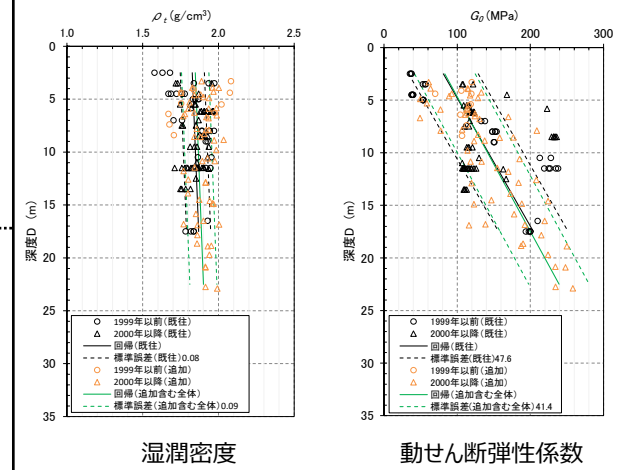
C - 4: 地震波干渉法

—

C - 5: S波検層



D: 表層地盤の物性値等



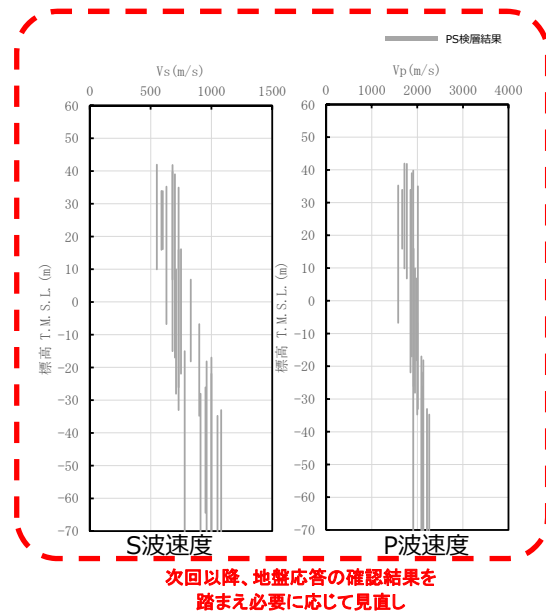
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

5. データの再整理

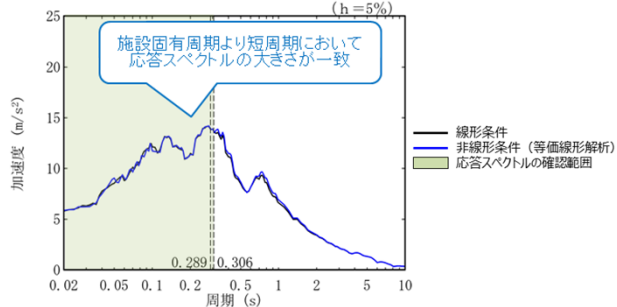
■ 整理結果のとりまとめ (ACグループ)

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

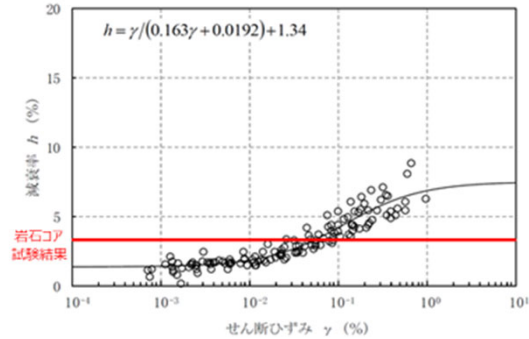
A: 岩盤部分の物性値等



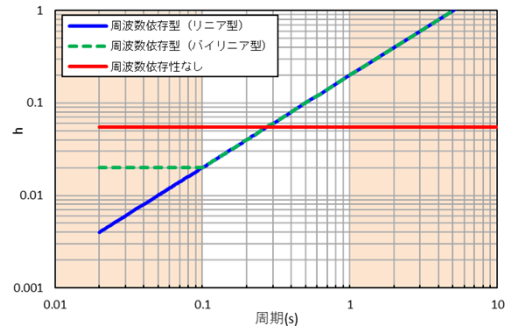
B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



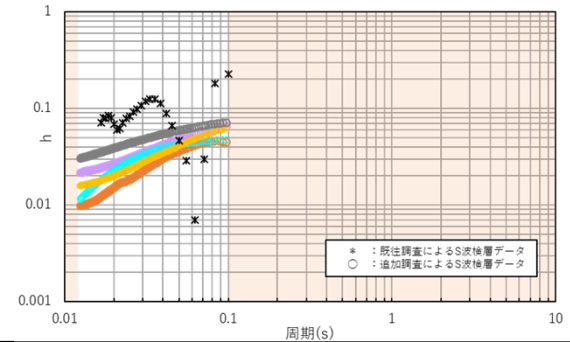
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



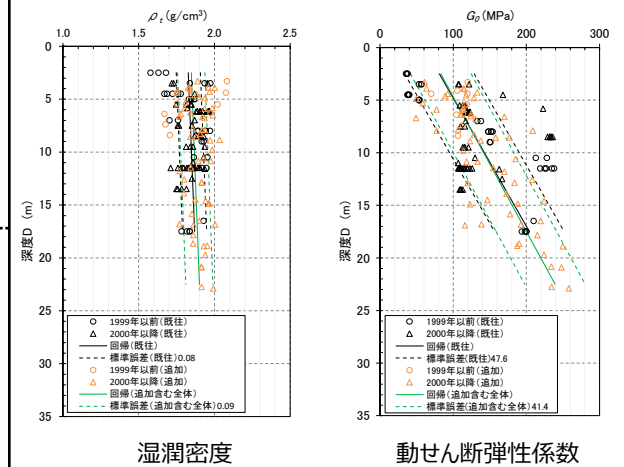
C - 4: 地震波干渉法

—

C - 5: S波検層



D: 表層地盤の物性値等



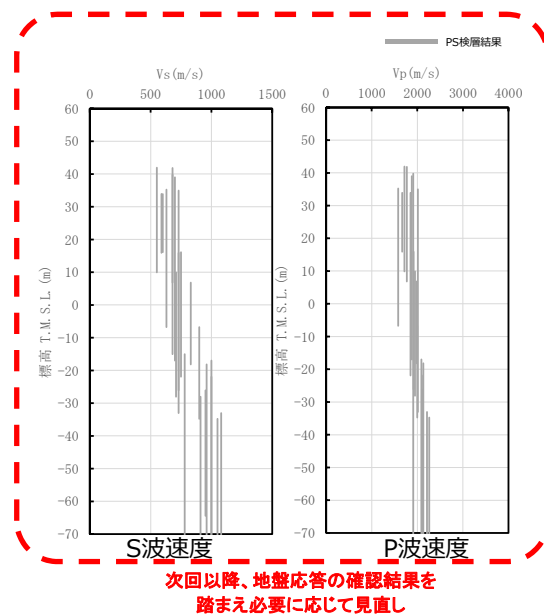
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

5. データの再整理

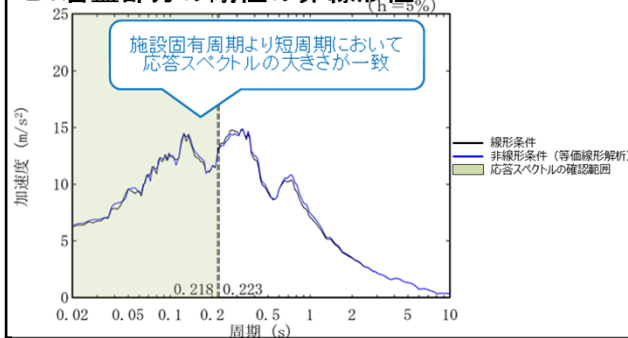
■ 整理結果のとりまとめ (CAグループ)

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

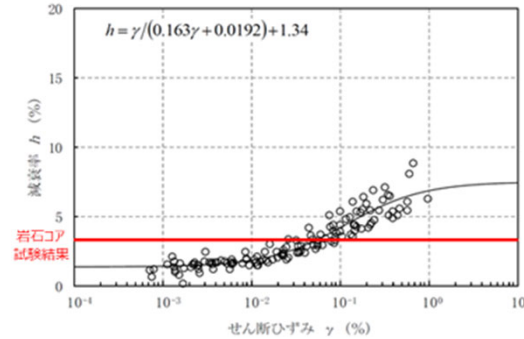
A: 岩盤部分の物性値等



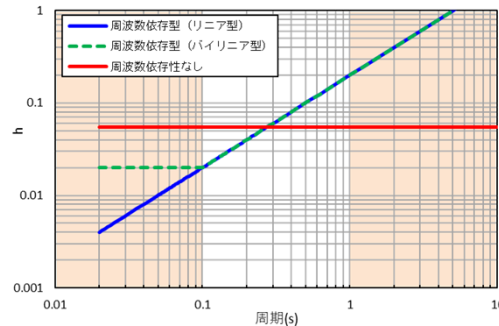
B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



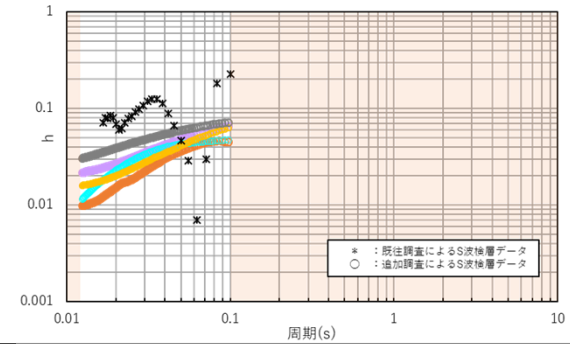
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



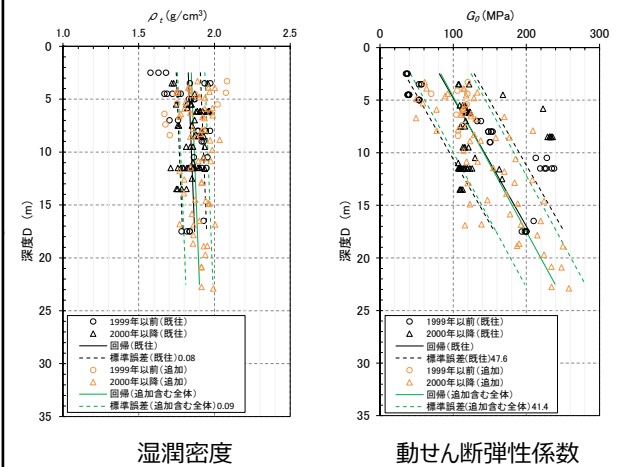
C - 4: 地震波干渉法

—

C - 5: S波検層



D: 表層地盤の物性値等



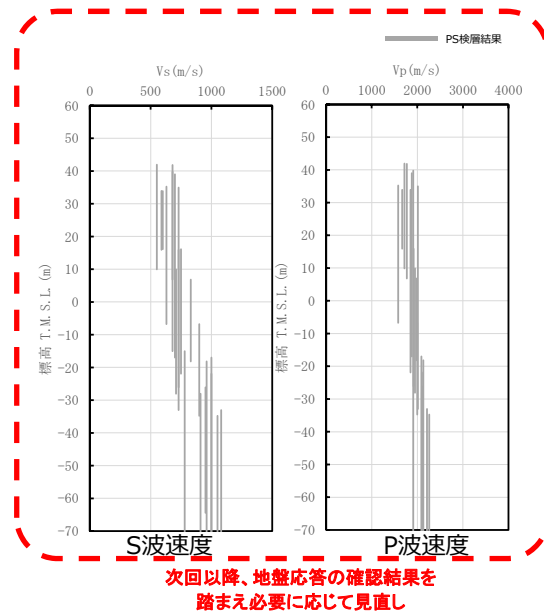
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

5. データの再整理

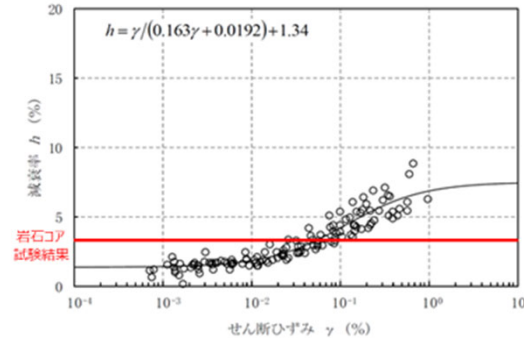
■ 整理結果のとりまとめ (CBグループ)

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

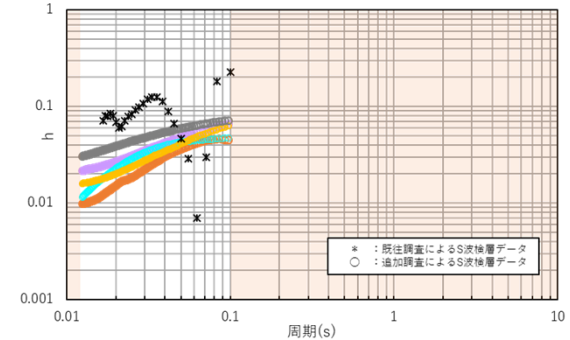
A: 岩盤部分の物性値等



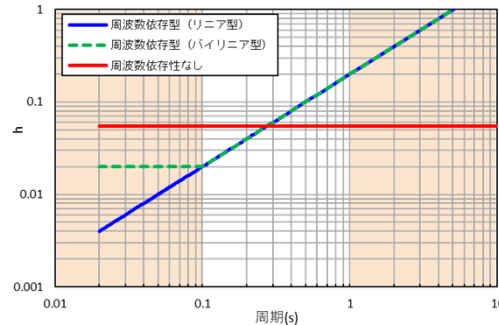
C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



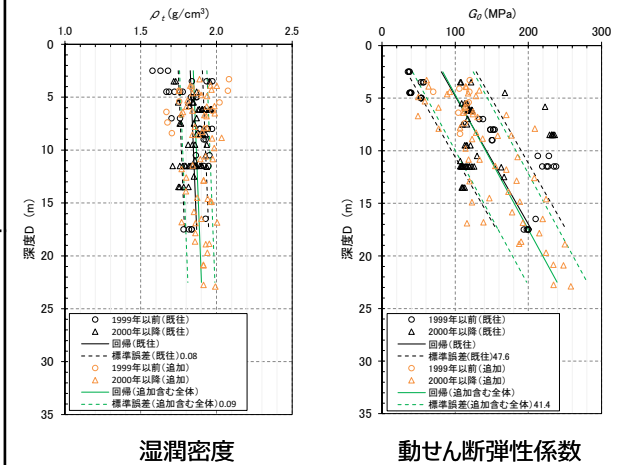
C - 5: S波検層



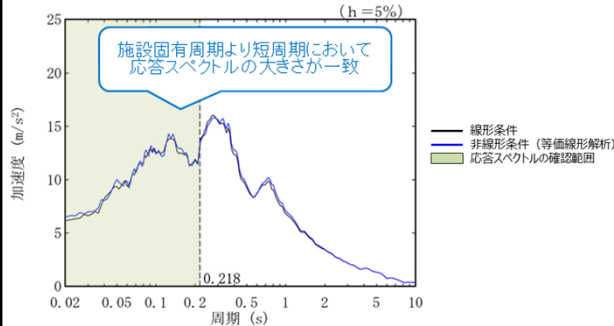
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



D: 表層地盤の物性値等



B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



C - 4: 地震波干渉法

—

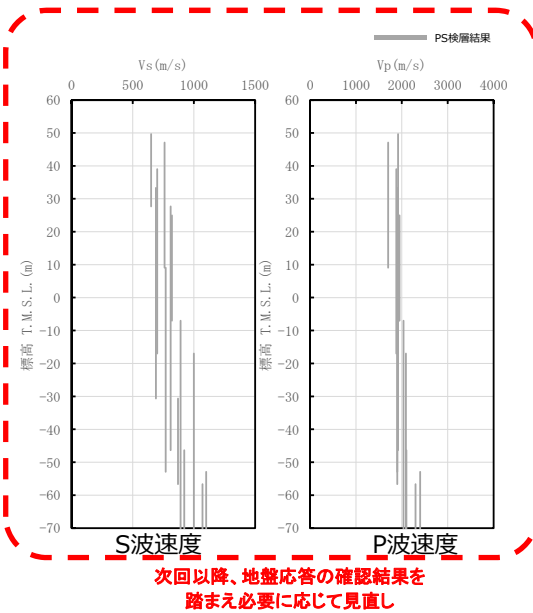
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

5. データの再整理

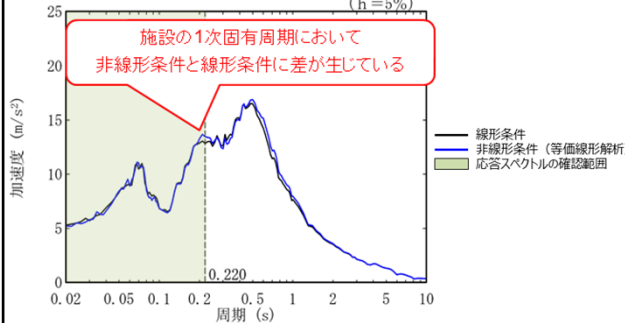
■ 整理結果のとりまとめ (AZ周辺グループ)

□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

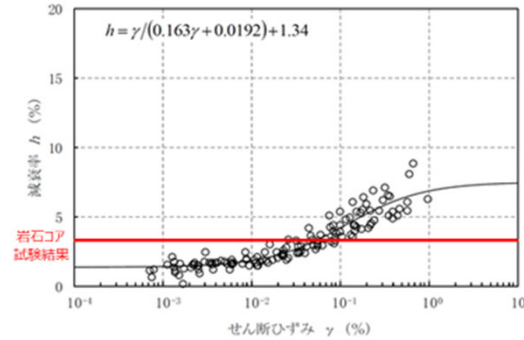
A: 岩盤部分の物性値等



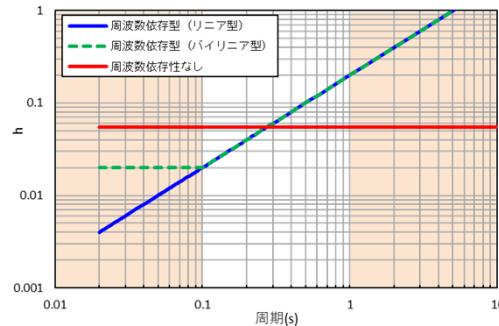
B: 岩盤部分の剛性の非線形性 (h=5%)



C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



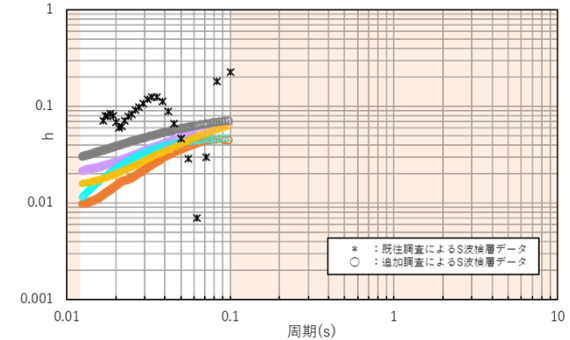
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



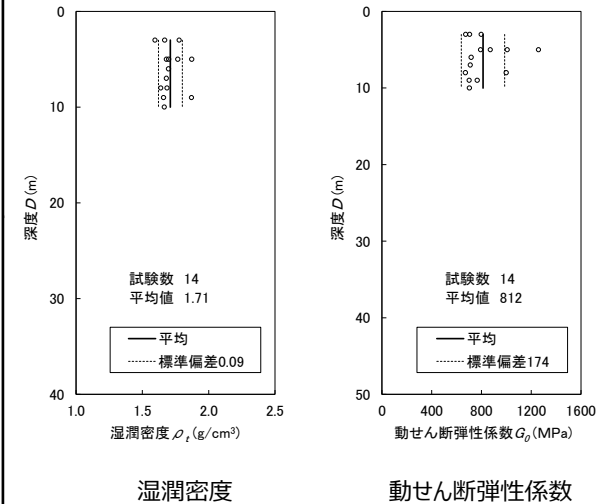
C - 4: 地震波干渉法

—

C - 5: S波検層



D: 表層地盤の物性値等



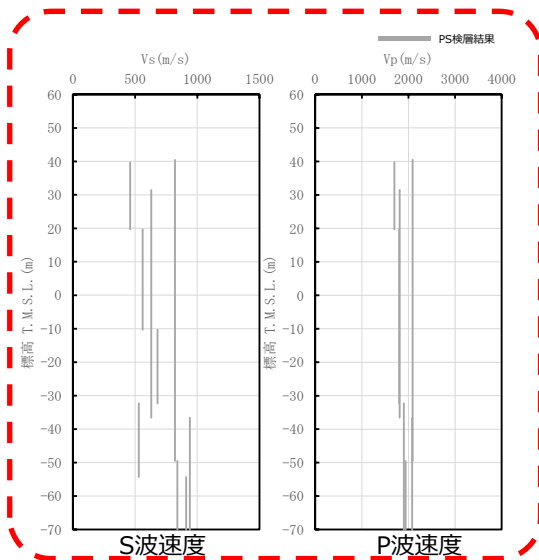
基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

5. データの再整理

■ 整理結果のとりまとめ (G14グループ)

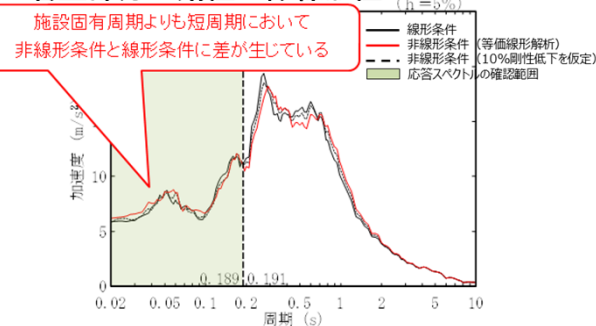
□ : 信頼区間外または信頼区間外に対する外挿範囲

A: 岩盤部分の物性値等

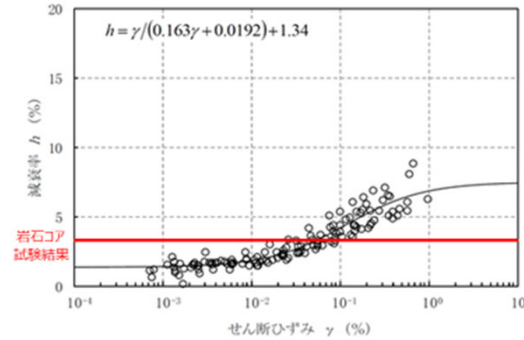


次回以降、地盤応答の確認結果を踏まえ必要に応じて見直し

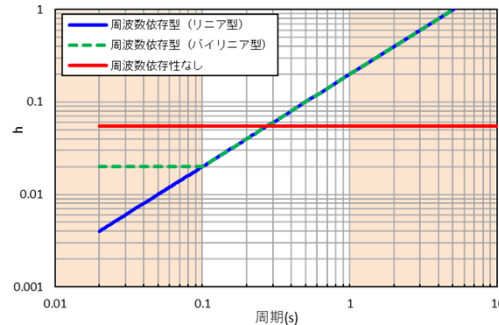
B: 岩盤部分の剛性の非線形性



C - 1: 三軸圧縮試験、C-2: 岩石コア試験



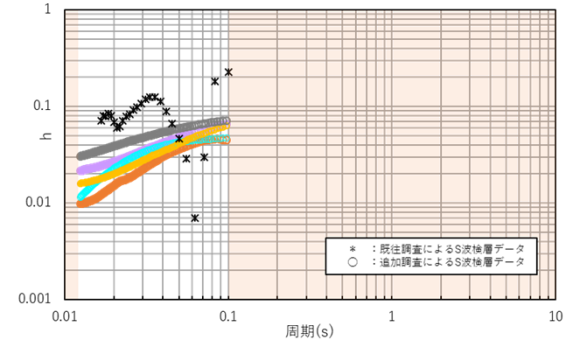
C - 3: 地震観測記録を用いた同定



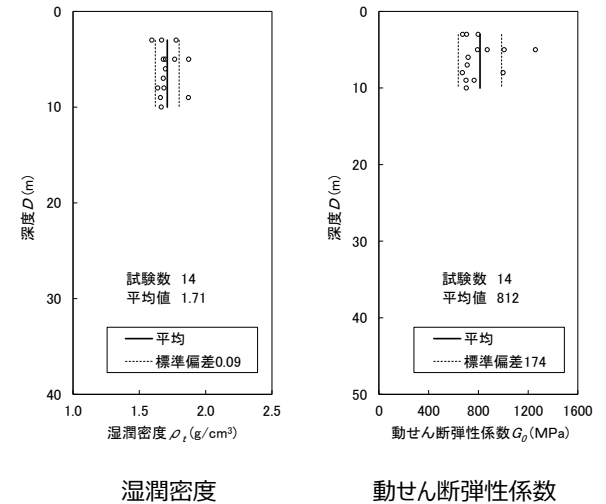
C - 4: 地震波干渉法

—

C - 5: S波検層



D: 表層地盤の物性値等



6. 敷地の地盤の特徴を踏まえた地下構造モデルの設定

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

6. 敷地の地盤の特徴を踏まえた地下構造モデルの設定

■ C. 岩盤部分の減衰定数に係る検討（複数手法によるデータの整理）

- A.～D.の因子のうち、C.岩盤部分の減衰定数については、複数の手法により減衰定数の値が評価されていることから、各手法により得られたデータについて、手法間または既往知見との比較等により、敷地における地盤の特徴を表す減衰定数を設定する。

設定するパラメータ	A.岩盤部分の物性値等	B.岩盤部分の非線形性	C.岩盤部分の減衰定数					D.表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、 V_s, V_p, ρ)	ひずみ依存特性 ($G/G_0-\gamma$ 関係)	減衰定数 (h)					速度構造 (G_0, γ)
			材料減衰		材料減衰 + 散乱減衰			
			C-1 三軸圧縮試験	C-2 岩石コア試験	C-3 地震観測記録を用いた同定	C-4 地震波干渉法	C-5 S波検層	
データ再整理の方針	-	-	複数手法により得られている減衰定数について、以下の観点で、敷地の地盤の特徴を表す減衰定数を設定。 ・手法間における減衰定数の評価結果及びその信頼区間を踏まえた相対的な比較 ・既往知見における速度構造の類似地点における減衰定数との比較 ・材料減衰と散乱減衰の成分に係る考察					-

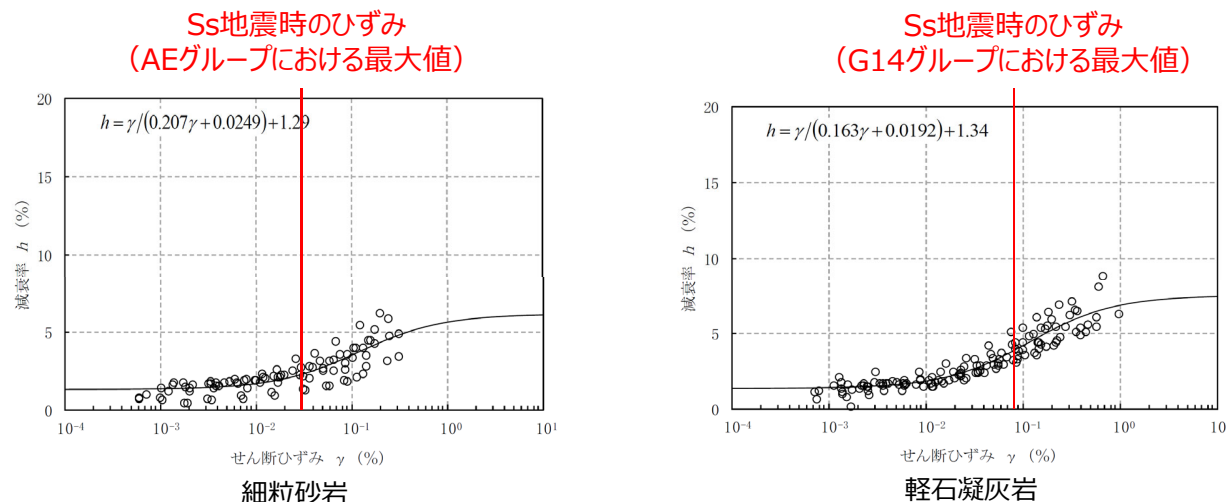
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

6. 敷地の地盤の特徴を踏まえた地下構造モデルの設定

■ C. 岩盤部分の減衰定数に係る検討（複数手法によるデータの整理）

● 材料減衰に係るデータ（「C-1：三軸圧縮試験」及び「C-2：岩石コア試験」）

- 三軸圧縮試験結果は、小ひずみ領域において回帰曲線の元としている個別のデータが概ね一定の値に収束していることから、線形状態に対応する減衰定数の値について、地盤の実態を捉えた値として評価されていると考えられる。
- 岩石コア試験結果は、線形状態における材料減衰としては、岩石コア試験は、透過波形データの高次成分による影響により、地盤の実態に対して大きい値として評価されていると考えられる。
- 各手法において対象としている地盤のせん断ひずみは、「C-2：岩石コア試験」がごく小さいひずみ領域のみに着目していることに対し、「C-1：三軸圧縮試験」は、ひずみ1%程度までのデータに基づく非線形特性を考慮可能。
- Ss地震時の岩盤部分のひずみは、「B. 岩盤部分の剛性の非線形性」におけるデータの整理結果（4.1～4.12）より、 10^{-2} オーダー%に至り、その際の材料減衰は、線形状態から数%増大することとなる。
- 以上を踏まえ、材料減衰としては線形領域及び非線形領域ともに、「C-1：三軸圧縮試験」に基づく減衰定数を設定し、Ss地震時のような大地震時には、ひずみ依存特性を踏まえた材料減衰の増大を別途考慮することが、地盤の実態を捉えた地下構造を評価することとなる。



三軸圧縮試験結果に基づくひずみ依存特性（ h - γ 関係）とSs地震時のひずみ量の関係（細粒砂岩、軽石凝灰岩の例）

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

6. 敷地の地盤の特徴を踏まえた地下構造モデルの設定

■ C. 岩盤部分の減衰定数に係る検討（複数手法によるデータの整理）

● 材料減衰 + 散乱減衰に係るデータ（「C-3：地震観測記録に基づく同定」、「C-4：地震波干渉法」、及び「C-5：S波検層」）

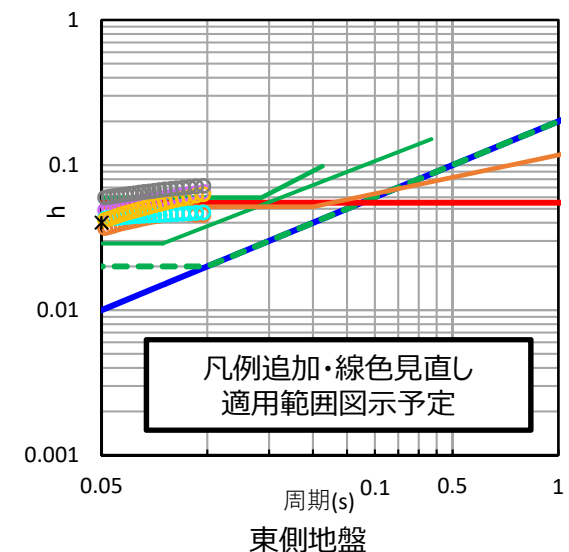
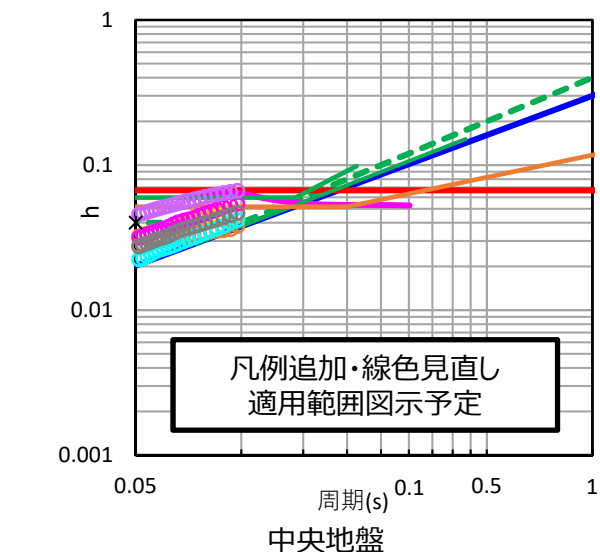
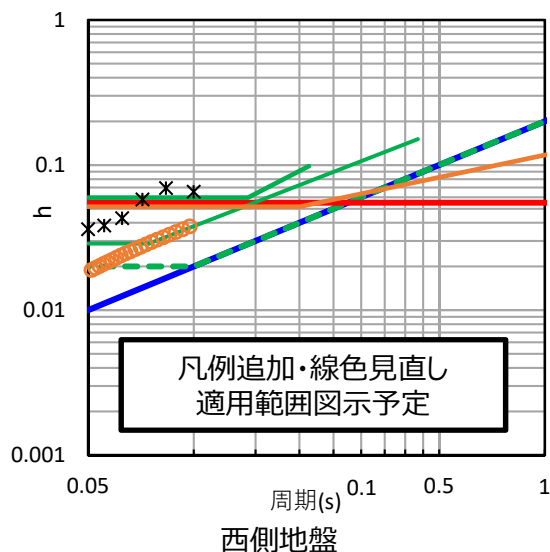
【周波数依存性の傾向の比較】

- 「C-3：地震観測記録に基づく同定」にて仮定した周波数依存性の条件については、4.1～4.12のとおり、一定減衰に対し、リニア又はバイリニアのほうが観測記録の再現性は高い。
- 短周期側に信頼区間を有するS波検層データにおいて周波数依存性の傾きを有していることを踏まえると、敷地の地盤の特徴としては散乱減衰が卓越していると考えられ、一定減衰、バイリニア型、地震波干渉法に対して、リニア型及びS波検層の方が地盤の実態に近いと考えられる。
- リニア型及びS波検層ともに、信頼区間外については外挿した設定としているが、両手法ともに、外挿範囲も含め地震観測記録をよく説明する。

【既往知見との比較】

- 上記を踏まえ、リニア型とS波検層について既往知見と比較した結果、中央地盤においては、既往知見の範囲に対して全周期帯で概ね整合。
- 西側地盤及び東側地盤については、S波検層は既往知見の範囲と整合的であるのに対し、リニア型は既往知見の範囲に対して小さい値を与える傾向となっている。この傾向は、5.にて示した福島ほか（1996）における速度構造との相関性に対して差を有している。

⇒以上より、中央地盤、西側地盤、東側におけるS波検層データによる減衰定数が、最も敷地の地盤の特徴を捉えた値となっていると考えられる。



手法間の減衰定数の差（材料減衰 + 散乱減衰）

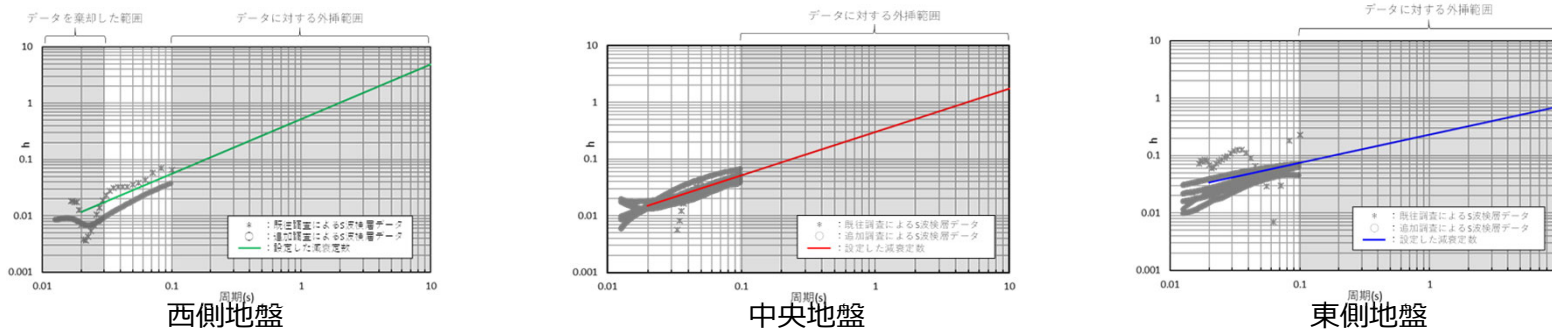
基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

6. 敷地の地盤の特徴を踏まえた地下構造モデルの設定

■ C. 岩盤部分の減衰定数に係る検討（複数手法によるデータの整理）

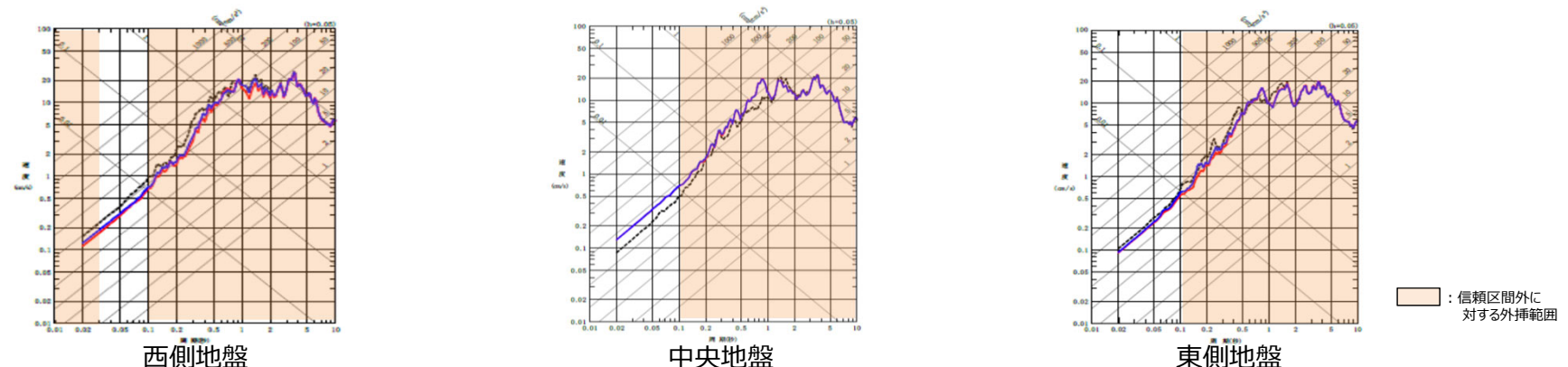
● 敷地の地盤の特徴を捉えた減衰定数の設定

- S波検層データに基づき、中央地盤、西側地盤、東側地盤それぞれにおけるS波検層データを平均化し、周波数依存性を有する減衰定数を設定した。なお、S波検層データの信頼区間外である周期0.1秒よりも長周期側については、周波数依存性の傾きが維持される条件で外挿して設定した。
- 上記により設定した減衰を用いて、地震観測記録のシミュレーションを実施した結果、上記外挿範囲も含め、地震観測記録及び「C-3：地震観測記録を用いた同定」におけるシミュレーション解析結果と整合した。
- 以上のことから、S波検層データに基づき設定した中央地盤、西側地盤、東側地盤それぞれにおける減衰定数は、敷地の地盤の特徴を捉えた減衰定数の値として適切であることを確認した。
- ただし、シミュレーション解析に用いた地震波は30Gal程度の小地震であり、岩盤部分は線形状態にあると考えられることから、前述のとおり、Ss地震時のような大地震時においては、ひずみ依存特性を踏まえた材料減衰の増大を別途考慮する必要がある。



注：西側地盤については、周期0.03秒までに見られる減衰定数の谷を考慮して外挿した場合、周期1秒程度で減衰定数が1を上回る過大な減衰定数の傾向となったことから、当該周期は棄却して平均化を行うことが適切であると判断した。

敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造としての減衰定数の設定結果



地震観測記録を用いたシミュレーション解析結果（2011年3月11日14：46（M9.0）EW成分の例）

— 建屋基盤面相当レベル（GL-18m）における観測記録
 — 地震観測記録に基づく周波数依存性（リア型）の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答
 — S波検層結果に基づく周波数依存性（リア型）の減衰定数を用いたGL-18mの地盤応答

基準地震動に基づく入力地震動の策定 (地盤モデル)

6. 敷地の地盤の特徴を踏まえた地下構造モデルの設定

■ 地盤の実態を捉えた地下構造の取りまとめ (イメージ)

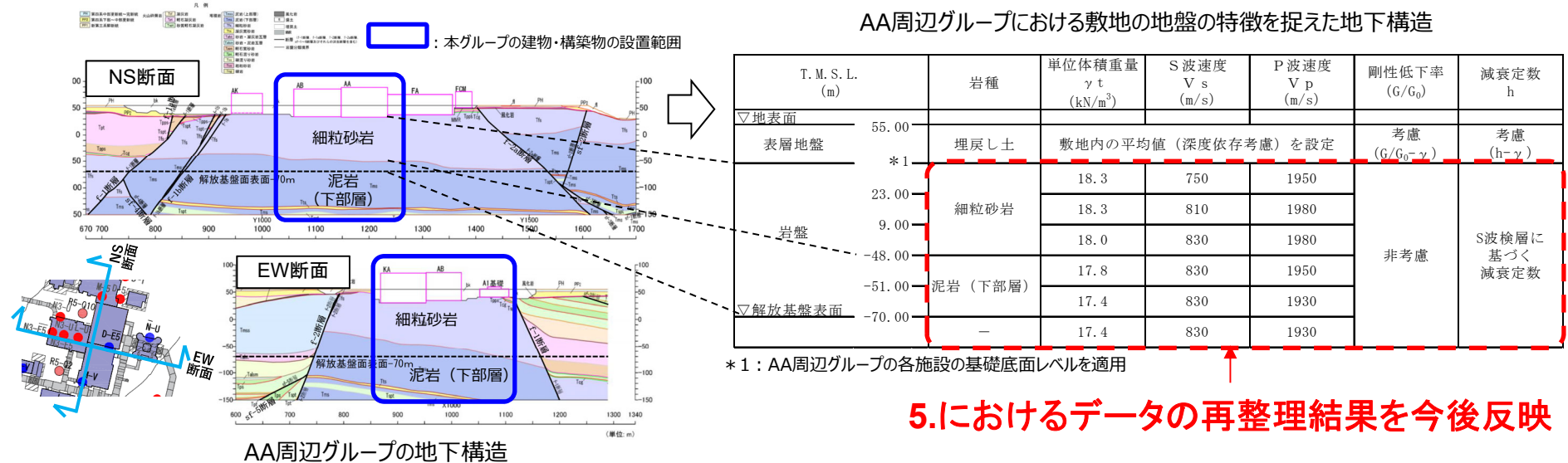
設定するパラメータ	A. 岩盤部分の物性値等	B. 岩盤部分の非線形性	C. 岩盤部分の減衰定数	D. 表層地盤の物性値等
	速度構造 (層厚、Vs, Vp, ρ)	ひずみ依存特性 (G/G ₀ -γ関係)	減衰定数 (h)	速度構造 (G ₀ , γ)
AA 周辺	<p>S波速度 P波速度</p> <p>次回以降、地盤応答の確認結果を踏まえ必要に応じて見直し</p>	<p>加速度 (m/s²)</p> <p>周期 (s)</p> <p>0.278 0.313</p> <p>h = 5%</p>	<p>減衰定数 (h)</p> <p>周期 (s)</p> <p>せん断ひずみ γ (%)</p> <p>$h = \frac{\gamma}{0.412\gamma + 0.0752} + 1.25$</p>	<p>湿潤密度</p> <p>動せん断弾性係数</p>

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

6. 敷地の地盤の特徴を踏まえた地下構造モデルの設定

■ 敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造モデルの設定結果（イメージ）

- ▶ 今後、前頁に示したデータの再整理結果を踏まえて、各グループにおける敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造モデルを設定していく。以下にイメージを示す。



7. 今後の対応

基準地震動に基づく入力地震動の策定（地盤モデル）

7. 今後の対応

■ 次回以降の説明内容

- ① 敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造モデルの設定に係る検討
 - データの再整理に係る検討（岩盤部分の物性値等に係る地盤応答の観点での比較分析）を実施し、各グループの敷地の地盤の特徴を捉えた地下構造モデルを設定する。
- ② 設計に用いる地盤モデル（基本地盤モデル）を作成するために必要な検討項目及び検討方針
 - 地下構造モデルの設定結果を踏まえ、以下の検討を行い、設計に用いる地盤モデルを作成する。
 - 設計に用いる地盤モデルに設定にあたっては、具体的な耐震設計を行っていく上での解析プログラムの制限及び設計の合理性を考慮した検討を実施する。
 - 上記事項の設計に用いる地盤モデルの適用にあたっては、各グループで設定された地下構造モデルとの応答スペクトルの比較等による確認を実施し、施設の耐震設計で適用する上での合理性を検討する。
- ③ 設計に用いる地盤モデル（基本地盤モデル）の作成及び入力地震動の算定結果

参考 データ集

以降に12月18日審査会合資料のデータ集に以下の内容を追加して掲載

- ・岩盤部分のPS検層（a.-①,a.-②）の単位体積重量
- ・岩石コア試験データ（c.-②）
- ・表層地盤のPS検層の追加データ（d.-②）